

昭和三十三年五月三十日印刷  
昭和三十三年六月一日発行  
(第十二卷 六月号 通巻第百八号)  
(毎月一回一日発行)  
昭和三十三年四月二十日第三種郵便物認可

# 奇譚クラブ

1958年 6月号



体験記「バー「ナナ」の人々」 南 時 夫  
創作「結婚の条件」 近 藤 一

6  
月号



奇譚クラブ最近号総目次

昭和三十三年  
〇八月号（復刊第十七号）

【定価二百円】

口絵

美への冒険

四馬孝・画

加賀利江子嬢艶姿集

加賀利江子・画

花魁「美吉野」の折檻

滝れい子・画

映画写真「夕立助五郎」

榎月太郎・画

映画題名、女優名当懸賞

榎月太郎提供

洋面スチール二題

星 光一

「聖衣」―「岩窟の野獣」

星 光一

旅廻り劇団の賣場面から

星 光一

陰花植物（或る流暢マニヤの告白）

島 直樹

「時報」

麻生 直樹

告白「恋する夫人への手紙」

麻生 直樹

ある女給の体験

日下 絹子

九月号（復刊第十八号）

【定価二百円】

女体屈伸測定器

四馬孝・画

いけにえの町娘

滝れい子・画

新緑の陽を浴びて

須川 幸子

「括られちやつたり」

萩 千恵子

緊縛映画名場面集

榎月太郎提供

縛られた女優たち

千葉栄市提供

洋面スチール二題

編集部選定

「征服者」―「魂術師の心」

柳沢 吉保

病床徒然草

柳沢 吉保

告白「鞭の線に描かれて」

皆川のふ子

異説八百屋お七「幻想炎の娘」

（後篇）

壮烈大和撫子

藤山 秀三

ある夢想家の手帖から

高崎 勉

探偵小説に現れた地獄絵巻

高崎 勉

美女を十字架にクギつけ（生）

東 一郎

りて肉体の狂宴

東 一郎

相模草

土俵 四股平

ワイド映画の縛りシーン

嵯峨美也子

和装教室（長襦袢濡れ場の巻）

白金 紅次

魔女裁判に關するノート（続）

甲斐 仁参

「苦しみ求めて」

（1）（細）

を持つ女性の手記より

近藤 正三

家畜人ヤブー（第九回）

山下 真一

「短信」

津々 武平

赤い煉瓦の家

内田 春雄

体験談「水兵生活と輝」

佐田 春雄

ビーチボールの魅力

森本 愛造

残酷な女性

古井 直哉

医学幻想

千葉 栄市

映画速報欄

千葉 栄市

告白「女性志願者の夢」

（前篇）

麻生保氏の生活と意見（二）

麻生 保

切腹随想

兵頭 庫一

私の本箱から（単行本、雑誌の責め場）

星 光一

美少年処刑の図「笑い」

山口 幸一

菊花会「例会報告」

筑紫 美弥子

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠正

フエチ通信「赤い下書き」

高木 栄二

痛められし桃の実（第一回）

（マリ）

又の手記より

鴉嘔吐夫・訳

続・潰滅の前夜（完結篇）

土路 草一

読者通信

土路 草一

十月号（復刊第十九号）

【定価二百円】

口絵

賣面「鼻いじめ」

四馬孝・画

縛られた女たち（場面集）

阿部 秀

緊縛写真「グラマー・ガールのニュー・スタイル」

阿部 秀

賣面「地下倉庫」

「いでゆ」

洋面スチール二題

北原 純子・画

「古城の剣豪」

「指紋なき男」

絵物語「お加代源三郎旅日記」

藤木 仙治

告白「女性志願者の夢」

（後篇）

女性の悲鳴について

（2）（細）

を持つ女性の手記より

近藤 正三

良二断想集

高木 良二

終戦奴隷（或る勤労動員女学生の手記より）

雪 俊

私の好きな女靴

波路 洋

「吊し責め」の実験（奇談俱樂部集）

岸本 青柳

女性化願望と男性愚慕

古井 直哉

家畜人ヤブー（第十回）

正三

東京の人よ何を穿く（腰巻とパンティとふんどし）

松原 三千代

「艶美なる捕物帖」

牧高 志文・画

ある夢想家の手帖から

沼 正三

大陸暴行列車（内府烙印38号の女の手記）

木田 由郎

可憐なサド、可憐なマゾ

佐々木 ツトム

緊縛映画雑誌「再映画化作品について」

木口 房代

告白「恋する夫人への手紙」

（二）

アブ・モード・オール・スクラップ

矢桐 重八

痛められし桃の実（第二回）

（マリ）

「美女達のお尻が風船をつぶす」

アイリス

マゾヒズムへのいさな

清水 恵二

女性切腹随想

天野 哲夫

和装教室（古典模倣矢野御供の巻）

田谷 敬生

雑誌と雑誌

白 紅次

院欄欄通信「アブ・マニア雑誌」

赤井 正三

捕縛入門

赤井 正三

戦争未亡人の告白「ヒップ受難」

花田 育子

美容病院（第一回）

久留木 栄

モデル志願の女性より

永井 朱実

架空小説「残酷芸術展覧会」

伊藤 晴雨

雑誌通信「挿絵を中心として」

丘 一明

フランソワの手記

山梨 参次

読者通信

山梨 参次

〇十一月号（復刊第二十号）

【定価二百円】

口絵

賣絵「拘束服」

四馬孝・画

滝れい子面集

滝れい子・画

舞妓（まいこ）

予後（よこ）

緊縛写真「猿ぐつわと縄目」

（伊吹真佐子嬢）

縛られた女優たち（場面集）

榎月太郎提供

東映「朝焼け富士」

三浦 光子

宝塚「題不詳」

尾上 三千代

サッスチツクな洋面スチール二題

伊映画「カルタゴの女奴隷」

米映画「異教徒の旗印」

久留木 栄

口責めと幾何学図形

三根 耕二

悲しきはマゾヒストの告白

山下 真一

性倒錯の男と女

久留木 栄

美容病院

久留木 栄

体験記「つばきの沼」

白 紅次

「秘蔵の黒髪」

白 紅次

ある夢想家の手帖から

近藤 正三

「苦しみ求めて」

（完結）

私の好きな女靴

波路 洋

女性ホルモン服用の実験報告

古井 直哉

再映画化作品について（2）

阿部 秀

私の本箱から

星 光一

ダイアナ夫人

乗杉 貴子

妙齡美人の吊責め

岸本 青柳

ジェームス・ディーンのこと

黒岩 一

残酷芸術展覧会

伊藤 晴雨

私のキタ・セクスアリス

山本 道夫

創作「東京自殺クラブ」

菅 道夫

「醜いた助爵士」の物語

菅 道夫



本誌百号突破記念

懸賞原稿募集

本誌の通刊第百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします故、何卒奮って御応募下さるようお待ちいたします。尙、募集規定には、従来と違って大いに幅を持たせましたので、御自由な気持ちで御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。(この際は誌上で連絡いたします。)

◎賞金

優作 壹万円 若干篇  
秀作 五千元 若干篇  
佳作 各篇 三千元 若干篇

種目 小説、創作、告白、手記、体験、等

枚数 三十枚乃至五十枚程度(四百字詰)

但し多少の増減は差支えありません。

締切 当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次銓衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。

投稿 「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

発表 入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以って報告します。誌上では入選作の掲載を以って発表にかえます。

用紙 二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用い第五種開封便(百瓦につき八円)にて御送付願います。

読者原稿募集

「創作」異色ある題材を掲げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用篇は本誌五カ月以上贈呈します。

「体験告白手記」読者皆様の偽りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上贈呈します。

「映画、雑誌」通信 映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。

「私のイメージ」熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌三カ月分贈呈します。

「アイデア」将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に、採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

「レポート」新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二カ月分贈呈します。

「読者通信」編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思ひ出し、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

◎本誌月極購読料◎

一月分 一冊 (送料共) 二百円  
三月分 三冊 (送料共) 六百円  
半年分 六冊 (送料共) 千二百円  
一年分 十二冊 (送料共) 二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方には景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十二巻 第七号  
毎月一回一日発行  
定価二百円

六月号

昭和三十三年五月三十日印刷  
昭和三十三年六月一日発行

編集 人 箕田 京二  
印刷兼発行人 吉田 稔  
大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号  
発行所 天 星 社  
振替口座大阪五〇〇四二番

従来準備しておりました払込料金加入者負担の振替用紙は都合により中止いたしましたので御諒承願います。御送金は振替、為替、現金書留、切手代用(八円切手)等、どんな方法でも結構です。送り先は必ず楷書ではつきりお書き願います。

奇譚クラブ

# THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan

昭和三十三年五月三十日印刷  
昭和三十三年六月一日発行  
昭和三十一年四月二十日  
第三種郵便物認可  
(毎月一回一日発行)  
(第十二卷第七号)



定価二百円

IBM. 2805



○十二月号(復刊第二十二期)

【例題】(4分)

新東宝「修羅八荒」連山 幸子  
大映「女狐屋敷」近藤美恵子  
写真「噂つた女体」…本誌写真部撮影  
(くさり)(ボリウム)(監視)(光沢)  
洋画「チール」二曜

家畜人ヤブー(第十二回)……沼

○新年号（復刊第二十二号）

【附註】

ある夢想家の手帖より……… 昭

女工月賃 100 円

二、

2008

**Abstract**

● 大正十二年四月

老いの恋風聞……………種ノ木

011 MC Qs

[illegible]

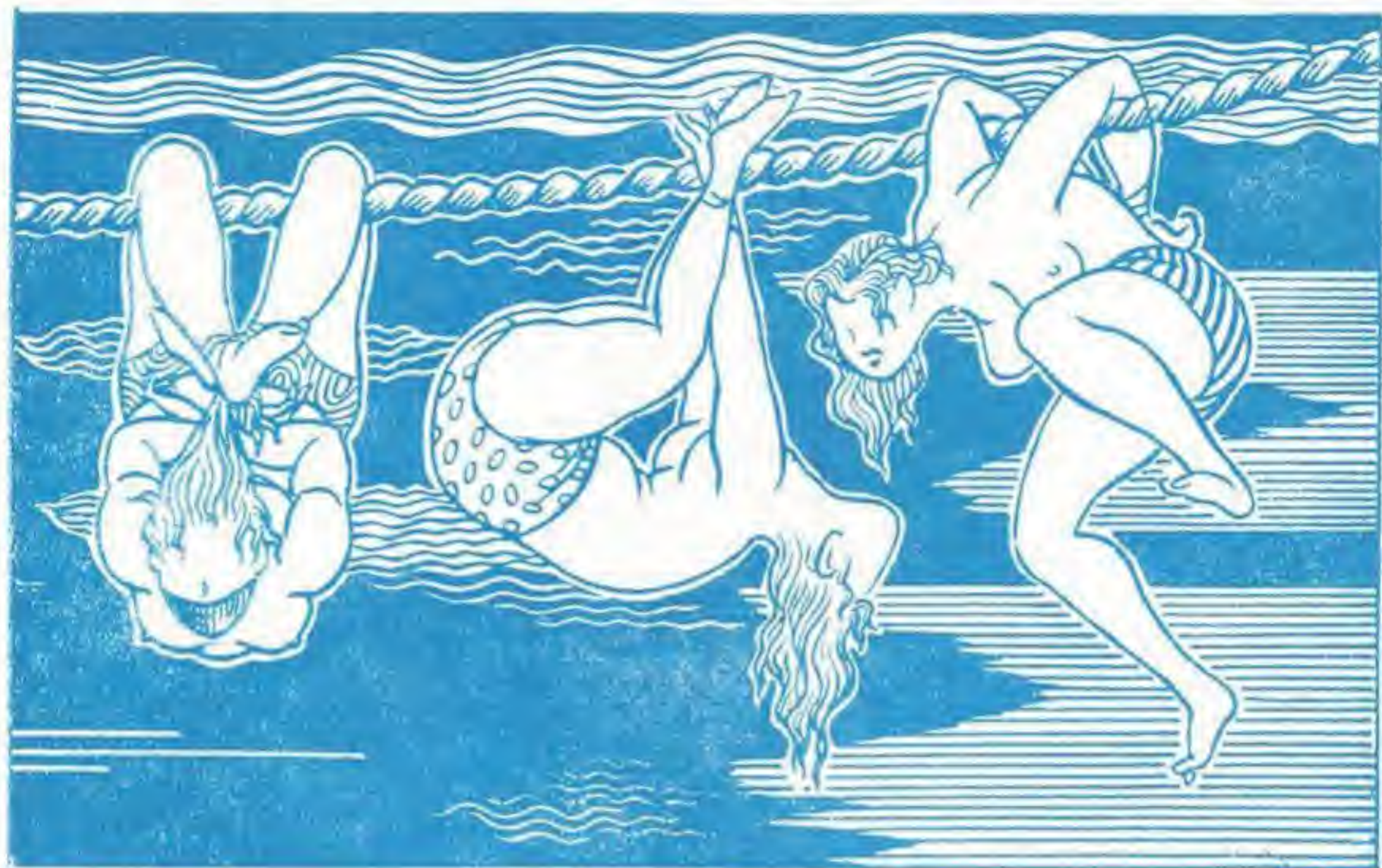
2

蘇通橋之第一大・第二

「アリスの冒険」

『大正の書』  
山田





# 奇譚クラブ

復刊第二十八号  
六月 号

## 目次

### 絵口頭巻

四馬 孝傑作集 革製縫ぐるみ

責給 迫りくるスリル

縛画 変形吊り責機

縛り写真「三味線」

時代物特写集「腰元折檻」

緊縛映画名場面集

大映「鏡形平次捕物帖」

松竹「題名不詳」

洋画スチール二題

仏映画「情婦マノン」

米映画「激情の断崖」

写真 双丘（そうきゆう）

編集部選

愛川悦子 嬢

時代小説 やくざしがら草紙

「文江の切腹」

春浅き日に

愛好者街を行く

私の見聞したマゾヒズム

十三人目の奴隷（完結篇）

縛られた女優新十花選

結婚の条件

映画通信「縛られた女優達」

四馬 孝・画

杉原虹児・画

忍頂寺保・画

本誌写真部特写

村井知可子嬢

辻村 隆成

阿部 秀提供

編集部選

愛川悦子 嬢

海野榮朗 18

佐藤すみ子 22

とよま・かつひこ 32

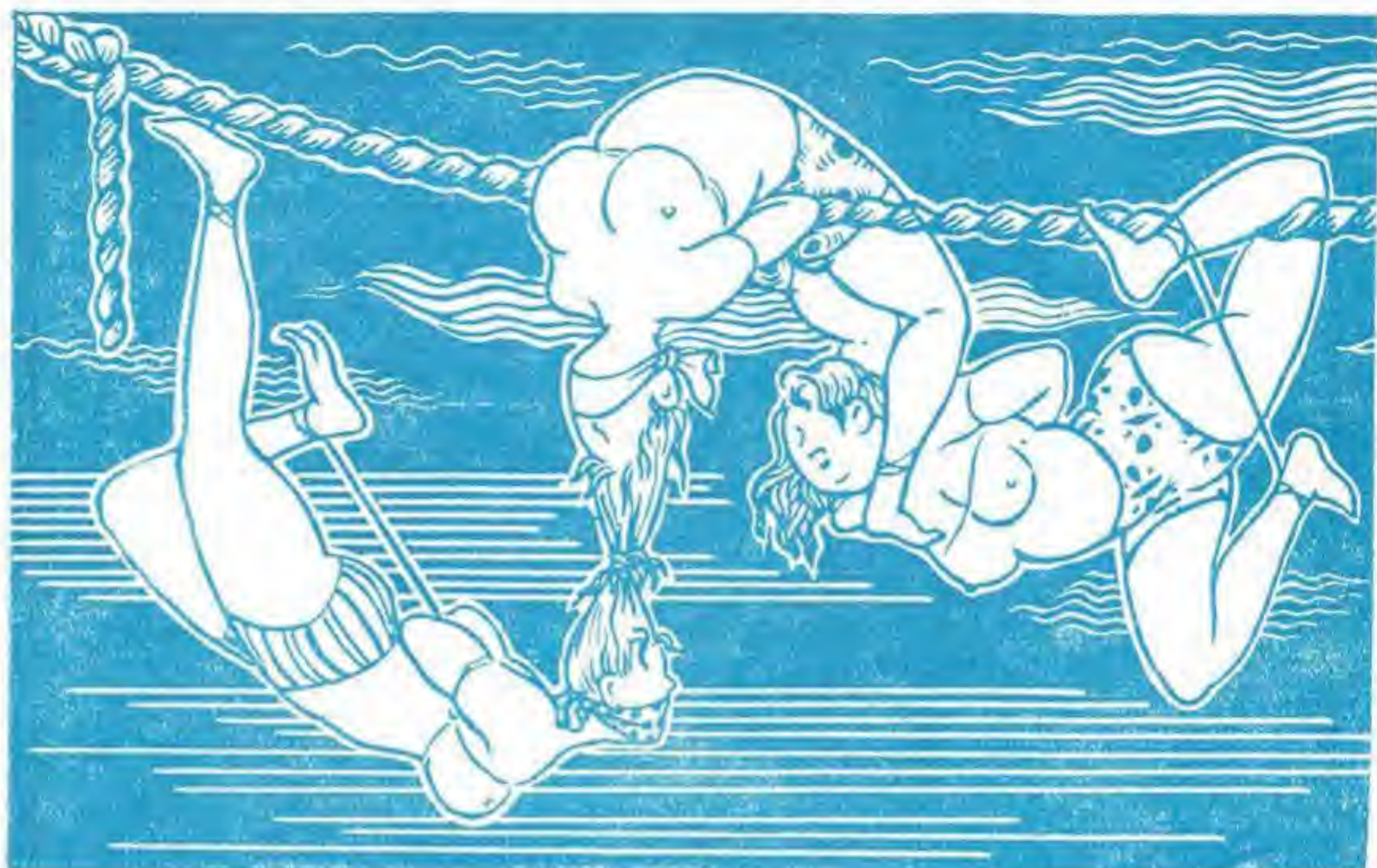
夢原狂介 36

南方佳男 48

近藤 一 50

大河原珠樹 55





— 事実小説 — 貸し男

植村 奏 66

映画ストーリーイ 嵐の中の花 (続篇)

浦田紀夫 74

残虐なる女性たち

森本愛造 80

創作美容病院

久留木 栄 84

『嵐の中の女』と題して

— 粹興春宵座談会 —

牧 高志 90

マゾヒズムへのいざない

黒田史朗 95

現代マゾヒズム芸術時評

原忠 正 98

創作小僧と禪

内田武男 100

夢五夜 女はらきりのイメージ

南方 純 104

『告白』 羞恥を求めて

柴崎黎子 106

創作紅山彦 (3)

三条卓史 110

海原にありて歌える

誘拐されてゆく美女の詩

菅谷はるみ 111

創作運命の小女

藤原紀世 111

映画研究 最近の時代劇縛りシーンから

藤原美也子 114

マリアンヌの手記 (その六)

赤いペチコート

鶴田吐夫訳 113

『レポート』その女の急所を刺す

近藤 一 115

魔教 罔 No. 8 (1)

土路草 一 118

体験記『バー「ナナ」の人々』

南 時夫 118

映画通信 今月の縛られ女優達

大河原武樹 114

天城心中異聞 誘拐された令嬢

水沢雅美 116

緊縛映画速報とその雑感

藤本仙治 112

読者通信

164



〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

さんまやぐん………  
現代マゾニズムの精神………  
街に生けるマゾニズム………  
嵐の中の花………  
一見合写真の撮り方………  
最近の雑誌・シーンから………  
貴物美人伝………  
マニア通信………  
娯楽と女優………  
探偵小説に現れた地獄絵巻………  
マゾヒズムへのいざない………  
十三人目の奴隸………  
麻生保氏の生活と同見………  
沼正三便り………  
読者通信………  
臨時増刊号「賣小説特集号」について………  
三月号（復刊第二十五号）

【定価二百円】

口絵  
黄面 瀧川 五輪塔………  
瀧川 五輪塔………  
写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子………  
ニューガールの緊縛模様………  
縛られた女優たち………  
真土の顔役、柳生武吉………  
緊縛映画のスチール………  
千原しのぶの巻………  
東映「快傑黒頭巾」「はちきん大行状」………  
シナリオとその関係………  
ガーベラの甘き香………  
大阪屋花鳥（女学生主）………  
家畜人ヤブー………  
女性切腹 麗腹乙女………  
探偵小説にあつた地獄絵巻………  
江戸川乱歩の「盲獣」………  
緊縛映画誌上封切………  
女性風俗「印安開眼の巻」………  
体験記 椿事………

山田 幸次郎  
原 孝正  
菅野 高志  
牧 野 高志  
伊藤 美也子  
宝塚 晴雨  
加田 三夫  
高橋 貞二  
夢原 史朗  
夢原 狂介  
麻生 保三  
沼正 三  
阿部 貞子  
大塚 好子  
阿部 好子  
大名 曜子  
藤本 仙台  
黒河 徹也  
辻村 隆  
小坂 多美枝  
堀江 正三  
藤山 秀雄  
高岡 勉  
阿部 裕子  
高志 希一  
青葉 慎一

麻生保氏の生活と意見………山口幸一  
神皇正統記………山口幸一  
夜情の一日………吉田孝一  
青島にあらわれた男………夢原狂介  
十三人目の奴隷………夢原狂介  
街でふつけたフエチンズム………やま  
現代マソヒズム芸術時評………原忠正  
映画通信「縛られた女優」………南方佳男  
加害事件に関する新聞記事………南本時夫  
女将と女殺の種々責………岸本和男  
マヤの結婚………山川正三  
ある思想家の手帖………沼田史朗  
マソヒズムのいさな………魚田三天  
マニア通信………土路草一  
魔教団NO.6………大河原珠蘭  
初恋を断られた女優………  
記者通信………

○四月号（復刊第二十六号）【定価二百円】

口絵  
腰刀島に捕われた令嬢………瀧川しづ子  
縛られた女優たち………阿部希  
危し伊達六十二万石………北沢典子  
（若き日の）千葉周作………高木悠子  
（力闘空手打ち第三回）………関山千子  
幽霊屋敷の秘密室………四馬孝雨  
和装剣り赤い投書………花坂道子  
緊縛写真「早春賦」………水戸真都  
漫画スチール二題………編集部  
米画「ジャワへの順風」………堀内形  
緊縛女性に關する小品五題………  
「捕られた令嬢」………水沢雅美  
十三人目の奴隷………夢原狂介  
切腹維新とその種々相………須藤大介  
私は訴える愚者の言………貴山律夫  
創作被店供養………青葉樹一  
家畜人ヤブー………桐三  
ある思想家の手帖………沼田史朗

日本国史記 外人の見た女腹の南方 編  
 田中芳雄 著 文芸春秋社  
 時代小説 七巻 藤野 史多  
 マゾヒズムへの道 三巻 黒田 史多  
 創作 紅山 三巻 三巻 史多  
 最近の時代小説の縛り映画 久留木 史多  
 縛りを使用した女体拘束 久留木 史多  
 シナリオとの関係 黒河 徹也  
 美容病院 久留木 史多  
 千重子より美しきさんへの手紙 三巻 史多  
 変な女たち 三巻 史多  
 魔教団NO.8(2) 三巻 史多  
 現代マゾヒズム芸術時評 三巻 史多  
 ジャーナリズムに見るゴッロ 三巻 史多  
 趣味(街)についたフエテ 三巻 史多  
 麻生保氏の生活と意見 三巻 史多  
 縛り女優二十花選 三巻 史多  
 悦唐クラブ定例会報告 三巻 史多  
 告白 私の生立ち 三巻 史多  
 緊縛映画速報 三巻 史多  
 読者通信 三巻 史多  
 編集後記 三巻 史多

口絵  
 四月号 製作 美人 四巻 史多  
 企画 女友達(乳房責め) 三巻 史多  
 企画 子嗣集 横恋慕 三巻 史多  
 縛り写真「屏風の前後」 三巻 史多  
 縛り写真「赤い振替」 三巻 史多  
 緊縛映画名場面集 三巻 史多  
 本館 仙治・岡部 秀・提供  
 (大映) 東宝 力団(矢島ひろ子)  
 (東映) 力団 伊映画(カルタゴの女)  
 洋画 スチール 伊映画(カルタゴの女)  
 奴隷 伊映画(カルタゴの女)

五月号 (復刊第二十七号)

【定価二百円】

[illegible]



## 革 製 縫 ぐ る み      四馬 孝傑作集 (2)

ギリギリ、ギリギリと天井の滑車をきしませて下りてきた袋の中から現れたものは？  
全身、黒光りのする革の縫ぐるみをびつたりと着せられた美女が、エビ縛りにされて  
荷物のように部屋の中央に置かれた。





# 迫りくるスリル

杉原虹児・画





# 変形吊り責機

忍頂寺 保・画





### 三 味 線

手にとる術もない三味線が、いたずらに膝の上で主のすさびを待っている。

後手はごらんの通り鏡の中で、あのように、がつちりと縛しめられているのだ。





腰元折檻



本誌写真部撮影

△モデル村井知可子▽  
辻村隆・構成



＜緊縛映画名場面集＞……………(提供・阿部 秀)



大 映 「銭形平次捕物帖」 縛られているお静は霧立のぼる



松 竹 「映画題名不詳」 縛られているのは高田浩吉と女優名は不詳



『洋画スチール二題』……………(編集部選)



仏映画「情婦マノン」セシル・オーブリー M・オークレール 主演  
公開当時異常なセンセーションを巻き起した乳房もあらわな美女を逆さに背負い  
砂漠をさまようシーン。



米映画「激情の断崖」 リチャード・グリーン バーバラ・ヘイル 主演  
手足を革具で縛しめられ、恋人の眼前で鞭打たれる屈辱感。



双

丘

(心の中)



モデル 愛川悦子嬢





## 江戸時代絞刑

(「刑事博物図鑑」より)

「大宝律令」によると、死刑を、斬・絞の二等に区別し、斬罪を極刑として、謀反・殺害等の罪重きものに処し、斬罪を加えるに及ばないものを絞罪に処した。江戸時代に行われた某藩の絞刑は、伝統のもので、室町時代に行われた斬より軽きを限り処した。絞罪はかくして罪が定つても立春より秋分に至る間を大忌斎日とし死刑を執行しない。

新しい文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1958年 6月号

(第十二巻 第七号 通刊第百八号)



## 時代小説

## やくざしがらみ草紙

海野 築 朗 作

(一)

「親分、そいつは悪い了簡だ」

重だった子分達の一番背後から口を切ったのは三ッ下の三太だ。

「何故だ、美しい女を、その女を欲しい男が争う……」

「お言葉中だが、主ある花は別物じや御座んせんか」

「余計な口を返すな、たとえ、花の持主が極まっても、蝶々同志がその花一つで喧嘩をし、蜂の仲間が針をふるって刺したり刺されたりするんだ、人間だって同じ事だ。根ッから悪い事じやねえ」

「へえ——……」

それっ切り、三太の言葉も途絶えた。

長火鉢に向って胡坐をかいて、どてらを引っかけた親分の山七、貫録だけは立派だが、横車とも異名がある信州飯田の貸元だ。

「それじやア手前達、どうあっても、この山七の云う事は聞けねえッてんだな！」

小肥りの赤黒い、こめかみのあたりへ青筋が見る見る太く隆起して来た。

居並ぶ子分達、一齊にビクッとしたが抜ける程に首をぶら下げているばかり。

その時

「御免下さいまし、旅のもので御座んす」と、低いがはっ切りとしたよく通る声が聞こえて来た。



その声に救われた様に要領良く立ったのは兄い株の重五郎だ。いつもはふんぞり返って、若い者を顎で使っている男だが

「待て、俺が出る」

と、三下共を押しつけて出て見ると、土間に片膝ついて、脇差の鞘をこちらに、ぐッと突き出している男。

云う迄もなく兇状持ちの股旅仁義――

(うまい所へ来やがった……)

と、思わず重五郎ニヤツとした。

## (二)

それから二日目。

国境いの大平峠を下る男があった。

何処から見てもばくちを打つての渡り鳥。

伊那の好太郎。

手甲脚絆に三度笠、大それた目的があつて矢のような早足だが

「あんまり話がべら棒過ぎて、軍談講釈の没義非道……つい面白くなってふらふらと引受けたが、俺ア少々気がとがめるぜ」と、ぶつぶつ独りごと。

黒っぽい上布の單衣に、寸の詰った小粋な帯、白い上締めをした旅人姿の好太郎が、美濃の中津へ草鞋を踏込んだ時は、町廻りの山々に暮色が這い寄っていた。

行く場所は一ツ、町を一本槍に突切つて、声をかけた家は、中津の貸元。今売り出しの林蔵の住居だ。

型通りの仁義がすんで、すすぎを貰つて座敷へ上ると、親分の林蔵が出て来た。

「旅馴れた客人の事だ。敷居を跨ぐと直ぐお判りの事と思うが、中津の林蔵まだ馳け出しで、碌な仁義もされませんよ、ハッハハ」と明るいい人柄。三十を少し越したばかり。

林蔵が手を叩くと、プンと香の匂いがして林蔵の新妻お里が酒の膳を運んで来た。

「半端ものの三ッ下へ、御丁寧なおもてなし、汗で御座んす」と、お辞儀をしたが

(ははあ、この女だな、飯田の山七親分が仮想した女は……)

心の中で独り合点して、ちらっとお里を見れば抜ける程の色白、輝くばかりの容貌、年の頃は二十を二つか三つ越して、成熟し切った四肢、脂の乗りようから、香ばしい体臭まで限りない魅惑だ。

(これ程の別嬪を……)

思わず口から出る吐息を、酒と共にぐッと飲み込んだ。

銚子を二本空にして、それ以上はいくら飲んでも酔わない好太郎は、別間に退いて床に横になったが、眠れない。目が冴えるばかりだ。

外は蛙の声。物静かな晩。

(飯田の親分山七が、この家へ通りがかりの仁義で顔を出した。そしてこの姐さんに思いを掛けた。無理もねえ、俺だって一目見てフラツとなった。山七親分は五十幾つの良い年をして、考える事が没義非道。林蔵をドスの鎗にして、女をさらって呉れ。そうしたら飯田の縄張りを分けてやろうとのべら棒話、それも子飼いの子分ならまだしも、一宿一飯のやくざ渡世の仁義を笠に、俺の様な渡り鳥に頼みやがった……うふッ。いや、笑い事じゃねえ、あつたらあれ程の珠を壊す野郎も野郎だが、壊させる俺も、とんだ罰当りよ) 好太郎は、寝返りを打った。

林蔵の身内は、十人ばかりいるが、今夜は賭場が立っているのか夕飯が済むと出払っている。(然し、事の善悪を問わず、引き受けたからにや、やり遂げるのが、やくざ渡世の作法だ。反古には出来ねえ)

愚々／＼していた好太郎、やっと心を決めると枕許の脇差を握ん



だ。

(三)

信州名物長脇差

二十才の時から、故郷の伊那を飛出して、放蕩不頼のやくざ稼業、時と場合には輝一本の素ッ裸、丁か半かと莫座へ座つての中盆壺振りもして来た好太郎だ。度胸は据っている。

(狐鼠泥見てえに、忍んで寝首はかけねえ)

と、いきなり襖をガラリと開けて、のっそりと踏込んだ。

一つ床に、並べた枕の奥座敷。

「あッ」

飛び起きた林蔵。

「野郎！ 何を戸惑いしやがる」

と、素早く床の間から脇差をとつての立膝で身構えた。

お里は、寝巻がわりの緋鹿の子の長襦袢、浅黄縮緬の扱帯を前結びにした、しどけない姿で、声も立て得ずに慄え組んでいる。

「林蔵さん、俺アお前さんに縁も恨みもねえんだが、やくざ渡世の仁義の表。気の毒だが命は貰うぜ」

「うぬ！ ほざくな！」

唇を引きつけて怒鳴ると、林蔵は居合抜きにサッと斬りつけた。

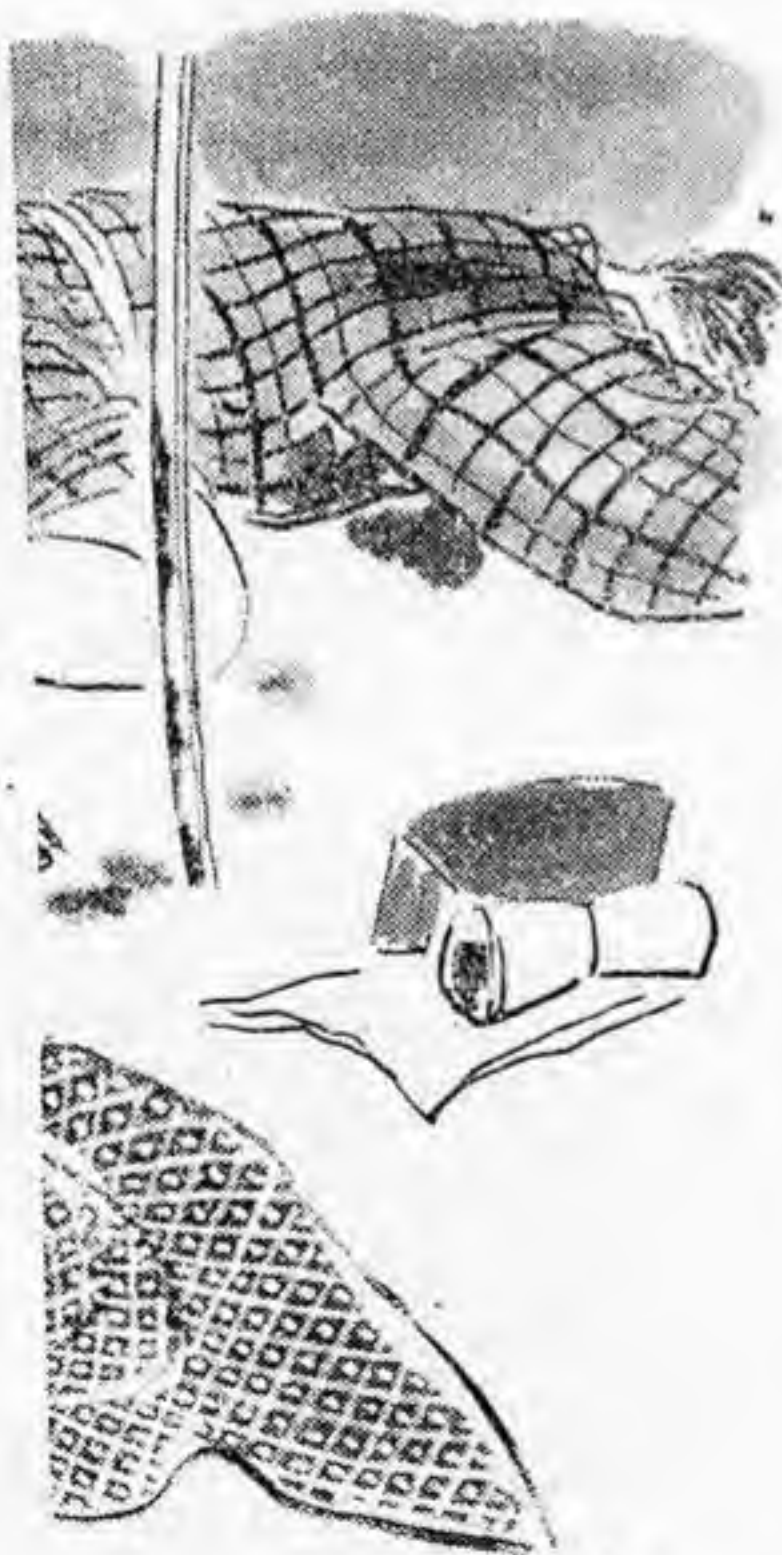
何回か、白刃をくぐった好太郎だ。身軽にからだを躲すとトツ／＼と前へのめる中腰の林蔵へピカッと稲妻が走った。

「きや——ッ」

と悲鳴をあげたのはお里だった。

林蔵は、ほどぼしる血潮の中へ無言のままのめり込んだ。もう虫の息。

「お、お前さん！」



冬

狂わんばかりの涙声で、林蔵にかぶりつこうとするお里の前に

「喚くな！」

と血刀を眼の前に突き立てた。

「音をあげると、手前も叩つ斬るぞ」

凄味を利かせて背後に廻った好太郎。かねて用意の細引と手拭を出した。

「口を開けろ」

と両膝で肩をはさむ。

「な、何を……」

叫ぶ口に、三つ折りの豆絞りが鼻孔まで塞いで、キュッと括り上げた猿轡。

「うー」

息苦しさで恐ろしさに、首を振って俯伏すのを荒々しく抱き起し

「手をうしろへ廻すんだ」

と庶二無二白い両手首を背中に捻じ上げる。ふつくらとした胸をぐる／＼と細引で廻し、目茶苦茶に縛り上げると、崩れた大輪の花



の如く、濃艶なお里の体は好太郎の足許に転がった。

馴れぬ仕事、好太郎は汗を掻いた。

然し、何となく胸のうずく仕事には違いない。

「ま、待て、待ってくれ……」

暫くは身動ごきもしなかった林蔵が、モゾツと動いた、悲痛な声だ。

混濁とした意識の中に、女房の事を思つて死に切れない様子。

「うーう、うー」

その声をきくと、猿轡の下のを絞つて、お里も必死に身をあがいた。

「未練たらしい奴等だ、やくざ稼業だ、此の世を仮と諦めてとつと冥土へいかねエか」

足蹴にしようとして、流石に思い止った。

「ま、まって……くれ……」

もう、断末魔だ。

(やくざ渡世の仁義の成りゆき、俺ア、後悔しねエぞー)

好太郎は、仏に代った林蔵を片手拝みにすると、華やかな色彩に包まれたお里の体を、ぐいと抱き上げた。

#### (四)

人目を避けて、田圃の中の一本道だが、好太郎気が気でない。星が降る様に出て、螢が飛び交っている。

猿轡を嵌めてあるとは云え、相手は生きた人間だ。おまけに長襦袢の薄着一枚のを、荷物の様に縛つてある。

誰がどう見たって怪しまれる所業だ。

時々、降して猿轡を念入りにするが、むん／＼とする女の膚の匂いについて一休みが長くなり、ともすれば妙な気持になる。



無理もない、伊那の好太郎まだ二十七、血気にはやる年頃だ。やっと、大平峠の本道に入った時、ばらばらッと行手に飛出した影がある。

「伊那の兄さんで？」

その声は重五郎だ。

「おう、山七親分の身内だね」



「へい。駕籠を用意して来ました」

「そいつは有難え」

と、どすんとお里を草の上に降す。

「うー」

お里の呻きが、もう艶かしく重五郎の耳を打った。

「ヘッヘッヘッ、これやア荒々しい、折角の獲物が壊れますぜ」

涎を垂らさんばかりの重五郎だ。お里にかがみ込んで人前もあるのにペタ／＼と、手を動かしてその感触を楽しんでやがる。

「う、うー」

又、猿轡から声が洩れた。

暗いを幸い、変な所に手をやったに違いない。

「おい、いい加減にしねエか……」

むしずが走った好太郎。思わず声をかけると、ハツとした重五郎

「うむ。傷んじやねエ様だ」

不逞／＼しく呟いて

「おい、駕籠に玉を乗せるんだ」

と、うしろの子分に頸をしやくった。

(五)

やくざ渡世の仁義は果したが、又重なつた兇状に、ほとぼりのさめる迄と、山七親分からずッしり重い饒別を貰って、再び宛のない旅に上った好太郎。

夏も過ぎて、秋風に木の葉が散って、散って枯れてはや半年。何

処の空を三度笠――

すでに木枯、雪、霰。やがて春――

そして再び螢が飛び交う夏が、三度廻って来た。

飯田宿の町下れ、この界限で客種一番の茶屋『浮舟』に、軒先きに枝垂れかかった柳をくぐって

「御免よ、お酒と御飯を使わせておくんなせえ」

落ち着いた錆のある声。

ぼらりと笠をとれば、月代はやや伸びているが、一層苦味走った伊那の好太郎だ。

見世の中には四五人の若い者が酒を飲んでいゝ。どうせは三ッ下らしい佻しい渡世人風である。

床儿に腰をかけ、一服すばりとやってから声をかけた。

「失礼ですが、お兄いさん達は、どちら様のお身内で御座んすか、御当所さんで御座んすか？」

柔かな物腰に、気を良くした三ッ下ども

「ふッふッふッ俺達かい。いかにもそうだが、お兄さんもこう見た所、いずれ仁義の面を銭にかえる旅人さんだろう。宛がなければ、寄ると良いぜ」

「早速の御親切、有難う御座んす、で、親分さんは今でも山七親分  
で？」

三ッ下共は、顔を見合せた。

「何ソだ。知らねエのか、山七親分は三年前に死んだぜ」

「えっ、そりやまた、どんな訳で？」

と、たたみ込むと、急にニヤリとした三ッ下

「俺達ア二年ばかり前、流れ込んだ子分だから、本当かどうかア知らねエが、何でも手籠めにした女に舌を噛み切られたとの事だ」

(えッ！)

口まで出たのを、辛くも押えて

「そ、そうですか」

「はッはッはッ、縄張りをついだ身内としてあんまり褒めた話じやねえが……さて、今の俺達の親分はね、この飯田の宿で、泣く子もだまると云われている重五郎親分だよ」

「えッ！」



此度は口をついて出た。

(うむ、あの野郎か、三年前までは齒にも牙にもかけなかった男がいまこの土地の大親分……)

変れば変わる世の中と、それっ切り黙って、複雑な感情を酒でまぎらわした好太郎だ。

其処へ、ぬーと入って来た冷飯草履の男。ふと好太郎を見て吃驚した様に眼を見張った。

三太だった。

## (六)

その夜、宿はずれの安旅籠で、好太郎は三太から三年越しの出来事を聞いた。

「兄貴が、あの後直ぐ旅に出てから、山七親分は女を土蔵の二階に閉じ込めて、毎日の様に口説きやがった。ところがどうしても女がうんと云わねえ……そこでとうとう業を煮やした親分は、或夜、女を縄付きのまま土蔵の二階で折檻をやったらしいんですがね、それっきり朝になつても二階から降りて来ねえ、不思議に思つてあつしが上つていつて見ると、女は赤い襦袢のまま後手に縛られていたが、猿轡のはずれた口が血で真赤になつて、その傍に親分が舌を噛み切られて冷たくなつていました。女は髪を振り乱して、青白い顔であつしをじーと睨んでいましたが、その執念に、あつしも思わずそーっと粟立つた位でさア」

「うむ、で、お里とか云うその女はどうした？」

「親分の仇だ、と云うんで子分達が寄つてたかつて膽なますにしようとするのを止めた奴がいるんで……」

「誰だ、そいつは？」

「今の親分重五郎で」

「何だと！」

「おっと兄貴、驚くのは未だ早い、その重五郎は、その女を許したばかりか、かえつて手馴ずけて女房にしちめえやがった。山七親分を殺したお里が、今じゃ重五郎親分の姐さんで、子分共に姐御く奉られてゐる有様で……」

「うーむ、女も女なら、重五郎も重五郎だ。話を聞いただけで、はらわたが腐る様だ」

好太郎唾を吐き度い氣持だ。

「そんな話を聞いたなら、こんな土地に一時もいたくねえ」

と吐き捨てる様に云うのを、三太も大きく頷いて

「兄貴、あつしも連れてつておくんなせえ、今迄かくしていましたが、実はあつしの故郷も、兄貴と同じ伊那なんです……」

三太は好太郎に手を合わせた。

## (七)

伊那は七谷・日は谷から出て谷へ沈む。

伊那の朝夕は、水のように静かに明けて、静かに暮れる。

三太を連れて、十年振りで故郷へ帰つた好太郎は、土地の親分仁兵衛の家に草鞋をぬいだ。そして半年もたたぬうち、持前の氣質と度胸で忽ち兄貴とたたまつられ、仁兵衛の一人娘お仙の婿となつて稼業をつぐ様になつていた。

好太郎最初の中は、別に大してお仙を思つてもいなかった。子分の様でもあり兄弟分の様でもある三太が、年の六十を越した仁兵衛に、何処でどう頼まれたのか、うまく芝居を書いては好太郎とお仙を逢わせた。

瓜実顔で、瞳が澄んで、花卉の様な唇に男心をそそる魅力があつた。それにもまして、きめが細く、滑らかで、シッコリと弾力のある餅肌はたまらなかつた。

女は魔物だ、女は嫌いだなどといっても、木でも石でもない好太



郎、それにお仙の方で好太郎に惚れたとなると、男女の道は唯一つ唇に触れたのがキツかけで、遂々三太にへたかさごやア——

を謡われて仕舞った。

それ以来、子分の者や、界限の後家女房達が、やっかむ程の睦じさだ。

売出しの若親分として定評も出た。

好太郎は、やっと男が女を愛し、女から愛される喜びを味った。

(俺にたとえどんな古傷があったとしても、今の気持に嘘偽りがなけりや良いじゃねエか)

(俺ア仕合わせすぎる、この仕合せが、いつまでも続いてくれりやいいんだが……)

幸福感に却ってそんな不安にも駆られる好太郎だった。

(八)

伊那谷の緑が滴り落ち、再び螢の飛び交う季節がやって来た。

或る夕方、お仙は涼みに出たっ切りだった。道に落ちたお仙の簪の傍に『飯田』と書



いた提灯があった——

そのお仙は後手に猿轡、駕籠に乗せられて三十余里、飯田の重五郎の奥座敷へ運び込まれていたのである。

「いつまで目をつぶってるんだえ——」

長火鉢に片膝立てたのはお里。



朱羅宇の長煙管で一服吸うと、目を閉じているお仙の顔に、ふ——と煙を吐きかけた。

「……」

「おや、やつと目を開けたねえ、成程、いい縹緖だね。好太郎が惚れるのも無理無いよ」

好太郎と、名を聞くと怯えた目にもぼつと生氣が射すお仙だ。

「ふん、恋しい亭主の名を聞いただけで、目の色が変わったね」

お仙はさも憎々しげに云い放った。

「お仙さんとか云ったねえ」

「……」

「おや、聞えないのかい……それとも返事をしたくないのかい」

猫が鼠をなぶる様な態度で

「返事をおしよ」

と、又一服、ふーと強く吹きかける。

「うっ……」

お仙はのぞけつて、からだを捻じれば、胸から腰、腰から乱れた裾へとあでやかな線がうねりくねる。

豆絞りの手拭が、鼻孔から唇を覆って、頬にむごく喰い込んでいる猿轡。

その下から喘ぐ息が切なそう。

「妾もね、その猿轡つてやつを、随分長い間噛んでいた思い出があるんだよ、お前の亭主の為にね……息は喘ぐ、声は出ない、泣くにも泣けない苦しさを、いやという程味ったものさ。此度はお前の番だよ、さっ、何とか返事をおし」

「……」

お里は、煙管を放り出すとお仙ににじり寄り

「返事をしないのかい！」

と口と手は裏腹、意地悪く猿轡の結び目をギリ／＼と締め上げる。

「う、うっ……」

悶絶せんばかりに苦しむお仙だ。

「そうかい、どうしても返事をしないなら、する様にしてやるよ」はっと、お仙は思わず身じろいだ。

お里の手が着物の裾をすつと左右にはだけたのだ。

「さあ、もっと赤い物を出してやろうか、襖の向うには、狼の様な男共が涎をたらしているんだよ」

緋縮緬の艶かしい長褌袴。

真赤な湯文字が、あられもない。

もう夢中で、剥き出された膝を隠す様に上体をかがめたお仙だ。

「顔をお上げよ、声が見えない」

「……」

「おや、ききわけがない女だね、矢張り男共に手伝って貰い度かい」

お里は、いま／＼しように舌打ちをして

「みんな、さあ出てお出で、声を出す迄、此の女を裸に剥いておやりよ」

と襖に向って声をかける。

その声を、待ちかねた様に、襖を開けて入って来た餓狼の様な野郎共、かぶり着く様にお仙に飛びかかった。

赤や青の色彩が、絹の裂ける音がして、お仙の身体からみる／＼剥れていく。猫のように身を丸めて、男たちの視線から少しでもかくれようと甲斐ない努力をするお仙だった。

それを冷く笑ったお里、解け散っている腰紐を手にした。

「その手はどうしたんだい、その手をうしろへ廻すんだよ」

と無理野理に捻じり上げ、白桃の様な両の乳房に迄腰紐を廻すとぎり／＼と括し上げる。

「う、う、うー」



あらん限りの羞恥を籠めて必死に畳にうつ伏すお仙を追って、お里は尚も剣る様な調子で続けるのだ。

「お仙さん、妾しや三年前の夏の夜に、伊那の好太郎の手に掛つて敢えない最期を遂げた、中津の林蔵の女房だったのさ。そして妾は縄付きのまま、ここの家に運ばれ山七親分に手籠めにされると云う目にも遭つたのさ。舌を噛み切つて復讐はしたけど、直接の下手人は好太郎……幸いここの重五郎親分が、山七の後を継いで妾を助けてくれたので、うじ、ぼうふらの様な了簡になり、今迄面白おかしく過ごして来たが、ただの一日だって忘れはしなかったのは好太郎の事さ。その好太郎が、伊那で良い親分になって、女房を貰つたと聞いて、その女房を拐かし、苛めなぶつて怨みを返してやろうと云う訳さ。どうだ驚いたかい」

聞いてお仙は、一瞬上体を起こしたが、又打ちひしがれた様にフラフラと畳に突つ伏した。

「自分の亭主のした事が、どんなに罪が深かったか、人の怨みがどの様なものなのか、これからその白い肌にもいやと云う程思い知つて貰うからね。女の身体にや、女は用がない。さあお前達、この女煮るなり焼くなり勝手においし」

と、お仙の身体に意馬心猿を燃している男共へ顎をしやくつた。

「待て、その料理は、俺が引受け様ぞ」

ニツタリ笑つて、色模様の座敷へ、ヌーッと入つて来たのは親分の重五郎だ。

まずい所へ帰つて来やがったと、心の中で舌打ちをしている男達と違つて

「おや、親分、丁度良いところへ……」

とお里は一人、妖しく微笑んだ。

(九)

必死に腕く、お仙が、重五郎の両腕に抱きかかえられた。奥の別間の厚い夜具。その中にお仙が横たえられてから一刻後——匕首を袖にかくしてそつと、その部屋を窺うお里の姿があつた。

お仙はフツと我にかえつた。

と、今迄後手に背中中で一つに縛られていた筈の手が、動く。

今更逃げ出しても、汚された肌身を思うと……正気に返つた自身は恨らめしい。

見ると、自分の傍に重五郎は、いぎたなく眠りこけている。そつと身を起すと、乳房から縛しめの腰紐がポトリと落ちた。

鋭利な切口——

(誰かが、そつと、縛しめを切つた?)

見ると、枕元に無気味に置かれてある匕首。それが行燈の灯を受けて青白く光っている。

顔の猿轡も忘れてその刃に憑かれた様に凝視したお仙だ。

「グワー」

と大きく肝声いなきをあげて寝返つた重五郎に、お仙の眼は剃刀の様に光つた。

お仙の手は、ぶる／＼と慄えて、その匕首を逆手に持った。

と、匕首は閃いて、重五郎の咽喉笛をグサと刺した。

ぷーッと白い、お仙の二の腕に飛沫いた血潮の紅葉。

その時である。

座敷の襖を開けて飛び込んで来たのは好太郎と三太だ。

そして、そこに血の滴る匕首を下げ、放心した様なお仙の姿に流石の好太郎、思わず呀つと云つて立ち竦んだ——

すると背後でかん高い笑い声がしたのである。

「ホホホホ、とう／＼来たね、伊那の好太郎親分」

「うぬ、お里だな！」

いつ来たのか、子分共を従えて、其処に艶然と立つお里を見て憤



怒の目を剥いた好太郎だ。

「まあ、おっかない顔だこと……自分の恋女房が汚されて、そんなに口惜しいのかい」

「な、何を！」

「好太郎は、ギリリと脇差を抜き放った」

「何をシタバタ騒ぐのさ、埃りが立たあね、まあゆっくり、腰でも落ち付けて聞きなさいな」

「ええい、すべたの声を聞くだけで、はらわたの腐った匂いがすらあー」

「そのはらわたの腐った女に三年前にしたのは、一体どののどいっだい！」

好太郎思わずぐっとなつた。

「好太郎親分、よく三年前の事を思い出して御覧よ、そちらは一宿一飯の渡世の作法か知らないが、無体な横恋慕をされ、亭主を殺され、手籠めにされて泥沼に落ちた女は、どうなるんだよ。事の善悪を問わず、親分の為に命のままに赴くのが、やくざ渡世の美しい慣習の一つなら、妾だって斯うして亭主の仇や、その片割れを討つ為にした事を、お前さんの方から罵られたりする訳はありやしない。ね、何とそんなもんでしよう……」

好太郎は目を瞠った。三太もそうだ。

昂奮の為に薄紅に匂うている、未だ色香の消えぬお里の顔を二人はしげ／＼と見守っているばかり。

「だが、因果応報とは云え、お前さんにしてみりや、恋女房を拐かされ、汚された怨みは怨み、妾にしてみりや亭主の仇の張本人。そして後の子分達にしてみりや、重五郎親分の仇、その最後の勝負を今こそ、つけ様じやないか」

お里の目が異様に光った。

好太郎も頷いた。

「成程、聞いてみりや、すべてこれも、親分子分の因縁づく、やくざ渡世の作法から出た因果の巡りだ、俺ア、たとえ汚れた女房でも引取るぜ、いつ何時、どんな事があっても、五尺の体を手前自身で引取るわさは、やくざの稼業にや、ドスしかねえ、さあ、どういつもこいつもかかって来い！」

凜とした好太郎の聲が一ぱいに響くと、次の瞬間は、刃と刃が鳴って屍山血河現世の地獄だ。

又、血飛沫が上った。――

(終)

## 女体緊縛フोट

G組 大中判印紙画焼付

各組1枚	一枚	一枚
五枚	六〇〇円	(送共)
十枚	一〇〇〇円	

G1	鉄鎖と柔肌 (高瀬 忍)	ES2	三枚一組 全裸悦虐集 (須川)
G2	股間縛正面 (高瀬 忍)	ES3	四枚一組 腎 羞 (佐賀)
G3	海老晒し (萩千恵子)	ES4	三枚一組 酒宴の弄者 (佐賀)
G4	羞紅の椅子 (菅登紀子)	ES5	二枚一組 脱がされる娘 (須川)
G5	量感の帯 (伊吹真佐子)	ES6	五枚一組 あわや寸前 (佐賀)
G6	アイデア (萩千恵子)	ES7	二枚一組 剥れたブローズ (佐賀)
G7	叫喚の森 (伊吹真佐子)	ES8	五枚一組 乙女のすべて (花坂)
G8	全裸目隠し (村田那美子)	ES9	七枚一組 七枚一組 女学生の縛り (須川)
G9	優すがた (花坂道子)	ES10	二枚一組 緊縛のベッド・シーン (佐賀美智子)
G10	開股一番 (萩千恵子)		六枚一組 三三〇円
E組	(9×13cm印画紙焼付)		
ES1	ヌード緊縛集 (佐賀)		



## 春 浅 き 日 に

—文江の切腹—

佐 藤 す み 子

文江は眼の前で自分をうらみつつ死んでいった男の姿をまばたきもせず、じっと見つめていた。文江はたしかに心からその男を愛していた。しかもかつてはその男と心中しようと思つたことがある仲だったのに、文江はその男を裏切つて第二の男に体を許してしまつた。もちろん、そうなるには彼女にとって背負い切れない色々なきさつが彼女の周囲に渦を巻いて、もうどうでもなれとその真ただ中に飛込んだ——結局彼女自身の弱さによることだった。文江は男に一切を告白して、それ以上はただ済みません、済みませんと泣きじやくりして許しを乞うばかりだったが、文江を命にかけて愛する男には到底たえられないことではなかった。男は自分が侮辱された

ものとして、文江を怨みつつ彼女の眼の前でとつさの間に腹を切つて死んでいった。

文江はあまりのことに茫然として、朱に染つて倒れた男のしかばねを見まもっているうちに、何とはなしに自分も男の跡を追つて死ななければ、自分の立つ瀬がないように思われてきた。これから第二の男と関係を續けてゆくことは良心が許さないし、のめのめ生きていては、死んだ男にたたられるような気がした。

「あたしも貴君のお伴をします—」

文江は自分にいい聞かせるようにつぶやくと、うつ伏せに倒れている男の体をだき起して、その手から短刀を取ろうとした。短刀は刃先を三寸ばかり出して紙で巻かれ、その刃

先全部が男の腹につき刺つていた。大きく切開かれた腹壁からは、大腸や小腸が無気味にはみ出ていたが、文江はちつともこわいと思わなかった。それ所か、こんなせい惨な有様で自分のために死んで行つた男をいとしいと思つた。

短刀を腹から引抜くと、どろりと餅のような大きな血の塊りが一緒にあふれ出た。

文江は、しっかり握られた男の指を一本一本放していったが、血を含んだ紙がべとべとにくっついて来るのにはいささか閉口した。それでもやっとの思いで短刀を引放すことが出来た。短刀は刃渡り六七寸のもので、柄も何もみな血だらけだったが、その血にはまだ微温が残っていた。



「許して下さい——あたしも貴君のようにお腹を切って死にます。あたしは罪の深い女です、貴君がお苦しみになった以上に苦しみながら死んで行かなければ貴君にすみません。どうか見ていて下さい」

つぶやくようにそう云って、文江は立上ると、するすると帯を解いた。

アパートの午後は、ものうい位に静かだった。まだ春は浅いけれど桜が咲くのは何時ごろなどと、もう人の口にのぼっていた。下の部屋でかけていたレコードが軽音楽から静かなバイオリンのソロにかわった。

文江は男のオーバーのポケットから鍵を出して、ドアに錠を下した。そして男の死がいの前に坐って胸を押開いてみたが、腰紐が邪魔になるのでほどこいてしまい、それで膝をゆわえることにした。

文江はうんとお腹に力を入れてみた。今年二十二になる女の、処女を失ったとはいえ、まだ男と幾回も関係したことのない体には、処女の名残の失せきらぬ肌のつや、豊かな乳房のふくらみがほのかに香っていた。

彼女はくつろげた着物の前を思いきりぐつと腹部まで押下げた。そして何処を切ろうかとお腹に手を差入れてみた。下腹の方が力が入って切りやすいような気がしたので、お腰の紐をゆるめて、下腹が充分に露出するように前をひろげた。

短刀を手拭で巻いて刃先を二寸ほど出し、右手にしっかりと握りしめ、左の下腹に刃先を押あてた。

彼女は目をつぶって、南無ツと口の内で念仏をとええと、短刀を徐々に腹に垂直に押付けていった。彼女は眉をひそめて、一生懸命、もうずぶつと皮を破って突刺さるか、もう血が出るか痛いかと、気が気でなかった。けれども、お腹の皮はだんだん引込んでゆくような気がするし、約一寸ばかりも短刀の刃先をささんでお腹の皮が深く凹んでひだを作ったきりだった。

文江はそっと押込む手を止めて、短刀を腹から放してみた。赤く一分ほどぼつんと血がにじみ出ているきりで駄目だった。

「駄目！」

彼女は何だかほっとしたような、がっかりしたような気持で短刀を見直した。

「いえいえ、どうしてもしなければ……」

今度は短刀の柄頭を畳について、それにのし掛るように、前こごみになって、自分の体の重みにはずみを付けて、一、二、三！と短刀に体をぶつけて行った。

ぶすつと驚くような大きな音がして、今度こそ短刀は文江の腹壁を貫いた。

「うッ」

と思わず声を立てると文江は、急に頭から血が一時に下ってしまったような貧血感を覚

えた。けれどもそれは極く瞬間的で、まあよかったと云うような感じも、それにまじって彼女の全身に駆せめぐった。

はアはア息がはずんで仕方がないのを、じつと落着けて、恐る恐るみると、刃先は巻いた手拭の端からまだ一寸ばかりほのかな青白い光を見せていた。予想に反して血はちつともだくなく流れ出ては来ないで、創口から僅かににじみ出るように、ばあーと刃にひろがって来て、やがてそれが集ってぼたーぼたーと滴のように、畳の上にたれ、何時の間にか巻いた手拭にも、ぐっしより吸われて行った。

刃の青白い光と血の色とが妙に調和して、思わずまア綺麗なことと云いたくなるような妖気に満ちた美しさを見せていた。

でも彼女はあたしは死ぬのだ、死ななければと、強く自分に教えるように思いかえすと同時に殆ど反射的に、短刀を握った右手に左手をそえて一層力をこめてぐつと突込んだ。

一寸ばかり残っていた刃先も思ったより造作なく全部刺さってしまい、短刀を握った右手の手はびったりと腹壁に密着した。

文江はもう半分は夢中といったもしい位に持ちそえた左の手に力をこめて、うーんと右に引廻した。

痛かった。焼かれるように、引裂かれるように——実際、彼女は自分で自分の体を引裂



いているのだ。今までに、どんな痛みにも嘗  
って経験したことのない程の、従ってなんと  
形容したらいいかわからないような劇痛が文  
江の下腹部、いや脳天までも響きわたった。  
彼女は眉に八の字を寄せ、口をゆがめ、歯を  
くいしばって之に耐えた。

文江は随分大きく切ったつもりで、もうこ  
れで死ぬると思った。そつと眼を下腹の方に  
向けると、今度は血が走るようにごぼごぼと  
湧出していた。傷口は三寸ばかりだったが、  
皮下脂肪と肉がまくれ上るように大きく口を  
あけていた。けれどもまだやつと臍のわずか  
右寄りに来たばかりで、短刀の刃先は何時の  
間にか一寸も浅く抜け出てしまっていた。

思わずはっとして「しまった！やり損なっ  
た」と心の中で叫ばざるを得なかった。そう  
思うと彼女はやにわに満身の力を両手にこめ  
て、再びぐつと深く刺通すやいなやブリブリ  
と強引に引廻した。

短刀を握った右の手が腹の中にめり込んで  
行くようだった。そして今度はぱかッと大き  
く口をあけた彼女の下腹から大腸がぞろりと  
ふくれ上るようにはみ出してきた。そのぬる  
りとした生温い感じに、文江はくらくらと目  
がまうと一緒にききを催しそうになって思  
わずペッペッと唾をはきだした。

血はシューッ、シューッと波打ちながら細  
い線を描いてほとぼしり、その先があられの

ように点として  
飛沫になつて行  
くのもあれば、  
だらだらと留め  
どなくしたたり  
落ちて行くのも  
あった。そうか  
と思うと、彼女  
が息をつくたび  
に、腹の中の深  
い部分から時々  
ゴボツ、ゴボツ  
と井戸水をかい  
出すような出方  
をしながら、彼  
女の手をあかあ  
かと染めてゆく  
のもあった。

これで死ぬる  
彼女はやつと行  
くべき所に行き  
着いたような、  
安心にも似た気  
持ちで、死んで  
行くのを待とう  
とする余裕が出  
てきたようだっ  
た。





彼女は突つ伏したままじっとして死んでゆくのを待っていた。その時間は本当にはかつたら、せいぜい三四分そこらだったろうが、彼女には一時間も二時間もの長さに感じられた。

深い谷底にでも落込んでしまうように、段々気が遠くなつていった瞬間、文江はお腹がきりきりツと猛烈にかき廻されるような痛みを感じて意識を引戻されると、思わずうなつてしまった。

咽喉が焼付くように乾いて堪えられなかった。水、水！無性に水が欲しくなった。後さきも考えずに、というよりは反射的に台所へでも行つて水を飲むつもりで、文江はすつと立上ろうとした。

紐は全部ゆるめたり外ずしたりしてあつたから、立上ろうとした途端に着物は上半身からぞろりと脱げて左の肩からすべり落ちた。右の手は短刀を腹に突込んだまま、脱出してきた腸の中に埋っていた。

膝をゆわえておいたので、文江はすつくりと立上ろうとしてまんまと尻餅をついてしまった。そのはずみに膝を結えた紐も脱けて、着物の前がはだけてしまった。本能的にまくれ出た膝頭をかくそうと、左手をのばしたがしびれてでもいるように手が利かなくなつていたので、彼女はもう駄目だ、いよいよ死ぬのだと直覺的に観念した。

女二十二才の生涯を、女だてらにお腹を切つて死ぬなんて——と自分を憐れむ気持ちがふと湧上つてきた。

「恥かしい、女の腹切りだなんて——」

半裸体で血まみれになっている自分の姿にふと気がつく、文江は居ても立ってもいられないような羞恥心が、血のけの失せた顔をわずかにほてらせた。

はやく死にたいとあせる気持ちに追かけられながら、文江は今にも滑り落ちそうな着物の前をかき合せようとしたが、その度に彼女の体は倒れよるめいて、結局彼女は部屋中をのたうち廻るより外はなかった。

ただごとならぬ部屋の気配、それにうめき声は、あたりの部屋の注意をひかずにはおられない。誰かがノックし、誰かが鍵穴からのぞいたから騒ぎは大きくなった。

もしも管理人の合鍵でドアを開けられたらと思つた文江は、一刻も早く死にたい、死ななければと、もう恥かしさより死ぬことが先だった。

「そうだ、止めを、止めを」

と、文江は腹に刺つたままの短刀を引抜くや、夢中でみぞ落ちを突いたが、もう力が弱っているものだから刃先は五分も入らなかった。

管理人を呼んで来たらしく、ドアに鍵の音がガチャガチャとせわしげに響くかと思う

と、ドアは大きく向う側にぶつかつて、どつと人の顔が折重つて部屋の中へ飛込んできた。

文江は最期の、ありつただけの力を振りしほり、泳ぐような手付きをして左の乳房を掻切るや、深い谷底へでも引ずり込まれるようにすうつと一時に気が遠くなつていった。

殺倒した人々は、部屋の真中に倒れている男の姿と、片隅で上半身をあらわにし、のけざまに倒れ、その腹部からは鮮血にまみれた腸管がすさまじく膨れ上つていて、左の乳の所で短刀を握つた手をかすかに動かしなうと、もうそれきり永遠に動かなくなつてしまった半裸の女の姿を見出して、ぎよつと立すくんだ。

× × ×

これは昭和二八年Y市であつた実話です。そして何を隠しましょう文江さま(仮名)は私の親しい友でした。その節の短刀は私が遺品として頂き、今なお所持しておりますが、時おりひそかに取出し鞘を払つてみて、あの時文江さまはこうしてと——何だか体がぶるぶるふるえます。私が切腹に心ひかれるのはこの短刀があるからでしょうか。私はどうしたら良いでしょう。KKの女性の同志の皆さま、お教え下さい。



# 愛<sup>マ</sup>好<sup>ニ</sup>者<sup>ア</sup>街を行く

— 私の見聞したマゾヒズム —

とやま・かづひこ

(はじめに) 沼正三氏へ—四月号で拙文への御教示ありがたく拝見、尊敬して止まざる貴兄のお見出しを受け光榮に存じます。

フェティシズムとMの限界は仲々デリケートですが、私は、自己分析の末、自分はMではなく、むしろ前者の立場にあると考えています。私の場合、例えば、躊躇し、むしろイヤがって逃げようとする相手方から、その『液体』なり『固体』を、自身の口中に向けて放出させる。そのことにスリルを感じ、対象者をおどし、すかし、力をつかい、追いつめてモノにする快感、そして相手そのものを自分の体内に入れようとするその意慾は、むしろ私のSと考えますが、如何ですか、附け加えますと、異性には、私に向っての放出を非常に喜び、進んでやってくるものと、反対にその行為を極端に不潔とし、罪惡視するものの二つの型にハッキリ区別出来るのです。いずれ後日、このスペースでノートするつもりですが、自分の固体を紙に包み『オミヤゲ』と云いつゝ渡してくれ、更には、放射をマホー瓶につめて来てくれる女性を私は会社の同僚に持っています。私考えますに、この女性是一种のフェティシズムと思いますが、如何ですか。もっとも、その『オミヤゲ』なり『お茶』に対して、私が法外と自分ながら考えら

れるほどの金をとくに与えるせいもあるのでしようが。御高見伺えれば幸いです。ではペンを進めましょう。

## 銭湯と大陽菌

話は少々古いですが、昨年十月二十三日附『内外タイムス』コラムの一節を引用。

前略—ところで、風呂屋で病気をうつされるのは大人ばかりではありません。乳呑児といわれる赤ん坊の七パーセントに蛔虫寄生率が証明されておりますが、その原因が土やホコリによるもの以外に、お風呂のお湯をなめることが案外多いのではないかといわれております。

近ごろの若い娘さんは、ショーツを脱いでいきなり湯舟に飛込む傾向があるように聞いておりますが、この場合、付着している排泄物の残ガイが溶解して湯舟いっぱいになる結果は、風呂屋さんが大腸菌の温床となるゆえんです。

しかも子供の頃は、どなたも経験がおありでしょうが、風呂に入ると、裸になった反射現象感として排尿感をもよおします。自分の家の風呂では、こんなとき我慢もしましたようが、公衆浴場になるとついよい気持になつて、浴槽内放尿の快感を味わう傾向が多いのであります。しかもこの傾向は、男性よりも尿道のはるかに太く短かい女性で



は括約筋の抵抗の関係で知らず知らず洩れてしまうものであります。この結果、極端に申せば、銭湯はベンジヨの代用所であると定義できるでしょうか―後略とある。

浴槽とWCの関係を事細かにしるしているが、文中、若い女性が、排泄物を付着させ云々の個所を読んで、私は、無心にその溶解した『汚水』をなめる赤ん坊がうらやましくてならないのだ。私だったら、こんなことで蛔虫がうつろうと、バイキンが口へ入ろうとむしろそれが喜ばしいことなのだから。

### ポータブル尿器

所は新丸ビルの地下ホール。

土曜日の午後、ある雑誌社の講演会。

アメリカ婦りのその雑誌社々長の帰朝報告会で、アメリカの自動車工業の話の一節で、こんなことを云った。

アメリカは、なにしろ広大な国、大陸を横縦して、サンフランシスコからニューヨークへ、ニューヨークからサンフランシスコへと、自動車で旅行する人々にとって、長の道中最も困るのが、WCの問題。

男性はともかくとして、いくらアメリカ人でも女は女、まさか道ばたで、放尿も出来ない。仕方がないので、彼女たちは、車中でカンヅメの大型のアキカンを利用して用を足し

それを、窓から外に捨ててゐるのだそう。

道ばたにころがっているアキカンは、大体その彼女たちが用を足したものだから、汚いと云って、バタヤもこれをひろわない、と、講演者は聴衆を笑わせた。

汚い―と思うとはとんでもない。私なら、喜んで、中味まで頂くのに―と私は思いつく。話はまだくくつづいて、近頃は、ポリエチレン製の『ポータブル式車中便器』もあって、車内から外の風景を楽しみながら、チユーインガムかみかみ、人知れず用を足して、それを無造作に、お供のボーイフレンドに窓から外へ捨てさせる勇敢な女性も追いついておられます、と講演者は話を終らせた。

ポータブル式尿器とは面白い着想だ。それを男性の手を使って捨てさせるところは、いかにも女性天国、アメリカらしい風景と私は思う。一歩進めて、忠実な男性なら、喜んで自分自身を『携帯用尿器』として彼女に提供するであろうと夢想するのは、私の云う、『空想の楽しみ』かもしれない。

### 看護の道具に思う

家庭看護法の書物に折々私たちの好みを反映したグラフや記事が見られる。

これもその一例。

『暮らしの手帖』二十八号五十五頁―六十四頁のグラフ特集。

### 『道具』その3『病氣』

には、浣腸器、肛門計、男子用尿器、女子用尿器、さしこみ便器、など実物写真で詳しく紹介されている。

同誌バックナンバーは一冊百六十円、発行元は、東京都中央区銀座西八ノ五、暮らしの手帖社。但しこの号は昭和三十年二月五日の発行だから、新刊でないことも附記しておく。

同じく読売新聞社発行

『家庭よみうり』別冊

『看護の仕方』二十四頁の『便器』のページもたしかに見えたえがある。特に『便器のあて方』の場合、モデルを使いいくわしくグラフで紹介している。

右二冊と限らず、本屋で、看護の本を見かけたならば、一応目を通しておくことをおすすめしたい。

### ドラムカンの蔭で

千葉県幕張町一町とは云え、一面の麦畑の道を、私より一足先に一人の女性が歩いてゆく。

二十七、八の和服の品のよい好みは、中流家庭の若奥様を思わせる。

とつぜん、その女性は、あたりを見廻し、立止まって、私の通りすぎるのを待つ様子。



私は、今更歩調をおくらせるのもおかしいとそのまゝ通りすぎて、道を左へ折れ、それとなく様子をうかがった。

彼女は、ソワ／＼あたりを見ながら、そこに立てられてあった十本ほどのドラムカンのむこうへ姿を消した。

(ハハア)

私のカンは的中らしい。

五分もすると、その婦人は、ドラムカンの向うから立上って、ソクサと再び道を足早やに進んで、いつか姿を消した。

私はソロ／＼とドラムカンの向うへ廻って見た。

そこで私の見たものは――。

私のひそかに、あこがれていたもの。

魅力の小山。

あたりの草は露に濡れ、あこがれの水のたまりも見られた。

躊躇せず、私はそこへ腰を据え、しばし、

その小山をたのしんだ。

そしてその水のした／＼りへ、ソツと口をつけてもみた。

身をふるわすその味。

私はたんのうした。

決して白昼の夢でなく、昭和三十三年三月十二日(水)所用の途中で得た偶然のプレゼントだった。

## 鉄格子の中の女たち

日本観光新聞三月十七日号から――。

『鉄格子の中の女たち』というレポートの一節にこうある。

この両側は大体重刑用の独房なんです。と看守長がいったとたん『ウオーツ』という獣のようなウメキ声がしてギョツとさせられた。髪をふり乱して歯をくいしばった女が鉄格子にしがみついている。まだ若いらしい。『ついこの前入った麻薬患者ですよ』と看守長はなんでもないうように説明を続ける。

よく見ると房内に水たまりが出来ていて異臭が鼻をつく。大小便もたれ流しらしいがこれでも出所するときは完全に落ちついた女性に返っている。――後略。

と悲惨なレポートをしている。この記事を読んで、私――とやまかづひは考える。

看守長がうらやましい。

麻薬中毒とはいえ、若い女性のたれ流しの始末とは、常人なら知らずかづひのなら、喜んで、志願し、そのあと始末を完全に、キレイにして差上げるであろうことを。

かづひこの友人にこんな体験者があった。その友人の知り合いの女性に、麻薬中毒者が居り、彼女は、薬が切れると、クスリほし

さに、どんなこともするそうだ。

『キタナイものでも、なめろと云うと、平気で呑み込んでみせるんだぜ』

友人は、得意になって云い、事実、自分のからだから出たものを、その女性にたべさせ、そのように云うことを聞かせてから、金を与えていたらしい。

麻薬――その恐ろしさを、かづひこは知らないが、中毒者になれば、どんなつらいこと、恥づかしいことも平気でやるものらしい。とすれば、こちらの求める。あこがれのものを手に入れるにも、命令ひとつで、中毒者は、喜んで、己のものを提供するであろう。女性のなかには、自分のものを、呉れることをイヤがる人もあるが、このような方法で、エサを与えれば、吾々の求めるところのものを手に入れることは容易かもしれない。

## 眼科医院にて

目がいたむ。

眼科医院へ行き、診てもらったら、急性の結膜炎で、しばらく通うようにとのこと。

楽しいことに、美しい女医さんで、治療のときは相当痛い目に合わされる。

痛くても、苦痛と感じないのが、マゾヒストのよいところだろうか。

治療が終ると、眼玉一ぱい、ドロ／＼の黄色いねりグスをベタ／＼に塗られる。



その色と云い、感しよくいい、『固形物』ソックリなのもまたたのしい。

かづひこは、いつもそのとき、こんなふうを考える。

この女医さんはかづひこの女主人。

彼女は、閑ツブシに、かづひこをいろいろな方法で、苦しめ、もてあそんでたのしむ。

自分のからだから出たものを、かづひこの顔にぬりつけて、面白がる。

その『モノ』は、かづひこの眼をおおい、鼻をぬりつぶし、口を一めんに、壁のごとく塗りつぶす。何をされても文句ひとつ云えぬ、ドレイのかづひこは、女王さまのからだから出たものを顔一めんに塗りたくられて、お許しが出るまでそれを洗い落すことも出来ず、『固体』のために、チッ息しそうになる『ヨシ』

やっとお許しが出て、顔にぬられたものを手ではがし、猫の如く、その手を口で清め、やっとな、許される――。

かづひこが、治療台で、こんな楽しい空想にふけつていとも知らず、美しき女医、T先生は、『おまちどおさまでした』という。一たん塗ったドロドロのクスリを、きれいに洗い落してくる。

こうして、不快な医院通いが、かづひこには楽しくてならないのである。

## オゾンの説

戦前もかなり古い話。

『文芸春秋』のゴシップ欄に、こんな話が出ていた。

パリに永住する日本人で、オカモトという老人は、

若い女性の『固体』は栄養素『オゾン』を非常に含んでいる。自分はそれを摂取するため、女の子には、自室内で、便器を使わせ、若返りのオゾンを、そこから吸収している。

という意味のものだった。

往々フランス人には、コプロ派が、割合多いことは聞いているが、このオゾン説も、そのへんから引き出されたのかも知れぬ。

フランスの話は今ひとつ。

これも戦前のある雑誌にあったもの、パリに住むあるフランスの占い師は、排出された『黄金水』をグラスに取り、それを舌先で味わって、その女性の生国、年令、職業、性格、趣味、運命百般をピタリと当てるといふのである。

そのアイデアの面白さをかづひこは買うものである。

だがこの占い師のごとく、このように勿体ぶったならば、大ていの女性は、自分の運命を占ってもらうために、恥づかしもなく、自分

の黄金水を供出するであろう。

この占い師、黄金水を味わうために、便宜上、このようなテを用いたので、本心はコプロ派の一人だったのではないかしら。

ところで、一九五八年の日本でも同じこと。勿体ぶったリクツさえ云い出せば、オゾンを摂るための固体も運命を占うための黄金水も案外容易に得られ、人生はますますたのしくなるのではなからうか。

演出さえ巧みなら、入手の困難とされる、若い女性のものも望み通り口にできるのでないとかづひこは考える。

(おわり)

責められる男性、  
虐められる男性十態

滝れい子画八分 譲

「マゾヒズム画廊」

大中判印画紙焼付十枚一組千二百円

略号(ろう)

- 一、屋根裏の妖女 二、黒帯と雪の足
- 三、御寮さんと丁稚 四、女学生と中学教師 五、禪かつぎの受難 六、二号さんと重役 七、従姉と中学生 八、愉しい苦行 九、衣桁の陰に舞う鞭 十、土牢の女王とスパイ



## 十三人目の奴隸

(完結篇)

夢 原 狂 介

——やがて藤野は、お嬢さんに、

「奴隸さん、お前は素直なようで存外、意地っ張りだね。私の好意を跳ね返す度胸は大したものだよ。わたしは、大勢の奴隸達の前で赤恥をかいたんだよ。その礼を受けて貰おうと、こゝへ来て貰ったのさ」

お嬢さんは、俯向いたまゝで黙っていらっしやいます。

「お前は、私の尋ねることに正直に答えるのだよ。お前は奴隸になつて嬉しいだろう」

お嬢さんは、首を横に振られました。

「そんな筈がない、嬉しいだろう」

やはり横に首を振られました。

「本当に嬉しくないかい。しかし、それ程嬉しくないお前が又、どうして主人の機嫌をおとりだね」

お嬢さんは一瞬、不思議そうな表情で、藤野を見詰めていらっし

やいました。

「そうじゃないか。知らないのなら云ってきかせてやるが、お前で二人目だ。前の一人は今頃は三途の川を渡っている時分だ。うちの主人は余程気に入った女でないと、奴隸の印はつけないし、女も自分から進んで主人に頼んでつけて貰うのだが……お前も身に覚えがあるだろう」

お嬢さんは勿論、覚えのない事ですから首を横に振られました。

「知らないというのか、しらばくれるのもいゝ加減におしよ。お前がいくら胡魔化そうたって、其の手は桑名の始だよ。それより、あつさり白状したらどう？」

お嬢さんが、黙っていらっしやいますと、

「渋太い奴隸だね。どうしても白状しないのかい。しなきやしないでもないゝ、証拠を見るのが一番早いからね」

と、お嬢さんの珍妙な服に手をかけたかと思うと、グイと腰まで



一気に下げ降しました。余り突然なことなので、お嬢さんは一瞬びっくりなさって全身を震わせています。藤野は平手で、お嬢さんの胸を音がするほど叩いて、

「これは一体、何んだね。『限りなき貴下の愛に随喜する私』こんなものを自分の肌へ彫らしておきながら、図々しくも、しらを切るつもりかね。この泥棒猫！」

と云い乍ら、お嬢さんの胸を捻り上げました。お嬢さんは「ウウウ」と呻き乍ら烈しく五体をゆすぶって居られます。その苦しみの下から何か云っていらっしやるのですが、猿ぐつわのために言葉になりません。終いには涙をポロポロ落されるのです。あゝ、お可哀そうにと思いますが、私も柱に縛られ猿ぐつわを嵌められているので、一心に神さまにお祈りするより仕方がありません。

「お前がわたしから主人を奪ったことは、お前の肌が証明しているのだから、この上は潔くわたしのお仕置を受けるんだ。そのためにお前の命がなくなっても、それは主人を奪ったお前の責任だから、お前自身を恨むんだね」

お嬢さんは「ウウウウ」と叫ん



でいらっしやるのですが、女は意地悪く猿ぐつわを外そうともせず「女奴隷が不義をした時は、主人に叩き殺されるのが普通だ。しかし私は殺さないよ。殺さずに死以上の苦しみと恥辱を加えてあげる



から」

お嬢さんは何か叫び乍ら、首を烈しく横に振られました。

「厭なの、奴隷でも苦しい事は厭なんだね」

私は総身が震う程、憤りを感じました。一言目には「奴隷、奴隷」と、この女は私達をすっかり奴隷にしきった気持でいる、それが憎いのです。こんな女が世の中にいる事は私達女の恥です。

「お前は赦して欲しいだろうが、それは出来ない相談だ。——それとも、わたしの命令を素直に守るのなら赦してやってもいいが」

お嬢さんは、コクンと肯かれました。

「そうか、じゃあ赦してあげるが、少しでも命令に背けば取消しだよ。わたしが尋ねること以外に、お前は口を利く権利がないのだから、そのつもりでいるんだよ」

藤野は、そう云って傍の男に何かささやきました。男は倉から出て行きました。藤野は、お嬢さんの縄と猿ぐつわを解きにかゝりました。この時、私は、なんの今こそ此女一人だ。捨身でかゝればきつと倒す事が出来る。その後で自分は自殺してもいいし、自首してもいい。今を外せば、もうこんなよい時期はないだろうとさえ思ったのです。しかし後になって判ったのですが、この時、私が縛られていたのでよかったです。でなかったら、お嬢さんの一命に取り返しのつかない事が生じていたと思います。

「さあ、着ているものを全部脱いでしまおうんだよ」

お嬢さんは、あきらめて素直に脱がれました。この寒い師走に湿っぽい地下室で、憎んでも憎んでも憎み足りない相手の前に、肌を曝さねばならないお嬢さんの心のうちを汲むと、とてもまともに見て居られません。

やがて藤野は、壁の釘を押しました。間もなく男が真赤におこったコンロを持って来ました。気のせいか、少し温い感じがします。

「さあ、あっちを向くのだよ」

藤野は、あたりに散らばっている縄切れを拾い集め、これにくるくると丸めると、それでお嬢さんのお尻をゴシゴシと拭きました。お尻の肌は見る見るうちに赤くなって、痛いのか微かに呻いて居られます。すると藤野は、傍の薬罐の水をジャアッと浴びせました。冷たいのとしめるので、お嬢さんは「アアッ」と短く叫ばれます。藤野は愉快そうに、

「奴隷のくせに、神経は一人前に持ち合せてるんだね」

と笑い乍ら、やがて木箱から赤いチヨコレートのようなものを出し濡れているお嬢さんのお尻へ、グルグルと円を描きました。お尻が美しいだけに、赤い色がくっきり見えるのが痛々しく思いました。

「さあ、今度は四つん這いになって」

お嬢さんは無実の罪ながら、罰を免じて欲しいために、あらゆる辱しめを甘受して居られます。藤野は、それをよいことにして、次々と無残なことをするので。お嬢さんが、体についている薬屑を払い落そうとなさいますと、

「馬がゴミなどどったりしないよ」

と云い乍ら、お嬢さんの手を払い除ける憎らしさったらありません。さて、それから私を柱から解くなり、直ぐに後手に縛り上げ、

「お前はこの馬に乗って、この中を私が許すまで廻るんだ」

何んと云う情けないことでしょう。他人ならとも角、日頃敬慕しているお嬢さんの背に、どうして跨ることが出来ましょう。しかもこの寒い時に、無残にも裸にされた背中に、気でも狂わない限り乗れる筈がありません。私は猿ぐつわを嵌められているので、身振りで必死になって哀願しましたが、許してくれません。この上は少しでも、自分の身を軽くせねばいけないと思って心で詫び乍ら、お嬢さんの背に跨りました。すると藤野は、私の右足首に結いつけた縄を伸ばして、私の首に一卷き巻いて、その残りの縄で左足首を縛ってしまいました。これで私の足先は床から離れてしまったのです。



そのために私の体の全重量が、お嬢さんにかゝるのです。お嬢さんに少しでも軽くと思つたことが、すっかり駄目になつてしまいました。全く意地の悪い女です。その上、私の膝とお嬢さんの胸の一つに縛つてしまいました。それから、お嬢さんの首へ縄を縛りつけ、その縄尻を藤野が握りました。そして、お嬢さんのお尻をビシリとたたきました。お嬢さんは四つ這いのまゝ歩きます。私は目をつぶつて、お嬢さんに許しを乞う気持以外、何もありませんでした。倉庫の中は余り広くないのですが、三回も廻ると相当えらいのです。ちよつとでも休むと鞭が飛んで来るので、お嬢さんはハアハアおとしやり乍ら廻つて居られます。私は、こわごわ目を明けて見ますとお嬢さんの首筋は真赤に充血して汗がガラガラと光っていました。呼吸が苦しいのか、背の筋肉がしきりと波打っています。恐らく全身に、苦悶の表情が現われていたと思います。それに、遅いと云つて縄尻をグイッと引くので、縄が首に喰込んで咳上げて苦しめます。全く、この世のこととは思われません。畜生のような恰好で這い廻るお嬢さんのお気持は、口では現わせないでしょう。「お嬢さん、勘忍して下さい。その代り、私は後であなたから、どんな責折檻でも喜こんでお受けします。鵜殺しになさつても構いません。しばらくの間です。どうぞお許しになつて……」私は縛られた両手で合掌する気持でした。

——やつとのことです許されたお嬢さんは、くたくたになつて俯伏せになつたまゝ物も云えない位、疲労された御様子です。しかも、床がコンクリートのため、膝頭から血が噴き出し、まわりが青黒くうっ血しています。でも許されて、ほつとしたのも束の間で、今度は男が大きな空箱を、人の身丈位に積上げました。そして少し離して、それと同じようにもう一つ積み上げました。箱と箱の間は、一メートル位ありました。男はお嬢さんを後手に縛つて、その箱の間へ立たせました。そして、傍にあった二本の棒を、お嬢さんの首を

挟むようにして箱に結いつけました。お嬢さんはぐったりとして、されるまゝになつていらつしやいました。藤野は、この有様を心持よげに見ていましたが、

「此処は寒いからね、少し温めてあげるよ」

とコンロを持って来て、お嬢さんの足許に置くのです。始めのうちは暖かくてよい気持でしょうが、だんだん熱くなつてくるのか

「あつ、熱い、熱い」

と叫ばれますが、これを見乍ら私はどうすることも出来ません。片足を上げたり体をくねらして、熱さを避けようとなさる姿を見ると、私の胸は張り裂けるような思いです。

「あつ、熱い許してっ！ あゝ苦しい！」

お嬢さんは悲痛な叫びをあげられると、全身から脂汗をタラタラ流されて、うつろのように大きく目を開かれ、気が狂つたように悶えておられます。折々、ぐったりとなさいますが急に又、身をくねらしてお苦しみになられます。お嬢さんは、このまゝ気が狂つて死んでしまわれるのではないかと、私はハラハラしていました。その時、急に喉も裂けるような声を出されて、

「ねえやつ！ ねえやつ！ 苦しい！ もう」

後の言葉が続かないうちに、首をガクンとさせておしまひになりました。私は、あらん限りの大声を出して「ウウウウ」と叫んだのですが、お嬢さんの耳に這入ったかどうか判りません。

——やつとお嬢さんは許されて、床の上に転がされました。藤野は、

「ちよいと、水をぶっかけておやりよ。最後の仕上げがまだ残ってるんだからね」

と凄じ口許をして命じました。ようやく息を吹き返したお嬢さんは、目を微かに開けた途端に、涙がパラパラと流れました。でも、起上る元気ありません。私は抱き起してあげたいのですが、それ



すら出来ません。全く呪われた二人でありました。すると男は、お嬢さんの両腕をとって、柱と柱の間に立たせました。そして両手を別々の縄で縛って、それを両方の柱に結いつけた上、猿ぐつわを嵌めてしまいました。お嬢さんは立っている気力もありませんので、膝が曲って前かがみの姿勢です。そのために、全体重の殆んどが二つの腕にかかるので、お嬢さんの腕は一直線にピンと伸び切っています。

藤野は、

「お前はさつき、わたしにも愛して欲しいと云ったねだからその願いを叶えてあげるよ。それにはまだ、お前の背中が残っているね。このすべすべした白い背中へ、わたしも愛していると云う証拠の印を入れてあげるからね。同じ入れるなら背中一杯がいゝだろう。お前の背中へ、いゝ按配に脂



が乗っているので丁度いゝよ。」と撫ぜ廻します。お嬢さんは真青になって、何か叫び乍ら烈しく首を振られました。

「嬉しいか、よしよし、早く彫って欲しいんだね。もうすぐ彫ってやるよ」

この女は、云いだしたことは是が非でも実行することを知っているだけに、私は身震いしました。

「それじゃ、そろそろ入れることにしようかね」

藤野は背中を撫ぜ廻したり叩いたりして、独言のように、

「きれいな肌を自慢にするのも今が最後か、フムム……」

と冷笑しました。そして合図をすると、男がのっそりと出ていきました。それを見届けた藤野は、コンロに差込んである鉄棒を引き出しました。棒の先には、四角なものがついていて、焰をあげんばかりに真赤になっています。私は一瞬「あっ、焼判だ。大きな焼判だ」と気がつきました。

「あゝ、お嬢さん。もう最後の時が参りました。あなたは何と云う不幸なお方でしよう」私は、心の



中で手を合わせていました。藤野は、その焼判を手にとると

「これで焼いてしまえば、おしまいさ」

と、じわりじわりとお嬢さんのそばへ近ずき、死人のように真蒼になって俯向いていらっしやる、お嬢さんの咽喉の下へ手を入れて細いお頸を邪慳に握むと、ぐいと後へ引きました。私は恐しくなつて、わなわな震え乍ら目を堅くつぶりました。

「美人奴隷のお前さんに教えてあげるよ。藤野というのは、わたしの仮の名前。本当は梶川ゆきという女だよ。見えるかい。これが私のしるしだ。よく覚えておきな」

藤野の声が終るか終らない一瞬、凄い悲鳴が響き渡りました。私は思わず身を固くしました。しばらく経って、こわごわ目を開けて見て、ビククリしました。これは何んとしたことでしょう。お嬢さんのお背は、やはり美しく輝いているのです。しかし藤野が、自分の肩へ手をかけたまま俯伏せになって、倒れているではありませんか。そしてそのそばには、主人の男が鞭をかまえて立ちはだかっています。私は、夢を見ているような気持でした。これは一体どうなつたのか、咄嗟のこととでわけが判りません。すると主人の男が、

「貴様のことだから、もしやと思つて来て見れば、案にたがわずだ。鞭と焼判が違う位のこととは判らねえのか、馬鹿者！ 手前だけの持物じやねえんだぞ。これからも、こんなことをしてみろ、そのまゝじや置かねえから……」

と、物凄い剣幕で云いました。私は、わけが充分判らないながらも、主人の男が現われたので、お蔭でお嬢さんのお助かりになつた。あゝ、よかった。でなかったら今頃は、取返しつかないことになつてゐる筈だ。私はホッとした気持で、お嬢さんの傍へ駈寄りたい位でした。するとこの時、むくむくと起上つた藤野が、主人の男を恨めしそうに睨みつけて、

「お前さん、何故あたいを打つたの。どんな理由があつて打つたん

だい。あたいを一体、何んだと思つてるの。お前さんこそ、銭金で買った奴隷とあたいのとの区別がつかないのかい。しやれた真似はおしでないよ」

「なにっ！ 奴隷であろうと貴様であろうと、俺の氣に逆らう奴は容赦しねえんだ。ぐずぐずぬかすなら、ひっぱたくぞ」

「ふゝん、えらい勢だね。お前さん、よく考えるんだよ。お前さんが、あたいをひっぱたく程、腹が立つのは彼奴（お嬢さん）を顎で差して」のためだろう。その彼奴は一体、誰が橋かけをしてやつたんだ。あたいいやないか。そのあたいを差し置いて、彼奴に現をぬかすお前さんは、余つ程恥知らずの恩知らずだね。あたいわね、こう見えても満洲じや、いっばしの顔役で通つて来た女なんだ。お前さんのような、なまくらとは、ちったあ理が違ふんだよ」

と甲高い声で、今にも飛び掛つて行きそうに怒鳴るのです。この言葉が余程、応えたのか主人の男は顔を真っ赤にして、

「何をっ！」

と云いざま、振り下した鞭が、傍に立てかけてあつた、さつき首枷に使つた二本の棒にキリキリと巻きついたのです。男は、慌てゝそれを取り除こうとしている隙に、女が投げ出してあつた焼判を手にするや、男に投げつけたのです。少し冷めてはいたでしょうが、まだまだ熱いし、それにかなり重いのですから、主人の男は不意を喰つて、

「あつ、うーん」

と叫びざま倒れました。私は、お嬢さんのことも忘れて片唾を呑んで、二匹の獣が血眼で争う浅間しい光景を見詰めていました。主人の男が、痛さに齒を喰いしぼり乍らよるよる立上ろうとした時、女は鞭を拾い上げたと思うと、ピュッと振りました。主人の男は、これをおかす暇もなく胸をしたたか打たれて、異様な叫声と共に再び倒れました。たとえどんな男にしても、自分の夫を打つその女が



非常に残忍であることは充分判ります。打ち倒された主人の男は片手をついて上半身を起しました。すると女は、

「あたいだって、お前さんと同じ権利があるんだから、あんまり出しやばったことはしないでくれ、別にあたいが独占しようと言うんじやなし、お前さんと仲良くわけりやいゝじやないか。お前さんが胸に彫れば、あたいが背に焼判を押したからって、別に不思議はない筈だ。どうせ彼奴は、お前さんとあたいのおもちゃにして楽しめばいゝだから……。それをお前さんが、今更留め立てする必要もなからう。どうだね」

と鞭を空振りして云いました。男も、こうなると弱いものです。諦めたように、「貴様は、いくら云っても判らねえ奴だ。俺の刺青と焼判が違うのが判らねえなら仕方がねえ、勝手にしろ！俺の気持が貴様にや判らねえんだなあ」と云い放ちました。

「勝手にしろか、じゃ、あたいの勝手にしようか。でも、断っておくよ。今度文句を云ったら、あたいの方が承知出来ないから……」

女はこう云うと、再びコンロに焼判を差込んで、板切れでバタバタと煽ぎました。その姿は全く鬼のようです。形勢がすっかり逆になったので私は又、心配になってきました。お嬢さんは、やっぱ駄目だ。どうしても焼判を押される運命なのかしら、一難去って又一難。世に神も仏もないものか、誰も助けてくれる人としてないこの邸で、鬼夫婦に一生苛まれて死んで行かればならない自分達かと思うと、いつそのこと一思いに殺して欲しい気持です。

あの日、奥様に笑顔で玄関先まで送って頂いたのも、この世での見納めになってしまった。あの時は、こんな悲しいことになるとは夢にも思わなかった。全く人間の生涯なんて一

寸先は闇だと、この時はつくずくと感じました。

コンロの火は段々と強くなって来ます。やがて今度こそは誰一人邪魔する者はなし、女は思う存分に、お嬢さんの肌を焼くことが出来るのです。その時が刻々近づくばかりです。私が犠牲になって済むことなら、代って上げてもいゝと思いますが、どうすることも出





来ません。あゝ勿体ないことだ。何故お嬢さんはこんなに美しくお生れになったのかしら、そのためにこんな目にお遭いになるんだと、お嬢さんを恨しくさえ思うのです。やがて女は、コンロを覗いて、

「皮がくっつくと面倒だ。もう少し焼かなくちや」

と独言を云い乍ら、炭をガサガサと動かしました。しばらくして、女は再びコンロを覗いて、

「さあ、よからう」

と、焼判をとり出しました。焼判は充分焼けているので、真紅の中に黄ばんだ強い光が眼を射るように放っています。

女はまぶしように目を細めて

「奴隷の印か、フフフフ、あたいに魅せられた女は、遅かれ早かれ一生極印つきの軀で暮すのが一番相応しいのじや」

と云いました。女の姿は青白いランプに照らされて、全くあの世から来た青鬼かと思うばかりです。お嬢さんは今はもう、すっかり諦めなされたのか、それとも失心なされたのか、ビクッともなさいません。それが気にかゝります。後向きに縛られていらしやるのでお顔が見えないのが残念ですが、それが却って気易いのかも知れません。まともに見えると、苦悶する形相に私の方が失心するかも知れません。何れにしてもお嬢さんの運命は、こゝ数秒のうちに迫っているのです。その後は最早、お嬢さんの肌ではなく、醜い唯一箇の肉塊となるでしょう。今度こそ、いよいよ見納めだと思って顔をあげて見ましたが、やはりお嬢さんは死んだように俯向いて、ぐったりして居られます。やがて女は、きゅつと下唇を噛みしめ、焼判を逆手に持ち直しました。その時、今まで目をつぶっていた主人の男が、パツと目を開いて、

「おい、よせよ。勘弁してやれ。俺が頼むから……」



「フフン、諦めの悪い男だね。満洲おゆきは、そんなの大嫌い。あたいが一度、こうと思ったことは必ずやり遂げる位のことは、まさか知らないお前さんじやあるまい。余計なおせつかいはよしな。それより冷めないうちに」

と、お嬢さんの方へ一歩踏み出した時です。部下の男が慌てゝ走り込んで来ました。

「た、大変だ。早く逃げて下さい！」

と、息を切らして叫びました。その途端、私はホッとしました。誰かが助けに来てくれたに違いない、どうぞ成功しますようにと心に念じました。女もさすがに怯として、一瞬さつと顔の色を変えました。しかし、この切迫した中にあつても、お嬢さんに対する憎しみを捨て切れないのか、或は最早これまでと思つたのか、焼判を握つたまゝ駆寄ろうとしたはずみに、アセチレンランプの出張ったねじに女のスカートの裾が引っかかりました。女はこれを外そうとして急に上半身を後へ反らしたために、身体が狂つてよろよろとよろめいたと思つた瞬間、俯伏せに倒れました。しかしその時握つ



ていた焼判が胸の下敷になったのですから堪まりせん。「キヤッ」と云う絹を引裂くような悲鳴がしたと思うと、何とも云えない厭な臭がしました。女は、胸に反りを打たせて苦しんでいます。部下の男も咄嗟の出来事に、只うろろするばかりでしたが、やっと女の胸へ薬罐の水を浴せて抱き起し、横抱きにして外へ出ようとしたが、ふと主人がいるのに気がつきました。

「あつ、親方！」

「おいっ、来たのは大勢かっ？」

「ええ、暗くてよく判りませんが、でも、かなり来たようです。早くしないと、もうおっつけこちへ来ますよ」

主人の男と部下の男は、二人で女を吊り下げるようにして、つまり乍ら出て行きました。後には、お嬢さんと私が自由を奪われたまゝ、雑然とした倉庫の中に残されました。誰が救いに来てくれたのかしら。大勢の様子だが、どこの人達かしら。若しかしたら警察かもしれない。それにしてもどうして判ったんだらう。誰も逃げ出した人もないのに。何んでもいい、とにかくよかった。これで私達は助かるかも知れない。お嬢さんに話しかけようとするのですが、口が利けないので無性に腹が立ちます。でも「うーうー」と思い切り唸りましたので、お嬢さんも何事かと思つて振向かれました。私は又「うーうー」と叫んで話しているつもりですが、お嬢さんに、はつきり判る筈ありません。でも以心伝心で、少しは通じたのかうなずかれた御様子です。これで私も、お嬢さんが気も狂わずに居られたと思つて、一安心しました。しかし、ふと後を見た瞬間、ぎよつとしました。今の今まで何事もなかったのに、何んとしたことでしょう。薙や縄切れが積上げてある中程から、ちよろちよると火が燃えているのです。今のうちなら、薬罐一杯の水でも充分消えます。しかし何を云うにも、二人共自由にならない悲しさ。ただ、じつと見てより仕方がない程、気持の悪い恐ろしいことはありません。

火はどんどん拡がって、今まで冷たかった倉庫の中が、ぽーっと暖くなりました。色んなものの焼ける臭いと煙が内部に充満して来ました。パチパチと何か弾ける音も盛んにします。お嬢さんは、お苦しいのか両腕をしきりに動かしていらっしやいます。私も呼吸がだんだん苦しくなつて来ました。鬼の手を逃れたと思つた私達は、今度は火の手で責められるのか、このひどい煙では窒息で死ぬかも知れないと思ひました。そのうちに煙はいよいよひどくなり、辺りは全く見えなくなり、涙がポロポロ出て鼻が刺すように痛みました。あの鬼の手にかゝつて直接死ぬより、焼け死ぬ方がまだましだ。自分はこの火事で死ぬ。お嬢さん、今こそ最後の時がやつて来ました。軀は離れていても心は一緒です。一緒に死にましょう。私は猿ぐつわの下で、ありつたけの声を張り上げました。すると、その時、

「あつ、声がしたっ、この中だっ」

「まあ、ひどい煙。これじゃ、あんた」

「なに云つてゐるの。あんた、そんなこと云つてたら駄目よ。いゝわあたしが這入るから。あたし、死んだっていい。これで死ぬなら本望なもの」

と外で、数人の女の声がしました。そしてしばらくして、煙の中から二、三人の女の人が腹這いになつて這入つて来るのが、微かに見えました。この時の嬉しさは、本当に地獄に仏のようでした。しかし、その人達も、さすがに苦しいのか途中で、しばらく動かなくなりしました。

ようやく私のそばに辿りついた女の人が、手探りで縄を解いてくれました。私は感極まつて無言で、その人に抱きつきました。次の一瞬「あつ、お嬢さんは」と、お嬢さんのそばへ這って行きますと誰かが縄を解いてくれている様子です。

「お嬢さん、私です。菊枝です！」



と、猛煙の中で必死に叫びました。これだけのことを云うのが、やっこのことです。

「あたしはこの人、あんたはこの人を頼むよ！」

と、一人の人がお嬢さんを背負って出ていきました。その後から私も又おんぶされて煙の中を出て行くまでは判っていたのですが、それからは気を失って、何も判らなくなっていました。

気がついた時は、病院のベッドの上でした。そばには、医者、看護婦、それに警察の人達、それから、あの危い中を背負って運び出してくれた女の人達（この人達は、私等と同じ運命にあった人々です。そして真先に飛び込んで来てくれた人は、他でもありません。いつか、マラソン競走をやらされた時、一番後になって罰として噴水塔に縛られた、あの人だったのです。あの時の、お嬢さんの優しい心に打たれた、その恩返しだったそうです。情は人のためならず全くその通りです）が心配そうにじっと私達を見詰めていました。幸い一週間ばかりで、二人は退院出来ました。とても生きては帰れないと思ったのが、皆様の御蔭で、どうにかこうして働けるのを喜んでいきます。

お菊ちゃん、話し終るとほっとした様子でした。私は

「そうか、事実は小説より奇なりで、大変なことがあったんだね。

でも君は、よく最後まで頑張れたね。僕は全く敬服するよ」

と云うと、

「あらっ、恥しいわ。でも先生。あの場合私だけだったら、とっくの昔に氣力を失っていたと思いますわ。なぜなら、責任がないのですもの。しかし、お嬢さんを預けられたような氣持でいた自分としては、何んとかして逃げようと、それ一心に心が張りつめていたものですから、よかったのかも知れませんわ。」

と、お菊ちゃんは云いました。そこで私は

「お嬢さんは、その後どうなさったの？」と聞きました。

「お嬢さんはね。退院なさってから、お家で奥さまと私が二カ月程ずっと看護につき切りでいましたお蔭で、どうやら健康をとり戻されたんです。田舎から出て来た私を、これまでにして下さった御恩に對して、私としては亡くられた旦那様や奥さまに申訳けないと思つて、お暇を願いましたが、奥さまは、ねえやが傍にいたので、あの娘も生きて帰れたのです。あれ一人だったら氣に張りがなくなつて死んでいたかも知れない。それにあれば、あんたを姉妹のように慕っているんだから今、ねえやがいなくなると、どんなに氣を落すか知れない。今暫くの間に欲しい」とおっしゃるのです。私は、このような勿体ない言葉を反古にしては罰が当たると思つて、その後も御厄介になっていました。しかし、お嬢さんの胸一杯に彫込まれた刺青のことで、奥さま初め私達は、毎日そのことばかり考へて心を痛めました。すると或日のこと、お家が盛大な傭工員として勤めていた人が遊びに来ました。その人は若氣の過ちから、右腕に凄いい刺青をしていたそうですが其の後、恥しくなつて消したんだそうです。でも、その後が殆んど判らない位、上手に消えていました。それで、それとなく尋ねますと、医者はこうした先生だと教えてくれました。翌日は早速、その先生に診て貰いました。先生はお嬢さんの胸を色んな方法で検べていらつしやいましたが、やがて薬を二三滴落して、じいっと見詰めて居られました。「うーむ」と大きく肯かれ、私達に「これはちよつと珍しい方法ですね。尤も外国ではこれに似た方法もありますが、これと同じじゃないのです。でも御心配は要りません。消してあげますから」と云うことで、一同は大喜びです。それから一週間余り毎日通いました。お蔭で全然、跡形もなく消えて再び美しいお肌が見えた時は、私達は小躍りして喜びました。」



「でもその刺青は、絶対消えないと云ったんだらう。それが一週間位で完全に消えたんだね」

「ええ、それが私、ちよっと変に思ってますの。あんなことを云ったが、嘘だったのか。それとも、先生のお薬がよく効いたのかしらとね、思っているんですよ」

「それは君、嘘だよ。尤も早く消えたと云うことは、お医者さんの腕前にもあるが絶対消えないぞと云ったのは君達を嚇していたんだね。つまり永久に消えないことによって、二人共、永久にその男の奴隷であると自覚するための一種のトリックだったんだ。と云って勿論水や石鹼で洗った位ではピクともしないがね。僕は思うのに、その男は悪党ではあるが、一面、ある程度の審美的な良心があったように思えるね。そこへゆくと、梶川と云う女は、相手を苦しめる為には手段を選ばなかったひどい人間だね。最後の時なんか、男はどんな気持だったろう。男としては、お嬢さんの美しい肉体は、いつまでもそのままにして置くつもりなんだ。だから薬品さえあればいつでも消すことが出来る方法によつて、お嬢さんを苦めていたと云わだけだね。悪人ながら、さすがにお嬢さんの肌には参っていたんだよ。それでその男は、それだけに美しさに対する征服感から刺青をしてそれが一生消えない等と、精神的にも相手苦しめて征服感を充していたんだね。ともかく相当変った茶目っ気のある、歪められた芸術家とでも云うのかね。それにしても、どんな素性の男なんかなあ」

「さあ、ねえ。あたしはよく知りませんけど、その後、警察で調べを受けた話では、以前どこかの印刷会社の技師を勤めていたそうです。処が今度の戦争で召集になり北支へ出征したが捕虜になり収容所へ入れられていたが、要領のいいその男は収容所の役人を抱込んで脱走し、しばらくは秘密結社のような処で働いているうちに認められて中共政府に入り込み、そこで日本の印刷局のような役所の主任に出世したのです。そしてそこで、贗札を沢山作って物凄く

お金儲けをしたそうです。その金を湯水のようにバラ撒いているときに、馴染になったのが梶川ゆきです。この女は一時、要人の妾をしたそうです。それで満洲おゆきという仇名が出来たのです。そして、どちらからともなく夫婦関係を結んで、終戦後日本へ復員したのです。そして在満当時、顔馴染の陳さんが経営するドレス会社を足がかりにして女を物色中、不幸にも私達がその毒牙にひっかかったと云うわけです。思えば、あの時見たお芝居の看板が、私達の運命を予言していたのかと考えると、今更乍らゾーッとしますわ。それに、あんなのをなんというのでしょうか、あの女は男女の区別なく苦しめるのが面白くて堪らないそうです。それに、女がヒステリ―を起すと、あの男を物凄く苛めるんですって。それが習慣となつたのか、時には打たれるのを待つようなこともあったということですよ。それから、その男にお母さんがあるそうですが、日本へ帰ってから一度も会わないのです。自分の行いが行いだから恥しいのかそれとも母がそばにいては、自分の思うような快楽に耽けられないためでしょう。けれども、さすがに母子ですね。毎月、相当なお金を仕送りしていたそうです。後で判ったのですが、ドレス会社の給仕婆さんが、その母親だったんです。今頃は、あのお婆さんも永年宿願の息子に会えたものの、どんな気持だろうと思います。私が島にいるとき、主人の男の顔が誰かに似ていると思つた筈です。あのお婆さんの息子ですもの。しかし、このお婆さんの主人も、ちよっと変な性格の人らしいのです。すると、こんなのは矢張り遺伝するのでしょうか」

彼女は、こう云ってしばらく黙っていましたが

「でもねえ、先生。苦しむ顔って、どう云ったらいいかしら。ちよっと美しいとお思いになりませんか？」

と云うので、私は

「そうだね。ある意味ではね、そう見えることがたしかにある。し



かし、その美しさは普通に云う美しさではない一種の幻影的と云うか麻酔的と云うか、ともかく特種な美しさを見せるね」

と云いました。

「先生も、そうお思いになつて……じゃ、あたしだけでなくてよかったわ」

彼女は、同好者の出現に意を強くした様子です。

「そして、その悪い女は死んだのかね。それとも……」

「天罰ですわ。二人で運び出されたものの、焼判で左の乳から右のへ胸かけて大火傷をしているので、これだけでも致命傷です。皮肉にも、あの女が自らの手で十三人目の女奴隷となつて、我肌を焼判に委かせたのです。しかも、警察の不意討ちで迷惑っている最中ですから、手当をするひまもなく寝かせてあつたのでしょう。その上に焼けた梁が落ちたそうです。火傷の傷が化膿し、肉がどろりと流れ出し、下敷になつたために眼はむき、口から舌を出し、二目と見られない姿だつたそうです。私は、その女が死んだと聞いて、ちよつと気抜けしました。あんな女こそ生かして置いて、うんと苦しめてやりたいと思つていました。他の男達は勿論、全部捕われました。当時の話では、その邸をとりこわし、その後を植物園にすると云われていましたが、今はどうなつてゐるか知りません。本当にあの時のことを思うと、夢のようですわ」

「全くだね。昭和の今日にもまだそんなことが存在していたということは、普通の考え方では信じられないね。そしてその中心人物の一人が、僕の前にいるお菊ちゃんという美しい女性なんだね」

「まあ、ひどい先生」

でも彼女は嬉しそうでした。

「お菊ちゃんのような純情な人がいるんだから、慾を云えば限りがないが、もう少し早く救けに来て欲しかったね」

「でも、ありがたいと思つていますわ」

「どんな動機で警察が知つたのかなあ」

「それはね、こうなんです。後で聞かされたんですが、私をおんぶして運び出してくれた人が、計画が知れると後が恐いので仲間にも秘密にして、ビール瓶にSOSを封じ込んで二、三本流したので。それが結局、警察の手に這入つたのです。尤も後で聞きますと戦車競走をやらせられていた時、来ていたそうですが、確認出来なかつたので引返したと云うことです。だが、あの邸が島にあつたのでよかつたと思います。でなかつたら、ビール瓶を流すことも出来ないわけです。又、地図にもない小さな島だったので、それだけに世間から忘れられていたことが、このような事件を起したとも考えられるのです」

「そう云うことだね——考えてみると、人生って奴は複雑に出来るよ。長生きしてると、いろんなことが聞けるものだ。お菊ちゃんも若くて美しいんだから、いい旦那さまでも見つけて楽しく暮すんだね」

「まあ、いやだわ。あたしみたいな女は、拾ってくれる人もありませんわ……でもね、先生。縁で判らないものですわ。消して頂いた刺青が御縁で、お嬢さんは先生の息子さんを御養子にお迎えになつて、今では、お嬢さんそっくりの可愛い嬢ちゃんがお一人ありますのよ。御夫婦仲が本当にお睦じいので、折々お伺いする私が、あまり悪い位ですの。ホホホホ……」

と笑いに紛わしているが、彼女の表情に何か一沫の淋しさが漂っているのを、私は見逃さなかつたのです。

「時に、お菊ちゃんが小屋の表で見たという看板の女優の疑問は判つたの？」

「ああ、あれはね、矢張り人違いでした。それからしばらくして判つたのですが、お嬢さんの黒子は左で、女優さんのは考えて見ると右側でしたもの」



「そうだろうなあ、他人の空似という奴だね」

「ええ勿論、人違いでした。けれども、お嬢さんに生写しの女優がお嬢さんと同じようなお芝居をするのも、私には因縁のように思えてなりません」

こう云い終って、彼女は歩んで来た受難の道を振り返るように、部屋の一隅を見つめているのでした。

因に筆者は、この長い物語を終るに臨んで、敬慕していたお嬢さんに別れて一人淋しく旅館の女中として働いているお菊ちゃん的心境に同情を寄せるのでした。そして又、私と同じような気持を抱かれる読者の方のため、次の後日譚をお伝えして筆を擱くことにします。

お嬢さんに離れた淋しさと、淡い嫉妬に似たものを感じ乍ら身をかこつお菊ちゃんの様子、私には如何にも哀れに又、気毒にも思えたのです。それに私が滞留中に、何かと厚意のこもった扱いをしてくれた感謝の意味で、後日、私が最も信頼する友人のE君を紹介

中村玉緒（大映）年も若かったし傍役的な

ものが多かった為か、昨前半期までは、一度も縛られなかったのに、暮の作品「天馬子太郎」でハリツケにかけられてから縛られるようになった。縛られてみれば、なかなか演技もしっかりしていて、十字架に雁字搦目に括られて空を仰ぐあわれな表情など初顔と思えぬ上手さ。愛らしい顔だけに憐れをさそった。「遊侠五人男」でも舟中に後手、猿轡されて、グツタリ縛られていた。このグツタリ

がなか／＼イける。

大川恵子（東映）この人も三十三年度派である。旧年まで一度も縛られなかったくせに正月作品では「神変麝香猫」「謎の蛇姫屋敷」と連続二本。前者では座り柱縛りで猿轡、後者では後手の折檻を受ける。非常に明るさを持合せている反面、こんな暗いシーンの折は、決して神経質そうに眉をよせて、反発するようなそぶりを示す。長所とはいきれないにしてもこの人の特徴だ。勝気な武家娘役

した処、幸い双方共喜んでくれましたので、私も生れて初めての月下米人となって式を挙げるのが、今年の秋にきまっております。

さて、お菊ちゃんも、今ではE君というよき理解ある婚約者を持ったことです。アベックで散歩する道すがら、当時の追憶を話しているであろう仲の良い有様が私にも想像されるのです。私に対してでさえ、あのように詳しく話してくれたことです。未来の亭主であるE君に対しては、普通では口に出来ないようなことまでも微細に亘って告白しているのではないだろうか、そんなところまで気を回して、思わず一人で苦笑することさえありました。

E君とは、いずれ近い中に逢うことになっていますので、二月号から連載しましたこの「十三人目の奴隷」についての感想も聞き、又その後のお菊さんとのことも無理にでも話させ、若しうまくいったら、改めて後日譚といったものでも、書いたら書いてみたいと思っております。長らく御愛読ありがとうございました。

（夢原狂介）

としてもってこいの演技ではなからうか。

円山栄子（東映）本数がまだ少いからどうかと思うが演技の方はたしかだし、これから縛られる機会をうんと得るんだから注目しておこう。「鬼面竜騎隊」で後手折檻をされ、ついにはハリツケにされたり。なかなか上手くハリツケにされる女優は少いものだが、火焙りにされて悶えるアップ・シーンなど、よくこなしていた。大川恵子とは逆に、無抵抗型の縛られ方をする。田代百合子、三笠博子



に似ている。両者の去った東映で、今度重宝、がられるだろう。

中原ひとみ（東映）

「鳳城の花嫁」で柱縛

り「怪人二十面相」で

前半ながら足まで雁字

搦目のグル／＼巻、「

花吹雪鉄火纏」で後手

猿轡されて拐かされる

など、このところ当りがつきかけている。特

異なマスクで、縛り向きでないようだが、縛

ってみるとマンザラでもない。年令的にも二

十二才。色気も出て来たし今後を楽しみにし

ておこう。

福田公子（松竹）イキは良い。「江戸群盗

伝」の縛られ方は今年上半年期の傑作だ。こぼ

れるような愛敬をたたえたお色気たっぷりの

あのマスクで、どうして激しい気性の女が演

じられるのだろうか。大阪屋花鳥の受ける拷

問というのが後手の吊し、笞打ち、さらには

股に役人が足を刺し込む淫らな責めなど。肝

腎の石抱責めこそみられないが、ホツレ髪で

歯をくいしばってたえる鉄火女の心いきを満

喫させてくれる。浅茅しのぶ、水原真知子の

後釜に座り得る貫録十分。これをテストケー

スに使われることだろう。

阿井美千子（大映）いまさら新人というわ

## 縛られ女優新十花選

南方佳男

けではない。前回の選もれをおわびして。東映時代から数多く縛られているのは御承知のこと。最近では「不知火頭巾」や「八人の花嫁」で縛られたが、不知火頭巾で後手に縛られ青竹でたたき責めの折檻を辛抱する、江戸前気性の芸者役は、さすが年期的に入った名演技だった。もうこんな年増役しか出来ないが、縛られた時になまめかしい成熟した女の線が表われるのがこの人の特色だ。特にしいたげられても決して弱味をみせまいと悶える時に一層美しくみられる。

勝浦千浪（東映）最近の東映二線級では、喜多川千鶴や、浦里はるみ、八汐路佳子にかわって一番縛られどころだろう。ヒロイン的な役でもなく悪の人でもない。ただ重要人物とおつき合い的に縛られる場合が多い。「隼人族の叛乱」「大名囃子」「謎の蛇姫屋敷」など縛られ方に個性のないのが欠点ともいえる。

三用登喜子（大映）この人もそろそろ主演してもよいころだが。ずっと以前に「怪猫五十三次」でほんの一寸後手に縛られたのをみただのが私の最初の印象。さて近くは「空飛ぶ若武者」で随分縛られ、最後には鉄砲の的にされたりしたが、セン細な表情が、あまりにも冷く堅過ぎるので受ける感じが悪い。同情がわかないのだ。同じタイプでも千原しのぶにはしなやかさが有る。うんと派手に縛ってもらわなければひきたたぬ。

雪代敬子（フリー）「酔いどれ牡丹」など一昨年までは瑤峨三智子がいまやっているようなお姫様役でよく縛られていた。美人でないくせに、可愛いし年より若くみえる。従順な性格な役ばかり。清純さをみせ、観念主義の縛られ方に魅力があった。フリーになって他社出演がかなうようになったから、再び美しい縛られ演技もみせてくれるだろう。

美多川光子（日活）東映時代も淋しかったが、時代劇をまったく作らない日活でも鳴かず飛ばずで過している。しかし二、三年前にみたアクション劇「肉体の密輸」でシユミーズ一枚の双手吊りにされて、煙草責めにされるシーン、はなかなかイケた。煙草の火で肌を焼かれ、悲鳴をあげて苦悶する表情、仰向いて体をふるわせ上手いと思ったが、再認識して活用したいものだ。白い囚衣、本縛りにして、石抱の拷問にかけるか、引廻しにでもしたら、あのあわれっぽい眼がいい芝居をすることと想像する。

（終）



## 創作

## 結婚の条件

近藤 一

敏彦は、カメラを据えてファインダーを覗いた。苦悶する「妻」を一枚、そして自分が責手になって一枚撮った。それから彼は猿轡用の布を取り出して妻に云った。「もう一寸だ、我慢しろよ。」

万里子は、その声が聞えた。しかし応えようがなかった。息は詰り、目は眩んで眸中の血管が躍り出したように脈搏っていた。できることは、全てを甘受するだけだった。無断でも速くするだけのこと。ことを済ませて欲しかった。しかし、「夫」はそれを許さなかった。夫は執拗に答を求めた。

「ええ？どうなんだ、いいのか、悪いのか、どっちだ。返事をしろ返事を。只首を振るだけじゃ、どっちだか判らないじゃないか。」そして、拳句の果に、敏彦の肌の汚れを吸い取った布片が万里子

の口の中に押し込まれ、大きすぎて口外にあふれた。その上を、ゆつくりと覆い終るや、敏彦はシャッターを押して被写体となり、右膝を万里子の背について押さえつけ、左手で「妻」の前髪を握って顔を仰向かせ、右手は指先がかくれる程に「妻」の右の大腿を掴んだ。それは傑作だった。かつての名作、S嬢の「凄艶」と比較していささかも恥じる処はなかった。「夫」の顔に漂う悪魔の快心の微笑。「妻」の面上に満ちている苦悶の歪み。縄目に絞なす皮膚の皺。抜けんばかりに引き上げられた前髪の一本一本にも、手落ちはなかった。眼の縁を彩った紅が、何かに濡れて光っていた。今もなお、最も大切にしている一葉のフオトは、このようにして作られたのである。

○



暮の休みを彼等はフルに活用した。敏彦はともかく、万里子は充分に楽しんでゐた。食事と用便の時でさえ、彼女は拘束を解かせたがらなかった。手を使わずにどうやって食事する心算かと敏彦が訊ねると、すました顔で、「貴方が食べさせて下さればいいのよ、もしいけなければ、お皿につけて頂いてじかに食べるわ、口をつけてね。」と答え、「あああ、犬になりたいなア。」と呟いた。流石に排便は敏彦の手を借りることを拒んだ。だから、浣腸マニアや排便時の露出癖などは理解できないと云っていたし、M嬢とO嬢のプレイの手記で、お互いに恥かしいからやめてしまったという箇所を指して「これが本当だと思うわ。」と云ったりした。ただ、どんな無理をしてでも、きちんと済ますからと誓って、全く解放されることは拒んだ。手首の緊縛さえ解放してやれば、まさかと思う程器用に用を足して来るのであった。足首まで括られていて、それでも手を拭いて肘から上を固定された体全体を使って匍い寄って来る姿は滑稽でもあり、また可愛かった。

年があけた。必要な所だけ数軒挨拶廻りをして、あとは寝正月だった。暮の疲労もあったし、そのせいか万里子が幾らか風邪気味だった。肺炎にでもなるといけないから、無理を慎むという口実で、万里子は寢床の中に固定されていた。素肌に纏ったのは、扱帯と腰紐だけだった。敷布団二枚、毛布、掛布団二枚。それに夫は湯たんぽを入れてくれた。縛しめは痛くはないが緊くて解けないことには変りなかったし、また万里子も解かれたくはなかった。そんな万里子の暖い身体は炬燵代りになった。足の裏が脂で、じっと汗ばんでいることを除けば、適度な温味であったし、万里子の方も足の裏で擦られるくすぐったいことを我慢すれば嬉しい扱いだった。そして自分の身体の凡ゆる部分に感覚が万遍なく分布していることを万里子は識った。

「うちにもお風呂が欲しいわね。」万里子が、しみじみと云う。

「贅沢云うなよ。君らしくもない。」

「あら、どうして？ そりや、私だって、今の生活に余裕なんか全然ないって知ってるわ。でも、こんな体じや、お風呂屋さんへとても行く気になれやしないのよ。」

「そんなこと遠慮することはないさ。夫婦の間のことだ。自慢したっていいことさ。」

「よしして！ 男の方に女の気持はわかりやしないのよ。」

敏彦は、自分の揶揄にすぐむきになる万里子が可愛かった。

「どうしてそんなに風呂へ入りたいんだ？」

「どうしてって。私、身体が汚れてるのが堪らないの。貴方にも悪くて、とても。」

「僕も汗臭い万里子なんか大嫌いだ。」

「済みません。でも、紐の跡が消えないことには、お風呂へ行かないの。駄目なんです、私。」

「おい、こんなの作ったらどうだ。」

敏彦は、テキストの中から、28年10月号を取り出した。M夫人の手記が出ていた。主題は「縛られ服」の文章だった。その挿絵が傑作で、自らかけた畏に、自ら嵌り込んで慌てながらも喜悅している女体の表情が姿態に溢れていた。かつて万里子は、その絵を見た時「私もこんなになるの？ 滑稽ね。」と云ったものだった。然し敏彦に差出されたページを見た万里子は眼を伏せて、ぽつんと云った。「意地悪！ 知ってる癖に。」

万里子は、高校卒業と同時に入った結婚生活で、裁縫は不得手だった。ボタンをかがったり、紐を当てる程度で、特に強い劣等感を抱いていたのである。

「御免よ、万里子。だが、僕の妻は、決して無能な意気地なしじやなかった筈だ。君が悪いのか、親が悪いのか。実家へ行ってよく聞いて来て御覧。」



勿論、敏彦は冗談の心算だった。だから、翌朝になって万里子が、「実家へ行って来ます」と云った時、内心どきつとした。

敏彦は父親にねだって万里子を洋裁学校へ通わせる出費を許して貰った。万里子も両親を恨むやら、拝み倒すやらして学費を出して貰う約束をして来た。どちらの親も苦笑しながら年若い主婦の成長を希ってくれた。

敏彦は、しかし、万里子の報告を聞くと、自分の採った策を譲歩した。そして黙ってミシンを一台購入するように金を渡した。万里子は、真意を識った。にっこり笑って、「夫」の胸に抱かれながら、瞳はうるんでいた。

○

亢進して来た「妻」の性向を、全く停止させることは不可能であり、その努力をすることは賢明でなかった。

社会生活の枠という制約を知らねばならず、二人の体力をも考慮の要があった。「妻」の体力の要求は当然であったが「夫」としても、極度の緊張と、細心の注意と、強健な体力を投入して得た興奮



が激烈なだけに、脳の麻痺する程の疲労を感じるものだったからである。

一月のうちに、東京では三度の降雪を見た。そんな晩は、「妻」は、どうしても雪責にされたいとねだって肯かなかった。しかし、



東京の雪は積らない。夜に入ると、「夫」は万里子を浴衣一枚に伊達巻を締めさせて、六畳と四畳半の境にある柱を背にして縁側に立たせた。頸から肩、胸、腹、腿、膝、足首まで、きっちり括りつけ、その前の雨戸を半分程開けた。隙間風は殊に冷い。しかも時には粉雪を伴って吹き込んで来た。十時から十一時まで丁度一時間、その間、厳しく身を苛む寒気と、それに因って起った不可抗力の生理作用に、万里子は腿をすり合わせて呻いた。十一時に「夫」は「妻」を跣足のまま戸外へ追いやった。「夫」の下駄に弱腰を蹴られ肩をぐっと抑えられて、「妻」は、三坪足らずの庭に積った雪の上へ、崩れて座した。雪は、それでも2糎ほどあった。

やがて、万里子は吸り上げた。辺りの雪は解けて湯気を立てていた。しんしんと鎮まり返った夜の静寂の中に万里子の鳴咽が浸み透るように思えた。

○

凍えた「妻」の肢体を、敏彦は愛しいと思う。万里子は、しかし普通の身体であり、決して特殊な強健さを持った女体ではなかった。彼女は、屢々、風邪をひいた。咳をこらえようとする姿は、かなり苦しうに見えた。無暗に「妻」の欲求を満たし、自分の嗜好を実行することは、敏彦には何か憚られる想いがし始めていた。その想いは、更に敏感に「妻」の胸に通じて行った。「妻」は迷い悩んだ。

そんな時、敏彦が万里子に示したのは、やはりテキストの中のH氏の手記であった。それはまた、かつて「虐げられる悦び」を公にしたH夫人の悲しい結末の手記でもあった。H氏は、お互いの新しい幸福のために、と云われたが、敏彦には身につまされる真実であった。

H氏は夫人の乙女時代、その危難を救ったことを契機として結ばれたが、夫人は後にその危難の主謀者がH氏であったことを識る。

然し、既にその時、夫人はH氏の激しい加虐の愛に魅了されていた。開拓という仕事は二人の生活を人里離れた僻地に追いやり、夫人は連夜の如く生と死の境界を彷徨させられる。昼の農事に夜の激情は、二人の身体を遂に侵し、僻地から引戻してしまふのであった。大自然を活用した人力の限界の烈しさを、敏彦は想像することでもできず、只管羨望を感じていた。しかしH氏は夫人と離婚した。理由は、夫人がH氏の嗜好の限界を超えてしまったと云うのである。H氏に手ほどきを受け、導入され、教育された途を、夫人は急速に前進し、H氏の達し得ない遙か彼方の目眩めくような高地に往ってしまったというのであった。そして二人の紐帯は断たれてしまったのである。H氏はそれでもよからう。しかし夫人はどうなるのか。H氏よりも優れた道案内が果して在るだろうか。失われた青春は、二度と再び夫人には無い。行き着く先は闇の煉獄であり、そこまで長い道程を、夫人は嗜虐の妄想に鞭うたれながら、どこまでもどこまでも、とぼとぼと曳かれて歩く囚獄の女に過ぎなくなってしまうたではないか。H氏を非難する心算は毛頭ない。ただH氏に身も心も捧げ尽くした清純な魂の歩む途として思う時、涙なくしては読み得ない手記であった。敏彦は、確かにH氏の採った方法がH氏の夫人に対する愛情の極とは思ふ。尊敬もする。しかし願て吾身を惟うと、彼は万里子を手放すことはできなかった。彼が夫人の境地に立った時、自分がそこまで行く自信もなく、また行こうとも思わなかった。唯々、何としてでも自分の手の届く範囲に引戻し繋ぎ留めておくのだと心に誓った。

万里子がH氏の手記を読み終えて、愁いに顔を曇らせながら、「貴方、私が嫌いになったの？ 煩わしいの？ 悪いところがあったら一生懸命直します。云って、ねえ、云って。」と振り仰いだ時、敏彦は妻の瞳に溢れるように湛えられた涙を見た。敏彦は妻の口からその続きの言葉を云わせなかった。それは万感の思いをこめた所作



であつた。

○

四月から万里子は洋裁学校に通ふことになった。三年間も忘れていた学生生活だつた。外は眩く、万里子は晴々として健康だつた。敏彦が指示した通り、設備の整つた東京でも有数な某服装学院に入學した。生徒の数も多かった。殆どが十代の娘達という環境の中では、まるで過ぎ去つた高校時代が帰つて来た想いがした。

万里子の主観では、乙女時代の再来であつて、万里子自身は既に大きく變つていた。万里子には、すぐに数人の友達ができた。その中の一人に節子という娘がいた。できの良くない部類で、ノートも碌に取らず、いつも万里子を頼りにしていた。あけすけな物言いをし、聞きもしないことをいろいろ喋つた。花嫁修業の洋裁なのだが根が遊び好きで先生の云うことはどうでもいいんだと云う。万里子をよくお茶や映画に誘つた。年は十八というのに、精神年令は十二三程度だと自嘲していた。同級生は表面はともかく内心は節子を怪侮していたが、万里子だけは人恋しさに誰にでも優しく暖かかったから、節子もそれを感じているのだろう、「マリコ、マリコ」と慕つてくれた。

万里子は人妻であることを同級生に云わなかつたのに、或る日節子が傍へ来て、「あんた奥さんなんだつて？」と訊いた。

「あら、どうして判つたの？」

「匂いが違うもの、うわア臭い臭い。」

節子がくんくん鼻をならした。万里子は訳も知らず真赤になつたが、これは節子が勘でかけたかまでであつた。節子は、万里子の暖か味や立居振舞の落着きに娘らしい勘を働かせたのであつた。が、とにかく人妻ということがバレて、万里子の信頼度はずっと増した。一つ二つ年上の女性達迄が万里子の周りを取り巻いて、「夫」について識りたがつた。

きやアきやア、わアわア嬌声がとび、ほうつと吐息が漏れたりした。挙句は、万里子は皆から撥られ、抓られ、小突かれて、理由もないのに謝らされるのが常であつた。

結婚後三年も経つてから洋裁を習い出した動機を問われて、まさか「縛られた服」のためとも云えず、「夫」の服を作るためと答えて、また皆に苛められた。

或る日曜日、節子がひよつこり訪れて来た。宿題のブラウスの仕上げを頼みに来たのである。上るや否や、四畳半のミシンを見付けて、「あら、ミシンあるのね。妾、引つ張り出そうと思つて来たんだけど、丁度、いいわ、ここでやつて頂戴。」と云つた。

「みんなやつて貰うとサ、良くできすぎちやうでしよう、留めとくのは下手にやつたから、その通りに、さアつとやつてくれればいいわ。簡単よ。」

云うだけ云つてしまうと節子は敏彦に向つて、「貴方、マリコの旦那様ですか？私節子です。いつもマリコにお世話になってます。」と自己紹介をして、それから、にやつと笑つて、「マリコつて、とっても惚氣屋さんなのよ。いつも私達当てられ通しです。貴方、とってもいい旦那様なんですつてね。」と云つたのには、敏彦も啞然としたし、万里子も思わずミシンを踏むのをやめて「夫」を振り仰いだ。

その節子が、テキストと同じものを持っていた。無遠慮な闖入者には、K夫妻の居城の居心地が余程良かったと見え、四回目の訪問で敏彦の好物を手土産にする程だつた。

「マリコ、ちよつと向う向いて。」

節子の言葉に、背を見せた万里子を敏彦が見やつた。同意を求めるとかのように節子は更に云う。

「ねえ、旦那様、マリコのヒップつていい形ね。」

「ええっ！」万里子はびっくりして向き直つた。敏彦も一瞬後には



微笑をもらした。

「旦那様はマリコのお尻、ぶつことあるんですか？」

敏彦は万里子と顔見合わせた。万里子は赤くなって俯向いた。それは結婚後三年を経たとは思えぬ初々しさだった。敏彦は「妻」に答を振ったことはない。しかし、時にはヒップの膨らみを平手で叩くことはあった。万里子は、それを思い起して赤面したのである。節子は、然し、戸迷っている敏彦をどう感じたものか、「そうでしょうね。いい旦那様だなア。マリコが妬けて来るわ。」と云った。「女房と牛のケツは三日目にひっぱたけて云うんですってね。」

二人とも、もはや、返す言葉が無かった。

「落語で云ってました。この前。だからって訳じゃないんですけど私、こういうもの読んです。お嫁に行つて自分の旦那様からぶたれても慌てないように準備しておくんです。私なんか、無能でお喋りでペアだから、マリコみたいに、良い旦那様が見つからないと思います。だから今から練習しとくんです。だって、私を貰ってくれるような人なんて、普通の男に決まっています。普通の男って、みんなこう云う趣味があるって、これに書いてありました。お読みになつて御覧なさい、面白いんです。それにとつても凄いものもあるんです。」

敏彦は、モデルとして豊満な艶姿を誇ったI嬢に何処か似通つたこの娘さんが、せめて現在の程度で止まっていることを祈る気持だった。モデルのI嬢が先輩のT嬢と同じ進化の途を歩みつつあるらしいと知つた頃のことであつた。

○

二年間の修学で、万里子は一通りの知識と技術を習得し得た。本科に籍を置きながら、その抜群の成績を認められて、速成科の聴講を許され、二年目の後半には助手を命じられた。本科の二年目の授業料は免除された。次第に友達の数も増し、万里子の訪問客も時折

あつたりした。節子の闊入も相変らずだった。そうなつては幾ら峻しい山道に馴れた万里子でも、「夫」と一緒になければ、みじめな姿態を曝す不安が先に立って到底踏み出し得ない登りになってしまつた。

卒業証書と師範科の免許証を手にしたのは去年の三月であつた。

講師の一人が渋谷で店を開いていた。そこへ招かれて働いている時、カクテルドレスの注文に来たのが高校時代の仲良しであつた。余程の上顧客であつたのだろう。恭子というその友人は、渋谷Y先生を説き伏せて、有楽町にある父親の喫茶店のレジスターへ万里子を引つ張つて来て座らせた。Y先生の処では、所謂お礼奉公の待遇であつたから、恭子の店で貰う給料と同程度であつた。今は安い工賃で、レジスターの収入の他である。生活に張り潤いが出た。

経済的な余裕は生活を健康にした。時折は敏彦につれられた万里子が有楽町の辺りで、映画や音楽を楽しむ姿が見られた。

また、忙しいということは生活を健康にした。責任の重い仕事に着いている間は、万里子は、緊しい縛しめの誘惑を完全に斥けることができた。大勢の客を見、人を観、社会を視た。余裕を持つて自分を診ることができた。

夫婦は相談の結果、余裕は出来ながら住居を移さないことに決めた。二人は決して、鎖や、犬の頸輪を買わなかった。必要かも知れないし、少くとも有用ではあつたろうが、然しそれらは、二人の生活環境には不自然であり、不吉な破綻を思わせるものであつたから……。

○

二人は一つのルールを作つた。それは「妻」が「妻」として、或いは「罪人」として扱われる基準である。

二人はこれを、去年の九月一日を期して実行に移した。殊更に出発点には夏を避け、秋を選んだものである。



『 決 定 』

〇〇万里子は、左の基準に従い、夫敏彦より罰せらるるものとす。

- 一、夫に対し従順ならざるを罰す。
- 一、夫への奉仕を怠りたるを罰す。
- 一、妻たるの品位を損せるを罰す。
- 一、家庭の品位を汚したるを罰す。

以 上

夫 〇〇 敏彦  
妻 万里子

『 誓 約 書 』

私は、決定を忠実に守り、誠心誠意、努力致します。

決定に違背し、又は貴方様の御心に適いませぬ節は、私の無能を戒め、怠惰を矯め、少しでも有能な妻になり得ますよう、御力を御与え下さいませ。

右のとおり、絶対服従を御誓い致します。

昭和32年8月×日

万 里 子

〇〇 敏彦様

右の決定と誓約は九月一日から発効した。決定には、「何々を罰す」とあるだけで、どんな罰を受けるのやら、万里子にはさっぱり判らなかつた。敏彦の言によれば、「罰を受けるということを知るだけで充分なのだ」そうだ。

第一の従順ということは、敏彦の云付に抗ったり、云付を忘れたらしなければ守って行けるものだった。敏彦は、決して無理であると判ると、その行為は採点から除外していた。

第二の奉仕と云う点は、敏彦の身の廻りや食事などを清潔に上品にすることだった。敏彦を心から尊敬慕っている万里子には、控

え目な敏彦の要求は殆ど問題にならなかつた。

第三の妻の品位と云うことは易しいようで一番厄介だった。敏彦の「妻」は、敏彦に相応しい、若さと美と健康を備え、上品でなければならなかつた。万里子の違反の大部分は第三項に関するものだった。

第四の家庭の品位というのは、主として家の内外の掃除と近所との交際であつた。多忙な妻を識っている敏彦は余程目に余るものでない限り、第四の違反に問わなかつた。

審判は土曜日の夕食後、または休日の前夜の夕食後に行われる。一週間の違反を万里子が申告する。万里子は六帖の間の真中に床の間を向いて正座している。敏彦も、勿論一週間の違反についてはメモを取っている。往々万里子の申告の方が少ないものだから、そこで峻厳な訊問が始まる。皮肉たっぷりに敏彦は万里子を問い詰める。この時は決して容赦はしない。余りの侮辱や厭味に、万里子はぼろぼろ涙をこぼしたり、時には声を上げて泣き伏すこともある。敏彦の片言雙句がすべて彼に能う限りの悪役ぶりを見せていた。それでも万里子は黙って肯かなければならない。弁解は無用であつた。いかなる理由も、弁解とは認められず、反対とされる。結局、罪を認めてしまうのでは、初めから結末に向つていた。

一番違反の多い第三項については、然しどうしても万里子は申告を忘れがちだった。自分が美しくなる努力を怠ったなどとは、どうしても恥かしくて云えなかつた。それ程に万里子は清純で美しかった。

審判には、申告が不充分だと拷問が用いられたが、もし申告が充分であると認められると処罰が猶予された。そして次週に違反がない場合、罰は前科と共に消えた。次週に違反があると、次週の分が猶予されなければ一緒に罰が課せられた。

猶予があり、前科が消される迄はその犯行が囚人番号として囚衣



の胸につけられる。囚衣は上下に分れたタイツであり、それには色によって罪の軽重がある。ウエストを巾の広いベルトで締めるので一見して囚衣はコンビネーションのように見える。着用の際は、ブラジエアとブリーフだけの裸体にされる。囚衣の上は、背中をフラスナーで閉め、可愛い襟を立てると顎の下まで隠れるし、四肢はそれぞれ手首と足首迄を、びったりと包み込んだ。すべて万里子の技術の優れた所産であった。

万里子がおかれる階級は、妻、女囚、奴隷の三段階であった。

「罪人でもなければ奴隷でもない」と真剣に訴えた万里子も、この階級の規定に喜んで従った。

「妻」の場合は「お仕置」が行われる、これは万里子の希望も容れられる合意の懲罰で結末は和合で結ばれるのが常であった。「妻」は従順の範囲で「夫」と対等に話すことを許されていた。

「女囚」の場合は、処刑であり懲役であった。赤、黄、黒、緑、空の順に、囚衣の色別があつて、左胸にはM・Kと頭文字の縫い取りがあり、その下に囚人番号をホックでつけるようになっていた。直立不動での復唱と看守の手を煩わした場合のお礼が義務づけられていた。従つて、義務違反には特別な懲戒が直ちに報いられた。

「奴隷」には二種あつた。囚衣と同じ型の奴隷着が茶とピンクの二種あつて、茶の方には胸に slave marico とマークがあり、ピンクの方には maid slave marie とマークがついていた。奴隷の手と足は一定の範囲内での活動しか許されなかつた。両手首、両足首は20種位に細紐で繋がれ、更に奴隷は人間の言葉を禁じられた。奴隷には懲罰はなかつた。何となれば奴隷は人間ではないのだから、云いつけにそむいたからと云つて一々罰する必要は無く、所有者の思いの儘の時に、思いの儘の処置を取っていれば良かったからである。然し概して marico は強制労働に追い立てられ、marie は弄ばれるようであつた。

○

11月23、24日は連休であつた。土曜日が休日なので、この週の審判は22日の夜だった。万里子は六帖の部屋に正座した。前科二犯の容疑者である。というのは、10月末までに無罪で通過の週が殆どなく、9月23日が無事だったただけなので11月3日の有罪宣告で六犯になつてしまった。この時は違反も大きかったので罰も酷く、万里子はくたくたになるまで苛め抜かれた。その代りと云うわけか。敏彦は特に文化の日に因んで、それまでの前科を抹消してしまつたのである。だから22日の夜には、4日から10日迄の一犯と、11日から17までの一犯が記録されていた。

「18日、月曜日。朝、少し寝坊したので、お靴をきちんと磨いておきませんでした。」「弁解無用！違反の事実だけを云えばいいんだ。ふん、お前は自分の身の廻りを飾り立てる間はあつても、主人の靴を磨く時間はないって云うんだな。まあゆっくり朝寝して、美人になることだ。」

こんな調子の審理が続く。最後には、涙で声をつまらせながら、罰を求めさせられる。

「私は、只今申請の分と、御指摘の分と、その他沢山の罪を犯しました。厳正な、お裁きを、お受けして、充分な、罰に、よつて、償いを、させて、頂きたいと、思い、ます。」

すっかり途切れ途切れになつてしまふので幾度も幾度も繰返して唱えさせられる。そのあとで敏彦が宣告を下す。

「万里子を有罪と認め、女囚第三号と呼ぶ。但し、次回審判まで刑の執行を猶予する。」

翌23日は勤労感謝の日である。万里子は敏彦がゆっくり寝ているというのを、「いいのよ、馴れているから……」と笑つて、起き出した。

「朝御飯は何がいいの？」



「何でもいいさ、簡単なものでね。トーストと紅茶ぐらい……」

朝食は、豆腐の味噌汁と生卵と焼海苔でさっぱりと済ませた。朝食の片づけが済むと、敏彦は、万里子を映画に誘った。

万里子はいそいそと鏡台に向かう。鏡の中にネクタイを締める「夫」が写った。

「ああ、ちよつと待って、こちらの方がいいわ。」

いつもの紺のネクタイを締めた敏彦を抑えて、万里子はグリーンの地に細く白の縞の入ったネクタイを取り出した。

「シャツもお換えになつて。」

僅かに水色地に染められたシャツに、濃いグリーンのネクタイは、落着いた華麗さを形作っていた。

二人は銀座へ出た。

○ 映画が終ってから二人は行動に迷った。

「真直に帰りたくはないナ、銀ブラでもするか。今日は君に付合つてデパートを覗いてもいいんだぜ。」

「うん、そうね。ほんとに付合つて下さるなら、日比谷公園へ行かない？」

「何かあるのかい？」

「ううん。ただ歩いてみたいの、一緒に。」

万里子は甘えるように敏彦を見上げて笑いかけた。

二人は日比谷まで歩いた。公園の中はアベックで満ちていると云



ったら大袈裟であろうか。万里子は、然し、楽しかった。彼女の仕立てたファッションを身につけた「夫」の色調は確かに当日のベスト・ドレッサーと云うことも恥かしくなかった。敏彦自身のシックな感じは充分に生かされていたから、さり気ない様子の人々の視線が同伴者にちらちらと注がれるのを万里子は誇らしくさえ思った。それにも劣らず万里子の清潔な美しさは抜群だった。ライトブル



ーのオーヴァの襟から純白のマフラーがのぞいて、ほこり除けのピンクのネッカチーフが柔いカールを丸く包んでいた。まるでティーンエイジの恋人という愛くるしさを備えていた。

敏彦が、万里子の肩を優しく抱いて、耳許に囁いた。

「お茶飲みに行こうよ。」

「じゃお店がいいわ。」万里子は、にっこり笑って云う。

「安くて済むんですもの……」

日曜日のティ・ルームはアベックでかなり賑っていた。万里子は敏彦の陰に隠れるようにしてカウンターから離れた一隅に席を取った。マダムも店のウェイトレス達も光線の加減か、それが万里子と気づかなかつたらしい。敏彦はウインナコーヒー、万里子はパインジュースを注文しておいて、そっとネッカチーフをしたまま万里子はカウンターにいるマダムの恭子に近づいて行った。

人の気配にふり向いたマダムは眼をくりくりさせて云った。

「あらっ、マリコいつ来たの？」

「うふん、いま、よ。」

「ふうん、貴女、今何時だと思ってるの？ あんまりハズに可愛がられて眼がとろけちゃったんじゃないの？」

「お合憎様、今朝は早くからアベックよ。——あ、それ、あたしが持ってくるわ。」

話のやりとりの間に搦えられたコーヒーとジュースを、盆に載せて万里子はカウンターを離れた。

「お待遠さま。」

手なれた身のこなしで器を並べる「妻」を、敏彦は微笑をうかべて黙って見ていた。

「いらっしやいませ。」

マダムが艶然と敏彦に笑いかける。

「マリコ、貴女は遅刻した罰よ、あちらへ行って働いていらっしや

い。怠けたら承知しないから。ハズは大丈夫、妾がお預かりするわ。さ、行った行った。しっかり働かないとよるめかしちやうわよ。」

「大丈夫よ。彼は妾に首ったけなんだもの。」

万里子は、にっこり笑うとマダムに代ってカウンターに立った。何かしら自信に満ちているようで、同年のマダムに勝るとも劣らぬ魅力が看られた。

約一時間後、二人はマダムのサーヴィスの紅茶とサンドウィッチを摂り、外へ出た。マダムは、「いつもよく働いてくれるから、今日は無罪放免にしとくわ。」と云いながら、万里子の背中を、突出すようにほんと叩いた。

○

「罪を犯しておいて全然意識しないなんてことさへ許せないのに、お前は今、罪なんか犯していないと云い切ったナ、まあ、そんな高慢な顔がいつまで続くか楽しみだよ。いいか、お前は今日一日で数々の罪を犯しているんだぞ。朝からの、起きて飯を食って外へ出てからの行いを、じっくりと振り返って見ろ！ それでもまだ白ばっくれて強情が張れるかどうか、謙虚に反省するんだ！」

万里子は敏彦の前に正坐していた。二人だけの遊戯ではあっても審判となれば緊張に身を固くするし、「妻」としての無能を衝かれて有罪に決まると、頬から血の引く想いがして魂の凍るような気分になった。彼女は、「夫」が何を指摘して罪を問うのかを悟り、一瞬どきっとした。反射的に顔を上げ、何か云いたげに敏彦を見上げたが、やがて「夫」の言葉につれて、次第にうな垂れて行った。白い艶やかな項が美しかった。

「今朝、俺の云いつけに背いて起き出した。食事の献立は俺の云ったものと違っていた。特に派手なネクタイをさせた。シヤツにも不必要な虚栄を張った。朝だけでもこんなに罪を犯しているんだ。その上、出かけるのに俺を随分待たせたが、あれも大きな罪になるん



だ。」

「済みません。……どうかお気の済むようになさって……私が悪うございました。」

うな垂れたままの万里子の声は、細いけれど澄んでいた。

「……店では完全に妻の品位を汚した。更に俺のそばを離れて一時間も奉仕を怠った。夕食にお前は俺の言葉に逆って違う店を選んだ。お前は俺が飲めと云ったビールを拒んだ。俺が取ろうといったデザートを渋った。」

万里子には、夫が決して怒ったり、気分を害しているのでもないことが判っていた。不快な時、夫は決して妻に不当に当り散らすことはなく、むしろ妻を近づけないでいたから、お仕置に熱心であることは上気嫌のパロメターとも云い得るのである。しかも今夜は普段なら当り前のこととして許されている妻の甘えを一々罪に問うのであるから今日の一日が、敏彦にとっても素晴しく快適な休日であったと理解しても良さそうであった。

それでも頭の中で理解するそんな心持と、実際に耳から飛び込んて来る敏彦の言葉に対する反応は別であった。

「お前は有罪だ。前科の執行猶予も取消だ。今からお前は女囚四号なんだ。いいな。」

それから敏彦は向き直って厳かに云った。

「第四号の処刑、直ちに執行。速やかに準備にかかれ！」

万里子の顔は硬張り、恐怖に見ひらかれた眼は、一瞬敏彦の口許を見上げた。

「可愛い顔するじゃないか。お前のそんな顔はたまらないぜ、とんだ芝居上手だ。まあ、その可愛さだけは忘れるよナ。」

そんな言葉に俯向いた万里子を、次の言葉が追い立てた。

「いつまで坐っているんだ？俺の云付に従えないと罪の上塗りだぞ。早く仕度しな。着物はA型とマリーを用意するんだ。」A型は六

種の最高刑を示す赤い囚衣であった。マークは勿論女奴隷の衣裳である。何故に両方を？などと問うことは許されなかった。万里子が扱帯や腰紐や細引など、自らを拘束するための品々を用意する間に、敏彦はカメラを持出し、電燈を明るく替えたり、セルフタイマーをつけたりにしていた。

敏彦は以前友人から登山の記念に貰った檜の杖を手にしていた。「フィルムがお終いになるか、お前が首を上げるかの勝負だよ。」敏彦が、にやりと笑う。

第1シーン 有罪の宣告を受ける万里子、両手を膝に正坐した万里子の頸に敏彦の指が掛って仰向ける。万里子の瞳が縋るように哀しく憐みを求めている。

第2シーン 死刑を言渡される万里子、以たようなシーンだが、両手は自ら腰の辺りで組んでいた、両肩の辺りに殊に力なく、頭を垂れている。

第3シーン 衣類を剥ぎ脱られる万里子、スーツは傍に落ち、ブラウスのボタンをはずされ、ぐっと拡げられた下にはスリッパの肩紐のかかった胸から背中が露わになる。背後に引かれた両腕の拘束は縛めを思わせ、万里子は諦めたような、しかも屈辱の堪え難い切なさ顔をふり仰ぐ。

#### 第4シーン

身を覆う一片々々を剥ぎ取られた万里子が最後のズロースを自らの手で取り去らねばならず、右手で両の乳房を庇うようにしながら左手の指先で片膝立になった右足首を潜らせようとした瞬間に、余りの遅い仕草に怒った敏彦が手にした檜の杖を力任せに万里子の脇やかな背中打ちおろし、生まれて初めてのその激しい痛みにより万里子が思わず身をよじって悶える。

これらのポーズはすべて瞬間のものであっても、撮影のためには一定時間継続した静止が必要であった。従って厳しい註文に基く練



習を幾度か繰返した上に、愈々本番という時には、万里子の演技力が要求された。

アルバムを飾っているあの夜のフオトの数々には、それぞれ説明がついている。

「囚衣は先に下を覆うことを許されない」

赤の囚衣は写真では黒く写っていた。囚衣の上衣をかぶった万里子が膝をついた姿勢で両腕を袖に通している。

「脱ぐ自由のない衣服が囚衣である」

下半身を露わにした万里子が膝をついている背後にまわった敏彦が、襟につけた輪にチャックの引手を通して小さな金色の南京錠を施すのである。

「囚衣の身にも不潔は許されない」ブリーフのびったり喰い入った足許に、柔らかい脱脂綿が見え、櫛の杖に追われた万里子が囚衣のズボンを引き上げている。

「女囚にも美への煩悩は厳存する」

囚衣の上衣には可愛らしい飾りの襟がついていた。胸には洒落たM・Kのマークが縫い取っており、そして上下ともびったりと仕立てられた囚衣は腰を締めつけた中広のベルトの下で接していた。許容の限界まで締め上げたベルトのために腹腔の内容は上下に押しやられ、胸の隆起は豊かに膨満し、ぶつくりと曲線を見せる腹部に続きヒップの張りは著しく映え、極端な表現をすると、まるで、蜂か女王蟻のように思われた。

「流石に小気味良い神妙さであった」

正坐をするだけでも余程苦痛であったろう。しかし万里子は顔を起して正坐しており、両手を背後で組んでいた。敏彦が後から手にした細引を腕に一卷して締めんとしている。

「覚悟はしていても縛めの厳しさは忖え難い」

細引は長かった。胸の隆起の上下を二巻づつ、而も二の腕は別に

くびれる程に締めつけてあり、更に両の肘を巻いて引寄せ、腰のベルトを一卷して留めてあった。

別の細引がまず交叉した手首をきっちり、文字通り緊縛した。それから手首を背中にくつと引上げた。前以て腕や肘が拘束されているので手首は水平から上には余り出なかった。しかし、万里子にとっては、それが敏彦の力に見せた誠実さの限界であって、苦痛を逃れるために少しでも余裕を残そうとするような万里子ではなかったから、手首が示した抵抗は骨と肉の單なる物理的な抵抗に過ぎない。細引は喉を締め付け頸の処で輪を造った。だから、手首を下げることは自ら絞首することを意味していた。更に細引は前の細引の横に走ると交錯し、縦に連結した。従って、もう上肢の付根からは何処を動かしても絞首に繋がっていた。

そんな縛めを前から後から、そして斜め上から迄撮ってあった。万里子は体の芯まで浸み透るような苦痛を味わうかのように、ぎゅっと下唇を噛んでいた。

「刑場への第一歩。何故の涙？」

縛めを終った万里子の立姿であった。両の足首はおよそ二〇厘米に間隔に結ばれていた。ウエストを締めつけるベルト、二の腕の血行を止める程の細引、締められた手首の激痛と腕の痺れ、呼吸を著しく圧する首縄等々、これだけの条件が弱やかな万里子の五体を襲い柔肌の苛む以上、きらきらと電光に輝く露の滴りが頬を伝って溢れ落ちるのも、また当然であろう。

○

長押に金の留具が掛けられ、それに腰紐が二重の輪になっていた。小柄な万里子の中へ項を入れると、辛うじて爪先が畳に残る高さになっていた。その下に万里子は立たされていた。

「愈々死刑を執行する。最後に何か云い残すことはないか。あったら今の内に云っておけ、聞いてやるぞ。」



「べつに……なにも……」

敏彦と万里子のこんなやりとりを、カメラがまた収めた。

万里子は白布で目隠しをされた。

「もうちよっと、此方へ寄れ。」

余りに本格的であった。苦痛も極度に身を責め虐んだけれど、それ以上に初めて経験した目隠しは恐怖であった。万里子は金具に下っていた腰紐の輪が迫って来るのを感じた。不安が胸の中に拡がり思わず喘いだ。

「貴方、まさか、本当になさ、あつ、あつ、嫌！ 嫌！ 嫌！ やめ、ああ、あうっ、ぐっ……」

万里子が不安げに、夫の方を心覚えで振り仰いで尋ねるのを、敏彦はぐっと抱上げて、身悶えして逃れようとするのもかまわず、被縛者の首に輪をかけてしまった。

目隠しをされた万里子は、顔を思い切り上に向けて輪の虐みから脱しようとはかない力を続けていた。仰向いているために足は、土踏まずの少し先までが畳に付いていた。丁度、ハイヒールをはいた程度で、バレエのトーションシューズ程ではなかった。

「く、苦、くっ、く、苦しいっ、く、く、」

「やめ、てえ、は、早、や、やめてっ！」

万里子の頭は揺れなかった。腰紐の輪と、それよりも厳しい首縄に堰かれていたためである。彼女は左右に、そして激しく後に頭を振り動かして呻いた。そんな万里子の脳裡へ、眼隠しを通して閃いたフラッシュが二度、三度と明るく映った。

「首っ吊りがどんなにいい恰好か見せてやろう。」

目隠しをはずしておいて、敏彦は姿見を持ち出して来た。鏡の中の万里子は滑稽な程に哀れであった。顔は充血し、汗と脂で黒っぽく光っている。眼がとろんと据り、舌をだらしなく垂らして口を開けたまま、はアはア喘いでいた。

絞首台に架けられた囚徒は、息の根のとまるまで絞索から解放されないものである。再び目隠しを施された万里子は、敏彦の暗示通り、咽喉にまわされた縄を顎で抑えて全身の重みを託して静止せざるを得なかった。

ピンクの奴隷衣を身に着けたマリーは、仰向けに寝かされていた。両の手首は背中に廻っていた。絞首刑の執行の時のように、ぎりぎり喰い込む締めではなかったものの、それでも両の二の腕は腋にびったりと付いて動かなかった。背中で抑えられた手首が痛まぬようとの思いやりか、それとも別の魂胆があつてのことか、三つ折の敷布団が腰の下に当てられ、足首を揃えて括られたので、マリーは下腹を突出す様な妙な形にされていた。そんなおなかの上へ、敏彦は三つ折の敷布団を更に二枚重ねた。マリーは次に加えられる苛虐の恐怖におびえながらも、じっとしていた。盛り上った布団の上へ敏彦は殊更に荒々して腰を落した。瞬間、マリーはびくんとふるえ、上体を起すように動いた。反射的にううっ！ と呻いて息をのんだが言葉はなかった。マリーには言葉というものが無いのである。

撫でられても、擦られても、抓られても、噛まれても、マリーは言葉を使えなかった。荒い喘ぎと一緒に出る動物的な叫声ならば、限度として許されるだけであった。

敏彦は枕を持ち出してマリーの頭の下に入れた。それから、どこから借りて来たものか、巾広の八寸程の庖丁を持ち出して、マリーの前にちらつかせてから、これ見よがしに砥石を持ち出して砥ぎ始めた。

マリーは、身じろぎもしなかった。体に載せられた布団の二枚位は、いつでもはねのけて起き上ることは可能でも、心はそれを命じていない。夫の仕草を訝りながら、奇妙なサンドウィッチにな



つていた。

「さて愈々、素敵な料理の始まり始まり」

敏彦はおどけた調子で云った。親指の腹で刃を擦りながら、「良く切れそうだ。触っただけで指なんか落ちそうだよ。」と、にやりと見やった。

マリーの綺麗な黒髪を掻き上げると、白い項をびたびたと叩いた。それから、何のつもりか、アルコールを含ませた脱脂綿で髪を生え際から襟足を丁寧に拭いた。首筋の冷やかさに、マリーは、まるで宙に置かれた我が身の思いがし、体中を吹き曝しにする空気の流れを感じた。

庖丁はマリーの首筋に当てて立てられた。直角な起立は、冷一本の線になって項を脅し、背筋を凍らせた。

敏彦は暫くの間、布団の上にのっかってマリーの苦悶を見おろしていた。枕に支えられて項は安全である。しかし、皮膚に触れている金属の味は、不断に、頭を、頸を、恐怖から逃れようとする努力に追いやった。

既にマリーの鼻の頭にまで、うっすらと小さい汗の粒が浮き出していた。

「こいつは要らないようだ。」

敏彦の手が、頭の下に当てられた枕にかかった時、マリーの顔に一瞬絶望が走った。事実、彼女はその瞬間、ああっ！と叫び出した。思いだした。鋭利な刃が白い柔らかな項に鮮血を迸らす危険だとか死ぬかも知れないんだわ！という恐怖だとかいうものでなく、顔に表われた絶望は、自分の忍耐が肉体の力の限界に打破される時、すぐ身近に押しつけて来た冷酷さの前の、哀しく見出した我身へのいとおしさであった。

ただでさえ色白なマリーの顔からは、全く血の気が失せていた。額の髪の毛の生え際の辺りに、脂汗がじつとりと鈍く光っている。

最後の足掻きとも云えようか、肩から頸にかけて小刻みにぶるぶると震えている。全直に保つための無理が、可愛らしい足の指の一本一本にまで、びくびく現われていた。

マリーの肉体は哭いていた。心はともかく、両眼からは止めどない涙が、あふれて耳へ流れ続けた。二枚重ねた布団の上の敏彦の重みが、滑らかな曲線を持つ腹部を圧して奇妙な歪みに変えている苛責も、最早、問題ではなくなっていた。

最後の一瞬が来た。

まるで今までの総ての忍耐の反動のように、マリーの全身は一時に力を失って硬直を解いた。細い項は挑みかかるように自ら金属の線にぶつかって行った。

ずぐっ！ 嫌な、奇妙な音だった。

敏彦は布団の上に乗ったまま、じっとしていた。彼の下に、マリーは仰向いていた。閉じた瞼の隙間から、溢れ続けていた。そして……庖丁は、庖丁は、鋭い刃を下にしたまま、畳の縁と縁の間に全身を押し込まれていた。

○  
万里子の放心状態はかなり長かった。夫を疑うことを識らない心にとつて、あの斬首のブレイは確かに異常な衝撃だったに違いない。縛めを解かれても、ぐったりと力無く横になったまま、万里子はいつまでも哭いていた。いや、唯、閉じた両の瞼から涙が溢れ続けていたと云うべきかも知れない。

その姿態は、余りにも魅惑に満ちていた。敏彦は、妻が精神の正常を失ったのではないかと案じた。しかし、心の隅には、なろうことなら、生涯狂い続けてくれてもいいと希うものがあつた。

それ程に、万里子の放心は愛しいものだった。だが、あれ以来、今年に入っても、二人は万里子の放心状態を招



来しなかった。

敏彦は、自分の快楽を追うためのより大きな刺戟が、この無上の伴侶を魂のない人形にしてしまうかも知れないことを恐れたし、それに自分という者を信じ切っている存在の汚れない心を酷く傷つけたことが、やりきれなく、反省された。

昨年の暮から、悪性の流感がまた猛威を振り出した。敏彦の社会でも多忙を極めていて、景気は上々である。つまり風邪の患者が多いのであろう。その一人が、万里子である。敏彦にとっては痛し痒しであった。

万里子が勤めを休まないものだから、ずっと風邪気味のまま年を越した。従って、今は審判も、烈しいお仕置も休業で、目覚ましいブレイの実績はない。只、お仕置の代りに、風邪の応急手当が毎夜続けられている。

万里は、いつもの通りパンティ一つの素肌に寝巻の浴衣を纏う。両手を胸に当てて、丁度乳房を抱くように固定される。両脚を括り合わせ、膝を頸から吊るように曲げて仰向に寝かされる。おなかに懐炉を入れ、拡げた毛布の上に置かれ、その中に頸の下までびったりと包み込まれて万里子は一個の荷物にされてしまう。毛布の上からは縦横に細引がかけられ引締められて行く。荒療治ではあっても、万里子のためという理由の許に、強制されているのであった。

荷作りされた万里子は、二枚重ねの敷布団にのせられ、掛布団二枚に覆われる。枕も当てられているから外から観た処では、足の辺りが盛上っている以外、普通の就寝である。然し、この女体は、隣りに寝ている敏彦が、一寸片手を伸ばして抑えるだけで、寝返りも打てない被縛体なのだ。

腹部にむき出しの湯たんぽが載せられる。毛布に隔てられて火傷の恐れはないが、かなりの熱気が伝って来る。

汗ばんだ肢体は、そのまま翌朝の解放を待つ。それまではトイ

レに行くことすら許されない。

「ねえ、貴方。もう許してよ。ね、朝のお仕度させて下さらない」毎朝、毛布に包まれた眼ざまし人形は、風邪のために自然の鼻声で呼びかける。その声の艶は、それこそ天の配剤であろう。

○  
傍の敏彦を流し見ながら、万里子の艶のある鼻声が挑むように流れる。

「私の風邪が癒ったら、うんと良い奥様に仕込んでね。」

今日は、からりと晴れた爽々しい朝だ。台所の窓を透して明るい朝日がまぶしい。万里子は水道の蛇口からほとぼしる水が、美しい水玉模様となってキラキラ輝くのを、弄ぶように、むっちりとした白い手を動かして食事の仕度にかかった。

朝のこのさわやかさに比べると、夜の風邪の応急手当は、なんと私の心を打ちのめすことだろう。万里子はそう思って、両手を伸べて、うんと伸びをしてみた。

「万里子、万里子」

寝床に横になって新聞を読んでいる筈の夫が、彼女を呼ぶ声がする。「私の風邪が癒ったら、私は、又、どんなことを考えるだろうか、私は忙しいのだけど」

万里子は夫の呼ぶ声を上の空で耳に聞きながら、味噌汁のみを刻んでいた。ガスにかけたお鍋からは盛んに湯気が立っている。

「なんですのー、私はいま一寸手が放せないんだけど」

そういいながらも、万里子は台所と居間の間の硝子障子を開けて首をのぞかせた。

「全く暴君だけど、子供のようなものだわ」

思わずそう呟きながら、前掛で手を拭くとガスの栓を止めた。「もうすぐ暮だわ」

なんとなく若やいだ気持で夫の所へ走り寄った。(おわり)



## 〔緊縛映画研究〕

## 縛られた女優達

大河原 珠樹

## ▽千両獅子（東映作品）千原しのぶ

義侠心の強い芸人玉川つばめが、葵太郎に拐かされた松平鶴太郎の許婚者雪姫を救いに葵太郎の持船へ忍び込むが発見されて後手に縛られる。

胸をかなり太い縄で二巻き、背中で縄を合せて帯の内側を通し、腰のやや上あたりで後手首を堅く縛り、全体に縄が千原しのぶの可細い体に食い込んでいた。後姿が多くほかに突きとばされて板間に転がる場面もある。この姿でつばめがタンカをきるのが面白い。

## ▽千両獅子（東映作品）無名女優

タイトルバックで葵太郎に押入られた商店の店員達が珠数つなぎに縛られている。中に女中姿で二人の女優がいた。平凡な後手縛りで特筆するところはない。

## ▽少年猿飛佐助・牢獄の姫君（東映作品）

丘さとみ・山本昭子

おぎん婆の幻術に拐かされた百合姫と佐助の姉おアヤが、まず水車小屋の中に縛られている。荒縄で胸を三巻した後手縛り。二人は山賀弾正のもとへ売られて、ここでは白布で猿轡もされる。

縛りかたも前より強く締めている。

佐助が救いに来て一度は縄をとかれるが、すぐ敵方の忍者の夜霧の源助に見つかって、また後手に縛られ、柿原玄馬に売られる。

玄馬は百合姫のお守袋にあった大砲の絵図面が酒がこぼれて消えたために、もとどおりにする方法をいえと、二人を磔柱に縛りつけて、火焙りにする。

段々と火を近づけて最後は硫黄を燃やしたり責めつける。ハリツケに掛けられている二

人は歌をうたって苦しみに耐えている時に佐助が救いに来る。

毎度のことながら東映作品のハリツケ縛りは精彩に乏しい化粧縄。かなり時間は長いが緊縛感がないのでつまらない。

演技は古参の丘さとみの方がやや上手いが歌をうたっている時の山本昭子のアップ（大写真）が、うつろな眼で空をおおいただけだ。ここでは全編の過半を縛られる。

## ▽女殺し油地獄（東宝作品）

女優の縛りはないが、中村扇雀の与兵衛が引廻しになるファストシーンとラストシーンは見のがさぬこと。

本縄（一寸型式が違って胸で網目がなくX型のたすき縛りだが）に縛られ、見物人にのしられて悪態つくところが面白い。

## △訂正V 先月号で、新東宝「花嫁殺人魔」

の女優藤木の実と書きましたが、その後調査したところによりますと、野々村律子が正しいようですので訂正いたします。



## 事実小説

貸<sup>か</sup>

し

男<sup>おとこ</sup>槇<sup>まぎ</sup>村<sup>むら</sup>奏<sup>そう</sup>

## まえがき

本篇は、私の経験した事実を小説にしたもので、本来なら告白手記として稿を起すべきだが、それでは主要人物である矢部運平の心理を充分に描ききれないうらみがあるので、あえて小説の形式をとったものであることを最初にお断りしておく。

## 一

××機工株式会社の技師、矢部運平は、関西方面への出張を命ぜられると、出発の前日に、部長の大角勇作に呼ばれた。

「矢部、お前、明日から一週間だったナ」  
精力的な赤顔の大角は、椅子に背をもたし

たまま、三十四という年にしては頭髪の薄くなっている矢部の、いつものように生真面目な顔を見あげた。

「今夜、いつものように俺の家へ来い。いいナ」

「はい。わかりました」

矢部は四十五度の礼をすると、自分の席に戻った。

「いつものように——」と云われても、最近では、あまり気持の動揺することはないなっている。しかし、晚餐へでも招待されるような期待が、心の隅に湧いてくるのは事実であった。

矢部と大角との奇怪な関係は復員後、職を失っていた矢部が、大角の世話で、今の会社

へ入ったときから始まっていた。

大角は、海軍で、下士官まで叩きあげられてきた男である。矢部が、彼から、交換条件として要求されたのは、自分の身体を無条件に提供することであつた。つまり、大角のサディズムを満す道具に使われるわけで、それはまた、彼に対する絶対服従をも意味していた。

応召兵として海軍へ回された矢部は、そこで屈従の意志をふき込まれた。精神棒の洗礼はもとより、偶々彼が上官を喜ばせる事の出来る条件を有っていたので、いい慰みものになった。彼は、ほとんど毎日を裸に近い姿で暮らしたといつていい。水兵服はおろか、褌さえも、彼には無用のものようになっていた



のである。

矢部が大角と知りあったのは、やきとり屋の屋台であった。二人は旧海軍のために乾杯した。就職をひきうけた大角は、早速自宅へ矢部を連れていくと、採用試験だといって、身体検査を行ったのである。

矢部は、己の因果をつくづくと思ってみるときがあった。だが、奇妙なことには、大角の意に逆えば、たちまちにして誠にされる立場に、安心もしていたのである。

いつものように、大角は、矢部を書斎に入れた。

「オイ、すぐに始めるぞ」

「はい」

矢部は、上衣を脱り、ワイシャツも下着も脱いで、上半身裸になった。遅いという程ではないが、筋肉は締っている。

大角が縄を出して、矢部を後手に縛った。そうしておいて、ズボンとズボン下を手荒くずりさげ、急に思いついたように煙草を咥え、と、それからゆっくりと、矢部の顔を眺めながら、煙の輪を吹き上げた。

その瞬間、矢部は戦慄する。

（ああ、もう、いっそ早く剥ぎとってくれ！

……）

と、心の中で絶叫し、じだんだをふむように、軀を揺する。

大角はすい  
さしを捨て  
と、舌なめ  
ずりをして、  
精神棒をか  
まえる。

クリクリと  
丸みをもつ  
て、よく発達  
した、矢部の  
臀筋が、みる  
みる赤く腫れ  
あがつてく  
ると、その口  
から、苦痛と  
も快感ともつ  
かぬ呻きが洩  
れ、ふんばつ  
た両足が、耐  
ええぬよう  
に、ヒクヒク  
と痙攣しはじ  
めた。

「今夜は、このくらいにしておこう」

大角は、新しい煙草に火を点けると、机の  
抽出から一通の封書を取りだした。

「——ところで、命令がある。出張の帰りに、H市へたちよってもらいたいんだ」



「はい——」

「九条という、昔俺が世話になったことのあ  
る人の処だ。直接逢っ  
て、この書類を届ける  
んだ。俺には、恩人と  
もいえる人だし、今は  
ともかく、戦前には、  
身分の高かった家の御  
子息だ。くれぐれも鄭  
重な態度で、粗忽など  
のないようにな。お前  
が失態でも演じようも  
のなら、俺の恥になる  
んだぞ。それから、こ  
いつは一番大事なこと  
だが、九条氏の云われ  
ることは、いかなるこ  
とでも、俺の命令だと思  
ってきくんた。いい  
が、絶対に反いてはな  
らん。胆に命じてお  
け。わかったか」

「はい」

「その晩の宿は、九条氏の処でしていただく  
手筈になっている。翌日の「なにわ」で帰れ  
ばよろしい。出張が一日延びることはかまわ  
ん。俺がいいようにとりはからっておく。心



配するな。では、この書類をわたす。大切なものだ。紛失でもしたら切腹ものだぞ」

大角は、ニヤリと笑うと、部厚い封筒を机の端においた。

洋服を着終った矢部は、おそろおそろそれを受けとると、鞆の奥深くへしまいこんだ。

## 二

九条令一は、大角勇作からの手紙に、何度も眼を通した。

それは、矢部が発つと、すぐその後で認めて、投函したものである。

『——かねてお約束のマゾ男、いよいよお貸しできる手筈になりました。来る十一月×日、関西へ出張の帰途たちよらせませう。なにわの上りで、御地着は十七時三十八分になります。矢部という男で、私の部下であり、私の命令には絶対服従を誓った者です。今回のことも、私の命令に従ったわけですが、貴方の云われること、すべて私の命令だと思つてきくよう、くれぐれも申しつけてあります。貴方のお好きなように、どんな残酷な責めを加えてくださっても結構です。彼は海軍で充分鍛えてありますから、それに耐えうる体力は持っている筈です。少しも心配はいりません。思うぞんぶん料理なさってください。私の見ていない処で、私の権力がいかに彼を支配できるか、私にとっても、サデイス

テイックな楽しみがあるわけで、貴方の報告を大いに期待しています。それから、お手数ですが、その晩の宿と食事を与えてやってください。そして、会社の都合もありますので、翌日の「なにわ」に乗れるよう、放免してやってください。もしお気に召せば、今後にも又機会をつくつてお貸しするようにはからいますから——』

矢部は、H市は初めての土地であつた。列車を下りると、長いホームにはもう灯が点いていて、肌寒い風が妙にエトランゼとしての心細さをそそった。

切符をわたしながら、あたりを探すと、柱に寄りかかるようにして立っている長身の男が、ジツとこちらを見ているようであつた。

目印だと云われた黒いベレーをかぶっているの、九条に間違いないと思ひ、矢部は少し緊張して近寄つていった。

「九条さんでいらっしやいますか——？」  
「そうです」

「私、矢部でございます。大角部長から申しつかつてまいりました」

「ああ、どうも御苦労でした」

矢部は丁寧に頭を下げたが、九条は一寸帽子に手をやっただけで、吟味するように、おくられてきた貸し男を、見上げ見下した。

九条は、この一見平凡そうな色の黒い三十

男の身体を想像した。瘠せているが、肉は固そうである。真面目にみえる額の広い貌も悪くない。九条は満足して歩きだした。

矢部はあわてて後に従つた。

九条は、合ゴートのポケットに両手をつつこんだまま、広場をぬけて一軒のレストランにはいった。

席につくと、矢部は鞆をゴソゴソ開けて、ハトロンの封筒をとりだした。

「これ、おわたししておきます。部長から預つてまりました。」

「あ、そう——」

九条は受けとると、重さを計るようになつてから、無造作にポケットへ押しこんだ。

かつては身分の高かつたときいているせいか、九条の白い貌には、何かおかしい感じが漂っているようで、矢部は、小さくなつてかしまつていた。

コーヒーとチキンライスが運ばれてきた。「君。食事をしたまえ。僕はすましてきたから、コーヒーをもらうよ」

九条は、コーヒーを一口啜ると、思ひだしたように、さっきの封書をだし封を切つた。『この封書を持参した男が、貴方の餌食になる男です。演出効果をだすために、貴方のことは、さる高貴の出だと云つてあります。用件としては、書類を直接わたすことしか云つてありません。彼はまだ何も感づいてはいな



い筈です。しかし、貴方の言葉には絶対反けない立場にある男です。ごゆっくりとお慰みください』

後は全部白紙で、いかにも重要な書類らしく部厚にするために入れてあるだけだ。

「高貴の出云々」の処で、九条は思わず苦笑した。

眼の前の矢部は、神妙にスプーンを動かしている。

（かわいそうに、この男はまだ何も知らないのだ）

そう思うと、九条のサディズムは、擦られるように疼いた。

レストランをでると、九条はタクシーを拾った。

ネオンが流れ、宵の街のざわめきが車窓に反響する。

「なかなか活気のある市ですね」

「そう、一応工業都市だからね」

まもなく、市の中心を外れたのか、ネオンの類がまばらになった。

「君ね。大角さんから、何か云われてきたかね？」

「はア、九条さんの云われることは、自分の命令だと思っできくようにと、くれぐれも云われてきました」

「そう。それがわかっていればいい——」

九条は、口の端で一瞬笑ったようである。

窓の外は、外燈も絶えて、暗い住宅地を走っていた。

そのとき、はじめて矢部の胸には不安が兆した。

九条は、それきり口をきかない。

やがて、自動車は門がまえの家の前に止った。

「君。少し顔色がよくないようだね」

九条が、門燈の明りで透して見ながら云った。

「いいえ」

矢部は、無礼を咎められでもしたように恐縮し、二階建の建物をふり仰いだ。穢い三畳を借りている彼の眼には、それが大邸宅の如く映ったのである。

### 三

矢部は、いきなり二階の寝室へ連れていかれた。

「妙な処へ連れて来たが、心配しなくっていいんだよ」

「はア」

「君。もう一度念をおすがね、僕の云うことは、本当に大角さんの命令だと思って、何ンでもきくんだネ」

「はい」

「じゃ、もし切腹しろと云ったら？」

「えッ？……は、はア、でも——！」

「ハッハハハ……冗談サ。まさか、そんなことをさせやしない」

「はア……」

擲擲されたのだと判っても、矢部の胸はドキドキしていた。

（この人は、何を考えているんだろう？）

そう思うと、気味が悪い。それに、調度の揃った、新築間もないらしい部屋が矢部をおちつかなくしていた。彼は、どんなことでもいい、いっそ早く命じてくれたらと願った。

九条は戸棚からウイスキーの壺をだすと、

サイド・テーブルの水差しをとってコップにつき、その中へ壺の口をかたげた。

「君にも、一仕事すんだらあげるよ」

「はい。有難うございます」

酒好きの矢部は、つい嬉しそうな声をだしてしまった。

「僕はね。まず、君の身体が見たいんだ」

「はい。では、裸になります」

「ヒーターをつけてもいいが、君は平気なんだろ。海軍じゃ、そうとうヤキを入れたって云うから——」

「はア、寒中でも、真ッ裸にされて、水に浸けられたりしました」

「それは頼もしいね。じゃ、ひとの面前で裸になるのなんか、なんでもないわけだ」

「はア、いいえ、でも、初めての方の前では……」



「僕の前では恥かしい？」

「は、はア……」

矢部は、ズボンを脱ぐと、ついでに靴下を脱った。彼を今まで命令で強制的にした相手は、階級的に上位であり、そのための権力を持っていた。そして、いずれも年長者であった。なるほど九条は金もあるらしいし、良家の子弟だから、矢部などより確かに優越した地位にいる。それに大角を通じての、一種の不思議な権力も握っていた。しかし、九条は、見たところ矢部よりは年下である。また、今までの男達にはなかった、白い手と、華奢な軀つきと、上品さとをそなえていた。

矢部は、妙なとまどいを感じた。海軍の上官や大角部長の場合は、外見の荒々しさだけからも強者の圧迫感におされて、むしろ楽々と被虐者の立場に入っていたが、九条となると、何か複雑な感情が邪魔をするのである。矢部は、九条の眼に、自分の姿を曝すことに苦痛を覚えた。

矢部の軀には、すでに

衣服が残りすくなである。

「君は、自分をマゾヒストだと思っているかね？」

九条は、ベッドの端に腰かけて、衣服をぬいでいく矢部から眼を離さずにきいた。

「さあ、深く考えてみたことはありませんが——」

いよいよ、後はパンツだけになった。

九条の眼が光った。

躊躇はゆるされない。矢部は観念してパンツを脱ぎすてた。

立ちあがった九条が、そばへ寄った。

「君は、宗全にマゾヒストだ！ハハハ、正直なものだよ。軀がチヤンと証明している」

そうあからさまに指摘されると、矢部は、面映ゆさに顔が赤くなった。

「しかし、僕も安心したよ。大角さんは、君のことを、マゾ男だなんていつてきてるが、彼はなかなかのサディストだからね。自分の地位を利用して、君を自由にしているんじゃないかと、実は疑ってましたよ。もしそうだとすると、大角さんと君との間は別として、いわば第三者的な僕が、いくら大角さんの好意で借りた君でも、虐待するのはホ、一寸気が咎めるからナ。ヨウシ。もう君がマゾだと判った以上、容赦はしないゾ。覚悟はいいかい——」

「ハイ、もうこうなったら仕方ありません。そんなふうにしてください……」

習性(?)とはおそろしいもので、矢部の尻は、打たれぬ先から、カッカッと火照ってきた。部長と九条の間に、こんな約束ができていたとは、うかつにも今





の今まで気づかなかったが、考えてみれば、あまりにも当然すぎることであった。矢部は、知らない家で、知らない人の前で、真ッ裸にされている自分が、このうえなくみじめに思えた。そして、そう思えば思うほど、妖しい期待が身体中を駆け回るのだ。

九条は、矢部がマゾヒストである証拠を見て、確かに安心もしたが、一方では多少落胆もしていたのである。彼は、ノーマルな人間を責めの対象にするのは気が咎めると云ったが、本当は、その罪悪感を心のどこかで求めているのかもしれない。

九条がラジオのスイッチを入れると、狂ったようなドラムが鳴りだした。

矢部の両手が縛られる。

「サア、ヒイヒイ云うまで打ってやるぞ！」

脚をしっかりとふんばれ

ピシリッ！と、意外に高い音が響き、矢部の臀筋が反射的に収縮した。

「痛ッ！」

矢部は、思わず知らず、二、三步前へよろめいた。大角の精神棒よりは、ずっと鋭い痛みが、皮膚を裂いたかと思えた。

九条の手に握られているのは、細い竹の筥である。

矢部が怯えたように筥を見た。

「たった一打ちぐらいでヨロヨロするな」

九条は、矢部の縄尻を取ってグイと引き戻

すと、ピシッ、ピシッ、と続けざまに乱打を浴びせた。

たちまち、尻全体が、焼火箸で焼かれるような痛みにも包まれ、矢部は、歯を喰いしばって呻いた。

苦痛に歪んだ顔は、脂汗にまみれてテラテラ濡れ、泣いているように見える。齒の間を洩れる呻きは、ラジオの音に消されて、他の部屋へは聞えない。マンボのリズムが高潮してくると、それにつれて、筥の唸りも熱をおび、九条の瞳は動物的に血走ってきた。

ジャズ放送が終ると、九条ははじめて筥を休めた。

「そうだ。約束のものを飲ましてやろう。オイ、そこへ坐れ」

「はい」

縄つきのまま、床の上に坐った矢部は、カラカラに乾いた咽喉へ、ストレートのウイスキーを流し込んでもらおうと、身顛いするように叫んだ。

「私は、もう、どんなめにあっても、かまいません！貴方のためなら、このままの姿で、表通りを引き回されても、いいと思います……」

「フフ、その言葉をきいて、僕も嬉しいよ」

そう云って、笑った九条の貌は、ただでさえ蒼白な面が、螢光灯に隈どられて、さながら凄鬼のように見えたのである。

どこかの部屋で、時計が十二時を打った。それを合図のように、九条は矢部の身体から離れると、

「十二時だ。もう赦してやろう。オイ、立ちたまえ——」

と云って、身づくろいを直した。

「ハイ……」

と答えたが、矢部は、すぐには立ちあがれない。芋虫のように跪いていると、九条に助けられて、やっと上体を起した。そうして、蹠踵と立ちあがった姿は、まるでボロ屑のようになっっていた。

「大分汚れたナ——ヨシ。風呂へ入れてやろう。だが、自由に入るわけにはいかんぞ。縄もそのままだ。サア、こっちへ来なさい」

九条に縄尻を取られて、矢部は階段を下り浴室に連れてゆかれた。

家人はもう寝静まっているのであろう。家の中はシインとして、物音一つしない。

九条は、ズボンの裾を捲ると、矢部をタイルの流しに転がし、湯を汲んでは、ザアザアと浴びせた。それから、柄のついたタワシとクレンザーを持って来ると、土管でも洗うようにゴシゴシとこする。筥の痕も容赦をしない。矢部は、痛さに顔をしかめながら、ゴロゴロと回された。それがすむと、浴槽へほうり込まれる。脹れた皮膚に湯がしみて、無数



の針で刺されるようだ。

「痛い……」と出かかった声は、頭をグイと湯の中へつつ込まれ、途中でブクブクという泡に変わった。アカの浮いた湯をしたたかに飲まされた矢部は、やっと引きずりあげられると、濡れた軀のまま、いきなり庭へ連れだされた。もう冬を思わせるような夜の風が、矢部の全身から、急速に体温を奪ってゆく。湯に浸けられていた時間は短かったから、軀はたちまち冷えてきて、ブルブルと顫えが止まらない。

九条は、矢部を立木に繋ぐと、  
「乾くまで、そうしていたまえ、僕はその間に風呂へ入ってくる」

と云いすてて、浴室へ戻っていった。  
矢部の腕は、とうに痺れて、感覚が無くなっている。空を仰ぐと、満天の星が、此の世のものならぬ美しきで煌いていた。彼は、不意に激しい屈辱感に襲われ、泣きだしたい衝動に駆られた。そうして、わけのわからない激情が、あとからあとから胸に迫ってくる。とうとう、子供のように、しやくりあげてしまっていた。

#### 四

翌朝。

九条は、濃いコーヒーをいれると、矢部にもすすめて、

「君。やっぱり顔色がよくないね。昨夜のやつがこたえたかな。まだ痛む?……」

「はア。いいえ。大したことは——」

「大角さんは、君を、なにわで帰せばいいと云うがね——」

「はい。私も、そう云われてまいりました」

「ウン。しかし、残念だが、急用ができてね。」

「そういうわけにはいかなかったんだ」

「そうですか……」

今日は、一日、どんな虐待にあわされるかと半ばは恐れ、半ばは期待していた矢部は、複雑な気持ちで、九条を見た。

「でも、大丈夫でしょうか……?」

「なにが?」

「いえ、部長に、私が叱られますようなことは——」

「ハハハ、そのことか。ナニ、心配いらないよ。僕が、わけを手紙に書いてあげるから、それを持っていけばいい。君が逃げだしたんじゃない。僕の都合でそうなったと判れば、いくら大角さんでも怒りやしないだろ」

「はい」

「そんなに、大角さんが恐いかな」

「ハ、ハア、それはもう……」

九条は立ちあがると、コートに手を通しながら、

「フフ……、さて、じゃ駅まで送ろう。今からいって、乗れるやつで帰ればいいだろ」

「はい。でも、もう送ってなぞいただかなくても大丈夫です。そんなにしていただいては——」

「イヤ。君のためじやない。大角さんからの借り物だ。無事に返さなくちや、責任があるからな」

「はア……」

「ああ、そうそう、手紙を書いてあげるんだっけ——」

九条は、手帳をだすと、なにか二、三行認め、ピリッとさいて二つに折った。

駅へつくと、九条は、何か思いついたように、矢部をふりかえった。

「一寸、こっちへ従ってきたまえ……」

「はい——」

矢部が、不審に思いながら従っていくと、九条は、男子便所の処で立ち止った。

「いいかね。一番奥の大便所へはいって、待っているんだ」

「はア、でも——」

「はいればいいんだ! 扉は開くようにしておくんだよ」

「ハイ……」

矢部は、大角の命令を思いだした。九条の云うことには、いっさい逆つてはならないのだ。矢部は、急いで従順さを媚びるように、大便所のほうへ歩いていった。



東海道線の主要駅の中では、穢いので有名な此の駅の便所は、勿論水洗ではない。扉を開けると、異臭が鼻につき、コンクリートの床は、掃除のとき水を使いすぎたとみえ、ビタビタに濡れている。

扉を閉めたが、矢部は、排便が目的ではないから、しかたなく、そのまま立ちつくしていた。

そうして、十分も経ったかと思われる頃、扉が開き、素早く九条がはいって来た。

「使用中」の鍵をかけると、九条は薄笑いを浮かべながら、

「オイ、服をぬぐんだ」

と小声で囁いた。

矢部は、肯いて先ずレイン・コートを脱ぎ、荷物置の棚へのせたが、棚が小さいので、ズルズルと滑り落ちたコートは、たちまち、水浸しの床へひろがってしまった。

その瞬間、矢部の被虐感急速に昂まり、一刻も早く、床の水溜はおろか、糞壺の中へさえ蹴落されたいと願った。矢部は、ワナワナと戦きながら、ひきちぎるように釦をはずし、靴も捨て、最後にパンツを脱ると、脱いだものを片隅に寄せ、仕置を待つように、床の上へじかに坐った。冷たさが、ソクソクと軀へ滲み透ってくるが、血管という血管は充血して、ドキドキと脈うっていた。

狭い床へ、やっとはまりこむようにして、

膝を折っている矢部を、心地よげに見下していた九条は、不意に荒々しい動作で矢部を搦じ伏せた。

矢部の頭部は、半ば糞壺の中へ落ちかかりハッハッと喘いだ。

九条の靴が、容赦なく、裸の肌を責めたてる。落とされまいとして必死で軀を支えながら、矢部の脳の中には、暗い糞壺へ落下していく自分の姿がハッキリと見えていた。

改札口を出てゆく矢部のレインコートが、ところどころひどく濡れてしみになっているのを、シロシロと見ていく人があった。

九条は、やや猫背の矢部の後姿に、フト憐憫の情を覚えた。そして、それは、快い酩酊となって、九条の全身を流れていったのである。

二、三日すると、九条令一は、大角勇作からの書簡を受けとった。

「——矢部をお気に入ったようでなによりです。逐一彼の報告で、様子は知りました。なお詳しい御報告をいただければ幸いです。只貴方の御都合で、早く帰しておしまいたったのは、一寸残念でした。私は彼の報告を聞きおわると、すぐに彼を裸にして検べてみました。彼の軀には、大した傷痕もみあたりませんでした。貴方の責めは、少し手ぬるか

ったものではありませんか。そのかりに、私がある場で、尻に幾条かの傷痕をつけてやりました。ともかく、今度のことでは、私も色々の意味で満足しました。又近く機会をつくってお貸ししましょう。次回には、歴然たる証拠をつけて、もっと私を喜ばしてください。では、お手紙をお待ちします」

数日して、大角勇作は九条令一の書いた次のような返事を入手した。

「——矢部の件につき種々と御配慮を頂き忝く感謝いたします。もっとも貴方に於ても今回の拳に関しては、それはそれなりに或る種の満足を御得ておられることは、貴翰によっても承知されるのですが、それにしても矢部の如きマゾ男を派遣されたことは、何物にも換えがたい贈物だったと思います。尚、小生の彼に対する責めが、いささか手ぬるかたではないかということですが、或は最初のことでもあり小生も無意識的に手加減していたということはありません。次回は是非、小生の本領を発揮して猛烈な折檻を与え、貴方に対しての証拠も、はっきり彼の肉体に残してやることにしましょう。出来るだけ早く、そういう機会のあることを切望して待つております。」



## 映画ストーリー

## 「嵐の中の花」

(続篇)

浦田紀夫

## 前回の梗概

宇宙物理学者、中原弘樹青年(二五)の研究を狙うA国諜報機関の陰謀に、弘樹の恋人で高校物理学教師の山水志津子令嬢(二四)弘樹の妹の純子と志津子の教え子、川瀬晴美(一八)純子の友達の学生映画スター、香山葉子(一九)の四人は、力を合せて弘樹を守ろうとする。しかしA国諜報機関は、次々この四人の美しい令嬢達を誘拐し、残酷極まる拷問を繰り返した。

四人は、苦痛と恐怖に耐えて弘樹を守ろうとしたが、純子は三人の友達の悲惨な運命に忍びず、遂に絶望の自白をしてしまう。

五時間後、弘樹は諜報員達に捕えられ、嚴重な縛しめの姿で箱詰めになされて、穴倉に監禁されていた。

## 箱の中――

鉄鎖で緊縛され、手錠、足錠を嵌められ眼かくし防声具をかけられたまま、弘樹はときどき体をビクリと震わせる。微かな呻き……

## 弘樹の声で――

「残念だ。とうとうやられた。これからどんな目に逢わされるんだろう。志津子さん……貴女はどうしてる？ もしかしたら僕のようには？ 四日前から便りがないが、ひょっとしたら……？ 大丈夫かい、どうして奴等

は僕の居処をつきとめたんだろう？ 純ちゃん、君は？ ああ苦しい……息がつかない……手足がちぎれそうに痛む……くやし……苦しい……」

「ウウッ、ウウ、ウウウ……」

穴倉の扉が開く。諜報員達。かつぎ出される箱

眼かくし、猿ぐつわだけは外され、くやしげに歯を喰いしぼったまま、両手両脚を縛られて跪かされている弘樹。若々しい美少年と違った方がよいぐらいハンサムな顔は青ざめキチンと分けた髪がやや乱れて額にかかっている。



「云わないんだな、よしっ」

縛られたまま再び猿ぐつわをされ、逆吊りに太いロープを吊り下げられる弘樹青年。それも、ただの逆吊りではない。後手の両手をグイとロープで足首につながれて、エビのようにのけぞらされている。淡オレンジとダークグレイのネクタイが垂れ下る。  
「ウウウックック、ウ、ウエーッ……」

鞭――

弘樹の声「云うもんか。苦しいっーいや  
いっちやならない、いうもんか。志津子  
さん、貴女は？……」

悶絶する弘樹。

抱き下され注封で蘇生させられる弘樹。  
しかし、すぐまた転がされ、蹴られ踏みに  
じられ打たれる。

服が脱がされた。もがく弘樹。

純白のカッターシャツとネクタイだけ、腰  
から下はパンツまで剥がされて、ピンクに  
水色のガーター、グレイの地に白と赤のラ  
インのナイロン靴下と黒短靴だけの姿で、  
手足を縛り上げられる。

何という屈辱！ 鉄柱に縛りつけられて  
身動き一つ出来ぬ弘樹。

蒼白な顔が、くやしげに歪む。どうする  
ことも出来ないのだ。

「歩けっ！」

手錠と麻のロープで、後手に縛られた捕

崩の美青年の背に、鞭がピシリと鳴る。

弘樹の美しい理智的な眼から、流石にくやし  
涙が溢れて、ポロリと頬を伝って落ちる。

余りの惨じめさ。

「今から、いい人に逢してやるぞ」  
絶望的な弘樹の眼





次の室へ曳き立てられる。

「弘樹さん——」

かすれたような痛ましい叫び。そのまま、

「ワアッ」とほとぼしる喚き。

「アアッ、アアッ、ウウアーン、エーン、

エエエーン、く、くやしい！ あな、た、だ

けは……ウアーン、ウエーン……」

猿ぐつわを嵌められたまま見詰める弘樹の



前で、スーツの両肩を脱がされ、白桃のよう

な乳房も露わに柱に縛られた恋人の志津子は

子供のよう泣きじやくり身もだえして「弘

樹さん……」と一声、蒼白な顔を伏せる。気

を失ったのだ。

立たされ鞭打たれる弘樹。

弘樹の前でストッキングだけの裸にされ、

木の台に手足を縛られる志津子。胸が絶望的

に大きく波打つ。

「それでも云わぬつもりかっ！」

弘樹の顔は歪み、わなわたと震える。血の

気を失った頬を引きつらせ。

「志津子さん……僕……」

「弘樹さん……いけないわ。云っちゃいけな

い。私……どうなっても……云っちゃいやよ

っ」

猿ぐつわが忽ち二人の口を塞いだ。

「生意気な、ええっ」

鞭に打ちのめされる弘樹。猿ぐつわ

の下で「ヒイーツ」と志津子の痛まし

い悲鳴。志津子と弘樹は、ついに気を

失ってしまった。

「どうしても云わぬか」

絨毯を敷きつめた豪華な一室。

首領と覚しいA国人が、三人の諜報

員と密議している。

「そうです。今までの四人の女より、

もっと手剛いです」

「と、すればすな。別の方法……つ

まり、宇宙線研究所の中原の協力員を

捕えること。もう一つは、奴の恋人の

他に捕えてある三人の娘を、もっと利

用すること。これは見込みが薄いです

がね。それで駄目なら、中原を直接A

国に送って気長に痛めつける以外にあ



りませんね」

「中原の協力員は誰かね？」

「それは今、三人の女を拷問しています。奴等じや、知らないかとも思いましたが、どうもよくたたけばホコリが出そうです」

拷問を続けられる川瀬晴美と香山葉子。

「知らないわ……私、ウウッ、本当に知らないのよ……ウエーン、本当よ……許して……」

ヘッブバーンの若々しい美少女は、紺のジャケット、白いカラー、紺のブリーツ・スカートに黒のストッキングの女学生の制服のまま、泣きじやくる。

大きな黒目がちの瞳。長い睫毛は涙にグシヨ濡れ、まだあどけなさを残した頬は、微かに震える。

「よしっ、もう一ぺん、この小娘を裸にしろ」

か弱い美少女の肉体を、悪魔の爪が引き裂こうとしたとき、

「待って……私、いうわ……晴美さんを……だから許してあげてよ……」

同じく惨じめに縛られた葉子だった。

この美少女のスターは、白の長手套の両手を前で重ねてしっかりと縛られ、口に金属パイプを嚙を革ベルトで固く嵌められ、パイプについた革紐で顔をのけぞらせて、ハイヒールの爪先立ちで天井へと吊られているのだった。

猿ぐつわに発声も不自由なまま、やっこのことでそれだけを、かすれた声でうめくように漏す。

「云うか」

「ええ、でも名前だけよ。名前しか知らないわ」

葉子の声で——（そうよ、名前だけなんだ名前くらいなら……）

「深見千恵子さんっていうんです」

穴倉——

水、水だ。ヒタヒタと胸許の高さまで浸してる水。

水の中に仄かに浮び上る白い影。

純子だ。頭から頬、口までスッポリと被せられ、固く尾錠で締めつけてる革製の猿ぐつわ。

革の拘束具が——前に純子が着せられたような全身のものではないが、腹部をピッタリと締めつけ、白く膨れ上った双つの乳房に深く溢れる程喰い入っている革紐の縛しめ。

ふくら脛まで固く締めつけている革の拘束ブーツ。

二の腕まで痺れるほどに喰い入っている革手套。そして後手の縛しめ。

水をタツプリ吸った革は、ますますギュッと締って呼吸も止まり、内臓までも口から飛び出しそうな苦しさ。

柱に縛られて水漬けされている令嬢は、もう泣く気力もなかった。秋の水は凍るように冷い。骨までが凍え切ってしまった。

天井の鉄板がギイーツと開く。だが純子はもうそれを見上げる力もない。

運び出されたズブ濡れのお嬢さんの前に投げ出された肉塊。——惨しい縛しめのまま気絶した兄の弘樹の捕われの姿。（兄さん、許して——）

純子は裸に剥がれ、責め立てられる。

（もう駄目、みんな駄目だわ——）

一たん自白した屈辱感は、続く拷問にもう立直る余裕もなかった。

「いいいます。それは三十三才になる独身の方です。××××に住んでいます。妹さんと二人きりです……」

吉祥寺の深見女史宅に、その夜四人の客が訪れた。

林に囲まれた瀟洒な家——呼鈴——ピストル。

「何をなさいますの？ 私を誘拐するおつもり？ でしたら、女には女らしく身なりだけはととのえさせて下さいね」

三十三才——大柄な髪を裾で軽くウェーブし眼鏡をかけた、年にしてはあどけなさすぎるくらいなお嬢さんの科学者は、落着いていた。中原弘樹青年の失踪は、さすがに彼女に不吉な予感と覚悟を与えていたのだ。



薄化粧して質素な薄茶のスーツ、タイト・スカートに、ウーリー・ナイロンのストッキング水色のヘップ・シューズを穿く。

手錠——縄——

「アッ、澄ちやん……やめて、澄ちやんには何の関係もないじゃないの……ウ、ウッ」

猿ぐつわ。

同じく大柄にもう成熟した妹の女子高校生澄子が、眼に一ぱい涙を堪え乍ら縛り上げられる。紺のセーラ、ブリーツ・スカートに黒のナイロン・ストッキング、ロウヒール姿で「そのベレーだけ冠せて——」乙女の誇りを保とうと、姉に励まされて、やっとのことにかすれる声。水色のベレー帽を冠り、猿ぐつわを噛まされる。

諜報機関本拠の密室。

志津子達が拷問されたと同じ室で、柱に縛りつけられている婦人科学者、深見千恵子女史の眼前で、ナイロン・シューズ一つにされた妹、澄子が責め苛まれて泣きじやくる。

若々しい大柄な肉体が、雁字搦めに縛られて——白桃のように固い乳房が、肉附のよい腿が、可愛い鼻が弄れる。

妹の澄子が気絶し、姉の眼から引き離され運び出されてから、今度は千恵子女史の番だった。激しい抵抗に、スーツが破れ、ブラウス、シューズが引きちぎられ、スカートが

剥ぎとられる。

オールドミス、のぼつてりと脂ぎった白い肌。「聖処女」と同僚にニックネームを囁かれる程、純情で、両親は失ったが良家の令嬢として育っただけに、あどけなさを保っている美しい若々しい顔。裸に剥がれて鞭、鞭、鞭。吊り上げられ、逆吊りにされ、エビ責め、ホースで鼻から水責め、煙草の火責め。

薄いナイロン・フルフアッシュヨンの靴下が処々切れ、シーム・ライン（後の縫線）は歪み、ずり下り、白大理石の肌のいたるところに血が滲み、腫れ上る。

「千恵子、お前が白状しなきゃ、澄子なんか用のない娘なんだから、あっさり死刑にしてしまうことになっているんだ。まあ、妹の形見だけでも身につけて、ゆっくり名残を惜んでろ」

グッタリとなった女史の体に、引きちぎられた洋服の代りに、大柄な妹の女学生の制服が着せられた。

セーラースカート、黒ナイロン・ストッキング・ロウヒール、ベレー帽。

女学生でも似つかわしい、このお嬢さんの科学者は、後手の縛しめのまま穴倉へ監禁されるために曳き立てられる。

「ウ、ウ、ウ……」

二人はジッと眼と眼を見合わせた。（中原

さん——）（深見さん——）

それは互に絶望の、しかも思いも寄らぬ姿での邂逅だった。

諜報員の「せめてものお情」で、長身の恋人志津子のスーツ、スカート、ブラウス、ストッキング、ハイヒール、ベレー、白手袋までつけさせられ女装させられた美青年、中原弘樹君と、セーラー服、黒靴下の女学生姿の深見千恵子女史の二人。

二人は鉄柱に背中合せに縛りつけられた。「山水志津子、中原純子、香子葉子、川瀬晴美、深見澄子。右五名は死刑に処す」

葉子がよろめいた。どうして工面したのか揃ってセーラ服の女子高校の制服姿で、後手に縛られ猿ぐつわを噛まされ両脚も縛られてやっとのことで立たされてる五人の令嬢達。

志津子と葉子は黒ストッキング。純子と晴美は白のソックス、澄子はナイロン・ストッキングを穿き、いずれも赤いロウヒールにピノクのベレー帽を冠せられていた。

「ただし、死刑といっても命を奪うのではない。日本人の女学生として〇〇方面へ売り飛ばす。女学生としての方が値が良からな」最早、逃れる術はなかった。

（中略）

ここで晴美のクラスメート達、つまり志津子の教え子の高校生達が登場する。即ち、石本光夫、菅沼俊彦、矢野久美子、荒井淑子等



である。しかし、彼等の必死の努力も遂に及ばない。山水先生等の行方は杳としてわからない。

だが、幸運は彼等を見捨てなかった。

冬も近い或日、伊豆方面へ旅行した四人の友達は夕方、道に迷い、先ず久美子と淑子とある山小屋に辿りつく。小屋の隅に積み重ねた箱の中から、うめき声や泣き声が漏れている。気丈な淑子が久美子を励まして、遂に箱をこじ開ける。

黒いふさふさとした髪、セーラー。ギッシ

### 奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに二十八号を数えましたが、現在既刊の中左記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。尚、各月号の目次は、最近号の表紙裏、目次裏に掲げてありますから御参照下さい。

#### ★復刊号の分

復刊第1号（昭和30年10月号）〈売切〉  
復刊第2号（昭和30年11月号）〈売切〉

リと縄で縛り上げられた体を折り曲げ、猿ぐつわを固く噛まされた顔を、黒ストッキングをピッタリ穿いた太腿に押しつけて、グッタリとなっている少女——。慌てて助け出す二人。猿ぐつわを外して顔を覗き込んだ途端、「先生！」「山水先生だわ！」

そこへ戻って来る監視の男二人。

赤、グリーン、白のタータンチェックのボックス・スーツに、同じボックス・プリーツのスカート、ナイロン、ストッキングに赤い中ヒール、赤いベレーにヘップバーンカット

の派手な姿の淑子。

この二人の活潑なお嬢さんも、かわいそうに忽ち後手に縛り上げられ、両脚も縛られ猿ぐつわを嵌められてしまう。

しかしそのとき、諜報員等の後から音もなく素早く駆け込んだ二人の青年——石本と菅沼の棍棒が二人の男の後頭部へ……

こうして中原弘樹君、山水志津子さんをはじめ六人の捕われの男女は、T国船に沖合で積み込まれる一歩前を奇蹟的に救出された。

（完）

復刊第3号	（昭和31年4月号）	定価二百円
復刊第4号	（昭和31年5月号）	定価二百円
復刊第5号	（昭和31年6月号）	定価二百円
復刊第6号	（昭和31年7月号）	〈売切〉
復刊第7号	（昭和31年8月号）	〈売切〉
復刊第8号	（昭和31年9月号）	定価二百円
復刊第9号	（昭和31年10月号）	〈売切〉
復刊第10号	（昭和31年12月号）	定価二百円
復刊第11号	（昭和32年1月号）	定価二百円
復刊第12号	（昭和32年2月号）	定価二百円
復刊第13号	（昭和32年3月号）	定価二百円
復刊第14号	（昭和32年4月号）	定価二百円
復刊第15号	（昭和32年6月号）	定価二百円
復刊第16号	（昭和32年7月号）	定価二百円
復刊第17号	（昭和32年8月号）	定価二百円
復刊第18号	（昭和32年9月号）	定価二百円

復刊第19号	（昭和32年10月号）	定価二百円
復刊第20号	（昭和32年11月号）	定価二百円
復刊第21号	（昭和32年12月号）	定価二百円
復刊第22号	（昭和33年1月号）	定価二百円
復刊第23号	（臨時増刊号）	定価二百円
復刊第24号	（昭和33年2月号）	定価二百円
復刊第25号	（昭和33年3月号）	定価二百円
復刊第26号	（昭和33年4月号）	定価二百円
復刊第27号	（昭和33年5月号）	定価二百円

#### 〔代理部だより〕

○本誌復刊号は全部送料は当方にて負担いたします故、誌代のみお送り下さい。六冊以上一緒にお求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一括してお求めの方にはキヤビネ版写真三枚贈呈いたします。

○休刊前の本誌は全部売切れてしまいました。今後の補充はつきかねます故、御諒承願います。



Das Grausame Weib

Dr. Yohannes R. Birlinger.

# ▽ 殘虐なる女性達 ▽

—1901年刊行の独文絵入単行本より—

森 本 愛 造・訳

カンダアル・エ・バルテ公<sup>(1)</sup>の妾であつたグヴィエ侯夫人<sup>(2)</sup>の書翰にも同様の残忍さが見出される。彼女は多数の兵士による一六六六年の掠奪事件について次の様に報せている。私は死にそうな程疲労していましたが、この期間中、よく頑張つたものだと思つています。彼等は恐らく今週中に首をくくられるでしょう。

此の書翰を提供した蒐集者の資料の中には一六八五年四月二十二日付のコリニイ夫人<sup>(3)</sup>の書翰もある。曰く、

「この国（訳者註『土耳其？』）の宮内大臣と仲が悪かつた或る貴族は、些細な職務上の意見の相違で職を辞さざるを得なくなりまして、彼は三日間自室に閉じ籠つていた末、短刀で自殺を計りました。けれども発見されて逆吊りの刑に十分耐え得る様に手当をうけさせられました。」と。

当時の土耳其駐在英國大使の妻メアリ・ウオートリイ・モンテ・ニユ夫人<sup>(4)</sup>も率直且明快に土耳其の刑事裁判の実態を述べている。私にとって、ずい分恥かしい事ではあります。私は土耳其で、我國よりも法律が厳正に実施されていることに驚嘆の念を持っています。特に宣誓し乍ら嘘を吐いたものについては、鉄を灼いて額に烙印を捺すのです。

下層階級の出身者であつた、エンマ・ハミルトン夫人<sup>(4)</sup>について、私達は多くの資料を

以つて、彼女の残酷性を証明することが出来る。エンマは、ナポリ女皇を助けて、無数の人々の生命、肉体、自由を奪ひ、彼女の愛人であつた勇将ネルソン提督<sup>(5)</sup>が、皇子カラツチオロ<sup>(6)</sup>を絞首した時には、皇子の身体が吊り下げられている帆桁のすぐ下まで小舟を近づけて観覧したと云う。ネルソン提督は隣接した艦上から処刑を見たのである。其の後一七九八年六月三〇日付でネルソンに宛てにエソマの手紙の中で、彼女はこう書いています。ジャコバン共は四年の間獄屋につながれて遂に釈放されてしまいました。私は、彼等をもっと早く絞首してしまふべきだと思つております。

ルキ十四世<sup>(7)</sup>の皇弟妃リゼロット・ド・ブアルツ<sup>(8)</sup>は、そのドイツ的な良心によつて高名であるが、彼女も亦、子供の教育に厳格さを常に要求したばかりでなく、反逆其の他で刑をうけるべき知己達の請いをいれたり、王に進言して軽減させる様なことは一切しなかつたし、又、次代のフランスの王となつた彼女の息子にさえ、一言の恩赦の要請をした事もなかつた。彼女は常に口にしていた様に、フランスの悪人を一人でも生かしておきたくなかつたのであつた。彼女が、想像を絶する残忍な方法で処刑された人々の事を手紙に書く時そこには一片の同情さえ見出せないのである。ハンノフェル<sup>(9)</sup>選挙侯の妻ゾフィー<sup>(10)</sup>に宛て



一六九九年二月八日に書いた書翰の中で、彼女は次の様に記しているのである。

「一人の料理人が、軍籍に在った彼の主人を暗殺した科で車裂きの刑に処せられました。つづいて、もう一人の男が車裂きに遭いましたが、この男も或る酒保の女商人の許で働いて居乍ら、彼女を殺した罪に問われたのでした。この男は、最初に料理人が処刑される時に、付き添いの役人に、自分の目かくしを外してくれと頼みました。役人がその理由をききますと、「あの料理人は泣くときひどい顔をするときいていますので、一度見ておきたいのです。」と答えたのだそうです。そうしてこの男は料理人が苦しみ叫ぶのを笑い乍ら見ていました。」

彼女の書翰には、こうした冷酷とも思われる記述が決して稀ではない。そして我々はこの様な多くの記録や記事、書翰等によって、この時代の婦人達の素質を推測する事が出来るのである。

最後に、マリア・テレジア女皇<sup>(12)</sup>の刑執行についての幾つかの言葉も興味深いものであるから、ここに紹介しておく。次に示される例は、マリア・テレジア女皇が一般に認められている様な同情心、慈悲心の多い女性であったとする通説を改訂せしむる力を持つているかとも思われる。マリア・テレジア女皇は殆んど例外なく、殺人犯に対する処刑——そ

の多くは身体の下肢よりする車裂きと四分斬殺刑であった。——を免除、又は軽減する為に行動した事はなかったと云われており、彼女は常に、殺人を犯す様な悪者を許すなどという事は、おろそかに考えるべき事ではありません。」と洩らして居たという。幼児を殺した女達に対しては、彼女は必要以上に残酷であつた。一七四三年十月十八日の勅令によつて彼女は従来、通常の斬首刑であつた前記の犯罪者に対し、累犯、又は情状悪質の者に対しては、斬首に先立って、手足を斬り落とし、又は殺された幼児の数だけ灼熱した鉄バサミで身体を切り取る刑を付加したのである。之等の拷問に対するマリア・テレジアの態度は、その時代に拷問が一般に行われており、それが正当であると一般に考えられていたと考へてはならない。第一、プロイセン<sup>(13)</sup>のフリードリヒ大王<sup>(14)</sup>は以前にこの無意味な自白強要の方法を廃止していたし、ヴーキン市<sup>(15)</sup>のゾンネンフェルス教授<sup>(16)</sup>の烈しい拷問反対運動によつて、マリア・テレジア自身その無意味を覺つて居たと解されるからである。ゾンネンフェルス教授は一七六八年、惨虐極まりない裁判や、拷問が図説入りで説明され、その適用を詳しく述べたテレジアナ<sup>(17)</sup>が刊行されたときに、再び熱情を以つて、この反対運動を再開し、健全な理性を持つ人間の理解力に訴えてあらゆる角度から、拷問が

決して眞実を明かにする方法ではない事を力説したのであるが、遂にマリア・テレジアの法典から、拷問を廃棄する事は出来なかったのである。マリア・テレジアにとつて、此の教授の批判が負担になつて来た為に、マリア・テレジアはいとも單純に、教授に法律に対する批判を禁止してしまつた。此の様な啓発的に学者に対する無謀な箴口令の後可成り経つてから、埃太利で拷問が廃止されたのであつた。

〔訳者註〕マリア・テレジアは埃太利の女皇である。その権勢と共に、文化的な抱擁力は埃太利を世界第二の文化国家としての発展を遂げさせた。英国のエリザベス女王<sup>(18)</sup>ヴィクトリア女王<sup>(19)</sup>等と共に、更に露西亞のエカテリナ女王<sup>(20)</sup>と共に、最も高名な女君主の一人である。ビルリッゲル博士の所説がマリア・テレジアの一面を衝いて居るか居ないかは、史家でない訳者の能く断じ得る処でないが、併し一九〇〇年代に至つて、マリア・テレジアの君臨した領土は再び、淫虐性の暗示に富んだ天才的な支配者を生んだ。彼は、やがて一九一六年第一次大戦後、遠く伯林に赴き、一党を率いて独乙を統一した。その範圍は遠くチエコ・スロバキア、イタリア、ハンガリア、ポーランドに至り、埃太利も亦その支配の下に在った。一九三六年彼は全勢力を結集して全歐を支配下に置くべく、フランスをそ



の支配の下に収めた。一方内政的に排猶太政策を採り強制収容所に於いては十二年間に六百万人の猶太人及反国家社会主義者が抹殺された。彼は雄図空しく一九四〇年四月、柏林市内の市街戦の最中に愛人、腹心の部下と共に自邸内で自殺して果てたという。彼の名、即ちアドルフ・ヒットラー<sup>(21)</sup>も亦高度の文化政策の一面、残虐な収容所政策を慣用した。そうして私達の見る事の出来る刊行物だけでも十指に余る記録が、その日常的な拷問、鞭打密殺を伝えているのである。勿論戦勝国側にも亦、多くの実例が得られようが、こうして実証された残忍性への郷愁は、單なる法律の廃止によって打ち切られるべき性質のもてはなかったのである。法は人の作る処のもの神の与えし性に、何等の制約をも本質的に与え得るものではないのである。かくて、マリ・ア・テレシアについてのビルリッゲル博士の所説は、肯定的に蓋然性を以て私達に迫ると共に、博士の考える如くにこの傾向、愛好が、一般的なものでなかったとは、又云い切れないのである。」

全ゆるこれらの発言や見解は、一部無意識に、又一部有意識的に発現する女性の加虐慾望を示しているといえよう。この慾望は勿論見解や発言でなく、刑の執行そのものを見る事によって発散される。この様な一種の好色を伴った慾望の発散は、次に挙げる引例によ

って明らかであろう。マニラ<sup>(22)</sup>に於ける公開鞭打刑についてのヒルデブランド教授<sup>(23)</sup>の記録である。

土曜は、公開鞭打刑の日である。非常に洗練された方法をとっているので絵の様に美しい街角が特に其の為に選ばれて、見物人は前以って、当日刑を受ける者の数を明らかにされる。ここの住民達は、西欧人よりもこうした公開刑についての反感が少い様に見られる。私は出発の近い最後の土曜日にハンブルグ<sup>(24)</sup>出身のある商人の家に夕食に招かれていた。食事の後に当家の部屋付の女中ドロレス<sup>(25)</sup>が、商人の奥さんに今日の午後一杯休暇を頂き度いと申出た。奥さんが何故かと問いたですと、彼女の従兄弟が、その日の午後公開鞭刑をうけるので、一族の者が皆で其を見にゆくのである由を応えた。ところが、この女中ドロレスは従兄弟の処刑の順位をきかなかったたので、従兄弟の番の来るまでずっと刑場に居る心算なのであった。

エレリヒ<sup>(26)</sup>は洪牙利での答刑の実施について次の様に報告している。

「答刑公開は、年の暮の市が終った後の所謂勘定期間中に行われる。洪牙利では、年末に現行犯で捕った盗人に対して、通常の刑事訴訟によらず、年末の市の期間中拘留して、勘定期間に略式手続で大小、各種の鞭答刑を課して釈放する習慣である。公開の日は見物

にとつては一種の祭日である。私は善良で、教養の高い人々の中で、この行事に必らず押しかける人を多数知っている。ペシュト市<sup>(27)</sup>では、公開刑の始まる数時間前から街角の窓という窓は人で一杯である。議事堂前のこの広場には人々の群が恰度、風に揺れる麦畑の様である。人々は、小高い舞台様の台の上で演ぜられる答刑をよりよく觀賞する為に、机、椅子、ソファ、車等の上によじ登る。私は口にするのも恥べきと思うのではあるが忠実な報告として述べるならば、この觀客の約半数は女性なのであった。

（以下次号）

（以下次号）（5月号の分）

- (1) Gustav Nieritz.
- (2) Dresden 独乙の都市
- (3) Heinrich IV > Henri IV.
- (4) Ludwig VIII > Louis VIII.
- (5) Batifol.
- (6) Baron Telmes.
- (7) Ravallac.
- (8) Maria von Medici > Maria di Medici.
- (9) Matguise Sévigné.
- (10) Funk-Brentano.
- (11) Victor Hugo.
- (12) Les Misérables.
- (13) Héctor Berlioz.
- (14) (井清)
- (15) Ruis Blas.



- (16) Rennes de Bretagne.
- (17) Chaulnes.
- (18) Contesse Grignan.
- (19) Garele. (19') Toqueville.
- (20) Johannes Birlinger. 本書の著者
- (21) Capo>Kapo. 囚人の班長・囚人頭
- (22) Dorothea Binz./Elizabeth Mareschal.

- (1) Prince de Candele et Bartet
- (2) Marquise Gouville.
- (3) Coligny
- (4) Mary Wortly Montagne
- (4') Emma Hamilton 映画「美女ありき」のヒロイン。ネルソンの想い者。
- (5) Nelson. 彼は旗艦ミネルヴァ号上より見物したという。

## 臨時増刊号「責小説特集号」大好評発売中！

(表紙色刷、本文中質紙使用) 売切れぬうち即刻お申込を！ 定価一部二百円

「責小説特集号」は主として昭和二十七年度に発行しました本誌の中から悦虐作品として好評を得ました作品二十篇を選び出し全部新しく挿画を描いて再録したものであります。

### 巻頭口絵

- 拷問 (片矢薫・作) 滝れい子画  
吸血女流画家 (岡田咲子・作) 北原純子画  
ある奇術師の恋 (吉丘垣根・作) 滝れい子画  
鬼兵衛刺青異譚 (二俣志津子作) 滝れい子画  
遊女葦水の最期 (片矢薫・作) 北原純子画  
縛られた妻 (早川新二郎・作) 滝れい子画  
巫女屋敷の責絵巻 (岡田咲子作) 滝れい子画  
読切傑作責小説  
拷問 (特高刑事の惨虐行為) 片矢 薫  
賭博 (淫奔マダム狂騒曲) 二俣志津子

- 巫女屋敷の責絵巻  
老いらくの恋異聞  
復讐のドラマ  
鬼兵衛刺青異譚  
吸血女流画家  
ある奇術師の恋  
惨虐戦慄の徴用女工  
遊女葦水の最期  
囚 衣  
奴 隷 妻  
悪魔と口紅  
悪 女  
縛られた妻  
廊の灯影  
M と S  
責 苦  
記 録 係  
赤に憑かれた男
- 岡田 咲子  
榛ノ木 参一  
片矢 薫  
二俣志津子  
岡田 咲子  
吉丘 垣根  
片矢 薫  
片矢 薫  
古川 裕子  
片矢 薫  
桂 牧次郎  
岡田 咲子  
早川新二郎  
片矢 薫  
岡田 咲子  
竹谷 十三  
岡田 咲子  
上村久秀雄

- (6) Caracciolo
- (7) Ludwig XIV=Louis XIV (?) 或は公国の王名か (?)
- (8) Liselotte von pfalz
- (9) Hannover ハノーヴァー市とも云う。
- (10) Sophie
- (11) 誤記、該当なし
- (12) Maria Theresia 奥太利王国の女王
- (13) Preussen<Prosia. プロシヤともいう。独乙北部の帝国にして、第二帝国の根幹であつた。第一次大戦によつて滅亡。
- (14) Friedrich Grss. 武人にして楽人、その文化施策、作曲は今日にも残る。
- (15) Wien. 又はライエツナ、奥太利の首府、第二の巴里と称せられる都。
- (16) Dr. Sonnenfels.
- (17) Theresiana. 不詳マリヤ・テレユシア記とも云うべき法典の一種か？
- (18) Elizabeth. 現女王でなく英国中世の女王
- (19) Victoria. 有名な英国の女傑であり、大英帝国の始祖ともいふべき人。
- (20) Ekatherina>Catherina.
- (21) Adolf Hitler. 有名な、余りにも有名な独乙第三帝国の支配者。奥太利生れ。
- (22) Manila. フイリビンの首府
- (23) Dr. Hirdebrandt.
- (24) Hamburg. 独乙北部の港市、愛徳娼婦によつて有名である。娼家は同市のサン・パナリ地区にあるという。
- (25) Dolores.
- (26) Ellerich.
- (27) Pesth. 後に隣接市ブダを合併してブダペシュト市となる。ハンガリアの首都、風光明媚の都である。



# 美容病院

久留木 栄

## 十一 木村愛子の経験 その十

(美容動物の巻)

○  
会食会の興奮が、まだ醒めやらぬ頃であつた。その夜、河野に案内されて木村愛子が、地下二階の入口に近い例の研究室に落着いたのは……。

河野は木村愛子をいつもの椅子に坐らせると、まだイブニングドレスの正装に身を凝らしている愛子を飽かず眺めた。美しいなあ！と河野は、心から感嘆する。果してこれ以上——どうして美しく出来ようか——とも思う。だが、その喜びより、そう云う女を自由に虐めることの出来る幸福の方が、より大きい、より力強い喜びが殖える。河野は、身も竦むほどの喜びを感じる。愛子は河野副院長の心を、そんな風には思えない。しかし愛子とて、もうこれ以上、美しくならなくても……と云う気は生れてきている。それにも拘らず

心は何かしら勇むのだ。苦しめられる、と判っていても、新しい感覚の陶醉に浸りたい。心のうずきに気をまかせたいと思う。

「木村さん。いよいよ、第二週目ですね。覚悟はできていますか、心配の方はどうです？」

河野副院長は、一応きいてみる。

「勿論、ありますワ。覚悟の方も心配の方も」

愛子はそう答え乍ら、憂いを含んだ目で副院長を眺める。

「じゃ、ポツポツ始めようか」

河野は、まるで他人事のように云う。愛子は、その言葉につられて「さあ、御存分に」と思わず口に出すところだったが、さすがにその言葉だけは押えた。

「お手柔かにお願いします」



「お手柔かにね」

河野は愛子の口真似をしながら、皮肉そうに笑った。

「じゃ、第一目の時と同じように、このプラスチックの猿ぐつわと、縄と裸のうち、どの二つを選ぶかね」

愛子は、目の前に出された道具を見て、試験問題に悩む少女のよう

に考えた。  
「仕方がありません。この方をお願いしますワ」



愛子は、うなだれ乍らそう云った。すると河野副院長は、手を叩いて池田フジを呼びよせた。

「お嬢さんが、これを選ぶそうだ。その方式は、方円流だ」

「ハイ」

池田フジは、さも嬉しそうに返事をした。

「貴方が余り美しいから、損をするのよ」

「ひやかさないでよ」

女二人は、そんな云い馴れた会話をかわし乍ら河野の命令に従った。横で河野副院長と小野茂夫が見ているので、いたたまらなかつたが、どうせ裸にされるに違いないと考え我慢した。

言葉を封じられるより、まだいいと考えたことが、裸を選ばせた原因でもある。自分で両腕を背中に回すと、池田フジが手早く縄をかけた。そのタイミングが余りうまいので、愛子は全く恥しさを忘れ、自由を奪われた身の情なさを忘れるところであった。しかし、その束の間の安堵感は、河野の次の言葉で忽ち打消された。

「次は、これとこれですよ。さあ、どれを選びますか？」

河野は、そう云い乍ら机の上に、プラスチックの猿ぐつわ、皮の



緘口具、布の猿ぐつわ、竹の棒に荒縄の組合さった猿ぐつわ、金属のパイプで出来た緘口具などを置いた。愛子はそれを見た途端、ハッとして身が竦んだ。

「こんなことなら、最初からプラスチックの猿ぐつわを選べばよかった」と考えた。「だが、所詮はどうすることも出来ぬ身なのだ」愛子は、そう諦めて河野を睨んだ。「いじわる……」と愛子の目は、物を云っていた。しかし河野は、冷やかな微笑で応答したにすぎない。

愛子は、しぶしぶプラスチックの猿ぐつわを選んだ。これが一番、清潔と考えたからだ。河野は「ハッハッハ」と声を出して笑った。「やっぱり思った通りですね、木村さん。ハイ、口を大きく開けて、そう」

河野は、ゆっくりと例の猿ぐつわを口に喰えさせた。ガチンといって鈍い音がすると、プラスチックの顎が愛子の上下の歯をしっかりと掴み、愛子は再び会食前の姿に舞い戻されたのだ。

「じゃ、今夜はもう遅いから……池田さん、木村さんを新しい寝床に案内してあげて下さい。それから木村さん。第二週目は貴女の気力と体力と、どちらが強い競争させるようになると思いますのであらかじめ覚悟をきめていて下さい。日程表を決めませんので、その点も御承知下さい。じゃ、お休みなさい」

河野は、云うだけ云うと、そそくさと立上った。池田フジが、縄尻をとって歩き出した。そして愛子の寝室の前までくると、反対側の戸を開けて中を覗いてみた。それから愛子を振り返って、目をつむるように命じた。愛子は、この命令にも馴れていた。池田フジは、愛子を黒い布で眼かくしをすると、両腕をかかえて部屋の中に入った。その部屋は、コンクリートで出来た窓のない部屋で、天井に螢光灯があり周囲が鏡張りになっていた。その部屋の中央には、直径一メートル位の丸くて平たい台があり、その縁にそって鉄の棒が植

わって鉄の檻のようになっていた。高さは一メートル程しなかった。池田フジは、その檻の蓋をとって愛子を押し込み、蓋をすると錠を下した。そして檻の間から手を入れて、愛子の目隠しをとった。愛子は、目をパチクリして四方を見回した。

「どう、木村さん。新しい寝室の寝加減は？ ああ、これから三日間ぐらいは、ここに入って貰う筈です。どうぞ思いきり泣いて下さい、と云うところね。嬉しいでしょう。それから、その間は誰も来ないと思います。その方が静かだと思いますから……。あ、そうそう。食事は天井から檻の外に吊り下げますから、口のパイプで……。あ、そうだ。パイプをとりつけるのを忘れていた。水もそれで飲むのよ。じゃあ、パイプを嵌めましょう」

池田フジは、そう云って、長さ三十センチ位の金属の棒をプラスチックの猿ぐつわの口の孔に嵌めた。このために愛子の体は、まるで一種の人間にはとりのようになった。

「これで万事OKだわ。木村さん、じゃ、御元気で。私、これから小野さんと、貴女の叔母さんを尋ねて貴女の見学に来て貰おうと思います。じゃ、その日を楽しみに……」

最後の思ひ言葉で、アッと驚く愛子を尻目に、池田フジはサッと鏡のはまったドアから消えていった。愛子は余りのことに呆然として、成行を信じかねた。叔母を連れてくるって……。それを聞いただけで、べったりと尻餅をついた。それから一時間ほど呆然として、そこに坐り続けた。

○

一時間ほど何も考えずに坐り続けていると、先ず愛子の興味を捉えたのは、美しい獣の姿であった。すき透るような美しい肌をしたその獣は、妙に長い金属のくちばしを持っていた。愛子は、その獣が自分の姿だとは信じかねた。しかし、やがてどうしても自分自身



であると信じないわけにはいかなかった。

余り強く縛られていなかったが、一時間もすると、やはり不自然な姿勢をしているので、両腕が痛くなりモジモジとし始めた。それと同時に、会食会で飲まれた酒のためなのだろうか、我慢のならない尿意を催して来た。愛子は、次第にたまらなくなって動こうとするが、高さ一メートルの檻では天井の金棒が邪魔になって、立つことも出来なかった。愛子は、こうして次第に河野たちの意図する救いのない苦悩の中に落ちていった。河野たちは、愛子のもたえ苦しむ姿を、天井の一隅に出来た穴から覗き見していた。

○

翌日――

それは河野たちにとっては素晴らしい一日だった。先ず河野は、池田フジを連れて愛子の叔母の家を訪れた。それには、二つの意図があった。その一つは、愛子に心を魅かれている小野の代りに、河野が愛子の叔母に会って叔母の内意を得ようと云う目的と、叔母の声を録音して、それを再生することにより実際に叔母が話しているように思わせ、如何にも叔母が愛子の苦しむ姿を見に来ているように、愛子を騙すためである。

河野は躍る胸を押え乍ら、地図に書かれてある叔母の家を目指して急いだ。屋根の低い下町を抜け、小じんまりした住宅街に叔母の家があった。玄関を開けると、品のよい中年の女が顔を出した。河野は一目で、これが叔母であることが判った。愛くるしい愛子の面影そのままな上品な顔立ちと、黒い澄んだ瞳が、すぐそれと河野の心に訴えた。先ず河野が口を切った。

「はじめまして、私は松井美容センターの副院長の河野ですが、お嬢さんのことでぜひ御相談したいことがあります……」

「愛子は只今、旅行中なのでございますが……」

「そうですか、それは残念。でも私としては、その方が好都合で

す。折入って叔母さんに御承諾願いたいことがありますのでお伺いしたわけです」

「そうでございますか」

愛子の叔母は、しばらく考えていた風であったが、直ぐ打ち切った風で、

「ちらかしておりますが、どうぞ、お上り下さい」

と河野たちを、奥座敷に案内した。河野の堂々たる風采と、池田フジの隙間のない服装に、好感を持ったらしかった。河野はその態度を見て、内心いけるぞと感じた。そして心のときめきを押えることが出来なかった。奥座敷へ行くと、河野は名刺を出して再び丁寧に挨拶した。そして、しばらくとりとめのない世間話をしてから、本論に入った。その時、勿論、河野の洋服の胸のポケットの中には、小型のマイクロフォンがそなえつけられており、池田フジのハンドバッグの中は、精巧なテープレコーダーになっていた。河野は端的に切り出した。

「実は突然な御願いなので、どう申し上げてよいか……。さぞ、驚かれることと思いますが、用件は二つあるのです。一つは是非、お嬢さんを当美容院の勝れたモデル嬢として売出したいこと。今一つは、私の忠実な協力者である体操教師の小野君が、ぜひお嬢さんを嫁に貰い受けたいと切望し、私とその仲立を頼まれましたので、御願いに参った次第です。小野君は、新聞などですでに御承知だろうと思いますが、都議、小野三蔵氏の次男で、かつて我国陸上界のホープとしてならした立派な青年です。私はこの小野君にせがまれて丸石デパートまで何度も足を運びました。出来ることなら、この青年の希望を叶えてやりたいと思っておりますが、何分にも同人同志の気持が大切ですし、小野君もその点を心配され、一面識もないのに突然結婚など申込んで失礼と、私に何度も相談されたわけです。しかし、私とて同じように叔母さんに始めてお会いするのですが、



そこは年甲斐という言葉もあり、先輩ぶってお尋ねした次第です。どうかよろしくお願い致します。しかし、お嬢さんが御旅行中のことだそうで、勿論、返事を急ぐわけでもなし、叔母さんのお気持がお進み下さるようでしたら、一度、私の美容院へお出で頂ければ結構と存じます。それからモデルの件ですが、その方は小野君の話

とは別に、ぜひ実現させて頂きたいと思っています。勿論、まだお嬢さんには、そのことは申し上げていません。お嬢さんが承知下され、叔母さんも御異存がなければ勿論、お嬢さん達御一家の御生活は、及ばず乍ら私共で保証させて頂きたいと思っております。また将来、お嬢さんが映画界などに進出されたい御意向でしたら、いま



評判の増田監督など、私の小学校時代からの友人であり、そんな関係よりこの方に御紹介申し上げてもよいと思っております。どうでしょうか……ぜひ一度、お嬢さんが帰られたら当病院に見学がてら来られては、如何でしょうか」

「ハイ、御親切にいろいろと有難うございます。でも、愛子が何と申しますかしら。それに、何分突然なこと——いいえ、お断りするなぞ——そんな了見で云っているわけではございません。あの娘の意見も聞いて見なければ、御返事できかねると云うことでございます。本当にあの娘にそんな素質がございますものやられたとえないにしても、そんなに云って頂ければ、あの娘がどんなに喜びますことやら。女と生れ、人様からたとえ一言でも信頼され愛されるということは、大変有難いことでございます。私からも心からお礼申し上げます。小野さんとかおっしゃる方にも、よくよく御礼の言葉をお伝え下さいませ。とは申し上げても、このことは全く一存で決めかねることです



から、あの娘が旅から帰ってきましたら、よく相談した上で、ぜひ一度、その美容病院とやらを見学に参りたいと存じます。本当に何と申し上げてよいか、色よい御返事もできかねる次第で申訳ございませんがほんとうにありがとうございました」

河野副院長は、この叔母の話聞き乍ら、これは希望が持てると思った。それから心の中でにやりとほくそ笑んだ。池田フジを交えた三人は、それからしばらく雑談して別れた。河野は、最初の訪問であるのでできるだけあっさりとし、しかも自分たちの印象を強く相手の胸に植えつけたいと思ったのだ。そして、その試みは成功したと思つた。河野は久振り清涼な空気は存分吸つたような気になり、美容病院への帰り途、池田フジを近所の喫茶店に誘つた。

○

愛子はその頃、果てしのない汚辱の中に沈んでいた。腕や体の感覚は、もうぼやけていた。いや、愛子の意志すら、はじめに踏みじられそうな有様なのだ。池田フジが云つた、たった三日という日数が、まるで十年のように感じる——というのは、明るい螢光灯の世界では全く夜という時間がなくなる——すなわち休息の時間がなくなるからである。物理学的にいうと、ただそれだけの現象だが、人間にとっては、そのことはたまらない悪条件なのだ。

人間の体は、必要な睡眠を必ずとるものだ——という一つの学説があるが、たとえば、その学説が真としても、このような条件の下で本当に十分な睡眠がとれるかどうか——心身ともに疲れれば眠る、たしかに愛子は眠つた。しかし、それが体に十分な休息であり睡眠であつたかどうかは疑問だ。とにかく、愛子は疲れてきた。のろのろと立上り、天井に頭がつかえない程度に背を曲げて、ぐるぐる檻の中を廻つた。すると空虚な目の中に、脂ぎった一匹の牝の動物の姿が写る。愛子は、自分のみじめな姿の中に、牝の体臭を見出して驚く。驚き乍ら一つの咆哮に似た空しさと憤りが、激しい渦をなし

て駆け過ぎる。無駄と知っていても、わざと体に力を込めて檻の棒に体をぶつける。肩を、胸を、乳房をすりつける。すると、意識の中から、やや複雑な女性の感情が芽ばえ、絶望の池の畔をさまよっている愛子の愚かな意識を強く引きずって、現実の世界に押し戻す。愛子は、倒錯の喜びを感じるようになってきていた。全く意識することなく、一つの喜びを発見しつつあつたのだ。愛子は、しきりに体を檻の棒にぶちあてたり、こすりつけたりした。

小野茂夫は一人留守番をして、そんな愛子の姿を天井の覗窓から見ていた。すると、不思議な感情が、小野の背中をつらぬいた。一つは所有慾であつた。今一つは、その所有慾の変つた強烈なサジズムの欲求だつた。小野はカッとなつて、横のボタンを押した。その途端、奇妙な絶叫を残して小さな檻の中を駆け廻り、呻きのたうつ白い肉体が見えた。小野は、ニヤリとほくそ笑んだ。檻の中を狂い回る美少女の姿は、完全に小野の心を魅了した。そして快い旋律を伴つて、小野の心を駆け過ぎた。小野は程なく気を取り直して、再びボタンを押した。すると女の狂い回る姿は、ぐったりと檻の底に横たわり、肩で息づいているのが判つた。小野はその姿に、ふと憐憫の情を覚えた。それと同時に、小野は始めて、この女が将来、自分の妻となるべき女なのかと考えて見た。なんとしても手に入れて、立派に華燭の典をあげてみたいものだと思つてみた。

愛子の身体はその時、完全に打ちのめされて、物を考える力すら失っているようだった。にわかには走つた激痛は——そうだ、あの痛みは電気ムチの——あのチヨコレートと渾名のある、あのムチの痛みだつたのだ。そう考えると、愛子の全身は恐怖におそれておののいた。

(未完)



## 『風の中の女』と題して

——粹興春宵座談会——

牧 高 志

文・画

出席者

櫻井邦子(主婦、29才)

磯村妙子(婚約中、23才)

花山みどり(未婚、21才)

司会

牧 高 志

於 紫苑荘

牧 本日は、いや今晚はお忙しい中をわざわざ有難う御座いました。実は前にも一、二回こうした集りを計画したんですが色々都合がありで、とうとう今晚が最初と云うことになりましたが一つ、眼の前のお料理でも召上りながら、腹藏のないところをお話し願えませんか。どうもお話の内容が少々妙ちくりんで恐縮ですが……御参考まで拙い画を御覧に入れます。先ず既婚者と申しては失礼ですが櫻井さんから何かお話を——

櫻井 嫌ですわ、ホホホ……冒頭からお名指しで……奥さん稼業はどうもいつも信用がなくて、でも今日はいささかよろめいてもよろしいんですよ、いい意味で。

牧 結構ですとも、まあ息を抜くと云うところなら何処からも苦情は出ませんから、

櫻井 この花嫁さんですか……石段が見えるようでお式が済んでお披露に行かれる処なんでしょうね。色のお振袖で、紋錦紗の長襦袢、それに緋縮緬の裾除、花なら正に満開の最良の時……もう一度お式でも挙げ見たくな

りますわねえ。

牧 そう感心なさらずに、こんな姿で階段を降りた途端に桜の風が無情に吹いた情景なんです。普通なら附添の方か、御本人が裾に手をやって乱れを直すのが御覧の通りの後手に自由が縛られてるあたりが味噌なんです。まあ男性なら一瞬見逃しませんね。

櫻井 そのお気持は何も花嫁さんでなくつてもいいんですよ、きものの女性でさえあれば……ただ一寸お可哀そう、そうでなくても花嫁衣裳は苦しくってぐるぐる巻でしょう、檜扇に結んだ帯の後で両手をくぐられちゃみじめだわ。

皆さん、いかがでしょう。あなたがたなんかこれからでしょ(磯村、花山両嬢顔に手をやって忍び笑い)

牧 どうも初鼻から花嫁さんの晴衣裳に集中してみじめなことになったんですが、角かくしがないんですから、どうしてもまず後手に縛っておいてから御披露しないと花婿さんも安心出来んと云うことにすれば磯村さんも花山さんも納得いくんじゃないかな。

櫻井 あたしなんか結婚三日目にお床の中でくられちゃった。夫唱婦隨を地で行けて云われちゃって……でも白昼この花嫁さん見たいな勇氣はとて——。裾が捲かれたと云えば結婚して一週間目に箱根へ新婚旅行に行っただけです。その折あいにくにわか雨に降



られて地獄谷って云うんですか、ツルツル滑る山道なもんでついお尻を端折って柄になく赤の蹴出しを出したり、引込めたり、飛んだ色気を発散するなんてあとで主人からひどくお小言を受けたことがあります、今は花嫁さんでもストッキングをおはきになるんですよ。

花山 でも——やっぱりお着物じや素脚に

白足袋の方がよろしいんじゃないでしよ  
うか、この間私のお友達がお嫁入したんです。その時パンティもやめていきなりお腰を締めていらっしたんですって。

この花嫁さん（画を指示して）もそんな気がして一寸……

牧 お気毒と云っていいかどうか判りませんが要するに六ヶ敷しく表現すれば秘められた羞恥じやないですか。

大体どうして花も恥じらう花嫁さんが何の仔細あって後手に縛られなければならなかったと云う点が問題と云えば問題だけどどっち道、粹興なんですから深刻に考える必要はありませんね。

もうすぐ御結婚される磯村さんあたり如何（いか）です？

磯村 さあ………どうなりますか、昔は先生、大丸鬚のシンボルで旦那さまの専有物でしたでしょうから或る意味で縛られたかも知れませんが、ですけど今は………でもやっぱり



縛られてオーソドックスな緋縮緬のお腰を出した方が可愛いがられるんじゃないかしら。

樫井 ないかしら………どころじやなさそうよ、あなたの未来の旦那さまって古典文学の文学士って承りましたよ、ならさしずめこうされなさいよ。きっと御夫婦円満で吉兆疑いなし——（一同笑う）

ただこうなっちゃ（と柱に縛られた画を掲

なんですの。

牧 まあ何かの取調べを受ける処か、お仕置でも受けると云った風に途中見えるでしよ。適当に判断されてかまいませんよ。小紋模様様の長襦袢の裾廻しが真紅なのにピンクの蹴出しが赤であつたため少し度強い感じなんですが……

樫井 これだから着物は両手がきかないと困りますものねえ、何かこれ終戦の頃の現地（満洲を指す）でも描いたんじゃないですか、随分ひどい目に逢わされたんですってね。

あたしの同窓生のお母さんになります。が知った方の中にこんなにされて今でも土着の人か何かのお婆さんになっているんですって。

聴損いかも知れませんが、あちらの人ってひどく日本の着物に執着があつたんですってね、そこへ持って行って日頃の怨みが積っているから、それ敗戦だッなんぞとその皺寄せが抵抗力のない婦女子に行つたんでしよ、中には鉄砲でうたれたり……

牧 まあそんな惨酷な話でなしに何も満洲に限った訳でもないんですから………私なら木枯の中での強制野立とでも解釈しますねえ。勿論、これはと思うお綺麗どころを引くくつて野山への遠出ですか。

磯村 でも、そんな折は訪問着なんで御座



いましょう。近頃は出来合いのウール地のものも結構間に合いますから……

ただ……さっきから少し一寸気に懸ることなんです、この三人の女の方、どれも口を覆っていらつしやる。これ何か訳でも……

樫井 これがいいんですの一寸猿轡嵌めて御覧なさい。

段々にその方がよくなつて来るんですから……フフ、あたしなんか今でもちよいちよい、おっとこれは内緒——（と口に手を当ててふくみ笑いをする）

花山 でも、とっても苦しそうだわ。いつか牧先生から見せて頂いた本にもあったけど……

牧 どうも、その都度「先生」だなんぞと云われちや汗顔の至りで困りますよ。まあ一言に云って絵空事になりますか、さっき樫井夫人が仰言った段々によくなるかどうか、今晚は風の中の女の縛られた姿に対する座談ですから口を開いて笑っちゃいくら浮世絵でも格が下りますよ。だから、みじめのようでも全部猿轡をかまされたんでしようね。

樫井 かました御本人がそう宣言されていらつしやる。あたしの主人をひっくるめて世



の男性殿方連中は風邪をひいた時の女の人のマスクに魅力があるんですって……ホホホだからなんでしょう。

牧 ところで——どうでしょうか、上方かみかたの人は昔から下着は薄汚れても表べさえよければと云いますが東京では下着をやかましく云いますね、僕なんか両刀使いですから、それなりに珍重しますけどね

磯村 でも、いくらお普段着でも、あんまり下着が汚れちや風の時なんかひやりとするんじやありません？この間も演舞場の帰り途、地下鉄の上で真赤になったんですもの、何もこんなにくくられた訳じやないんですけど……

花山 裾除けしていらつしたんでしよう。

だけど木枯が吹くと恥かしいわねえ、一っぺん誰も居ない処で後手にされて思い切り吹かれて見ようかしら……フフ、それこそ薄汚れたお裾除か何んかし——

樫井 誰も居ない処でなんてあなたを縛る人が居なくつちや誰が後手に縛り上げるんですか。だから早く彼氏を見付けなさい。

牧 まあまあ、そうきめ付けなさらなくて——縛る人は男性にきまっていますから、いい意味での愛情の発露だと思っていて下さい。と同時に後手の女性をさまざま縛り方で無情の風に曝らして見ると云う処に多分に伝統の浮世絵趣味が湧くと云うものなんです。この画のような事がしよつちゆうあつたんでは軽犯罪になり兼ねませんけどね。僕の友人で着物の乱ればかりカメラに撮して廻るマニヤがいますよ。

先だつても御熱心の余り自動車にぶつかつて怪我をしましたかね。それがまた優秀なレソズと見えて望遠でも開放でよく撮るんですよ。奴さん御丁寧に引伸していちいち吟味して、やれ一越だの浜縮緬だのと……これは今は余り流行らないメリンスの蹴出したなんぞと仲々博学の処をぶつていましたけど——まあそれはそれとして、磯村さん、変な質問ですが、あなたがさっきも云われた通り、結婚されて仮りにでもですよ、旦那さまがこん



なことを云い出されたらどうなさいます？  
素直に両の手を後に廻わして風に吹かれますか？

磯村 さあ、ホホホ、何んともその時でないと判りませんわ、でも、ひよっとすると仰せの通り赤い物をちらつかせることになるかも判りません。主人でなく、もともと私自身国文科出身なんですから……

花山 裾廻しても胴裏地でも赤は女の好む色なんでしょうか？

牧 女性ばかりではありませんよ、昔でも作り話でしようが林不忘の丹下左膳は赤の長襦袢を着ていたんですから——（一同笑う）

大体忌憚なく云うと男性が要求する色なんです、ね、早い話が赤い色を見ると女性以上に興奮する、その挙句が男性ホルモンの分泌を促して生命の躍動を感じるって物の本に書いてありましたよね、その点スペインの牛以上ですな。

と云ったからとて朝晩のべつに女の赤い着物を着る訳にも行きませんしね、手術でもして女になるなら別ですが……それともう一つ何んと云うのかなあ、なよなよとした身体を縛ってみたいと云う気持があるんですね。その両方をナチヨラルに演ってみたいのが風に吹かれる女性と云うことになりますか、どうも四面楚歌の中で

僕ばかり喋っちゃ助け舟出して下さいよ……。

樫井 あたしは縛られる女性って幸福だと思えますわ。だって、それだけ御当人に執着があるんですもの。強盗は怖いけど、そうでなかったらギユウギユウに後手に縛られて御覧なさい。それが男のかたの要求なら赤い

長襦袢でもお腰でも出して御覧に入れますわよ。

ただし愛情の小出しにね、ホホホ。

磯村 でも昔は蹴出しですか湯文字は赤い縮緬物を締めることに女の喜びを感じ出したのは極く最近なんでしょう、徳川の末期か明治の初め頃じゃないんでしょうかしら……。

牧 近頃は一般に薄い色に変わって来ましたが白木屋の火事までは、どの娘さんも赤いお腰を締めていましたね。だから小早川清の「黄塵」だの山川秀峰の名画が出たんですよ。それといま一つ、女の羞らいが出てないと現物でも絵でも駄目ですね。

花山 この三つの絵を拝見すると、みんな諦めていらつしやる——

牧 絵がまずいんですよ。

樫井 仲々よろしいじゃありませんか。

ませた玄人くろごより下手な素人しろうこの絵の方がその物ズバリで面白いわ。

牧 褒めたんですか、けなしたんですか。

磯村 私は気持はアバンですから、この三方かたの女の気持は判りそうなんです、不思議と縄が上半身ばかり縛って腰から下にかかってない処が微妙だと思っていました。

樫井 だって、そうしないと御注文の品が出ない（一同笑う）

花山 牧先生はいつかだらしない着物は嫌いだと仰言いましたでしょう。





牧 いや別にちやんとあるべき物があれば着流してもかまいませんよ。

シユミーズにいきなり着物を着たり、パンティにじかに長襦袢着たりするから艶消しだと云うんです。

本当はストリップでも赤いお腰の下はノーパンツであるのが効果的なんですがね。話がひどく横道になりましたね。時間もそうありませんから最後に何うものを伺って閉会と致しましょう。で—こんなことをお聴きするとお怒りを蒙るかも知れませんが、どんな縛られ方をしても何も風でなくともいいんですが、恥かしさをかみしめたらよいか、大分マゾ化したよろしい気分の湧いた処で今度は一番お若い順に花山さんから一つ……。

花山 嫌だわ、だってまだ一度もこんな目に逢ったことないんですもの、何んて云ったらいいかしら、されてみたいけど怖いみたい。その——縛られかたなんですのね……まだ判んないけど。

『お嬢さん、その両手を後に廻わしなッて』云われたら黙って廻わすかしら……

本当に縛られたら、あたし泣いちゃうわ。そして大抵、柱につなげられたりして変なことでされるんですよ。

磯村 私、白状すると矢絣姿の腰元風が大好きなんですの、それが何かの仔細があつてあの手、この手と折檻される姿が私がされる

としても一番美しい姿じやないかと思つてますの。

高校生の折、父の秘蔵絵にそんなのがあつてひどくびっくりしたんですけど——着物が極彩色でしよう、緋縮緬の長襦袢に真赤なお湯文字が適当にアレソレして縛った縄がまた真黄ろなコントラストは縛られた女って何んで素晴らしいんですよって今でも羨しい気がして……

絵空事でしようが、お仕置場縦横に十文字に縛られて殊に後手の処なんか三重にも四重にも本縛りに縛って縄尻を取られた添え文句にへ折しも散り行く桜花に似て哀れ腰元八重は……云々ってひどく文学的で……。ですから私に心の底から愛情を下さるなら、おさなりな責めかたでなしに、本縛りに後手にくくられて堪能させて頂き度いと思つてますの。

牧 それは相手がたの男の方でもしょう？

磯村 勿論、私を含めてどなたにでも御存分に、それこそお氣に召すまで……

牧 いや、どうも御決心の程恐入りました。では磯村さんの今後の御進展をお祈りして、最後に樫井さんの締めくくりを拝聴しますかね、名セリフでも一つ……

樫井 どうも皆さん、案外に日本趣味ばかりでいらつしやるんで……

ぐいッぐいッと紐が肉に喰い込んで行く時は堪らないわねえ。博多織の伊達巻があるで

しよ、締める時鳴る……あんな音がしてぎゅうぎゅうと後手にされていく時が女の官能をゆさぶる最高時じやないかしら……。

ウフ……ホホホ、ひどくおセンチになっちゃったわ、御免なさい。で——どうしたらいいのかな。やっぱり痛い位に縛った方が鑑賞される男の側からもいいんですよ。だったら、うんとあちこちグルグル巻に縛り上げた方がお互に効果的だわねえ。花山さんも樫井さんも未来のハズさんから素敵な長襦袢でも買って貰いなさいよ、そして誰も居ないアパートの屋上か山の中で思う存分風に吹かれてみたら……？ 案外男って復古調でやれピンクのお腰がどうのこうの、真赤な蹴出しがどうのって、うるさいわよ。そこがまた生甲斐があるところなんだけど、紋切型に御主人を送り迎えるばかりが能じやないわよ。

へアラ……そう？ じや今晚は吊るされてみようかしらってなったらお終いだけど——。何んのかんのお喋りしてお料理あらかた平らげちやったのねえへえ、皆さん、食い気も旺盛、ホホホ……

牧 じや、まあこう云う処で——どうも長時間を有難う御座いました。

いずれまた話題を改めて張切つて集つて頂くことにしよう、じや、それまでお元気で——失礼しました。

(編集・文責……牧)



## マゾヒズムへのいざない (九回)

黒田史朗

「いざない」第七回の文章の冒頭に、私は榮子・千代子・由美子という三人の女性を紹介した。前の二人は本名ではないと思えるが由美子というスラックスの小妖婦は正しく本名をなのっていたものと信ずる。赤線・青線は既に四月を待たずして消え、三人のドミナ達も又いずれへか去っていった。私は別段に彼女達の後を追うつもりはない。私には別のドミナがあり、そして又次の新しいドミナがやがて私の前にあらわれるだろうから。しかし、私は大変に悪いことを読者の皆さんにしましたことを残念に思う。七回目の文章で彼女達を紹介したという私の真意は、何も皆さんに対してのひけらかしのつもりではな

かった。あの文章を書いたのは去年の十二月で、まあ、四月実施という売春対策の方針からすれば、ギリギリの線であうだろう。若しか、私の文章が縁で、彼女達の客になりたいというマゾの士があれば幸だと思ったからに過ぎない。彼女達は、いわゆる赤線の女のあのスレッカラシなところが全然なかった。下手な勿体もつけなかった。思いきったことを、商売気なしに、目を輝やかしてズバリとやってくれた。そして、それには適度の雰囲気失われずにいたのである。彼女達は、まず私の判ずるところの、かしこい女の部類に入る資格が、まさしくあったと思う。私の文章が機縁で、一人でも多く心のうめき

をいやすマゾの人達があらんことを心から願って止まなかった。気持を内攻させておくことはやはりいけないことだし、私のこれまでの精神的苦痛の遍歴からみて、同じ苦しみを味わうマゾに憑かれた人達の苦悩が、手にとるが如くに分るからだ。我々の女王は本来如何ような美人であろうと、やはり商売女であってはならない。彼女は肉体的にも精神的にも、共に健康で潑刺とした汚れをしらぬ女神であってほしい。しかし、私は、私のマゾに結ばれた友人達の一人一人が、その各々の孤独の世界において、女神を得られずに日夜苦吟しているのを知る。何時の日にか、とはいえ、これこそ全くあてどのない旅路だ。そこ



で私は最も手とりばやい方法として、前記三名の女性を紹介し、そのことによって私の友人達の一人でも多くの人が渴をいやされることを願ったつもりだった。ところが、事態はあまりにも早急に進み私の文章が発表された頃には、既に赤線・青線のすべてが廃業し、彼女達もいずれへか消えていった。私の紹介はまさにその時機を失し、結果として皮肉なものにおわったことが残念でならない。しかし、私はその穴埋めとして、事情の許す限り、私の友人達にドミナを紹介して差し上げるつもりでいる。沼氏が指摘された通り、私も皆川のぶ子氏に申し上げたい。完全な私たちで性を放棄してしまった真のマゾヒストは、たしかに此の世に現存することを。彼は正常な交渉には全く興味を持たない。彼は男ではあるが男性ではない。完全に女性の隷属物であって、他の何者でもない。そして四月号における「愚者の言」の貴山茂氏にも申し上げたい。あなたはあまりにも知らなすぎる。サジスチックな女性が本当に居られるのか、疑問だ、などという言葉自体が腑におちない。黙っている限り、普通、女性はすべてサジストなんかではありはしない。当り前な話ではないか。灼きつくような心の悶えが本当ならば、必ずそこに工夫と努力がともなう筈だ。そして勇気も。それらのタイミングが

一致したとき、女性は一人の例外なくサジストとして我々の前に現われるのだ。この世にサジズムを発揮出来る可能性を持つ女性は満ち溢れるほどにいる。ところで貴山氏に御忠告しよう。サジスチックな女性は本当に居るのか、という問題の出し方自体をあらためてサジスチックな衝動を内包し、それを発揮出来る可能性を持つ女性は本当にいるのか、としたらどうだろう。たしかに。たしかに。いるのだ。その可能性をひらく鍵は、あなたの心にもえるマゾの火が、本物か、どうかにすべてがかかる。本物であれば、熱意が、工夫が、勇気がちがってくる筈だ。それなくして、マゾヒストは生きることが出来ないからだ。女性は、すべてサジストなのだ。具体的な私の体験の一つ一つをこれから気長にかくつもりでいるので、御参考になれば幸だと思う。又再び皆川のぶ子氏に申上げたい。マゾヒストは嗅覚が鋭敏だ。己が拝跪する相手方の女性の女王たるの資格を有するや否やの判定に対しての感覚が実に厳しいのだ。あなたが求められる真のマゾヒストは、女性の前にさえいれば、どんな相手にだってのべつまくなしマゾヒストであるというわけにはいかない。選ばれたる女性こそが、はじめてマゾヒストをマゾヒストとしてその場所に拝跪せしめることが出来るのである。勿論これには異

論があることだろうと思う。女性でさえあれば、誰方でも、と仰言るマゾの士があるいはいられるかもしれないからだ。それはしかしすこし許りちがうのじやないかと思う。私だって赤線の女の足をペロペロなめたりする。そうした経験を持ちながら、女性でさえあれば誰だって、とは思っていないのである。一見矛盾した如く見えて実はそうではない。「犬の生態」の筆者だって同感なさるだろうと思うが、マゾヒストは事の性質上、相手と所と時間とに恵まれない場合が殆んどであるため、最も安易に逃避する意味で、とりあえず手近な女に代替物を見出し、一種の自慰に耽るというに過ぎなからう。皆川のぶ子氏よ。真のマゾヒストにめぐり合いたくば、まず真に女王としての資質を身につけられてからになさったらどうだろう。その時にこそ、コイツスを女王に申請するなどというカタワなマゾヒストは決して始めからあらわれないようになるだろうから。コイツスを欲するマゾヒスト？は、前にも述べたと思うが、マゾヒストではなく正常人だ。マゾヒスチックな欲求は、すこし変った立場での前戯の意味としてしか通用しない。正常なる方々よ。あなた方はヘンタイじやないんだ。お目出とう。私はあなた方とちがって立派にヘンタイだ。畜生！嬉しいんだか悲しいんだか、とにかく涙が



出てきて仕様がなない。私は三十二歳の童貞で、これからも生涯それを通すだろう。それでそれはそれなりに又一応私の過去をふりかえってみねばならないだろう。「暗い欲望」の続篇「幻炎」からすこしばかり抜き書きを試みることにする。

……………(前略)

少年の涼しげな瞳、じっと見据えられ、その時のおののきは、本質的に私の人恋しきおもいを実証することにでもなるのだろうか。かくて私の青年期の第一歩はふみ出された。と共に、いつしか少年に托せる私のねがいも曾ての意欲的なものから多分に習慣的、惰性的なものに変わっていった。

……………(略)

「幻炎」のこの部分から、いよいよ私は本然のマゾヒストとしての立場に変わるのである。対象は少年から女性に移るのである。丁度敗戦直後の昭和二十年、二十一、二十二年と、私は完全に少年を卒業した。私のおもいえがく女性像とは、再び「幻炎」に戻ってみよう。

……………

瞳が涼しく優しげにうるんでいる。丈は高く、スナナリと伸びた足の筋肉が羚羊のようにつややかであった。おお、彼

女こそまさしくは私の御主人様であらねばならなかった。

……………(略)

或る日、私のそばをすり抜けて、女子学生が一人、急ぎ足で帰りかけた。私は二、三步後を追いかけて、

「あの……………」

すこしもつれ気味に、

「お・ね・え・ちゃん」

女は立止まり振返った。

「何でしょう」

というように私の顔を見た。私は自然哀願するような目つきになった。

「お・ね・え・ちゃん」

もう一度云って私は目を伏せた。それは二十三歳(当時)の青年とは思えない幼なげなしぐさだった。

「何か御用でしょうか」

澄んだ声だった。私は襟首のあたりまでも真赤にしながら、

「あの、ネ、ここいら幽霊が出るって、

ほ・ん・と・う」

語尾に力をこめ、甘えるように云った。女は怪訝そうに首をかしげた。でも、すぐいたずらっぽい目になり、

「さあ、どうですか」

「幽霊って本当にいるの」

私は重ねて云った。

「そう、いるかもしれないわね」

註、本来ならば、そう、いるかもしれないせんわ、と云うべきをいるかもしれないわね、と云ったのである。相手を一人前の男でない、精薄児とみてとっての発言なのだ。

「ほく、こわい」

女は真顔になった。

「だから早くおかえんなさい。ぐずぐずしてると本当に幽霊が出るわよ」

云い残すと女は背を向けて歩き出した。サッサと傍目もふらず歩を運ぶ女の姿は夕暮近い空気の中で直き小さくなった。私は訳も分らずに口惜しくなり、道ばたの雑草を引き抜いて空中に放り上げた。雑草はバラバラに散って私の頭にふりかった。

……………

「幻炎」その後の引用は又次回にゆずるところにして、ところで今回は「いざない」もいよいよ十回目を迎えることになるのも何かの記念的な意味にもと考え、「マゾヒズムへのいざない」の題名はそのまま、ひとつ、創作を発表させていたかどうかと思う。勿論、そのためには、こわい編集の小父さん達の了解を得た上でのことではなければ。(未完)



# 現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第五十六項

## 「ソヴィエトの女性」誌について

モスクワ市ゴリキイ街にあるトルード出版局か、或はブラウダ紙の出版局か、いずれにせよソビエト・ロシアの国営誌で二ヶ月に一回、即ち年六回発行の啓発誌である。かつて一九四〇年代には英、仏、独、露の四ヶ国語でのみ発行されていたが、現在は日本語版まで出来ている（一九五六年頃から）のだから恐らく十ヶ国語以上で発行されているのである。特に英語誌名の「ソヴィエト・ウーマン」が最も一般的に使用される誌名である。内容は勿論資本主義諸国に対して、ソヴィエトの女性の実態、日常生活、婦人功労者、芸術、モード等を紹介するのが主眼であるが、この雑誌には時々期せずして私達の興味をそそる記事が掲載されるので、茲に注意を

惹いておく次第である。

一例に丁度私の手許にある一九四九年第五号を見てみよう。十頁にエヌ・ヴェ・ポボヴァ女史の論説「平和の積極的な使徒ソヴィエト女性」が掲載され、その題字下には、反ファシヨ協議会総裁たるポボヴァ女史に並んでツソラ・ドラゴイチエーヴァ女史（ブルガリア婦人連盟総裁）とジナイダ・トロイツカヤ女史（反ファシヨ協議会員）の写真があり、その写真によって、トロイツカヤ女史が軍人であることが示されている。三十六頁からはグラビアで、「平和の空の下に」という小特輯、先ず一九四三年当時の夜間爆撃連隊に属する婦人将校達の写真が示され、戦後に彼女達が除隊した後の生活が報告されている。先ず、アレクサンドラ、アキモヴァとイリイナ・ラコボルスカヤのモスクワ大学に勉強中の姿を、ヴァレンティナ・ルムヤントセ

ーヴァの愛児と共に居る姿を、空の戦士エカテリナ・リヤボヴァの良人と愛娘との家庭の姿をそれぞれ紹介し、一九四九年の彼女等の集会の写真を更に掲載している。一九四三年の写真はすべて軍服姿であるが、一九四九年の集りにも一人軍服姿の人が居る。其の名はよくは判らないが、皮相な観点からすれば、此の女性が軍服愛好者であるという判断をしてもよいかもしれない。キント博士の高名な「女天下」によらずとも私達は第一次大戦中にモードの世界に軍服に似たデザインが多く侵入したことを知っている。確に、一九一三―一五年頃の雑誌等に見られるモード（特に上半身）にはユニホームの影響が顕著である。むしろ、軍服的な色彩の見られないモードの方が稀な位である。女性にとって軍服は、伝説的な騎士的な幻想のよき媒体でもあり、安易なヒロイズムの対象であると共に、軍隊という掟の中での自由が束縛された世界に対するサド・マゾヒスティクな妄想がつきまとっている様に見受けられる。現代女性の中に川島芳子に対する憧れと羨望が示され、自由を束縛されているかに見られる少女歌劇の生徒に対する倒錯的な思慕が見られることも、同様の心理の一つの現われと見てもよいのではないだろうか。

因に、ナチス、ドイツ時代の女兵の服装は婦人服に近かったが、（将校又は収容所の看



守、及特殊勤務の女兵は靴だけ長靴を用いた。ロシアの女兵は男子と全く同一の服装を用いる事が多い。こうした種々の断片的な資料は若し、アウシュヴィッツがロシアにも存在したとしたら、赤いドロテア・ピンツ、赤いイルゼ・コッホ等が容易に生れたことを暗示している。

以上の如く一部のソヴィエト・ウイメン誌は多くの連想の源となる。又、女猛獣使として本欄が更三指摘したマルガリタ・ナザロヴァやイリイナ・ブルジモヴァ等の記事が、写真入りで紹介される事も多い。現在専ら軍国的色彩の濃い米ソの内、ソ連が何か一時代前の欧州の如き観を与える風俗を持っているが故に、本誌も亦興味深い示唆を時々与えてくれるのもあるうか。

#### 復刊第五十七項

##### 邦画 「秘められた扉」

曾っての名画の削除場面——といっても戦前の削除だから今見れば大した部分ではない——と遂に陽の目を見なかった「夜と霧」の一部——これはコマ数で言う方が早い位の極く瞬間的な一部分——とストリップ映画の焼き直し、——これもアメリカ版の十六耗からの複写ものらしい——を一つにまとめ上げにもので、記録映画でなく劇映画でなく、教育映画でもないという、所謂海賊版映画である。筆者が、ここに敢えて紹介するのはむしろ海賊版という点に就いてである。

各種劇映画の中から、例えば緊縛場面だけ、

又はコルセットに関する部分だけという様に再編集した長編が出来たら、これは特筆に価すると思われる。

特にアブノーマルな嗜好に投ずる為に作られたのではない各種の映画からアブノーマルな神経に訴える部分のみをつなぎ合わせる事によって、私達は原作に対しての関連なしに其種場面を楽しむことが出来るわけである。

扱て本題に戻って、本映画は第一部として「秘められた接吻」として過去の削除場面の中で——「隊長ブリーバ」、「暁に帰る」、「想い出の円舞曲」等の接吻の場面が収録されており、第二部には「秘められた惨劇」として、今次大戦中双方で撮影されたニュース映画を主として、特にナチスのユダヤ人収容の一場面と戦後に撮影したアウシュヴィッツ、ベルゼン等の強制収容所の写真を紹介し、更に第三部として「秘められた愛慾」と題してストリップ映画をバラバラに収め、その中にほんの一部アーヴィング・クラウ社、ビザール社の挿絵を紹介している。決してよい出来でないことを諒解の上で御一見の価値はあるものと思う次第である。

猶、本映画は全八巻であるが、併映用に製作されたらしく、ニュース映画館での上映が期待される。

#### 復刊第五十八項

##### 演劇 「令嬢ジュリイ」について

二月十九日より始めて向う二ヶ月間、毎日曜日俳優座劇場（東京麻布六本木）で実験的

に開始された日曜劇場の第一回に選ばれたストリンドベルク作の「令嬢ジュリイ」——KEN JULIE——は曾って名作であった同名の映画について本欄が採り上げたものである。

映画で主演した名舞台女優アニタ・ビョルクのイマアシュは、私達の頭に最も写實的なジュリイという女性の映像を与えた。彼女の演ずるジュリイの示した全ゆる性格描写は正しく唯一無二のものであるとさえ云い得た程のものであった。高貴な美しい天成のサディスチンとしての風格、傲岸、厳格と共に、その正しい節度は舞台上に現われる他の如何なるサディステイクな女性よりも、マゾヒストに対して崇敬の念を抱かしめた。

その完璧のジュリイが今や忘れ去られようとしているとき、俳優座の今回の上演が、果して如何様な成果を上げ得るであろうか。私は決して大きな期待を持ち得ないが、然し、若し映画でのジュリイを知らぬ人にとって、この新しい東洋人の演ずるジュリイが、アニタ・ビョルクの極く一部分をでも伝え得れば幸であると思う。

付言するが、三月上旬東京有楽町そごうで開催中の「ブロードウェイ写真展」に「令嬢ジュリイ」の上演写真が一部展覧されているので海外でのジュリイと比較することも一興あるのではないかと思う。

以上



# 小 僧 と 禪

内 田 武 男

常雄の両親が突然の交通禍で亡くなったのは、彼が中学（旧制）の四年の春であった。

彼の父は、ある町工場の職工をしていて、

恒産というものはなかったが、親子三人がどうやら食べてゆける程度の収入があった。父は小学校中途退学で、今日までかなり苦勞して来たせい、息子だけは学問させたいと云う希望を強く持っていた。しかし、上級学校に上げるだけの資力はなかったので、たまたま常雄の成績がよく学校からの勧めもあり、軍人にすることにきめていた。したがって彼は、士官学校を受験するつもりで勉強していた。彼の両親の突然の死は、それだけに残酷だった。両親の死後、彼は近くに住む遠縁の家に預けられた。生前は他人同様だったので、引取るのがむしろ不思議な程であったが、他に親身になって世話をしてくれる身寄りがなかったからである。しかし常雄は、この家に引取られて間もなく、殆んど強制的に学校を止めざるを得なくなった。「上の学校にゆくばかりが出世の道じやない。世の中に出て苦勞しないと一人前にならないからなあ」とこの家の主人は常雄を説き伏せ、他人の飯を食うのも苦勞の一つだと説明した。常雄は学校に激しい執着を感じ、また未知の世界に出る恐しさもあって渋っていたが、それにも構わず主人は、ことを運んでいる様子であった。

それから間もなく或る朝、今日から主人の懇意だった店で店員として修業することになったと告げられ、連れて行かれた。

彼は両親が受験のため用意してくれていた真新しい服に着替え、身廻り品を父の遺品のボストンバックにつめると、主人に従った。

町から汽車に二時間程乗り、県庁のあるA市に着いた。A市はこの地方ではかなり大きな都会で、常雄も父に連れられて何回か来たことがあった。彼は進学をすっかり締めていたが、大きな商社の事務員としての生活を十分に都合よく空想していた。都会の生活の華やかな空想が、彼のうつろな心を埋めてゆくように感じられた。しかし連れてこられた場所とは都心から離れた住宅地に近い、しかも空想した立派な商社とは似ても似つかない鮮魚店だった。そこには、筋骨たくましい若者が三人、短い股引に前掛姿で威勢よく働いていた。常雄は、心臓が大きく鼓動するのを押えることが出来なかった。あんな姿で働かなければいけないのかな、と云う羞恥心が先にたった。主人は常雄を引き立てるように中に入ると若者たちはけげんな眼で彼を眺めた。奥に通されると、店の主人が待っていた。「この子かね。フン、なかなかいい体格のようだね。一つ軍人になったつもりで頑張るんだな」

常雄を坐らせたまま、二人の大人は帳場に



姿を消すと、そこで暫く何か話している風であつた。その時間が、彼には恐しく長いように感じられた。暫くして現われたのは店の主人、一人だけで、遠縁の人は常雄のことを色々頼んで帰ったことを知らされた。しかし、主人の態度が最初とかなり違い、常雄には荒々しく感じられた。

「さあ、これからこの店の小僧として、気持を入れかえて働いてもらわにやならん。お前には金がかかつているからな。徴兵検査までは年奉公だから、修業のつもりでみっちり仕込むよ」

「それから、着ているものを、全部脱ぎなさい。今日で中学生はお終いだ。今出させるけど、魚屋の小僧の制服をつけるんだ」

と主人は顔をゆがめて、意地悪く笑つた。常雄は主人に云われるままに服を脱いだ。お内儀が現われると

「へエ、この小僧、なかなかいい体だね」

と、拾いものだと云わんばかりに、主人と顔を見合せてニヤツと笑つた。

「サルマタをつけて天ビン棒が担げるか、バカ野郎」

最初から主人は怒鳴つた。その勢に圧倒されて、彼は慌ててはすした。常雄は羞恥心と恐怖で、すっかり紅潮していた。

常雄は先ず六尺禪をかけさせられた。主人は彼の尻をたたいて両足を開かせ、巾の狭い

豆絞りの模様をついた六尺禪を強く締めあげた。

「禪が弛んでいるときは、気持がたるんでいくときだ」

と、主人は云う。常雄は、うって変つた下半身の簡素感と緊張感に、うろたえてしまつていた。そして主人に歩いてみると云われて、恐る恐る二、三步踏み出した。

「そのうちに馴れるさ。禪をギュツと締めたら、サルマタなんか、おかしくて穿けなくなるぞ」

と主人は笑つた。股引を穿いて前にかがむと、余りびったりしすぎて尻が大きく割れ、常雄の羞恥心を一層かきたてた。上半身は前掛をつけるだけだった。うそ寒いやるせない気持が、常雄の心を激しくゆさぶつた。

名前も、常雄と云うのは魚屋らしくないと云うので、常吉と改められた。通称、常公もしくはツネと呼ばれることになった。主人や家族が、ぞんざいに「常公！」と呼ぶと、威勢よく「へイ！」と返事をしなければ、頬をはたかれるのである、すっかり鮮魚屋の小僧の装いになると、主人は先ず返事の練習を強制した。常雄は返事のたびに何回か頬をはられ、自然に涙で眼が曇るのを隠すことが出来なかつた。

店には、三吉と善助と云う同僚がいた。いずれも、主人が適当につけた名前である。三

吉は常雄より三つ年上で、来年は年奉公があげることになっていた。善助は常雄より一つ年下で、小学校卒業と同時に奉公に出されたのだそう。いずれも年に似合わず筋肉質のたくましい体で、修業の激しさを物語っていた。もう一人は番頭格の次郎である。彼等は番頭さんと呼んでいた。彼は、既に三十過ぎと思われる、脂の乗り切った感じの男であつた。顔は無骨者と云った感じであつたが、若者たちには、如何にもやさしく振舞つていたので常雄は、ちよつと安心した。店の者に紹介が済むと、常雄は庭先に連れて来られた。そこには盤台と天びん棒が置かれていた。盤台を担ぐ練習である。主人の指示で地下足袋を履かされると、天びんをどつと肩に乗せられた。一瞬、体がくずれるような重さだった。常雄は腰をかがめて、両足を力一杯踏んばつた。「その姿勢、その姿勢」と、主人が声をかける。庭の周囲を、よろめき乍ら廻るうち、要領が判つて来た。盤台を振らずに腰を左右に振り乍ら、調子をつけて歩くのである。禪が尻に喰い込んでくるのが気になったが、慣れるに随つて次第に苦にならなくなった。丁度、禪を締め上げた緊縛感が、重心を下腹部に据えるのに助けとなつていたし、ぴたり短い股引も、すべてこのような商売に都合よく習慣づけられているものであることが、無意識に常雄の頭に理解されて来た。主



人に「うまいうまい」と褒められると、自尊心が次第にくずれてゆき、魚屋の小僧の意識の中に溶け込んでゆく自分を、どうする術もなかった。

小僧としての最初の晩が訪れた。番頭や小僧は、家族とは別な貧しい食卓で食事をとった。家族は、常雄と合じ年頃の明男と云う少年と、弓子と云う娘と主人夫婦である。明男は、今朝までの常雄がそうであったような中学生の服装をしていたが、いかにも神経質そうな少年だった。この家には女中がいないので、小僧が家の中の用事まで、すべてやらねばならない。つまり新参の常雄が、今日から善助に代って明男の世話をすることを、主人から命ぜられた。

使用人の部屋は、便所のそばの四畳半である。畳は薄汚なく、通風が悪いので独身者特有のすえた臭いが充満していた。部屋の一隅の柱にはベルがついていて、呼び出しの符牒が音の長短で、それぞれの小僧に知らされるようになっていた。家庭内のことは、主として内儀から用事を云い渡されるのである。

常雄は、今日は見習である。食事の後かたづけから明日への準備が、二人の小僧の手によつていかがいしく処理されてゆく。それを常雄は、おぼつかない手つきで手伝うのである。だから、主人やお内儀からの小言の連続である。一通りかたずくと前掛をはずし、シ

ヤツをあてがわれた。半袖の前をボタンで留めるようになった毛織のもので、首廻りが大きくはだけていた。しかも真赤である。常雄は羞恥心を通りこして反動的につけると、明男の部屋に案内された。その部屋は別に立派でなかったが、小ぎれいに整理され野球の道具や書物が、中学生らしい調度品の中におさまっていた。善助は、明男の身の廻りの世話をすることを常雄に教えた。蒲団をのべると明男は無雑作に夜着に着替え、脱ぎ捨てた衣類を投げ出した。それを善助は綺麗に畳み、汚れた下着は風呂場に持ってゆき洗濯する。清潔な衣類をつけた明男とくらべて、今日からの常雄は禪と股引をつけた使用人である。

運命のあわただしい廻り合せに、悲しみもつかぬ感情がこみ上げてくるのを感じた。明男は主人に似て横暴だった。常雄が、ぼんやりしていると「ツネ、俺の蒲団を踏むヤツがあるか!」と怒鳴り尻を蹴った。はずみを喰って倒れた常雄は、善助に教えられた通りに「坊ちゃん、申訳ありません」と謝らなければならぬ。このような姿勢になると、馴れない禪が常雄の劣等感を益々駆り立てた。

魚屋の朝は早い。魚の仕込に河岸まで行かねばならないからである。これは、主人に番頭と三公が同伴する。常雄と善助は、朝を迎える家庭の準備が盛沢山に待っていた。朝の掃除や店の準備は、主人の仕附で禪一本でか

いがしく働くのである。これは、水仕事が多いせいでもある。善助の話だと「尻が皮むけないと一人前でないと」と云う程、小僧は忙しい。雑巾を握り四つん這いになった二人の小僧は、お内儀の金切声に追い立てられる。

天びんを担いでの客廻りは、常雄にとって最初の外出である。善助の後から馴れない恰好で、尻を振り乍ら常雄はついて行く。常雄は、往來の人目がすべて自分の体に滲がれているような錯覚がつきまとった。腰の部分を被う程度の股引や首から下げた前掛、頭に巻きた手拭などは、すべて昨年まで、中学生であった常雄の感覚に、しっくりこなかった。家々の台所に廻っての売込みも、あらかじめ教えられた通りの調子が出なかった。主人に叩かれ乍ら練習したセリフが、声にならないのである。最初の二、三軒は殆んど悲鳴に近い声をはりあげた。「可哀想に、新しい小僧さんだね」と云う言葉を、何回となく聞いた。庖丁の手さばきも善助を見て覚えるのであるが、数軒目に許されて常雄がこしらえた魚の切身は、客から苦情が出た。常雄は、善助の一挙手一投足を見守りながら、このような習慣に引きずられてゆく自分を想像して、すっかり憂うつになった。

常雄が、最初の折鑑を経験したのは、使用人の部屋に引き上げてからである。帳場で売上の計算をしながら善助の報告を聞いていた



主人の眼が、常雄をみてギラリと光ったのがひどく印象的だった。ベルの音で起された常雄が帳場に出かけると、主人が激しい憤りを浮べて坐っていた。常雄をみると忽ち罵声が室をこだまし、彼の身体を取り巻いた。主人の命令で服を脱ぎ禪一つになった常雄は、首筋を足で押さえられ後手に縛られた。そして、俯伏せになつて臀部を持上げるような恰好にされた。主人は「馬鹿野郎」と怒鳴り乍ら、繰返し繰返しバットで尻を叩いた。常雄の悲鳴が次第に哀れみに変わり、それが奴隷の哀願になると、主人は始めて打つ手を止めた。この新参の小僧に、絶対服従の思考が形成される最初の衝撃を与えたことに満足したからである。常雄は括られたまま風呂場に引きずられてゆくと、そこで冷水を浴せられた。折鑑の過程で始めて口にした奴隷の哀訴を、常雄は叫びつづけた。

最初の折鑑を受けた常雄は、翌日から不思議に魚屋の小僧らしくなつていった。そして禪一本の姿で働くことも苦にならなくなつた。

また常雄は、よく明夫の愛玩物として利用された。主人と似て横暴な明夫は、常雄が従順さを増すにつれて扱いが乱暴になつて、常雄を虐めた。常雄を馬にして跨り部屋の中を這い廻らせたり、麻縄で縛つて尻を叩いたりした。明夫は又、善助と三公をも常雄の相

手をさせることもあつた。青年期に入つたばかりの若者達が、明夫のバットと竹刀で芸をする風景は珍しくなくなった。

小僧として生れ変つていった常雄は、次第に主人から目をかけられるようになった。常雄の体は、三公や善助のように逞しく鍛えられていった。主人は常雄を呼んで、よく風呂上りの体を揉ませることがあつた。その時の常雄は、巾の狭い三角禪をつけさせられた。これは、お内儀の手製で常雄の体に合せて作られていた。常雄にとっては、自分の姿が第三者の目に晒されていることが、こそばゆいような愉しみとなつていた。

常雄が完全に小僧として脱皮したのは、主人の命令で強制的に肌に刺青をされてからである。徴兵検査前の男子は、刺青をすると徴兵検査の時に激しく叱られるので、恐れてやらないのである。三公も善助も刺青をされずに済んでいたが、常雄の白く柔かな皮膚は主人の慾望を押さえ切れなくさせた。常雄の哀れっぽい願いをあっさりと退けると、主人は刺青師を呼び、右肩から腕にかけて緋ボタンを散らし、尻には主人の名前を入れた屋号を美しい化粧文字で彫り込ませた。尤も、このような化粧文字は番頭の尻にも彫られていて、彼が独身でしかも年期が明けてからも奉公するようになったのは、このためであると云うことを聞かされたことがあつた。だから

常雄が、これによつて一生がきまつたように感じたのも無理はなかった。綺麗に彫り上ると、常雄は新しい赤い六尺禪を締めさせられ、店の者には祝膳が出された。常雄は一人、床の間に立たされて、主人に命令される姿勢をとり乍ら肴にされるのである。強制的に飲まされた酒で緋ボタンは華やかな花卉を開き、尻のふくらみを走る化粧文字は、くつきりと浮び上つてほのほのとした美しさを湛えていた。それが尻に喰い込んだ六尺禪と、見事な対象をかもし出していた。「これで常公も一人前の魚屋になつた」と云う主人の顔は、如何にも満足げな表情である。

翌日の客廻りは、常雄に激しい羞恥心を掻き立てた。しかし、それは入店当時のそれとは、かなり違ったものであつた。一種のスリルとも不安ともつかぬ感情が一方にあつたからである。他人にどこかで見られることを期待するといった感情である。主人により「一人前にされた」ことになった常雄は、精神の転換ということもかねて、新しい股引が与えられた。しかし、それはガーゼにひとしい薄い晒で作られたもので、特に締めることを強要された赤禪が外部からよく透いて見え、近くで見れば尻の化粧文字さえも判読できる位であつた。しかもこの目は、前掛はせず胴巻だけで盤台を担がされた。主人は躊躇する常雄を叱りつけるように身仕度をさせる



と、客廻りに追い立てた。刺青をした若い小僧が尻を振り乍ら盤台を担いでゆく姿は。人目を引いた。「小僧さん、しばらく見えないと思つたら刺青なんかして、どうしたの」と

いう声や「赤い禪なんかして、おもてからよく見えるじゃないの」「この人、お尻に刺青してるわ」などと、こまかな観察までするの  
で、その度に身の置きどころに困るような羞

恥心に顔を赤らめた。

モモ引は汗と激しい足の動作のために皺くちやになり、露出する尻のふくらみを街を吹き抜ける風がたえずなせていた。(終)

## 夢五夜

### || 女はらきりの

イメージ

南方 純

## 1 狂恋の女師匠

「新さん、そりや、あんまりじゃないかい。」

湯上りの洗い髪、無雑作に横櫛をさした小よしは、立ひざで一杯茶碗酒をあおると、そこには誰もいないのに、狂わしげに口説きます。「どうせお前のつもりじゃ、たかがしがない

小唄の師匠と安くお見くびりだろうが……男ざらいで通したあたしが、これが生涯に一度と、弁慶じゃあるまいし本気に思うなんて……ふん、さぞ馬鹿な奴だと腹の中じや笑っておいでだろうね。新さん、お前は三河屋の若旦那、今度の縁談も無理じゃないと思うけど、たった一言のことわりもないとは、余りひどいじゃないか。新さん、女の怨があるものかないものか見ておいで。」

短刀を有合せの奉書でくるみ、左の脇腹につき立てて引廻します。女の執念、よろよろ立ち上って窓に手をかけ、夜の町を見据えます。三河屋の二階はあかあかと灯がとまり、にぎやかな婚礼のざわめきが、ここまで聞えてくるのです。

## 2 孤城の秋草

寄手のときの声にまじって烈しい剣戟の響きが聞え、今や火の手は姫の居室近くまで燃えひろがっています。煙をくぐって血だらけの武士が一人、杉戸の中に駆込んできました。



「作左、戦の様子は。」端然と経机を前に座った萩姫は、こう尋ねます。

「無念ながら負戦、もはや落城は目前でござりまするぞ。姫、おいたわしや殿には……」

「ええ、殿が……」

「唯今、ご御最期でござりまする。」

覚悟していたとはいえ、冷厳な現実を目のくらむ思いです。

「姫は敵將肥後殿の御息女、殿もこのまま逃げよとの思召でござった。」作左衛門は、じつと姫の顔を見上げます。

「敵の娘なれば逆隣にもすべきに、逃げよとは……お情が過ぎてお怨みに存じます。殿、萩もお後より参りまする。」

経机に香一炷、懐刀の鞘をはらって、

「作左、大儀ながら介錯を。」

### 3 女やくざの最期

「おめえさんの御亭主の弥太を、おれが殺したと。とんでもねえいいがかりだ。仏の権兵衛といわれたおれが、何でそんなことをするものか。」

太りじしの権兵衛は、小気味よさそうにお浜を見おろします。亭主の仇と切りつけたものの女のかなしき、刀は叩き落されて、高小手に縛り上げられたお浜は、口惜しそうに唇をかみます。

「縄は解いてやんねえ。おっと、そのまま助けてやるとはいわねえぜ。」

権兵衛の頬には残念な笑いが浮びます。

「なあ、お浜さん。おめえさんも仕損じて、はい左様ならじや帰れめえ。またいくら仏といわれたおれだって、命を狙われてなんにも云わずに許すわけにやいかねえじやねえか。男まさりのおめえさんだ。いさぎよくおれの前で腹を切ってあやまりなせえ。」

のがれられない絶対絶命、やくざ装束の前くつろげ、脇差を腹につき立て無念の十字腹、権兵衛は満足気に杯を上げます。

### 4 美人薄命

「お勝、早まったことをしてくれたな。」

息せき切って部屋に入ってきた家康は、その場の模様に一瞬立ちすくんでこう声をかけました。そこには、侍女のお勝が自装束をまとい、見事腹一文字に切って苦痛をこらえているのです。

「ああ、お殿さま。お、お情は勝ありがたく……」

家康を見上げて、お勝の目は何か訴えています。もう声がつれてきこえませんか。家康が、その小机におかれた遺書を取り上げて読んで見ると、織田信長から家康にお勝を引渡すよう強い申入れがあり、家康がそれを

断っている為、両家の戦争にまでなりかねない雲行きなので、自分さえいなければと思いい、自ら命を絶つと書いてあります。

「お勝、忝いぞ。おぬしの志は家康決して忘れぬ……長く苦痛させるも不憫……家康が手ずから介錯してつかわす。」

二十三歳、若き日の家康は太刀を抜いて、お勝の後に廻ります。

### 5 女賊改悛

暁近い宿屋の行灯に、寝もやらず物思いにふける一人の女客。前に血のついた財布が一つ。

「ああ、とんだことをしてしまった。」

財布の中には、三年越し尋ねていた夫の父宛てた手紙が入っていました。思えば今晩、街道の松並木で手に掛けた老人は、何と自分には舅に当る人だったのです。

「知らぬこととは……」

だが、いくらいつても返らないこと、あまた重ねた悪事のこれが報いというものでしょう。よしんば夫に又めぐり会えても、何で今更顔向けができよう。

「そうだ。死ぬよりほかには……」

覚悟をきめて片肌を脱ぐと、桜の刺青の鮮かな朱が、ぱっと行灯の光にteriはえて、時ならぬ春を思わせます。片ひざ立てて真一文字、改悛の短刀は深く女体をえぐります。突然窓に御用提灯の影が……。(終)





## 「告白」

## 羞恥を求めて

柴 崎 黎 子

久しぶりでペンをとらせて頂きます。奇クを購読できない事情にあつて最近は見失して居りませんが、きつとすばらしい記事が満載されている事でしょう。奇クはどうしても忘れることのできない文献です。

一カ月ばかり入院していて、先日退院したばかりで今日も床に伏したまゝこれを書いていきます。病院という所には、空想の上ではたぐさんの楽しい期待があつた筈でしたのに、実際は單調なつまらないものでした。高熱で

意識もぼんやりしていた何日かは排泄物も誰かがとってくれたのでしようけど少しも覚えて居りませんし、よくなつてからは安静と一日二回の回診だけで、トイレ位は自分で行けました。何だかとてもがっかりしてしまつたのです。

部屋の前の小さな庭では梅と山吹とが同時に満開です。福寿草もかわいゝ花をつけています。寢床の中も温まりすぎて気持ちが悪いほどで、こっそり下穿きも脱いでしまつてピンクのねまき一枚です。予定通りだと二、三日後にお花が咲き出すのですが、私はこの時期になると一番興奮しやすいようです。こうして一人で静かに寝ていても、私流の空想があとから／＼湧き出して来て身体をじいんと熱くさせます。

女であること——が、何となく嬉しくて仕方ないのです。男の人に知れない生理の秘密が私を喜ばせ、私に妄想のきっかけを与えてくれます。

私は羞しめられたいのです。女として堪えられないすべてを白日のもとにさらし、すべてのひどい行為を受けたいのです。私は羞恥で死んでしまいたくなるでしょう。でも死んでしまいたくなるほど羞しめられたら、うれしいだらうなと思うのです。

満員のバスの中などで、身動きできないほど押されて男の人の胸に身体を倒されてしま



う時、私は耳を染めながらもとても楽しいのです。皆様も御経験があると思いますが、二本の足が離ればなれになってしまつて、その間に他の人の足が入ってしまう事があります。しかもそんな時はうしろからぎゅっと押されますから、身体はびったり密着してしまします。

去年の秋、学生オペラがあつた時、その会場で忘れられない体験がありました。窓はすっかり黒幕でおゝつてあり、その日一日だけの公演だったものだから、女子高校生や学生服の大学生がぎっしりつめこんで、後の入口からはわっしよい／＼とかけ声をかけて押しこむほどの盛況で、じつとしていてもポタポタ汗が落ちる暑さでした。私は前後を大学生にはさまれてしまつて、片足を上げたらそれが下りないという混雑の中で、三時間四十分も立ちつづけたのでした。後からぐっと押されて片足が前の大学生の横に出たとたんに、入口の戸がしめられ、それきり身動き出来なくなつてしまつたのです。私の両足は前の大学生の片足をはさむ恰好になつてしまい、後からは別の大学生の足が私の足の間に入っていました。そのまゝの姿でオペラが上演され始めたのですが、心臓がどき／＼してしまつてろくに鑑賞もできませんでした。私は両手で無意識に胸を押さえ、汗びっしりになつてしまいました。後の大学生の手は、ちよう

ど私のお尻に當つていて、時々もり／＼と動くのです。私はそれが何ともいえない気持ちだったので、逃げようとして腰を前に引くようにすると、今度は腹部が前の大学生の身体に當つてしまいます。私は仕方がないんだと観念して（本当は喜んで観念したのですが）後の大学生のするまゝになっていました。仕方がないという状況のもとでは、ずい分ひどい場面も自分に許せて、喜びさえ感じるのには私ばかりではないと思います。

三時間四十分はずい分長く思われました。私は胸から手を放し、胸を大学生の背中に當てたまゝ、一つ冒険をしたのでした。

普通なら恥かしくてとても口にさえできない事を、私はしてしまつたのです。顔は火のように火照つて、心臓は破れそうに躍っていました。それも前後を忘れて自分の身体の感覚の為にしたのならいざ知らず、私の場合は前の大学生に、その女の秘密を見せつけて精神的に羞しめを受けたかったからに外ならないのです。

オペラが終つて、どっと人垣がくずれるように入口から外へなだれ出ると、私は後をも見ずに一目散に駆け出していました。その大学生に顔でも見られたら生きていられないような気がしたのです。ずい分走って街中へ出ると、ほっとすると同時にくら／＼と目まいしました。

その時のような羞しめの感覚が、ともすると私に返つて来て切ない欲求を起こさせるのです。できるなら、どんな羞しめでもいい、すべて他の人の力によつてされてみたいと思ふのです。

羞しめといつてもいろいろあるでしょうけど、私は精神的な屈辱を第一義とするようなのは好みません。あくまで身体に加えられる屈辱でありたいと思います。皮相な考えのようですけれども、私みたいな女でも、詩にも音楽にも憧れる事があるので、自分の生命を尊く見つめる事もあるのです。精神の中には、汚されない神様を持っていたような気がするのです。

そこで私が希う羞しめとは、子供の火遊びみたいなものでしょうが、覗かれない、見られたい、触られたい、知られたい、というようなものになってしまいます。

その中でも最も強烈に私を刺戟するのは、覗かれないという欲望です。夜寝床の中で誰もいないのにズロースをずり下ろしたり、とつてしまつたりして腰を外へ突き出して寝てみるのも、誰かその辺から覗いているのではないかという気がするからです。又、便所の戸を少し開いておいたり、鍵をかけないで用をたすのもそのせいです。誰か覗いている明るい部屋で、知らんふりをして着換えをしたり、美容体操したりしてみたいとも思いま



す。

見られたいというのも同じ気持です。誰もいなくてもいゝから、日光の輝く野原で全裸になつてとんだりはねたりしてみたいと思うのです。大自然に見られるだけでもずい分楽しいだろうと思います。外国では裸体クラブというのがあつて、男も女も全裸で暮している所があるそうですが、羨しいと思ひます。そんな所に行けたら私もいじくしないで大きな顔して裸の生活を楽しめるでしょうが日本にはまだく望めない事なのでしよう。裸で馬とびしたり、美容体操したり、鉄棒や逆立ちや、相撲などどったりして遊ぶ事ができたら、私はきっと一番先に出て行つて仲間入りするだろうと思うのです。

男女混浴の温泉なんか、とても魅力があります。(私の今住んでいる近くの山あいにもあります)公然と裸になれて、自然に「見られる」唯一の場所ですもの。ほんのちよつと手足を動かすだけで、こういう風にでも男の人の視線を受ける事ができます。温泉は湯舟が洗い場と同じ高さですから、無意識でいてもとんでもない所を見せてしまう事があります。私は意識しすぎるせいか、かえつてそんな失敗はしませんけれど、十二、三歳の女の子が湯舟に背を向けて髪を洗っている時にお尻を天井に突き出して平氣でいるのなどを見ますと、私もあんな風にしてみたいあと考

えるのです。

アトリエ社から出た東郷青児のヌード写真集「三人のヴィナス」を見たのですが、その姿態の自由奔放さに思わず嘆息をついてしまいました。正面接写で、足を開けて腰かけているポーズなど、私がやってみたくて心に叫んだほどでした。

私は顔にも身体にも、自信なんて大袈裟なものじゃありませんけど、人に恥じない位な気持がなくなりました。画家のモデルになつてみたいと思ひました。髪も解けば肩のずつと下まで下がる位長いし、東郷先生ならこの髪を愛して下さるのではないかしらなんて考えます。アトリエでなら、どんな恰好をさせられても恥かしいと思わないかもしれせん。

触られたい、という気持はそんなにひどいものではありません。別に感覚の為に触ってほしいのではなくて、やっぱり羞められたいからです。

七つか八つの時だつたと思いますが、同年のヒデオちゃんも、もう一人の男の子が薄暗くなつた公園で私に悪戯をしかけたことがあります。

その夜は家に帰つてごはんも食べずに布団にもぐりこんで、じつと顔をかくしていた覚えがあります。でもその記憶は今日になつても私から去らず、今そうされたらどうだろう

なんて時々空想してみるのは、私には、そのヒデオちゃんでない方の男の子が、「うつ伏せになつてくれよ。」といった言葉が妙になつかしいのです。

ヒデオちゃんという子は今考えるとずい分悪い子だつたようです。すぐ近所の子なのですが、よく私をさそい出しては変な話をするのでした。

もう忘れてしまいましたが、その他にもいろく悪い事をして喜んでいたようです。

知られたい、というのは私の悶えでもあるのです。女として私がつけているもの、その営み、すべてを誰かに知つてしまつてほしいのです。見るばかりでなく、触るばかりでなく、実験され、解剖され、徹底的に調べられてしまいたいのです。

お花の始末の時など、強烈にそれを感じます。若いお医者様にいろく生理の説明を受けながら、手当して貰えたら。又、この臓器を切開して、流血の母胎まできれいに掃除して貰えたら——と。

以前、キャンピング地で学校の先生に浣腸して頂いた時の感激は忘れられません。藪の中へつれて行つて下さつて、まっくらではありましたが、一米も離れない所で私の排泄につきそつていて下さつたのです。あの先生は私の生理現象をつぶさに御存知だと思つと、何となく嬉しくなります。



中学生の時、ひげ面の理科の先生が随意筋の説明で、

「例えばほら、皆のお尻の穴だ……。」

と笑いながら指を丸めてつぼめたり開いたりして見せてくれた事がありました。皆赤い顔をして笑いころげましたが、私には異様な刺激でした。その事から私は自分が理科の実験材料にされる事を望むようになり、教卓の上に俯伏せにされて皆に覗きこまれて説明の具にされる場面を空想して楽しむようになってしまいました。

私は又、直腸という言葉にもとても惹かれます。私の考えでは、女の身体の中で最も忌まわしく恥かしいのは直腸ではないかという気がするのです。そこにつまるものこそ、女

## 絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略面の添布をお願いします。(困難なときは略面はなくとも差支えありません。)(編集部)

の一番羞恥の強いものじやないかと思うのです。だから直腸という言葉を知りたくて私は紅潮してしまいます。

つい最近の毎日新聞に直腸癌の記事が出ていました。見出しの大きな活字に「肛門」という字があったのにも驚きましたけど、本文を読んでみると、触診する——触診は肛門から指を入れて探るのである——というふうな個所がありました。又、肛門鏡とか直腸鏡という器具も出ていましたが、どんなものなのか知りたいと思いました。

おむつにも興味があります。私は満二歳になるとおむつは要らなかつたと母に聞いた事がありますが、今おむつをさせられたらどんなだろうなと空想します。おむつをされる時より、ベト／＼に汚してしまつたのを取りかえて貰う時の事がすてきです。そこに汚されているものは、女の一番恥すべきものだと思うからです。

その意味で「赤ちゃんごっこ」なんか楽しいにちがいありません。病院で時々考えた事があるのですが、大好きな男の人に一日だけママになって貰って、私はベビーで手も足も動かさないのです。食べる事は勿論、排泄もおむつにとって貰うか、或いはトイレへつれて行って貰うのです。それを考え出すと、今ごろはこうしてあゝしてと、心の中にさまざま情景が浮かび上って際限がありません。

せん。

夏などワンピース一枚で、ブローズはとつてしまつて外出する事は今でもあります。下に何もつけていないと思うと、それだけで胸が躍つて楽しいのです。東京の電車の中で、丸裸の腰をまくられた記憶がありますが、又されてみても——なんて気がします。

私はお尻をほころばせたズボンを持っています。いつだったかわざ／＼糸をぬいて十五センチほどほころばせたのです。勿論外出する時にはきませんが、家に一人にいる時は下は何も着けずにそれをはいてみる事があるのです。自分の心には、破れている事を知らないんだと思ひこませて、足を広げて寝そべったり、お掃除したり、机の下に頭を突き入れてみたりします。そして時々お尻に手をまわしてみても破れ目が開いていてと安心してしまふのです。つまり一人でお芝居をして楽しんでる訳です。

座ぶとんを三つに折つてその上にそのズボンで跨がってみるのもうれしいんです。座ぶとんが見えている、触れていると思うと、思わずその座ぶとんを抱きあげてほほずりしてしまいます。他の人がみたら何と思うでしょうね。

(終)





やがて、この山の村にも鬱陶しい梅雨がや  
つて来た。真向いに見える山から谷へ、霧雨  
が立罩めて、まるで墨絵に描いたようであつ  
た。

その頃になると開墾も畑仕事も出来ないの

で、彦造もおたねも京子も、みんな家でかま  
すを作ったり、炭俵を編んだりした。

彦造にとっては、おたねと京子を訓練する  
のに此の上もないよい時期であった。平常で  
さえ滅多に人の訪ねて来ない山の上のこの家

へ、五月雨のぬかるみの坂道とあつて  
は、大抵用事のある村の人でさえ敬遠  
して寄りつかなかった。

今日も彦造は昼過ぎには京子に風呂  
を立てさせて、悠々と湯に浸りながら、  
今日これからおたねと京子に加えよう  
とする新しい責めの方法を、あれこれ  
と頭の中で考えていた。軒を伝う雨だ  
れの音が、いかにも山里らしい長閑か  
な趣を見せていた。

「湯加減はどうでしょうか」

硝子窓の外で京子の声がした。

「良い湯だな、もう追焚きをしなくて  
もいいから、おたねに仕事を仕舞って  
すぐ後から湯に入るように言ってくん  
な」

「はい」

と京子は言つて、おたねに伝えた。

「おやそうかい、じやア京さんもそろ  
そろ其処らを片付けなさいよ」

という、いそいそとして風呂場へ  
立つて行つた。

京子が編み上りの炭俵を数回納屋へ  
運んで散らばった萱の屑を掃き寄せて、風呂  
の焚口へ回ると、中からおたねのなまめいた  
声が聞えて来た。

京子はふツと急に軽い嫉妬を覚えた。二人  
の場合、京子は彦造の常日頃の所行からして、



荒々しい嗜虐的な状景が想像せられるだけに、何となく悩ましい気持ちに駆られて、そそくさと其の場を離れた。

京子は先夜、縛られたおたねをくるんだ蒲団の上で彦造に折檻されてから、彦造に対して、それまでとは変った感情を抱くようになっていた。それまでは、ただ亡夫の兄という立場で畏敬の念を持っていただけであつたがあれ以来、彼女は彦造に対して無意識のうちに、異性というものを意識する様になつていた。しかも、その男性がかって彼女が身も心も許した夫に一番近い肉親であつて見れば、京子の心が彦造に惹き付けられてゆくのは、むしろ自然の成り行きといつてよかつた。彼女は彦造の容姿や音声や、いろんな動作の中に亡夫の信一郎の像を見る事があつた。そんな時が彼女には一番やるせなかつた。

——彦造にはちやんとおたねと云う人が付いているのだ。自分が彦造に心を寄せてはいけないのだ——

心の中で自分にそう云い聞かせては見ろのだが、兎もすると、そういった理性のワクを越えて甘酸っぱいような彦造の体臭がまざまざと彼女の脳裡に蘇って彼女を煩惱の渦に巻き込んだ。

彼女が仕事場を綺麗に掃除して再び風呂場へ行った時には、彦造もおたねも風呂から上つて、彦造は部屋へ、おたねは台所で薬籠の

中へ二合徳利を入れて酒の燗をしていた。「もう片附いたかい？」

「はい」

「だったら、お前さんも早く湯に入つて身体をお仕舞いよ。今日は彦造の前でいい事をしあけるからね」

そういつておたねは京子の顔を見ると、意味あり気に含み笑いを洩らした。

「ああ、それから京さん、湯に入る前に晩の鶏の餌はちやんと搔いておいておくれよ」

おたねはそれを指図すると、徳利を持って奥へ入つて行つた。

久し振りでこのうと昼の湯に浸つた京子は、珍らしそうに自分の腕や脚を眺めた。この山の家へ来てからは、町に居た時よりも相当激しく立働らく為か、肢体の贅肉が取れてすっきりとして健康な形になつていた。

彼女は湯槽ゆなの中で、両手を後ろに回して、後手に縛られた恰好をして見た。そうすると胸が張つて、何となく鳩尾のあたりが疼くように思われた。彼女はこれから彦造の部屋で自分とおたねとが彦造から受ける責めに、軽い恐怖と、新しい期待と、未知に対する好奇心を持って湯から上つた。

簡単に身繕いをして彦造の部屋へ入ると、彦造は箱膳の前に胡坐を組んで杯をなめていた。おたねは扇模様を一面に散らした紅い長襦袢姿で銚子を持って酌をしている。

「お京、お前のためにわざわざ町から買つて来たんだ。それを着な」

彦造がそういつて顎でしやくつた部屋の隅に、おたねの着ているのと同じ紅い色の鶴の飛んでいる模様の長襦袢と紺市松の伊達巻が置かれていた。

「お京、それを着たら台所へ行つて、もう一本つけて来て呉れ」

彦造は後向きになつて長襦袢に着換えている京子に、銚子を振つて見せた。

「いいやね、お酒はあたしが行つてくるからそれより京さんは早くここへお坐りよ」

「いいえ義姉さん、お酒はあたしが行つて来ますわ」

京子はきゅつと伊達巻をみると躍んだような動作で、急いでおたねの手から銚子を取つた。

彦造は膝の左右におたねと京子のあでやかな長襦袢姿の二人を侍らせて大満悦である。

「ハハハ、馬子にも衣裳と云うが、そうして長襦袢を着て見ると、おたねも満更捨てた女でもないな、お京は又一段と綺麗だ、モンペなど跨はかせて置くのは惜しい位なもんだ」

「どうせあたしや馬子ですよ」

おたねは彦造をちよつと睨むと、彼の膝頭をいやという程抓つかつた。

「ア痛ッ、ひどい事をするじゃないか」

彦造は杯を置くと大そうにいつて膝頭を撫



でた。

「いつも私を責めているじゃないの、これ位の仕返しは当然よ。ねえ京さん」

京子は返事のかわりに、眼元でちよつと微笑んでみせた。

「なアに、お前だって責められて喜んでるじゃないか。もうそろそろ始めようかな」

「ねえ、あなた。あたし、今日は京さんに面白い事をしてやろうと思っているの。いいでしょ」

「いかん、いかん。お京は俺が適当に仕込んでやる。お前は感情に突っ走って手荒な事をするから駄目だ。お前とお京とは大分気性が違うんだからな」

「大丈夫よ、あなた。あたし、こんな事を思いついたのよ」

おたねはそういうと、彦造の耳へ口を寄せて小声で何やら囁いた。

「ね、面白いでしょ。だから……」

「ふん、そいつア思い付きだが、じゃアやって見るがいい。それじゃア俺は一つ高見の見物と行くか」

彦造はそういつて京子の顔を見た。

「雨が降って部屋が暗いからランプをつけようよ。灯をつけたら京さん、ここへお出で」

京子が四つの置ランプと二つの吊ランプに灯をともしておたねの傍へゆくと、おたねは京子の腰紐を捌いて両手を後に縛って、仰向

けに転がした。

「腕が痛いだろうから薬にして上げるよ」

と云って、座蒲団を二つに折って京子の尻の下へ挟んで、するすると伊達巻を解いて長襦袢の前をはだけた。ふつくらとした京子の乳房が盛り上り、みぞおちからお臍のあたりへ、ゆるい弧を描いた桜色の肌が紅い長襦袢の色に囲まれて、惚れぼれとする様な色気を見せている。

「いい身体をしているねえ。」

そういいながら、おたねは平手で京子の鳩尾のあたりをびしやびしやと叩いた。反り身になって、緊張している京子の腹がピクピクとその度に動く。おたねは、っと台所へ立って行って、木のお椀を二つ持ってきた。そしてその椀を京子の乳房に冠せると、両手でぐッと押しつけた。二つの乳房はお椀にすっぽりと嵌り、お椀のふちが、ぎりぎり乳房の周囲に喰い込んだ。

「ああーッ」

と京子は思わず悲鳴を上げた。すると今度は急におたねが、そのお椀を引ッ張った。押付けられて、中が真空の様になっているお椀は中々、京子の乳房から離れなかった。

「これは又、よく喰っ付いたもんだね」

おたねは面白がってぐいぐいと引く。それに吊られて胸を引き上げられるように、乳房を吸い上げられるような、何ともいえない苦

痛に耐えかねて、京子が思わず上体を上下にきつく揺ぶると、そのはずみにスポツと、変な音を立てて乳房からお椀が離れ、京子の上体がどうと畳に落ちた。

乳房の周囲が、押し付けられたお椀の縁で赤く丸い線が入っている。

「どう、もう一度やろうか」

「ああッ、もうやめて……」

京子は、いたずらそうなおたねの瞳を見ると、慌ててごろりと身体を横に向けた。

「横になっちゃアいけない。さア、上へお向きよ」

おたねは京子の肩に手を掛けて、元の仰向きにすると

「お京、痛かったかい、おたねは無茶をするからな、今度は俺が少し責めてやろう」

と、盃を置いた彦造が箱膳を横に押しやって一膝、乗り出した。

「お前さん、何とかいつて京さんの身体に触りたいんだらう」

「馬鹿ア言え、だが、お京も一人で淋しいだらうからな」

「それで浮気をしようとおいいかい？」

「ハハハ、やきもちを焼くんじやアない。お前はだまって俺についてればいいんだ」

彦造はそういいながら、京子の肩をぐつと掴んで起し上げた。その次には大きな掌でお椀を乳房にぐいぐいと押しつけた。今度はそ



のお腕を引つ張ったかと思うと、押した。そうして、それを何回も繰り返した。

京子は彦造を見まいとして眼を瞑った。烈しい乳房の圧迫に身をよじて喘いた。苦しいが、ただ苦しいだけの気持ではなかった。ずるずると彦造に引入れられてゆくような、哀しい女の感情が、引き絞られる乳房の苦痛感を通じて彼女の全身を突ッ走る様に感ぜられた。彦造が一きわ指に力を入れてギユッと押しつけると、京子は

「くーッ」

と歯を喰いしぼってのけ反った。思わず身体が硬直し、両足を踏ん張って反り身になると、彼女の腰巻の裾が割れて白い脛がランプの光の中にくっきりと飛び上った。

「お前さん、もうおよしよ。」

おたねは、京子の乳房にお腕を押し付けている彦造の腕を捉えて意味あり気な眼付をした。そして京子に向って

「お前さんはうちの人に乳房なんか触らせて、いい気になっているか知らんが、変な気持なんか起すんじやアないよ。お前は今は後家さんだ。昔だったら髪を剃って、頭を丸めて尼さんになっているんだよ。そうして全然男気のない淋しい僧房で念仏三昧に暮していたんだよ。それをお前さん、男盛りのうちの人に、肌へ手を触れて貰えるだけでも幸福だアね。それをいい気になっておかしい真似な

んかすると承知しないよ。え、わかったかい」  
京子は、嫉妬に燃えるようなおたねの眼を見ると、思わずこっくりと頷ずいた。

「ふん、ちよつと納得したような顔をしているが、そうすぐ悟り切れるものじやアあるま

い。なア京さん。お前さんが——私しや貞淑な未亡人です——という事を忘れないようにお前を得度してあげようよ。私の言うことをきいて素直に、尼さんになるんだよ。」  
おたねはそういうと、つツと立って一個の



TAKUSI



吊ランプの紐を伸ばして、京子の方へするすると下げた。

京子は首を捻じめるようにして軽い不安の眼でおたねの行動を見ていた。おたねは鏡台の前へ行つてしばらくごそごそしていたが、やがて、こちらを向いた彼女の手に日頃彦造が使っている鋭利な剃刀と髯剃りブラシが握られてゐるのを見ると、彼女は本能的に

「ああッ、堪忍して……」

と叫んで両膝を固く合せ、渾身の力を罩めてところどころと襖の際まで転がっていった。

「何だねえこの人は、案外往生際が悪いんだね。何もそう、逃げることもなんかありやしない。もうお前さんには用事のない物なんだから。さあ、いい加減に世話を焼かせないでこちらへ来るんだよ」

おたねは京子を再びずるずると部屋の中央へ引き戻すと、一旦彼女の後手縛りを解いて、衣紋竹で両腕を横一文字に縛り直した。

それでもうどう藻掻いても寝返りは出来ない。それからおたねはもう一本の衣紋竹を持って来て、今度はその両端に京子の両足をそれぞれ固く縛り付け、座蒲団を四ツにたたんで京子の尻に敷くと、京子の身体は完全に身動き出来ない状態になった。

「いいかい、じっとして……動くと切れるんだよ」京子はおたねの声を聞きながら、観念の眼を閉じた。

京子がかつて信一郎と一緒に暮していた時、自分の襟足の後れ毛を刷って貰った事があつた。ぐっと襟をはだけて首を伸ばして待っている、べったりと冷たい石鹼水が塗られて、思わず首をすくめたくなる様な氣持の悪さ、それからゾリ、ゾリと皮膚の上を剃つてゆく剃刀の音と感触の氣味悪さ、耐えられぬ、という程ではないが髪が生え際に逆らつて逆剃りに擦り上げられる時の、何ともいえない痛みを、身に泌みて體驗した事があつた。

おたねは、剃り終つた剃刀の峰で床をトン

トンと叩きながら、

「どうだい京さん、手鏡を持って来てお前さんの貞女の姿を見せてあげようか」

といった。それまでチビチビと盃を舐めながら京子とおたねの様子を眺めていた彦造

は、やおら立上つて部屋を出て行くと、先刻京子がつ作つておいた鶏の餌の容器をぶら下げて帰つて来た。そしておたねに

「鶏小舎へ行つて、元氣の良い奴を二、三羽抱えて来い」

といいながら糠と菜ッ葉を小さく刻んで水で捏ねたその餌を、杓子の先で掬い上げて京子の両腕や胸から腹、足先までベツタリと塗り付けた。

やがておたねが雌雄三羽の鶏の羽を掴んで提げて入つて来た。

「鶏責めとは面白いね」

そういいながらパツと手を離すと、鶏は一せいに羽ばたきをしながら京子の肌を目がめて飛び降りた。そして、

——グワッ、グワッ、クッ、クッ——

と啼き声をあげて京子の肌に塗つた餌を食べ初めた。貪婪な鶏は先を争うようにして餌を突ッ付いた。その度に京子の肌は鶏の鋭い嘴で啄まれ、まるで錐を刺すような痛みが間断なく責め立てた。

「ああッ、もうやめて……」

京子は夢中で首を振りながら身を揉んだ。彼女の身震いで振り落された鶏は、グワ、クッ、と啼きながら何度でも這い上り、飛び上つて京子の肌を襲つた。もう殆んど啄み尽して、餌の影が見えない様になつても鶏は一向に突ッ付く嘴を止めなかった。むしろ、そうなるに肌を突ッ付く刺激は一層ひどくなつて

「ああッ、ああッ」

と叫びながら、荒い呼吸を弾ませ、五体を波打たせて身悶えした。

京子の苦悶に喘ぐ表情を見ながら、彦造は今度は指で丁寧に京子の臍とその周囲に餌をうすく撫で付けた。三羽の鶏の嘴は、一齊に京子のちよいと凹んだ臍に集中したが、三羽の鶏が一度に京子の腹の上には上れないのでお互が相手を押し合うと、一羽はばたりと脇腹へ滑り落ちる。今度はその鶏が駆け上ると外の一羽がつるりと滑り落ちた。そうして三



羽の鶏は互に競り合つて、終には臍の中のごままで、喙み取つてしまふのであった。

京子はもう叫ぶ氣力もなくなつて、ぐったりと伸びてしまった。胸から腹へかけて、鶏の喙んだあとが無数の紅い斑点になつて責めの痕を残している。

「お京は今日はこれ位にして置こう。さあ、ぐんなりしないで、しやんと立って小舎の鶏に餌をやつて来るんだ」

彦造はそういつて、京子の手足の縛しめを解いたが、彼女は暫らくは起き上る事も出来なかつた。

彦造は部屋の隅に立て掛けてある大きな机を提げて来て部屋の真中にでんと据えると

「おいおたね、今度はお前の番だ」

とおたねを促した。

「ええ、京さん、鶏に餌をやつたら、さつと身体を流して夕御飯の支度をしてお呉れ、そして、この部屋へ来るんじやアないよ」

といいながら、京子をその部屋から押し出すようにした。

京子は先刻まで自分の肌を責め抜いた鶏を戸外との境の障子を開けて表の庭へ追い出すと、手早く仕事着を身に着け、餌の容器を下げて雨の鶏小舎の方へ出て



行つた。部屋を出る時ちらつと見た大きな机の四本の脚に鉄の鎖が取付けられて、それに紐がぶら下っているのが眼についた。

京子は鶏の始末をすると、風呂の下を一度燃やして湯槽に浸つた。彦造とおたねが、今頃どんな事をしているのだろうか、と想像しながら上氣した自分の肌をいとはしそうに撫でて見た。鶏の嘴で散々突ッ付かれた跡が、ぼつぽつと紅くなつて湯に滲んだ。

湯から上つて身体を拭きながら、先刻のおたねの嗜虐に燃えた眼を思い出した。

それから約一時間程たった。京子は飯を炊き、芋の煮付けを済まし漬物を刻んでいると「お京、もう夕飯の支度は済んだかい？」

といいながら彦造が部屋から出て来た。昼過ぎからチビチビ飲んでいた酒の酔が廻つたのか、彦造の眼が充血している。

「ええ、もうお茶を沸かせるだけです」

「じやア、お茶はあとで良いから、こっちへ来な」

「はい——、でも」

京子はさつき、おたねに「この部屋へ来るんじやアないよ」といわれた言葉を思い出して逡巡した。

「どうした。まだ夕飯には早いよ。なに？」

おたねが？ハハハ、あいつ柄にもなく恥かしがつているんだよ。」

「でも……」



「まアさ、おたねがどんな責め方をされているか、お前もよく見ておくがいい。さア」

彦造はそういうと、なおも拒もうとする京子の手首を捉えて部屋の中へ引き入れた。

京子は敷居を跨いで部屋の中へ一步入った途端、思わず

「あッ」

と小さく叫んで眼を瞠った。

先刻、部屋を出て行く前に彦造が置いた大きな机の上に、腰巻一つのおたねが大の字に縛られ、口には手拭でしっかりと猿ぐつわが咬まされている。そして、ふっくらと盛り上った双つの乳房の乳首を中心に、赤と青の点線で、乳房一ぱいに、菊の花弁が描かれていた。おたねの脇腹の横の机の上に、二つのインク瓶とペンが置いてあるので、京子にはそのペンでおたねの乳房を突いて、模様の入墨をしたものであることが直ぐ分った。

おたねは頸を持ち上げて京子を見た。その眼が、何ともいえない輝きを帯びて燃えていた。

「ううッ」

と何か云った様だが、猿ぐつわのために声にはならなかった。

「どうだ、面白い入墨だろう。お京にもしてやろうか？」

彦造は真剣とも冗談ともつかぬ顔付きでペンを取った。

「いいんです——やめて、義兄さん」

京子は手を振る様にして襖際まで退いた。

「フフフ、まあ、お京には今日は止めておこう。いずれはお前もおたねと同じように入墨してやるけれどナ。これからおたねの腹へ蟹を描くからよく見ているんだ」

そういつて京子とおたねの顔を暫らく見ていたが、いきなり引倒して縛り上げた彦造は京子を、そうして置いて、おたねのみぞおちの辺りを腕でぐツと挟むように腕を拡げて、青インクを含ませた尖鋭なペン先を、むっちりとした丘のように円く盛り上ったおたねの腹のまん中に突き立てた。

「むむウッ」

と猿ぐつわを洩れる呻き声と共に、おたねの太股がピクツと動く。

ツ、ツ、と彦造は器用な手つきで次から次へとおたねの腹へペン先を真直ぐに突き立てて細かい点線を描いてゆく。鋭いペンの先が肌を突く度におたねは両肢をピクピク痙攣させた。彦造の腕の蔭になって、おたねの顔は見えないが、両足の痙攣によって彼女の苦悶の表情が分るように京子には思われた。

菱形の蟹の胸を描き脚を描き、飛び出した二つの眼玉を描いて、爪は臍を挟んでいる図に描いた。その次には下向き的小蟹を一匹、その横に描いた。これは赤インクで山にいるせんちん蟹の、片一方だけ発達した大きな鉗

がおたねの臍を、挟もうとしている図であつた。

「どうだい。おたねの臍が蟹に挟まれている所は、ちよつと変っているだろう」

といいながら、京子の両手の縛しめを解いて、今度はその手の一つに縛り直すと

「さア立って」

といいながら彼女を柱の前へ曳いて行き、鴨居際の鉄の環に吊った。爪先で立つ事がやつの高さに吊られた京子は、今度は机の上のおたねを見下す位置に立たされていた。「さア、おたねをもう少し可愛がってやるかな」

と独り言をいいながら彦造は二本の衣紋竹を持ち出すとおたねの乳房の上と下とへ水平に載せた。

京子は、思わず頸を横に振って眼をそむけた。おたねの乳房は彦造に二本の衣紋竹でぐいぐい締めつけられて、その菊の花模様の入墨をされた隆起が、今にもはち切れるかと思われる程にくびれて、歪んで、張り切っている。彦造が丁度麵棒を使うように容赦もなくぐりぐりと捻じ回すと、おたねは必死の形相で頻りに首を振り、足先を折り曲げて少しでも苦痛をやわらげようと足掻いた。

「ああ義兄さん、やめて……」

京子は思わず、自分が責められているように錯覚して切ない声を上げた。



「なアに、おたねにはこの位が丁度良い加減だ。お前はだまって見ているがいい」

彦造は京子の複雑な表情を愉快そうに見ながら、今度はおたねの足の方へ回って、一本の衣紋竹をおたねの背中へ通してぐいと持ち上げた。

四肢を机の角に縛りつけられたおたねの身体を、無理矢理背中から持ち上げようとする衣紋竹の力に、彼女の腹から太股のあたりは、まるで蛙を仰向けに叩き付けたような恰好になった。

「ヒイーツ」

と猿ぐつわから洩れるおたねの悲鳴を素知らぬ顔で、彦造は左手でおたねの尻を持ち上げた衣紋竹を握り、右手に持った今一本の衣紋竹で、びんと張り切ったおたねの腹をピシャリと打った。

「あッ」

と京子が思わず叫んで眼を瞑ったが、再び眼を開いた時には、彦造の右手の衣紋竹は、今度はおたねの乳房の方で鳴っていた。

ピシャン／＼／＼。大掃除に畳を叩くように振り下される衣紋竹に、見る見るうちにおたねの肌には幾筋もの赤い線が痣のように印されていた。

四方から明るく照らすランプの灯の下に、おたねの足が白く泛び上って、激しい打撃に身をくねらせ、汗を吹きながら喘いでいる

姿。その傍の柱に両手を上に爪立ちの姿で縛られている京子の姿とが、彦造の眼には丁度水中の人魚が戯れているように思われた。

彦造は、おたねに手拭で眼隠しをしようと、立ち上って京子の傍へ近ずいた。

「どうだ、面白かったろう。これからはまだ変った方法で、おたねもお前も存分に責めてやるぜ」

そういいながら京子の耳から後頭部を後手でぐいと掴んで顔を近付けた。

「あれ、義兄さん……」

と、叫んで彦造の顔を避けようと本能的に

## 海原にありて歌える (一)

――誘拐されゆく美少女の詩――

菅谷はるみ

芳彦さん――

私、縛られてるの、縛られてしまってるのよ！

縄が、麻の細いロープが

私の手足に噛み入って、厳しく縛り上げてしまってるのよ！

そうよ

ほの暗い船艙の片隅 身じろぎすら出来ず、今は呻く力もなく、うづくまる私

藻掻いたが、その叶わぬ抵抗の中に、何故とも知れず却って男の暴力を求める矛盾した気持が動いていることを京子自身は気付かなかった。

彦造は京子の耳許へ口を寄せて、小さい声で囁いた。

「いいか、信一郎の事は忘れるんだ、これからは俺が可愛がってやるからナ」

京子のうるんだ瞳に大きく映っていた彦造の顔が、次第に信一郎の顔に変わって行くように思われて、京子はじっと眼を閉じた。

――未完――

三千ドルで取引された、一箇の商品。

そして船艙の中、ぎっしりと押し込められたり折り重なる美しい商品達の一人、いや一箇として、惨じめな囚われの身を、異郷はるか売られてゆくものよ。

芳彦さん――。

つい三日前、あなたとしっかり握り合った。その私の白い手、しなやかな指、桃色の爪は、今背中中にヒシヒシと振じ上げられて冷たい手錠の鋼鉄が手首に固く喰い込みロープがギリギリと噛み入って、シーンと凍れてしまっているのよ。



# 運命の少女

嵯峨紀世

「いよいよ、今日は旦那様のお帰りになる日だ。」

志津江は、此の家の主人——檜木英雄が社用で出張した此の一週間の間、練りに練った計画を実行する日を心待ちにしながらも、流石にその日を迎えると、その緊張に身震いをするのであった。

彼女は、此の家の主人——英雄に拾われて、此の家の女中奉公をするようになる迄は随分と苦勞を重ねて来た。中学校を卒業すると間もなく両親に死なれ、叔父に引取られはしたが、叔母の目に余る虐待に堪えかねて、僅かの金を叔父の家から無断で持ち出すとその足で直ぐ上京し、ある時は浮浪児の群れの中に混じって靴磨きをしたり、ある時は大衆食堂の飯運びをしたりしたのだが、こういうものか、その何れの仕事の場合も決って些細な事で仲間や先輩達から叔母の虐待以上のむごいリンチを受け、それに堪えられなくなつては

その仕事を止めるという事を繰り返した。元々、彼女は実際の年令を二つも三つも上廻っているといつても疑う者のない程大柄であつたし、丸顔で色も白く、まだうぶ毛の生えた柔かな綺麗な肌をして居り、うるんだようなつぶらで長い睫の瞳を持っていた為、醜い容貌の持主だった叔母や靴磨きの仲間、食堂の先輩達が嫉妬しての虐待であり、リンチであつたのだらうが、年若い志津江には矢張り堪えられぬ程恐しい事であつたのだ。そして食堂を飛び出して途方に暮れていた時、運よく通り合わせた英雄に救われ、女中を置く程裕福でもない此の家に小遣い程度の給金を貰つて、それでも恩人の家と思えば夜昼を問わず随分とマメに働き、此の頃では置く事を決つていた英雄の妻、英佐子までも「志津江さん、志津江さん」と可愛いがるようになった。



此の様に毎日々々を幸福感に浸りつつ送って来た志津江だったが、ある時、それは志津江が此の家に入って三ヶ月程過ぎた春だった。芙佐子が姉のお産扱いの為一週間程家を留守にしたその四日目の夜、一日の仕事を済ませ遅くなってから、久し振りで焚いた風呂に入っていた時、突然、眠られぬから一風呂浴びてと風呂場に入ってきた英雄の為に思わぬ運命の転換に遭遇してしまった。英雄にしてみると、始めは別にそんな気で風呂場に入ってきたのではなかったのだろうが、妻は留守であり、一人寝の侘しきを感じていたところを、年令以上に成熟しつつある志津江を目のあたり見せられ思わず知らずそんな気持ちになってしまったのだった。それ以来、芙佐子の目を盗んでは、英雄は志津江の部屋を訪れ、愛のささやきを交すようになった。始めは志津江も英雄を怨んだが、始めて知った男の甘いささやきによって、日を追うにつれその怨みは消え去り、逆に英雄を慕うようになってしまった。そんな状態を続けて来たある時、英雄が社用で一週間程出張する事になった。その出発の前日英雄はそっと志津江の部屋へ忍んで来ると、

「志津ちゃん、僕は出張で一週間程家を留守にするけれど、僕達の仲を芙佐子が感ずいている様に思われるから、若しかすると僕の留守中、その怨みで志津ちゃんを苛めるかも知れない。若し、そんな事をしたら帰ってから知らして呉れ。それを芙佐子を離婚するのにいい口実にする事が出来るからね。若し、そうになったら志津ちゃんお前は僕の奥さんになれるのだよ。遠慮しないで知らせて呉れ給えよ。それからね、明日僕の出発した後、僕の書斎の机の横に積んである本を古本屋に売って来て呉れないか。では頼んだよ」

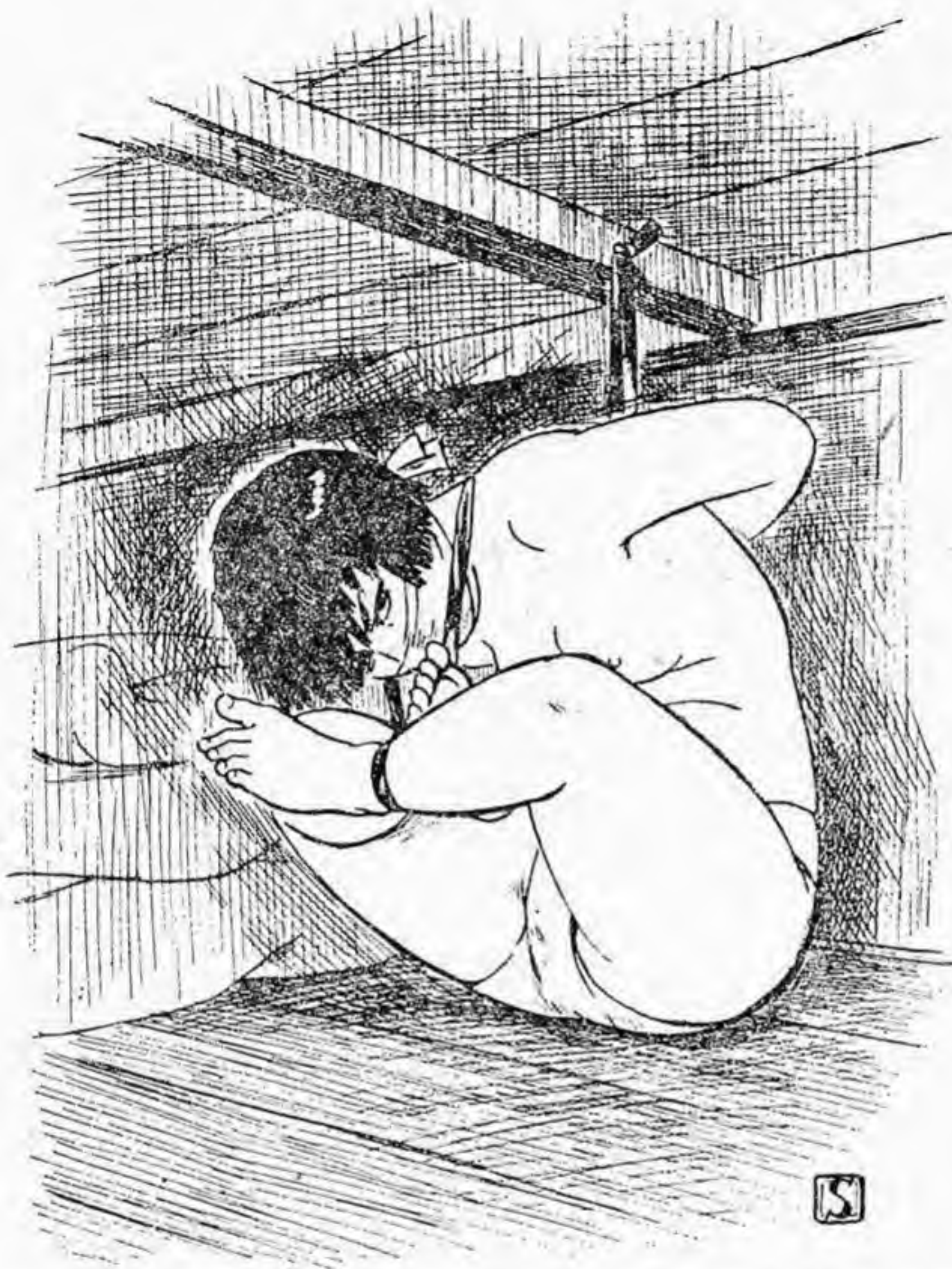
とささやいて、翌朝出発した。此の英雄のささやきと、翌日云われた通り古本屋へ持って行こうとした本の中に混じっていた雑誌が志津江に思い切った、そして大胆な今日実行しようとする計画を思いたたせる結果となったのである。その雑誌は積んであった本の中

程にカバーを被せた儘挟んでいたのだが、志津江が何気なく一冊一冊をべらべらめくっているうちに、不図縛られた女の絵や写真のあふことに気付くと、咄嗟に過去に自分が受けた叔母の虐待や仲間達のリンチの状況が脳裡をかすめ、何故か胸がドキドキし始め、その内容をゆっくり見、読んでみたい気がして、どうせ古本屋に売ってしまったのだから此の本一冊ぐらい抜いておいてもよいだろうと思いつき、用事が済むと自分の部屋に閉じ籠り、目を輝やかせながら一頁一頁を食い入る様に見つめながらめくっているうちに、ある頁に載っていた絵に目を止めた。その絵は、裸の儘、高手小手に縛り上げられ、猿轡を噛まれた年若い女性が両足首と首とを縄で繋がれ、「く」の字型にされた姿で転がされ、その傍で女主人が小気味良さそうに口許に薄笑いを浮かべながら見つめているという様子を描いたものであった。じっと穴のあく程それを見つめて居た志津江の脳裡に「若し、奥さんが志津ちゃんをいじめるような事があったら知らせて呉れ」とささやいて行った英雄の言葉が浮かんで来た。だが別に私を疑っている風も見えない奥様、従って苛めるなど到底考えられない奥様、何時も優しく可愛いがって呉れている奥様、こんな良い奥様に犯しもしない罪を被せるなど、私には出来ない。志津江は幾度かそう思いながらも、若しかすると旦那様は私の方が奥様よりも好きで、妻にしたいのではないだろうかなどと虫のよ過ぎる考えも浮かび、矢張り、英雄の愛を得たい、その事に思いが達するともう前後の見境もなくなり、芙佐子には済まないとは思いますが英雄の帰宅を狙って一芝居打とうと、毎日々々を此の雑誌の口絵や写真・挿絵を参考にして緊縛体のポーズを研究し、更に時刻や場所など綿密な計画を練って来たのだった。

遂にその日を迎えた。今夜九時過ぎには英雄は帰宅する筈だ。緊張にぶるぶる震えながらも志津江は準備だけを整えていた。彼女の部屋の押入れは、今日そっと芙佐子の居室から盗み出して来た芙佐



子のネーム入りのハンカチ、しごき、そして台所や物置から持出して来た手拭、麻縄などが押込まれてあった。苛められている自分を作り上げる為の用具である。準備は整った。あとは英雄の帰宅一時間前を待つだけである。志津江は興奮のあまり、夕食ものを通らず、さっさと後片付けを済ますと、美佐子に気取られない様にしな



がら自分の部屋に入ったが、流石にじつとしては居れず、立ったり坐ったりして時を待って居た。

美佐子の居室の柱時計が八時を打つ音がかすかに聴えた。待ち構えて居た志津江は、ぶるぶる震える手で急いで自分の着衣を脱ぎ捨てるとそれをその辺に散乱させ、パンティ一枚の儘押入れの下段に

入り襖を閉めると、先ず美佐子のハンカチを丸めて口の中に詰め込むとその上を手拭で覆い頬に食い込む程きつく巻いて首の後ろで結んだ。次にかねて作って置いた麻縄を大きく輪にしたものを肩から両腕の上に掛けると、次に美佐子のしごきを首に掛けその両端を組んだ両足首に掛けると、自分の身体が「く」の字になり息苦しくなるのを泳えながらぐっと引締めると足首に巻きつけきつく結んだ。次に両腕を背に廻すと、そこに下っている、さきに両腕に掛けた縄から背後に下げられた輪の中に手首を入れぐっと引上げると、胸から腕、手首に麻縄が食い込んで完全な「海老責め」の自縛態が出来上った。案外時間が掛った様だが、もうあとは英雄が帰宅して志津江の見えないのに不審を抱き、名を呼びながら探しに来るだろう。その時此所に居る事を襖に身体をぶつけて知らせる。その後は、奥様かと告げる。それで此の計画は成功という事になる。志津江は猿轡の為の息苦しさと屈曲した身体と肌に食入る麻縄の苦痛とを堪え忍びながら、此の計画の成功を心に念じ



て居た。

柱時計が九時を報じた。いよいよ旦那様が帰って来る。あと十分か十五分後には、との期待と緊張とに苦痛も忘れて唯、息遣いだけは激しくしながら志津江は耳をすましていた。だが、十分経ち、二十分過ぎても英雄の帰宅した様子はない。どうしたのだろう。途中で事故でもあったのだろうか。志津江は焦立って来た。間もなく柱時計は九時三十分を報じた。志津江の心は増々焦立ち、肌に食い込む縄の痛みが特に感ずる様になった。旦那様は何かの都合で今夜は帰宅しないのではあるまいか。若しそうだったらどうしよう。明日迄こうして居るわけにはゆかない。折角苦心して樹てた計画だけにと止めてしまおうか。志津江は縛った縄から手首を抜こうともがいた。然し、充血して腫れ上った皮膚の為に、いくらもがいても手首は抜けない。返って縄が皮膚に食い入り苦痛が増すばかりだ。手首が抜けなければ首と足首を繋いだしごきも、勿論口を覆った猿轡も解く事は出来ない。志津江は焦った。だが、どうもがいて見ても無駄だった。やがて、疲れ果てた志津江はぐったりすると、不図、かつて郷里で叔母の為に後手に縛り上げられて物置に放り込まれた時の事が想い出された。あの時も同じ状態だった。叔母の幼い子供が盗み食いをした事を志津江がしたように云ったり、叔母が自分で財布を置き忘れながら志津江が盗んだと云ってきかなかったりして、弁解する暇も与えず直ぐ手足を縛り、泣きわめくと五月蠅いからと猿轡を嵌めては家の裏にある物置の中に放り込み何時間も放置したあと、何時も口汚なく罵った叔母、そして、自分は物置の中で幾度となく何とかして縄を解き逃げられたらともがいてみては縄のきつさに諦め、口惜しさに泣きながら許されるのを待って横になった儘だったり、柱に繋がれた儘だったりしたが、その時の緊縛の苦痛が今再現された錯覚を感じ、何か慄然とした肌寒さを感じた。然し、現実がその通りで手首の麻縄は皮膚に食い込むばかりでどんな

にもがいても解けはしない。そのうちに腕や足が痺れ、曲げた背骨がズキズキ痛み始めて来た。やがて、その苦痛に耐えられなくなった志津江は、自分の愚行を悔みながら何時の間にか氣を失ってしまった。

それから間もなく、英雄が帰宅したのである。玄関の戸の開く音がして、奥から美佐子が「志津江さん、志津江さん」と呼びながら足早やに出て来て志津江の部屋の襖を開け

「あら、こんなに脱いだものを散らかして 一体どこに行ったのだろう」

と訝りながら襖を閉めると、廊下を小走りに玄関に向って行った。勿論、失神したばかりの志津江には聞えなかっただろうし、仮令聞えたとしても美佐子の呼ぶ声には応じなかっただろう。

間もなく、英雄と美佐子が話しながら志津江の部屋の前を通りかかった。不図、足を止めた英雄が

「志津江が見えないが、どうかしたのか」

と妻に問いかけたが、

「はばかりにでも行っているんじゃないんですか。先刻部屋を覗いてみましたけど見えませんでしたわ」

と美佐子に云われると「ふーん」と云い乍ら自室の方へ行った。

一時間程して、その後も志津江が姿を見せないのが心配になったのか、英雄が志津江の部屋へ「志津江、居るか」と襖を開けて一歩足を踏み入れると

「あつ、之は随分乱雑にしてあるなあ」

と顔を顰めながらも、室内にも志津江の姿が見えないのにけげんそうな面持をすると、しばし室内を見渡している裡に、不図押入れに気付くと、つかつかとその前に行き、ガラリと襖を開けた。と、中で襖に寄りかかるようにして氣を失っていた志津江が縛られた身体で英雄の眼前に転がり出た。「おっ、之はどうしたと云うんだ」



よもやこんな姿では想像もしていなかった英雄は、びっくりして咄嗟にどうすればよいか判断がつかなかったのか、しばし呆然と身体を「く」の字にして緊縛された志津江の目を射る様な純白の肌を見つめていたが、そのうちに目がらんと輝き出したかと思うとニヤリと口元に笑みを浮かべたが、咄嗟にその表情を隠すように元の驚きの面持に戻ると、瞳を閉じ、苦痛に耐える様に眉に皺を寄せた儘ぐったりしている志津江を抱き起し、揺す振りながら、その耳許で押し殺すような声で「志津江、志津江」と呼んだ。二、三回目ですうと薄目を開けた志津江は、目の前に待ち続けていた英雄の顔を認めると「あつ、旦那様」と叫んだ。いやそのつもりだったが、口をしっかりと覆った猿轡の為に英雄の耳には「うう、う」としか聞きとれなかった。

「志津江、これはどうしたと云うんだ」

何故か、志津江の縄も解かず、じっとその顔を見つめながら詰問する様に云う英雄に、計画通りに話そうと思つた志津江だったが、固く口を覆った猿轡の為に物も云えないし、又、之以上緊縛の苦痛にも耐えられないので「早く縄や猿轡を解いて」という身振りを示しながら、窮屈な身体を英雄の方へにじり寄せると、

「おお、そうだったね、猿轡が嵌っているんだもの、ものが云えるわけはないな」と云いながら、英雄はゆっくり猿轡を外し、首と両足首を結んだしごきを解き、両腕や手首の麻縄を解くと

「苦しかったろう。どうしたんだ。うん」

と改めて問い直すと、志津江がかねてからこう云おうと計画していた言葉を口に出さぬ裡に

「うん、そうか。そうだったのか。僕の留守を幸いに美佐子がお前をこんなにして苛めていたんだな。此のハンカチもしごきも皆美佐子の物だ。ね、そうだろう、美佐子がやったんだろう」

と、そっくりその儘同じ事を云って呉れたのには、永い間計画し

て来たとは云え、いざとなると、あの優しい美佐子に濡れ衣を着せる恐ろしさと良心の苛責に、その儘口に出し難かつた志津江としては全く有難いやら、ホツとするやらで、英雄の言にコックリと頷くとひとりで涙が溢れ出、その涙に濡れた顔を英雄にすりつけると声を殺して泣きじやくった。

「よしよし、もう泣くな。苦しかったろう。あんな恰好で縛られてそれに腕や手首も腫れ上っているし、さあ、布団を敷いてあげるから寝巻を着て、今日は此の儘ゆっくり寝んだらいいよ。さあ、さあ」

英雄は優しく志津江の髪を撫でると、立上って行って押入れから寝巻きを出して志津江に渡し、更に布団を出して敷くと、その上に志津江を横たえ、彼女の額に軽く接吻し、

「何も考えなくてぐっすり眠らないと疲れや痛みがとれないよ。いいかい」

と念を押しながら、証拠物件にすべく、美佐子のハンカチとしごきを手にして部屋を出て行つた。残された志津江は、何もかも順調に計画通り事が運ばれた事が嬉しくもあり、又恐しくもありだったが、布団の中で腕や手首を擦っている裡に、之から美佐子が英雄にどんな目に遭わされるかも想像しないで、身体の疲れと神経の消耗との為、何時の間にか眠ってしまった。

翌朝、志津江が叔母にぐるぐる巻きに縛り上げられた儘、物置の柱に繋がれ、猿轡の下からうめき声を洩らしながらもがいている夢を見続け、自分のうめき声にハッと目覚めた時は、何時もの朝よりも三十分近く遅かつた。驚き急いで起き上ると、腕の筋肉や骨の節々の痛みを泳えながら朝食の仕度に取り掛つた。美佐子はまだ起きて来ない。やっと仕度が整った頃、英雄が茶の間に腫れぼったい目をしてながらやって来た。志津江は昨夜英雄を瞞した良心の苛責もあり、英雄の顔を正視し得ず俯向きながら朝の挨拶をすると、英雄は



「やあ、お早よう。どうだ、よく眠れたかい。まだ身体が痛いだろう」

と優しく言葉をかけながら洗面に向った。どうしたものか奥様はまだ見えない。まさか昨夜の裡に離縁して家を出してしまった訳でもあるまいに、本当にどうしたのだろう。志津江は半ば不思議に思いい、半ばそんな期待を持ちながら、洗面を済ませて茶の間に戻って来た英雄に

「あのー奥様はどうかなさったのですか」

と、半分は口の中で問うと、英雄は

「あー、美佐子か、何だか身体の具合が良くないといって寝て居たから今日は一日起きないかも知れん。ああ、朝食か、いいよ。僕らが済んでから、僕が持ってたってやるから」

と至極あっさり答えながら箸を取った。美佐子に対する憎悪の念など微塵も感ぜられない英雄の此の言葉を聞くと、志津江は、ある期待を持ちながらの問いでありながらも、それが外れた事で、何故か、内心ホッとしながら、きつと昨夜、私の事で旦那様に詰問されそれを反撥するあまり起きて来もせず寝て居るのかも知れない。などと自分に都合のよい解釈をして居た。

やがて朝食が済むと、英雄が

「今日は慰労休暇で休めるのだが、美佐子の食事が済んだら、用務の報告に一寸会社へ出掛けるから、ほんの一時間もかからないだろう。お前、美佐子の寝んでいる所には行かなくていいよ」

と云いながら、美佐子への食事を盆に載せながら、自分達の寝室へ行った。

二十分程して半分程口をつけたらしい朝食を下げて来た英雄は、出勤の用意をして

「いいかい。美佐子はゆっくり寝たいと云ってたから、その儘にしておいて呉れよ。一寸したら帰って来るからね」

と云いながら、送りに出た志津江の頬に軽く接吻をしてあたふたと家を出た。残された志津江は朝食の後片付けを済ませ、主人達の寝室を除いた他の個処の掃除を了えた後、一人自分の部屋へ入ると今朝からの英雄の言動では美佐子を離縁してやろうという考えなど微塵も見られないように思うが、又昨夜の自分への労り様、今朝の優しい言葉、そして出勤前の接吻などと考え合わせると自分への愛情には変りはない様にも思われ、何か判然と理解出来ない気持の儘まだ残っている腕や骨の節々の痛み、そして寝不足の為モヤモヤした頭の中などの為、そうと横になると何時の間にかウトウト眠りに入りかけた。その時、玄関の開く音がして英雄が帰って来た様子に、ハッと我に帰った志津江は急いで玄関迄出迎えた。

英雄は何か非常に機嫌良さそうに、志津江の「お帰りなさいませ」と云う言葉にも

「あー、留守中、何もなかっただろう。うん、飽か、いいよ、自分で持っていくから。それよりもどうだい、今日は一日僕が家に居るのだから、久し振りに映画でも観て来ないか。どうせこれから書き物をしなければならなし、静かなほうが却って都合が良いからなほら、映画代」

と少し浮き／＼しているのではあるまいかと思われる程明かい表情だった。志津江もついそれに釣り込まれて、今朝からのモヤモヤした頭の中の暗雲も晴れた様に明るい顔になり、英雄の差し出した五百円札を受け取ってしまった。そして、自分の部屋へ戻ると早速外出の仕度を整え、出掛けるのを断るべく英雄の書斎の前迄行って声を掛けたが返事がない為、きつと寝室で奥様の容態を見ているのか知れないと思いい、寝室の前迄行ったが、その時、微かに中から人のうめく様な声が聞えた様に思った。志津江は奥様の容態がよくなくて苦しんで居るのではないかと思いいながら、

「あのー、旦那様」



と中へ声をかけると、びっくりした様な顔で中から扉の戸を細く開けた英雄が

「何だ、お前。まだ出掛けなかったのか。遠慮しないで行っておいで」

と厳しい口調で云って扉を閉めかけたので、

「奥様、お悪いんじゃないのですか。」と聞くと、英雄は

「あー、大丈夫だ。心配は要らないからゆっくり行っておいで」

という、すうーと扉を閉めてしまった。志津江は何だか少し変だなど思ったが、久し振りに映画を観られる嬉しさの為、それは直ぐ忘れ、いそいそと家あとに街に出て行つた。久し振りで街の賑やかな通りを歩き、浮き／＼した気持ちになった志津江は、家に最も近い所にある映画館に入つた。中は空いて居たが、映画は時代物と現代物の二本立てで、久し振りの志津江には此の上なく面白かつた。

だが、偶然と云おうか、どちらの映画にもその中に緊縛場面があつたのには、自分でその経験を有する志津江にとっては何かギリとくるものがあつた。現代物の方は、七つの顔を持つ探偵が野球賭博団を發くと云うものだったが、最後の方で野球選手の恋人が悪漢に誘拐され、悪漢の情婦の為に椅子に縛りつけられ、猿轡を嵌められてもがくシーンと、恋人と二人で機械鋸の台に縛りつけられ、油汗を流しながら猿轡の下からうめき声を出しもがくシーンがあり、時代物では最も有りふれたストーリーだったが、悪人の為に攫われた地図の持主の妻とその女中とが持主の居所を白状しろと責められるシーンと、最後に地下室に二人共猿轡を嵌められ、緊縛されて放り込まれ、火をつけられ、炎の中でもがくというシーンだったが、どれもが迫力あり、観ている志津江にとっては、映画の中の主人公がそれぞれ自分自身であるような錯覚に陥る程だった。映画が終わつて時計を見るとそろそろ夕食の仕度に取り掛るべき時刻だったので急いで帰宅した志津江は、帰宅の挨拶に再び寢室の前に立つたが、

中からボソボソと夫婦で何か話し合っている様子に、それを中断させる様に突然声をかけるのもどうかと思ひ、そうーとその儘台所に戻つて夕食の仕度に掛つた。

夕食の仕度が整つた頃、まだ呼びにも行かぬ裡に茶の間に入つて来た英雄は、どうした事か、志津江の顔を見、志津江の帰宅の挨拶を聞いても、むっつり黙りこくつて食事を済ませると、又美佐子への食事を盆に載せ、二、三步歩きかけたが、つと立止ると振り返り「志津江、今夜は早く後片付けを済ませて寝みなさい」

と云い捨てると、その儘寢室の方へ足早に立去つて行つた。急変した英雄の態度に志津江は激しい不安を憶えながら、手早く食事のあと片付け、玄関の戸締りなどを済ませると自分の部屋へ戻り、寢床を敷き、寝巻きに着換えながら、何故急にむっつり怒つてでもいるような態度になつたのであらうと考えながら寢床の中にもぐり込んだ。

時計が八時を報ずる音が耳に入つたが、志津江は仲々寢つかれなかつた。色々と考えている裡に一層不安さが増して来る。映画を観た事ではない筈だ。きつと、昨夜の自分の芝居が嘘である事が分つたのだ。奥様にしたところで、自分で全然もしない事をした様に云われたらそれを否定するだらう。旦那様は始めそれを信じなかつたが、もう一昼夜も経っている現在、私の嘘の芝居が分り、それで怒っているのかも知れない。ああ、私は何という馬鹿な真似をしたんだらう。あの優しく私を可愛がって呉れている奥様を無実の罪に陥れようと企むなんて。假令、旦那様に囁やかれたとは云え、奥様を追い出して、その後釜に坐らうなどと考えた自分が馬鹿だった。私のお蔭で奥様は昨夜から今日一日旦那様に詰問されていたのだらう。あー大変な事になった。奥様にも済まない事をしてしまった。此処迄考えると居ても立っても居れなくなつた志津江は、いつその事、今直ぐお部屋を訪ねて正直に全部を打ち明けた上、お詫びし



て許して貰おうと、掛布団をのけて起き上ろうとした途端、部屋の襖がガラリと開けられ、ハッと振り仰いだ彼女の目の前に、目をキラキラさせた英雄が立って居た。

「あつ、旦那様」

と、急いで跳ね起き、布団の上に正坐した志津江は、怒気を含んだ英雄の瞳に射すくめられ、今決心した事が咄嗟に口に出ず、俯向くだけだった。その目の前に、いきなり昨夜のハンカチとしごきが投げ出された。ギクツとなった志津江は尚、舌がもつれ、何も云えなくなってしまう。その頭上に

「志津江ッ。お前、僕を瞞し揚句の果てに芙佐子に迄濡れ衣を被せたな。そうだろう」という英雄の押し殺した声だったが、明らかに怒気を含んだ強い言葉が投げられたが、身体を縮めて何も云えずかしこまっている志津江の様子をじっと見つめていた英雄は何故か、ニヤリと口許に笑いを浮かべたが、再び真顔になると

「お前のお蔭で芙佐子も昨夜から今日一杯ひどい目に遭った。然し、お前は今それを後悔している様だ。そうだろう。」

と後の方は大分和らいだ口調で云った英雄の言葉に、流石にホッとした気持になった志津江は、やっと顔を少し上げて、コックリ頷いたが

「だが、罪はまだ消えて居ない。お前はこれからその罪の償いをしなければならぬ。」



それは、もう一回、昨夜のお前のやった通りの事をする事だ。それが瞞された僕のお前に対する罰だ。分ったか」  
そう云うが早い、英雄は、志津江がまだ何の返答もしない裡にいきなり躍りかかると、叫び声も出さぬ裡に口の中にあのハンカチを無理矢理押し込み、用意して来たのだろうか懐から出した手拭で



その上を口も縊れよとばかり固く縛り、猿轡を嵌めてしまうと、もがき、抵抗する志津江を押し倒し、猿轡を外そうと上げた両手を後に握じ上げ片膝で押えると、寝巻きの帯を解き捨て、寝巻きの衿や袖を引きちぎる様にして脱がせようと両腕を背に高々と握じ上げ寝巻きの帯でしっかりと括り、余り帯を両肩から前に廻し、胸の双つの隆起の間に交叉させた上、その両端を盛り上った乳房の下から腕に廻し、背の手首で結び合わせ、更に持って来たしごきでバタつかせる両足首とももとをしっかり縛り合わせてしまった。志津江はパンティ一つのまま完全に縛り上げられ、恐怖に瞳を一杯に見開き、鼻の上から口を覆った猿轡の手拭の布地を激しい息遣いに上下させながら、うめいていた。激しく肩を上下させながらそれをじっと見つめていた英雄は、やがて息遣いが静まると

「この儘では風邪をひかせてしまうかも知れんな。よし、そうだ」

と、つかつかと、身体を締め恐怖に慄いている志津江の傍に寄ると、緊縛したままの身体を抱き上げ、敷布団の上に横たえ、その上に掛布団をかけようとしたが、一瞬、その手を止めた英雄は、今迄とは打って変わった優しい声で

「志津江。苦しいかい。我慢するのだよ。お前のこうしている姿は全く美しい。普通の姿より遙かに美しい。だから僕はたまらなくお前が好きになるのだ。志津江」

と云うと、いきなり志津江の上半身を起して、猿轡の上から志津江の頬に自分の頬をこすりつけてしっかりと抱きしめた。

縛り上げられた時、恐怖の念で一杯だった志津江も、こうして英雄に優しい言葉をかけられると次第々々に恐怖感がうすらいでくるのだった。

しばらくして、英雄は、志津江を緊縛の儘布団に寝かせると、「志津江、苦しいかも知れないが、これが罪の償いの為の罰なのだから朝迄我慢してそうしているんだよ。朝になったら解きに來てあ

げるからね。では、おやすみ」

と、今は、むしろ緊縛に愉悦の感を憶える様な氣のする程になった志津江の眼だけで微笑んでいる顔に唇を当てて自分の部屋へ戻って行った。後に一人残された儘緊縛され、口を覆われ、身動き出来ぬ身体で志津江は、肌を食い入る帯の痛みや背に両腕を廻された苦しき、猿轡の息苦しさなどを感じながらも、何かしらこうして縛られる事が特別厭だとは思わなくなつて居た。緊縛の苦痛はむしろ快感に置き換えられる様にさえ思つて居た。そして、時々旦那様にこうした罰を与えて頂くかなどと考えるようになった。そうしている裡に、今迄の疲れが一遍に出て來、又心の底にわだかまっていた良心の苛責も融けた様な氣もしてぐったりすると深い眠りに入つて行つた。

翌朝、英雄は、まだ志津江の目覚めぬ裡に部屋を訪れ、優しく労たわりながら猿轡を外し、帯を解いて呉れた。緊縛は解かれても、背に廻していた腕を前に戻せないのも一生懸命揉んで呉れた。志津江は何回も礼を云いながら、まだ甘えたい氣分で居たが、朝食の仕度やら色々の仕事があるので、痛む身体を我慢しながら起き出で、仕事に掛つた。

やがて、今朝も昨日の朝と同じように二人きりで朝食を済ませると、急いで出掛ける仕度をした英雄が「今朝はお前、美佐子の朝食を運んで呉れ」と云いながら、あたふたと出勤して行つた。志津江は玄関から戻ると直ぐ美佐子の朝食をお盆に載せ、今朝は思い切つてはつきりと奥様にお詫びしてお許しを乞わなければいけないと固く決心しながら寝室へ向つた。そして、扉の外から「奥様、朝食を持参しました」と声を掛けたが何の返事も聞えない。もう一度声を大きくして呼び掛けてみた。と、中から微かに人のうめく様な声が聞えた。途端に志津江はハツとして奥様もと思ひながら急いで扉を開けて中へ入って見ると、美佐子は布団の中から僅かに目だけ



出して寝て居た。志津江は急いでベッドの枕許迄かけ寄ると「奥様  
 どうかさいましたか」と言葉をかけると、むくむくと布団が動き  
 出し「うむ、む、む」といううめき声が美佐子の口から洩れた。志  
 津江は、矢張りと思うといきなり掛布団を剥いで見た。その下には  
 ……猿轡を頬に食い入る程きつちりと噛まされ、高手小手に縛り上  
 げられ、両足首を括った紐をぐつと引き手首に結びつけ、逆海老の  
 形にされた美佐子が、自分のそんな姿を志津江に見られるのを拒む  
 ように身体を縮めていた。志津江は急いで猿轡を外し、緊縛の紐を  
 解き捨てると、壁に掛けてあった寝巻を背に掛けてやりながら、  
 「奥様、旦那様がなされたのでしよう。ひどい旦那様、奥様をこん  
 なにして」

と云いつつ、美佐子の腕をさすり始めた。どれだけ長い間縛られ  
 ていたものか、美佐子はすっかり疲れ切って一人で坐って居られな  
 い程ぐったりしていたが、一生懸命腕を揉み背をさする志津江に  
 「志津江さん、ありがとう。そんなにしなくても大丈夫なのよ。そ  
 れよりも志津江さん、貴女。」

とそこ迄云った時、ハッと自分が決心してここ迄来た事を思い出  
 した志津江は、美佐子にその後を続けさせないで、急いで床に坐る  
 と、一昨夜実行した自分の浅薄な行為をすべて告白し、泣いて詫び  
 た。それをじつと見つめていた美佐子はやがて

「志津江さん、その事ならもういいのよ。貴女がそう云つて下さる  
 のだし、夫も誤解が解けたようですし、私、別に怨んだり怒ったり  
 もしていないのだから、もう気にしなくていいのよ」

と云つてニッコリ微笑んだ。美佐子のその優しい言葉に、志津江  
 はガバツとその場に打し伏し「わー」と大声を出しながら泣き、  
 「私は悪い女です。奥様に濡れ衣を被せたりして。その為奥様迄  
 こんな目に遭わされたんですもの。私、私、奥様にどうお詫びした  
 らよいか分らない」

と、身を揉んで悔んだ。美佐子はベッドの端迄にじり寄って身体  
 を屈めて手を伸ばすと「泣くのは止して、私、何とも思つてはいな  
 いし、貴女もそうして悪かったと思つて下さるんですもの、それだ  
 けでいいの。それよりも、私達もつと仲好くしましうね。さ、  
 私、御飯頂くわ」

と云いながら、志津江の肩に手をやると、

「奥様、私の罪をお許しになつて下さい。そして、何時迄もお家に  
 置いて下さい。私どんな事で致しますから、お願いします」

志津江はこう叫びながら、美佐子の伸ばして寄越した手にしがみ  
 ついた。美佐子は、

「志津江さん、私、志津江さんが大好きなのよ。だから何時迄も家  
 に居て頂戴ね。」

と云いながら、片手で志津江を引き寄せると、志津江は、美佐子  
 の胸に顔を埋め「わっ」と声を出しながら泣いた。それをしっかりと  
 抱きしめるようにした美佐子は、ふと、志津江の手首に食い入った  
 縄目の跡に気付くとハツとしたように、志津江の顔を覗き込み、

「志津江さん、此の手首の跡はどうしたの、貴女——一昨夜のがま  
 だ残っている訳はないのに。じゃあ、貴女も主人に……」

とせき込むように問い

「はい、いえ、あの——」

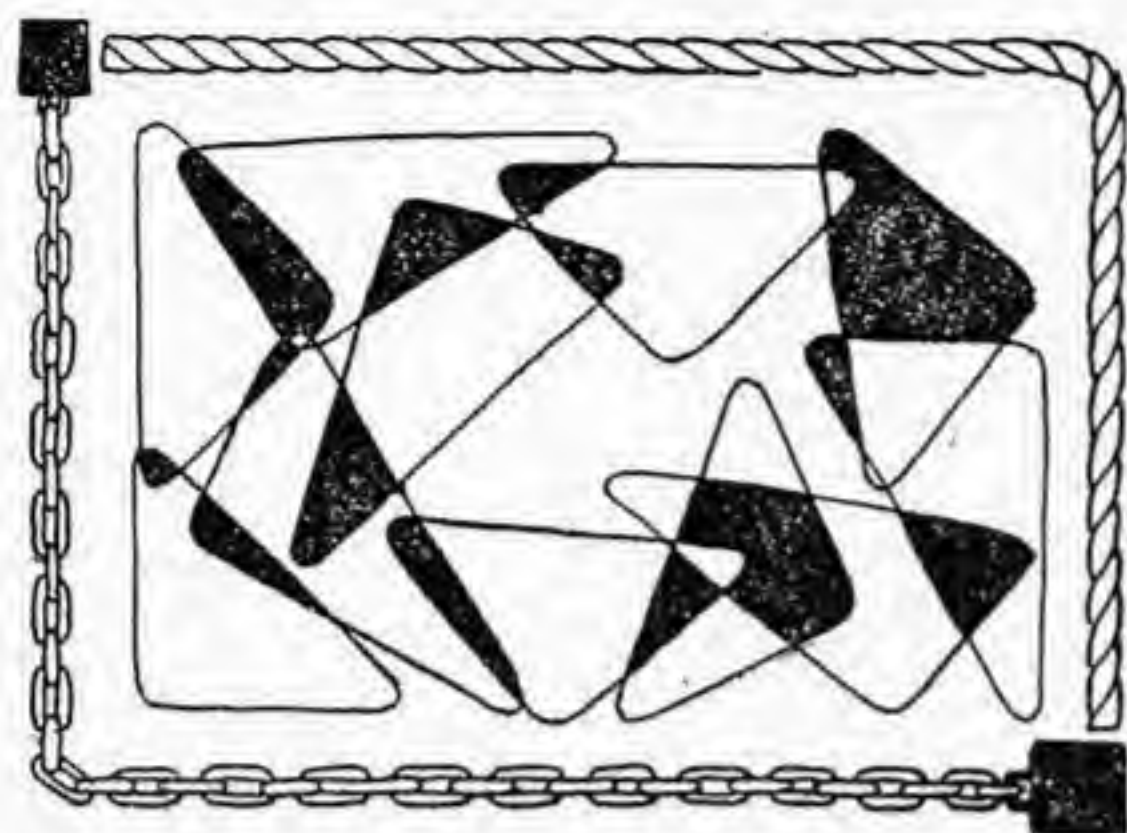
と口ごもる志津江の顔をまじまじと見つめている裡に

「そうだったのね。可愛想に貴女迄があんなむごい目に遭わされた  
 のね。昨夜でしょう。しばらく部屋を空けた時にしていたのね。苦  
 しかったでしょう」

と云つて涙の溢れた目で見つめられた志津江は、思わず、それに  
 つられて

「いえ、奥様、私、何にも苦しくもなかったし、痛いとも思わなか  
 ったんです」





## 最近の時代 = =縛りシーンから

嵯峨美也子

と口走ってしまった。それを耳にした美佐子も又、思わず「あら、貴女もそうなの」と聞き返してから、ハツとした様に急に口をつぐんでしまった。然し、志津江はそれを聞き逃さなかった。奥様も私の様に、縛られる事に愉悦を感じているのだろうか。と思うと、涙に濡れた顔をあげ、まじまじと美佐子の顔を仰ぎ見た。その視線を感じた美佐子も

又、志津江の顔を見返したが、バツタリ視線が会うと、途端に二人共頬笑み合い、異句同音に「志津江さん、貴女もそうだったのね」「奥様もそうなんですのね、私、知らなかったわ」と云い合うと、始めて二人共明るい顔になった。

(以下次号へ続く)

最近の邦画時代劇の責め縛り映画で最も期待される庄巻は、松竹ワイド、柴田錬三郎作「江戸群盗伝」福田公子の大阪屋花鳥の拷問シーンだろう。愛する男、梅津左門(近衛十四郎)を役人の包囲から逃すために、吉原遊廓に火を放ち、捕えられる。梅津の行方を白状せよと、与力筆頭の谷村正造に折檻される。

福田は灰色の囚衣一枚で、本縄で後手に緊縛され、鞭打と吊責にかけられる。

時代劇のリアリズムを表現するという監督は、緊縛感を出すために容赦しない。福田も演技者として本当の苦痛に辛抱しますと悲痛な決意。先ず本縄の時に首縄をかけられたが、ぐっと喉が締められ危く窒息しそうになり、首縄が外され乳房の上を縦に縄が二筋かけられる。又、吊責は金具を背中に引つけて吊るのが普通だが、それでは本物ではないと金具を外し、後手縛りで



吊り上げられたので手首が本当に痛み、本当に白状しそうだったという。その上、背中を鞭打たれる。これは一寸、手心が加えられるが……。

遊女であるという女の本能を利用した……谷村の足袋が、いきなり花鳥の膝の間へグイと割り込んだ。白足袋は残忍な触手になってシワシワと花鳥の柔い肌を弄んだ……という描写の責である。テストの時は、膝の上に蒲団をのせて責められたそうである。

リアルな気分というので、囚衣の肩の処を、彼女自身破るというコリ方で、二月の寒い中を、素肌囚衣一枚で責められたそう。又、残忍さとエロチックがなかなか出ないというので、二回程、責められ、手首の縛り跡がなかなかとれず風呂にも入れなかったという。女優もまた辛きかな。この作品には、嵯峨三智子の雪姫の縛りシーンもある。

東映スコープ一周年記念「丹下左膳」では、長谷川裕見子の櫛巻お藤の縛り、美空ひばりの萩野、それに松島トモ子のチヨビ安の猿ぐつわ等がある。

ワイドだけに、長谷川裕見子は真赤な帯上げて後手に縛られ、猿ぐつわを嵌められ

ているのが印象的。短いカットが惜しい。それに比べ、美空ひばりは一寸堪能さしてくる。山形勲の峯丹波一味にさらわれ、別荘に連れ込まれる。後手縛りで俯向けに気を失って倒れている。「わしは、お前が好きだ」と一旦、縄を解かれていどまれ、逃げ回る。だが再び縛られ、チヨビ安と共に猿ぐつわを嵌められる。後手縛りで胸に刀を突きつけ「二人の命が助けたくば、刀を捨てろ」と、大友柳太朗の丹下左膳、大川橋蔵の柳生源三郎に云う。処へ助太刀が現われ、源三郎に助けられるのが定石だが、乱斗の間、縛られウロウロしている。

次は、大映ワイドの角田喜久雄の「花太郎呪文」。原作では、大美津はじめ鶴姫、お徳等が、長襦袢一枚に剥かれ、縛られ鞭打たれ吊られて残酷な責に逢うが、映画では、そうは出来ないらしい。近藤美恵子の娘目明し、お美津がラストで河津清三郎の呉龍角に拐われ、荒縄で二重三重に縛られ物置に転がされている。そして挑まれるシーンが一寸いたただけるが、市川雷蔵の花太郎が現われ、人ダテにされるが救われる。小林某の老婆お高が、洞窟の中で、鈴の在処を白状せよ、と吊責に逢っているシーンは、カメラアングルもよく、一寸不気味だ

った。

東映お得意の娯楽版「変幻胡蝶の雨」で、桜町弘子の月の輪族の娘弓が敵に捕らわれ拷問される。中村賀津雄の小法師丸を救わんとした弓は、代りに捕えられ、白洲に引出され後手縛りで緊縛され、鞭打たれる。背中に三枚ほど蒲団を入れてピシピシと鞭打たれ、なかなか迫力を見せる。だが健気にも所在を語らず、ついに業を煮やした獄卒達は、真赤に焼けた火箸を弓の肩に下そうとする。このとき小法師丸が現われ、変幻胡蝶の術で花を降らし、救うのである。

また、大川橋蔵の股旅映画「旅笠道中」で、橋蔵の源次を追う千原しのぶの鳥追のおもんが、追いかけて回して遂に山中で「しばらく辛棒していてくれよ」と猿ぐつわ。後手縛りで転がされる。以前に「つばくろ笠」という題名で、長谷川一夫、山根寿子のコンビで、よい縛りシーンを見せてくれたが、今度はどのようなシーンを見せるか、佐々木監督の演出が楽しみである。



# 赤いペチコート

(マリアンヌの手記 第六回)

原作 セシル・フォーレ  
翻訳 鴉 嘔吐夫

## 一

毎日の日課は修道院のように規則正しく厳重であった。食事も便通もここでは仕事の一種である。彼女の肌は、その訓練に鍛えられ、程よく脂肪がのり、さりとて肥りすぎもせず、女性の持つ最上の美しさを、隅々までみなぎらせてきた。

最初の一週間目がやって来た。苦しい六日の勤めが終わった日、マダムは全員を広間に呼び集め、ペチ・コートをかかけたり、乳房をつついたりしながら四、五人の人間を指名した。その中にはマリアンヌも入っていた。

「他の方は明日一日、お休みをさし上げます。ゆっくり、美味しい物を喰べて、眠るな

り、シネマに行くなりしてお休みなさい。今、私が選んだ四人の方は、特別ドックへ一緒に行きます」

三人の女の顔色が、ハッと変った。彼女等は特別ドックの意味を知っている。マリアンヌだけが知らないので平然としていた。

女の一人が、マダムに哀願した。

「マダム、お願いです。私は大変この頃体の調子がよいのです。だから特別ドックへ行くのだけは、どうかお許し下さい」

しかし、マダムは冷やかであった。

「私の見た眼には絶対狂いはありません。あなた、行く必要がありますよ」

「おお神様！」

その女は、身悶えして泣いた。他の女も、

暗い沈んだ顔で居た。

しかし容赦なく、その日の朝が来た。

打ちしおれた女にまじって、マリアンヌも、玄関に近い控室に預けてある自分の衣服を久し振りに着た。

レースのパンティ、コーセーット、ガーターベルト・ブラジエール、欠し振りに身に着けた衣裳に、妙に身も心も引締った気持ちになった。思いなしか体自体が、スツキリとスマートになったようにも感じられた。

丘の家の玄関の前にはもう、黒いカーテンを窓に垂らした自動車が待っていた。まるでそれは、葬儀場へでも行くような無気味な車であった。まだいやがる女の手をズルズル引ずるようにして、マダムは、皆を車の中へ押



しこむと、  
自分は、助  
手台に坐つ  
た。車は丘  
を下りて町  
の中へ動き  
出した。

だが、カ  
ーテンがか  
けられてあ  
るので、一  
体、どの道  
をどう走っ  
ているのか  
まるで解ら  
なかった。  
そして三十  
分ばかり、  
ぐるぐる町  
中を乗り廻  
して、車は  
止った。扉  
をあけて出  
て見ると、  
既にそこは  
ビルディングの地下室であつた。

女達は、マダムにつれられ、一つの部屋に入  
った。とげとげしいコンクリートの何の飾



りもない部屋である。マダムは冷い口調で命  
令した。

「さあ、早く早く」

女達は諦めて、衣服を脱ぎ出した。マリア  
ンヌも、人々に見習つて、すべての衣服を脱  
ぎ捨てた。女達が裸になると、マダムは扉を  
あけて、追いたてるように四人の女を隣室へ  
入れた。

そこには天井からパイプが下っており、下  
が椅子になつてゐる装置が幾つかあつた。既  
に席についてゐる女もいた。四人はまず冷い  
鉄の椅子に腰かけた。一緒に来た女は、泣き  
そうになつてゐる。

そこへ、毛むくじやらの力士のような男が  
四人、黒いパンツ一枚の隆々とした体で現わ  
れ、女達をベルトで椅子に縛りつけた。少し  
でも氣に入らないそぶりを見せると、彼等は  
鉄のような掌で、その背中を力一杯叩いた。

やがて、女達の鼻の穴に、プラスチックの  
細長い棒が詰めこまれた。それは鼻の穴の形  
に作られており、かなり奥まで入るので、も  
う鼻では絶対に呼吸出来ないようになってい  
る。仕方なく皆、口をあけると、天井のパイ  
プがのぼされて各自の口に入れられた。  
マダムは云つた。

「いいかい、一立幾らと高い金を出している  
んだ。少しでもこぼしたらひどい罰を与える  
からね」

やがて、パイプから、液体がどくどくと、  
溢れ出て来た、少し塩からい、耐らない悪臭  
の液体であつた。



「良いかい。わざわざ、ラグビーの学生寮から貰って来た液体だよ。高いんだからね」

マリアンヌは、悪感に吐き出そうとした。しかし、鼻で呼吸出来ないで、自然に飲み下すより他無かった。ゴクンゴクンと、その悪臭の液体は腹の中に入って行った。一人の女性が唇から数滴こぼしたのが見つかった。いきなり、男が彼女の髪をひっぱり口を上に向けた。もう呼吸も出来ず彼女は、むせるようにして飲みこんでいた。それこそ、ごぼごぼと口がなり、本当に苦しうであつた。

最初の一立が終つた。女達の腹は、やや目立つ程ふくらんできた。彼女等は鉄の椅子から解放され、隣室へ運ばれた。

そこには、大きなタンクが並んでいた。円筒形のタンクに四人はそれぞれ入れられた。やがて、内部の気温が上つて来ると、彼女等の体に猛烈に汗が吹き出て来た。

今まで腹にためられていた、精分のエキ스가、その発汗現象によって、体中の隅々まで惨むるようになつて吸収され、やがて老廃物のみが汗となつて捨てられる。

この操作は、次に又一立半、二立と、飲む量を多くして、三回繰返された。

女達は、すっかり疲れ果てていた。

## 二

三回目、タンクから出された女達は、次の部屋に連れて行かれた。

そこには、既に青春を失つた老婦人や、もっと美しくなりたいと云う貴婦人などが、タンクの予備操作を終えて待っていた。ここは、女性のセクシアルな魅力を増すための、道場のような、美容院であつたのである。しかし美しくなりたいと云う事は、誠に怖い本能である。女性に、どんな苦しみでも堪えさせるものであるらしい。

中央の寝台には、一人の貴婦人が括りつけられている。やがて、調教師によつて連れられてきた。大きなシエパードが、婦人の体を足の爪先から、徐々に舌で浄め出す。体中にうっすらとバターでも塗つてあるのであろうか。犬は、一カ所に止らず、次々と上の方へ舐めて行く。貴婦人は、じつと苦痛を堪えているような表情であつた。マダムは説明した。「ここで、これから行われる如何なる事も、一言も言葉を出してはいけません。しやべれば苦痛は減ります。それでは、効果が達せられないのです」

彼女等の中から、一人の女が、ひきずり出された。

ベッドの横が、拳斗場のようなマットになっている。女はひきずり出されると、その上で男四人にかこまれ、体中、こずかれ殴られ出した。一種の制裁のような激しいやり方で

ある。逃げようとしても逃げられない。悲鳴を上げてはいけぬのである。むしろ、まるでこうとしても、男達は強い。それは、まるで遊戯でも伴うような、激しい争闘であつた。男達は、追いつめた兎のように一人真中で震えている女に向つて、様々な動作を加えた。それは詳述を許されない程の動作であつた。十分ばかりの激しい鍛練が終ると、次の人間がひっぱり出された。

そして四人共、くたくたになるまで揉まれて下りてきた。女達の体は、汗でヌルヌルとしている。

マダムは四人を、最後の仕上室に連れて行った。柔いベッドに四人は体を横たえた。別の男が、一人につき三人ずつ出て来てベッドをとりまいた。うつ向きの彼女の体を見てやがに一人の男が、暫くじつと精神を統一していたが、体の上に油性の液を滴らせると、自らの掌で静に彼女の体に塗り始めた。皮膚の奥にしみ通るような、優しい塗り方であつた。他の男も、液体が出来たらしく体にそれぞれ塗り出した。背中、乳房、太股、腹部と、静かに塗られて行く。

そして、手当は終つた。

女達は再び服をつけた。マダムは、一人一人の顔を見ながら、

「ああ、綺麗になりました。本当に男の心をとろかすような魅力に溢れてきましたよ。こ



れでこそ、パリ・インデセントがほこる、ビ  
ユティフル・ガールです」  
と大満足であった。

そして、くたくたに疲  
れた女達は、マダムに連  
れられて、又丘の上に戻  
って行った。

## 三

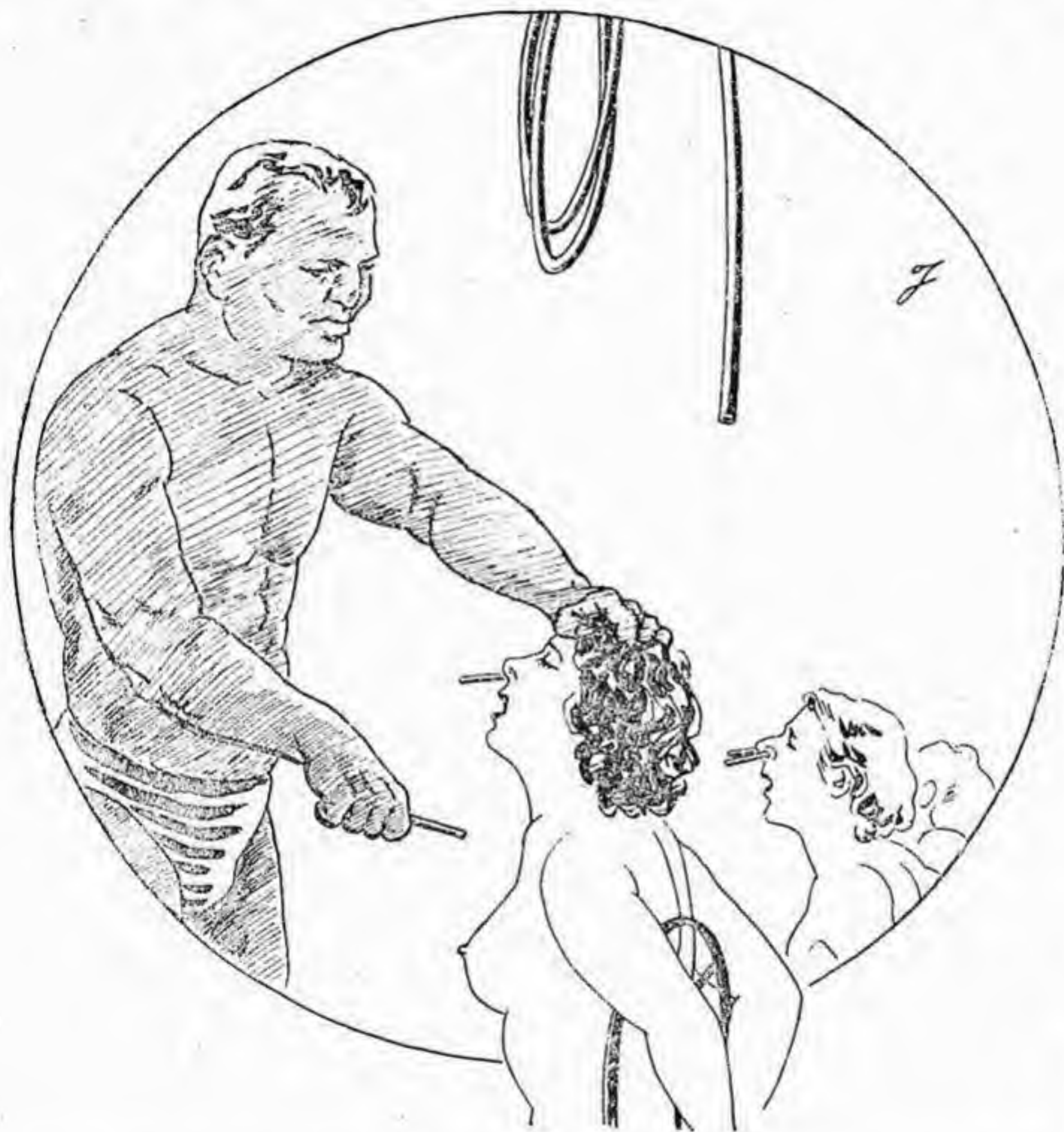
たしかに、彼女達は美  
しくなっていた。

体の上での單なる線  
や、皮膚の艶だけでな  
く、男心を刺激する微妙  
な色気も生じたようであ  
る。恋をしているような  
いつもうるんだ瞳、特定  
の男性も居ないのに、こ  
の状態が起ると云う事  
は、普通には絶対に考え  
られない。生物がもつ本  
能で異性をひきつけよう  
と思うからこそ、生じる  
デリケートな変化を、人  
工的に体に加えて起させ  
たのである。考えれば惨  
酷な事ではあったが、美  
を創造するためには、い

かなる事も神は許したまうのかもしれなかつ  
た。

広間での日課も色々と変化を加えられた。

特に団体の競技形式のものが増えて来た。  
女達は全部目を黒い布で被い広間に集めら  
れる。男の客は、電源と接続した電極棒を持  
って、目隠しで見えない



女を追い廻す。体の一点  
に触れば、それは飛び上  
るように痛い。しかも、  
いつ触るか全く目が見え  
ないので、見当がつかな  
い。その恐怖に震えて、  
あてどなく逃げ廻るが、  
男達は悠々と追い廻す。  
そして好きな時に、好み  
の女の好みの場所に、そ  
の電極棒をつきつける。  
マリアンヌも、それだけ  
は全く怖しかった。

特に乳房の先などに一  
寸触られると、体中が飛  
び上る程であった。頭は  
ジーンと気の遠くなる程  
しびれて来、体中の筋肉  
はピクリピクリとケイレ  
ンする。すぐ逃げなけれ  
ば、ひっくり返ってしま  
うかもしれないが、  
目が見えないのだから、  
どこへ逃げて良いのか解



らない。女達はしまいに、ワーワーと泣き出し、しやがみこんでしまうのもあった。

だが、休むのも泣くのも許されない。逃げれば逃げるだけ男の追究は執拗である。十分間が、一時間にも二時間にも感じられる程であつた。

そして無抵抗の状態で、苛められるだけ苛められると、又、それぞれの指定の椅子や、木馬や寝台に括りつけられた。

マリアンヌの今日の椅子は、特六号と呼ばれるものであつた。頭が低く垂れ、足が両脇に広げられ、高くかかげられている。わずかに腰部を掩う赤いペチ・コートも、却つて、男の慾望をかきたてるだけで、体の一部分も隠すわけにはいかないであつた。

今日の客は、背の低い、老人であつた。顔中に、いかつい黒い髯が生えている。退役の軍人でもあらうか。腕の筋肉は、もくもくとして盛り上つて来た。

「わしはな、この手でしつかりと、お前さんの柔い肌を味わいながら、調練をしたいのだよ」と云つてから、手に刺激剤の油を塗りつけた。そして、ぺた／＼と最初は柔かく、やがて激しい勢で殴り出した。まるで一打ち毎に、じゅつと油が燃えて、火が吐くような力のこめ方であつた。彼女は、叩かれる苦痛はまだ我慢できたが、その油が打ちやくにより体にしみこんで、熱を持ってきた時には、堪らない痛みに苦しめられた。まるで、火鏝をあてられるような熱と痛みである。

「ウー・ウー」

と耐えようとしても、耐えきれない苦しみの呻き声が洩れてきた。流石に両眼から涙が溢れてきたが、男は髯だらけの顔をその眼にあて、頬や顔がチクチク刺激されるのもかわず、

「おう、勿体ない／＼。わしは女の涙が大好きなのじや」

と、その涙をチュウ／＼吸い出し、あげくは瞼や眼の玉を、ザラ／＼した舌で舐め出すのであつた。

彼女の尿も同様にして、全部その男に処理されてしまった。幾ら体を動かして脱れようとしても、椅子にしっかりと括りつけられた体は、どうしても動く事が出来なかつた。羞恥と、苦痛、一瞬／＼が、まるで地獄に居るような責苦であつた。

男のちようちやくは、しかも休みなく続けられて行く。皮膚は、全体的に真赤に腫れ上つて、柔かい舌がさわつてさえ痛い。それを、ザラザラする舌は、更に遠慮なく舐めて行きかたい髯がチクチクと刺く。泣いてもわめいても許されない、苦しい勤めであつた。ようやく、夜の解放される時間が来た。

#### 四

客の男はすこぶる上機嫌であつた。

「おまえさんは、本当に良い素質を持っている。わしは、すっかり気に入ったよ」

その男は、繰返し／＼そう云つた。そしてマダムを呼びよせ、何か、ひそひそと二人で話していた。

時間通りの規定の用便を、皆並んですませると、体を淨めて食事についた。

赤いペチコートだけの最前の仕事で、それぞれほんのりと色づいた女の体を眺めながら、マダムは機嫌良く云つた。

「マリアンヌさん、貴方は大変な幸運を掴みましたよ」

「えっ」

マリアンヌも意外なマダムの言葉に、びっくりして見つめると、

「あの方は文部大臣の、サン・ピエール様です。あの方は、余程の人でないと御寵愛にはなりません。それがすっかり、あなたがお気に入りになつてしまつたんですから、大したものですよ。これからは、あのサン・ピエール様の専属として、充分に可愛がつて貰うんです。お勤めは、今よりずっと辛くなるかもしれませんが、お手当てだつてずっと多くなるし、それに、どんな幸運が貴女に廻ってくるかわかりませんよ」

他の女達も、口々に羨やましうに彼女をたたえた。

しかし、彼女は暗い絶望感に囚われて行つた。考えて見れば見る程、あの髯の濃い老人は嫌で堪らなかつた。瞼の裏をさした、固い髯の痛さを思い浮べて、総毛だつ程の怖しさを覚えて、思わずゾクゾクと身を震わせた。食事も、ろくろく喉を通らない思いで終つた。寝床に入つても、あの老人の事を思い浮べると、ゆっくり眠りにつけなかつた。すると、マダムが入つて来た。そして起き



て迎えようとする彼女を制して、自分も彼女の寝床に入りこむと、マリアンヌをしっかりと抱きしめた。

「貴女は、とうとう、この家に幸福をもたらせてくれました。あの方のお引立を被りさえすれば、この店は今の五倍も十倍も儲けるのですよ。貴女は、この店の恩人です」

マダム、肥った体に包まれるように抱かれたマリアンヌは、まるで息がつまりそうだった。

「明日から、貴女の体を一層美しくするため、特別な養成をします。そして貴女を、もう他のお客には出しません。貴女は、もっともっと美しく、もっともっと魅力的になって、そして貴女が苦しみで訴える涙を、一滴千フランの値にもするよう、頑張るのです」

マダムは、しみじみと自分の商品をいとしむように、彼女の身体を撫で廻した。

「マダム、くすぐりたいわ」

彼女も、初めて見せたマダムのやさしさに身もたえしながら、その肥った体にすがりついた。

マダムの唇が、マリアンヌによせられた。二人は本当の恋人のように、お互いの体を抱きしめた。やがて暫くの時が終ると、マダムはやさしく云った。

「私達、頑張りますようね」

マダムの言葉に、マリアンヌはおとなしくうなずいた。

そして、このマダムの為にも、どんな苦しみにも堪えようと思った。

(未完)

## △レポート▽

### “その女の急所を刺せ”

近藤

一

二月の末、浅草へ行きました。久々の六区見物なので興行街を一廻りしますと、フランス座に面白いスチールが飾ってありました。下着一枚に剝がれた若い女が、十字の柱に括りつけられ、爪足立っている足首にまで縄がきっちりかかって胸に刃物を突き立てられ鮮血を噴き出させているのが一枚。同じように剝がれた女が、足首を括り合わされて、その荒縄で逆吊りに吊られ胸を裂かれて苦悶している傍で縄尻を握った男が眼を光らせているのが一枚。若い女を男が抱きすくめて刃物で胸を一刺しに貫き、女が一瞬のけぞったポーズが一枚。下に「美人モデルの怪死」と朱書してあり、題して「その女の急所を刺せ」。

早速観に行きましたが結果はいつもながら失望でした。筋そのものが違ふのです、須山と兵頭という二人の宿命的な交渉とか云うものが、纏まりの悪い運びでワケの判らぬ登場人物の出入を追いながら、緑川士

朗作並に演出というのに、珍らしく手際の悪い進行を続けて終りになるのです。玉川みどりが居なくなると女優陣が全くお粗末です。殺し場はラストで、ユリと云う女が黒のブラジャーとズロースだけの姿で台の上に両手を頭の上で縛り合わされて、天窓から吊り下げられます。女に恨み持つ男が、その脇腹を一えぐります。女は絶叫して台から転げ落ちて息絶えますが、正体もなく酔いつぶれた女が、自分で台上に立ち両手を頭上に組むのも変ですし、縛られて吊られているのが倒れて死ぬのも変なものです。唯、男が吊下げられている女を刺すと見せて、一瞬ズロースに触れると、ゴム仕掛の刃物が脇腹に突き立ったようにとび出し、トリックの血が流れる辺りは、なかなか巧みな手際でした。

これよりも「くさり」と題するショウで、天津くるみが、右手首に手錠を嵌められたまま踊るシーンが魅力的でした。できれば、両手錠の拘束で踊ってくれたら……と思いましたが。

ロック座では、同座の看板女優小松龍子が蒲団の中で、両手を頭上に縛られ襦袢の衿元を大きくはだけたスチールを飾っていました。こちらは残念ながら、観る機会がありませんでした。

(了)



魔<sup>マ</sup>教<sup>キョウ</sup>団<sup>ダン</sup>N<sup>ナンバー・エイト</sup>  
o  
・  
8

(その四)

## 土 路 草 一

## (一) 公安三課

津田慶介は千代小路邸から社へ記事を送るとその足で警視庁の公安三課へ立ち寄った。

「公安三課——。この課は一言にして云えば『外事特高』である。」

警視庁の組織には総務、警務、刑事、防犯などの各部と並んで、警備第一部、第二部という部がある。この第一部は警備の名に相応しく警備、警護の二つの課に分れて、制服実力部隊を指揮するのであるが、第二部は『公安部』と称される。

公安第一課は左翼を、第二課は右翼を、第三課は外事を、第四課は資料と、それぞれ思想的な背景があるものか、もしくは集団的威力ある犯罪を摘発する係である。

公安三課の中には更に欧米人、朝鮮人、中国人との三つの係に分れて、情報、捜査、翻訳などの仕事を分担している。が併し、いくらか外人が関係していても、単純な殺人、強盗、詐欺などの刑法犯は刑事部捜査第三課に任せてあり、出入国管理令、外国人登録法、刑事特別法に拠って、思想的犯罪を追っているのである。

部屋の机はあらかた退庁していたが、第一

係長の原田の一角だけは灯が点って、二、三人の部下と真剣な面持で何やら密議をこらしていた。

「やあ！」

津田は持前の新聞記者らしい無遠慮さで、片手を挙げて挨拶代りにすると、係長の前の椅子を引き寄せた。

津田は先頃に、警視庁記者クラブに所属する公安担当記者だったので彼等とは顔馴染みなのだ。

係長は、ちよつと不機嫌な顔付になって「何だい、今頃？」

「今日は、私から情報を提供しようと思いま



してね」

津田は思わぬぶりに云って、ゆっくりポケットから煙草を取り出す。

「ほう！」

係長は、気のなさそうな返事をする。

「これを御存知ですか？」

津田は内ポケットの中から、丸い小さなパッチを出して机の上に置いた。パッチは直径五耗ぐらいの黒色で、古代の塔が金で浮彫されている。

係長の眼が光った。

「君は何処で、これを？」

勢い込んだ声の後で、部下達の眼がぎらついて、一齊に新聞記者の顔を凝視する。

「それを云う前に、このパッチの由来を説明してくださいませんか？」

津田は、それが知りたかったのだ。

係長は困ったように腕を組んだ。新聞記者の意図は解かる。併し、彼等に謀った以上は新聞紙上に発表されるということは自明の理なのだ。そして、その事件を公けにすることは今、時期ではないのだ。

「シベリア・オルグか、赤軍第四課の標識ですか？」

記者は急に黙りこんだ相手に、ソ連諜報戦線の名を誘い水にしてみた。だが、相変らず口を結んだ儘だ。

「元キヤノン機関、シヤタック氏を先導とす

る米国CIAでは無さそうですね。そうすると、レッドマン氏に代表される英国諜報機関ですかね？」

併し、係長の顔は微動だもしない。明らかにそれ等と関連のない表情だ。

津田は迷った。差し当って、この他のものだとすると、

「フリーメーソンか、ユー・マ・メーソンですかね？」

部下の一人が、ひよいと臉を上げたのを津田は見逃さなかった。

「ユー・マ・メーソン？」

独言云った津田は、はてなと首を傾げた。ユー・マ・メーソンは、国際秘密結社ではあるが、その会員は殆どユー・マ・人に依って占められており、他民族は極く僅少で、それもユー・マ・人の血が混っているか、ユー・マ・人に永年育てられた者に限られている。

このパッチを所有していた者は、歴とした日本人であり、幼時から、ユー・マ・人に交ったとの話は訊いていない。

「ユー・マ・メーソンじゃないよ」

原田係長は、腕を解いて否定した。

「じゃ、何なのですか？」

有能な記者は切返すように鋭く追求した。公安第一係長は又、口に蓋をしてうう。

「ユー・マ・メーソンと関係があるのですね？」

「それがはっきり解らないのだ」

「臭いはするのですね？」

係長は決意したように、回転椅子をぐるっと回すと眼をむいて

「津田君。これから話することを、君だけの胸に納めておく約束してくれないか？、我々も君の話を訊きたいし、これが解決した時きつと君にスクープさせるから。今、公表しないと誓ってくれたら話すよ」

津田は暫く考える。記事を差止められることは新聞記者の致命傷だ、が、ここでうまくコネをつけておかなかったら、あたら特種を逃がしてうことになるだろう。国際的な臭いがする以上、公安課員の後援を得ることが先決問題だ。この処、彼等の云うとおり手を打ってそれからの方策は又考えることだ。事の重大らしさに、津田の心は咄嗟にそう決心した。

「いいでしょう。協力しましょう」

原田係長は、ほっと息を抜くと、窓際に立った。

日比谷公園の樹木と高層の官衛は月明に黒く鎖っていたが、その後の銀座街は華やかな光りを夜空に明るく映し出していた。

「先月の始め、東都ホテルで殺人があった。殺されたのは、サラン・パシヤと云うアラビヤ人だ」

係長は、低いがよく通る声で話し始めた。

「手口は絞殺で、着衣は脱がされた上、ずた



ずたに切裂かれ、ポケットの中のものは全部放り出してあった。犯人は、それを纏めて燃し、火災にして証拠湮滅を計ろうとしたらしいが、マッチを擦っている処へ、ボーイのノック。仕方なく応答して、入ってくるボーイに拳銃を擬したんだ。ボーイにとって幸運だったことは又、我々にとっても犯罪資料を失くさずに済んだのだが、偶然、ホールドアップした場所に、カウンターに通ずる非常ベルがあったことだ。警官達と華やかな拳銃戦の後、犯人の一人は射殺され、一人はその掩護のもとに車で逃走した。これは、国際ホテル内の事件と云うことで嚴重な銃口令を敷いたので、まだ君達の耳に入っていない筈だ」

津田は頷いた。実際に初耳だったからだ。

「其処で先ず、被害者を調べてみた処、彼の旅券は巧妙な偽物で、記載された日の羽田空港、降客名簿にも彼の名は見当らない。勿論アラビア領事館にも姿を見せない。彼の渡日経路が全然不明なのだ。それと、燃え残りの手帳の間から、ユー・マ・メーソン第三十一階層を表わす身分証が出て来たことだ、ユー・マ・メーソンの最高位は第三十三階層だから、相当な高位であり、その上位者が密入国したと云うことは、重要な宿命を帯びていたと想像される。着衣を切り刻まれていたことは、衣服の中に何物かを隠していたに違いないし、それを奪われたと判断出来る状況だったが、

多額の現金や宝石類には何等手をつけようとした形跡がない処をみると麻薬か、いや、單なる麻薬だったならホテル滞在三日目迄、衣服に縫いこんだ儘ではないだろうから、他の何物かだ。一方、射殺された犯人は中肉の浅黒い男で日本人に酷似しているが、骨格、皮膚質の解剖所見に否定的な答えが出ているのだ。中国人とも朝鮮人とも違う観察なのだ。拳銃は消音器付のチエコ製小型コルト、日本では普通では絶対に入手出来ない品だ。所持品には手掛りになる品は何一つない。勿論全部化学鑑定をした上の結果だが。ただ一つ、上衣の裏につけていたのが、そのパッチさ」

係長は、じろつと津田を睨んだ。

## (二) 記者情報

「その後の捜査は？」

津田は、喰らいついた視線をその儘にして訊いた。

「五里夢中さ。さっぱり進捗しないんだ」

公安係長は表情と口ぶりでは投げ出しているが、瞳の奥では新しい事実を掴んでいるといった光りがあった。

津田は、敢えて追求しなかった。公安課としての限度もあることだし、訊いても、それ以上語るとも思えなかったからだ。後の探策は自分でやることにしようと、記者は唇を曲

げて

「アラビア人と正体不明人の暗殺抗争？ 根源は中東にありますね」

「ずばりと云ってのける。係長は、うっと胸を衝かれて」

「そう云える君の根拠は？」

「そのパッチは、今日殺された日イ油田開発会社の千代小路氏が持っていたものです」

「えっ？」

外事特高員は、一樣に事の意外さに顔を見合せる。

「本当かい？、併し、捜査課が見落す訳はないが……」

「千代小路氏の令嬢、伊奈子さんから私に示されたものですよ」

「どうして警察に出さないで君に？」

「新聞記者風情の妹と皇太子妃候補と云われている伊奈子姫、取合せは妙ですが、今日の世代ではいろんなグループ活動と云うものがありましてね。二人は、或る詩歌雑誌の同人で二、三度、弊屋にもお運びがありましたので、私も顔見知りと云うわけなんです」

津田は、取囲んでいる緊張した空気をほぐすように語を崩したが、笑っていない四囲の顔に引戻されて固い口調になった。

「今日、千代小路氏に命ぜられて、伊奈子さんがレポをやったんです。日比谷公園の図書館横入口に午後二時頃、立っていれば、緑緑



の眼鏡をかけた男が眼鏡を押えながら銀座への道を訊く。丁度そちらに参りますから御一緒しましょうと返事して、内幸町の方角へ歩けば包みを渡してくれる。使いである印としてこれを胸につけているように。それも午後二時になったらつけ、逢ったら直ぐ脱るよ



ダイビングする姿勢

うにと云って、そのパッチを渡してくれたのだそうです  
「それで、伊奈子さんは行ったんだね」  
「ええ、相手が四十分ぐらい遅刻したそうですが、来て紙包を渡したそうです。そして直ぐ帰宅すればよかったのに偶々、友達にぶつ

かり、喫茶店で三十分程、時間を費やして戻った処、父親が訪ねていた男に惨殺されていたというわけです。千代小路氏は大分伊奈子さんの帰りを待ち焦れていて、幾度も女中に問合せたそうです。伊奈子さんは泣いて悔んでました。それに、この事実を警察に云っているものかどうか。父親の口ぶりでは身分にきずつく秘密な事柄らしいし、レポートした男からも嚴重に口止されていたので、心細く悶えていたらしいです。其処へ私が行ったものですから、渡りに舟と打明けたって訳です」

「相手の男と云うのは？」

「外人ですね。アメリカ人らしい派手なチエックの服を着ていたって云いますよ」

「紙包みの中は？」

「金です。五千円札の十万円束が十箇、百万円ですね」

「ほう。事業取引なら事務所でやればいいのに、殊更、街頭で秘密に受取る金となると穏かでないね」

「そうそう、別れ際に外人がレポートは後程って云ったそうです」

「レポートは後で？ そのレポートってのは何だ」

「わかりませんが、彼女は單なる使いに過ぎませんからね」

原田係長は、意志的な唇をぎゅっと引締め



てパッチを取上げる。沈黙考、暫く掌で転がしていたが、やがて底光りする瞳をぎらつかせて

「千代小路邸の家宅搜索だ。直ぐ令状をとろう。それから山田君」

と、部下の一人を呼んで

「千代小路氏の最近の足取りを洗うのだ。木村君は、日イ油田開発会社の内容を改めて調べてくれ。出来たら役員が行状もな」

原田は、てきばきと部下に指図すると、今度は津田に

「伊奈子さんに気をつけてくれ給え。狙われる公算が大だからな」

津田は頷いた。

「じゃ、捜査三課へ行ってくる」

と係長は、元公爵千代小路綾雄氏殺害の捜査顛末を訊きに腰をあげた。

ここで元公爵千代小路綾雄氏のことについて、その概略を記しておくことにしよう。千代小路綾雄氏は公卿の出身に拘らず豪宕不羈数々の事業に關係して、昨今財界の一方の雄として重きをなした人物である。

最近新聞紙上を賑わしているイラク北辺山中に年間七千バーレルを見込まれる石油礦脈の存在を推定して設立を計っている日本とイラクの合弁石油会社である日イ油田開発株式会社の発起人総代でもある。この会社はアラムコ（アメリカ、アラビア石油会社と謂い、

サウジ・アラビアの利権を従来一手に握っていた）の向うを張り、日本資本の中東進出を期した劃期的な事業で、さきに渡イした千代小路氏に依ってイラク政府との間に契約調印を了し、来月早々から探鉱に取りかかる予定になっている設立寸前の会社である。

それだけに、この人の突然の死は我が国政財界に与える影響甚大でともすれば日イ油田開発会社の存立さえ危ぶまれてくるのだった。

さて、津田は伊奈子嬢に話して、妹の保志江を千代小路邸に住ませては、どうだろうか等と考えながら、津田は警視庁の正面階段を降りる。

濠の水が黒々と灯は跳ねていた。

ふと美加子のことを思い出し、北奈地路子の約束を放っておいたことに気付くと、彼は近くの公衆電話ボックスに入って行った。

### (三) 美体の計尺

美加子は両手を前方へ突き出して、直立させられていた。

手は前の鎖に開いて留められ、両肩の附根は革紐で後上部へ強く引かれ、脚はきっちり揃えて足首で拘束されていた。

丁度、ダイビングするような姿勢で、明朗な乙女は余す処なく佳麗な裸身を強烈な光線に曝して首うなだれていた。

惨めさと哀れさ、美加子は急激な変化に心身共に磨滅していた。

清らかに保持して来た処女を奪われるのかと、真暗な絶望に叩きのめされた檻の中。あの骨も砕けんばかりに畳み込まれた苦痛、そして愛玩動物のように弄ばれた屈辱感。併し都合があつたのか、タツーマは何事もなさずに帰り、それから、檻を出されて、医者に依る嚴重な身体検査。他の同様に誘拐された女達と共に、猶に一日二十四時間は越えたであろう、精密な検査だった。身長、体重に始つてレントゲン撮影、血液採取、血圧計算、検査は申すに及ばず、聴力、視力、嗅力、味覚感度に至る迄、徹底的に調べ上げられ、最後に軽いメンタルテストで知識力を試されて、罅へ追いやられたのだ。その間、一片の食物も一杯の水も与えられず、衣は片鱗さえも許されなかった。寝薬の中で錠鎖を鳴らしながら、涙にかきくれていたのだが、いつしか、とろとろと眠ったらしく、いきなり乳房を蹴られて眼を醒まし、引摺り出されて、今度はダイビング、ポーズだった。

何をされるのだろうか？ 純真な乙女心は愁然と閉される。

傍に立っていた男が壁に植ったパイプについている金属製の半輪を、レシーバーのように美加子の耳に差し込んでボルトを締めた。半月の金具は楕円形になって、乙女の顔は動



きを止められた。

目盛りのある棒が桃顆の様な頬に当たる。

「縦二十糎、横十三、五糎」

鍵型に挟めるようになっていた物差で、美加子の黒髪うねっている前頭と円い顎を挟んで、顔貌の縦の長さを計ってから顴骨あたりの横幅を記録させる。

「額、縦五糎、横十四糎、眉の長さ、五・三糎、臉幅三・九糎」

男は無表情に、機械の型状でも述べるように美貌の数値を云う。

次は鼻の高さ、小鼻の拡がり、鼻と口の間隔、唇の巾と厚み、顎との距離、耳の大きさと刻明に梨花美の尺数を出して行く、

美加子は、涙に潤んだ瞳を浮かしていた。

真正面の強い照明がきり／＼と網膜を射ち、頭芯を掻きまわす。苛立ちが激しく波打ち、生温い男の手と冷い金属の計尺が、たまらなく煩しかった。人眼を隠らせた魅力的な顔を出来損いの泥細工のように寸法する。清潔な乙女意識は火となって凌辱感を燃した。が、それを避けようにも顔は留められている。唇を噛んだ令女は、口許を撫でている男の指にいきなり、歯を当てようとした。併し、顔を振れない身ではなんとしても無理なことだった。男に手を退かれ、可愛い紅唇をいやという程、計尺で突かれた。

「こいつ！ ふざけやがって！」

ぱしっ！ ぱしっ！ 力一杯の往復ビンタが清純な頬で鳴った。

「あああっ！」

両頬が痺れ裂けて、美眸は火花を散らし視界を消した。

「癖になる」

男は、まだ胸の凝りが癒えぬげに、手許の鞭を取上げる。

扉が開く音がして、別の声が

「おい、待て！」

タツーマと連立った勝谷だった。

「クローズアップが済む迄、鞭痕は困るぞ。終ってから、たっぷり叩かせることにして、早い処、片付けてしまいな」

「はい」

男は、いまいまいそうに鞭をはなして仕事にかかる。

手荒く、がらくたを扱うように、肩巾、乳房の標高、乳首の間隔、乳暈の直径、鎖骨、肋骨の太さ。腕、指の長さ、太さ、臍から下腹部へ、そして腿から胫へ。木のように佇立している白桃の肉体を隈なく計尺して行く。

美加子の屈辱は渦巻き高潮する。物品のようには取扱われている自分の身体。颯爽と放送スタジオに姿を現していた二十一才の素敵な曲線が、馬体の品定めのように計られる。

筋肉の陳列、裸容の商品視、まるで牛馬か豚の如き肉体の尺度計算だ。まだ失われている

ない自尊心は、彼女に向い齒並をぎりぎりとしめさせた。

「仲々よい数字ですよ。タツーマさん」

勝谷は、係員の記録したカードと印刷してある標準表とを見比べながら云った。そして鉛筆で、さらさらと算出公式を書いて計算していたが

「指数も頃合ですよ。御覧なさい。肩巾に対する腕の長さ、腕の長さに比例した太さ、この通り標準びつたりじゃないですか」  
タツーマは、嬉しそうに脂顔を緩めて覗いた。

#### (四) 美女の部品撮影

係員が手を挙げて合図した。

するすると伸縮器に装置された三個のカメラが送り出されて来て、美加子の顔の前と左右に配置された。

麗容の嬌やかな脇腹が不意に擦られた。脂っこい男の手が、すんまりした臍の廻りから脇へ、蛇のように撫で這いつたのだ。

「あっ！」

麗体は、小さく魂ぎって迂った。それも拘束された限界でだが、こみあげてくる声を噛んで、腹を退き、びくびくと震わせた。

が、相手は自由だ。柔かく、ゆるやかに破顔を呼ぶように揉み続ける。



「う、うふ、あふっふっ」  
思わず声を洩らし、牀を拗りながら笑いを表情する

「ジシー！ シャッターが鳴った。笑顔の動態をプロフィールを含めて三態、カメラは素早くキヤッチする。」

すると、今度は横手に傷痕のある猙獰な男の顔が現われる。ぎらぎらと狂暴な眼光で女を睨みつける。

「覚悟するんだ！」

どすの利いた声で、黒光りする拳銃が、白く豊かな胸乳に、ぴたっと押つけられる。

「あっ！」

笑いから一転、恐怖に突き落されて、さあっと背筋に冷水が走る。咽喉は乾からび声も停り美貌は蒼白になって立竦んだ。サッー、シャッターが五十分の一秒の瞬間で開閉した。

拳銃が消えると、足指が摘まれた。第二趾と三趾の間へ何か挟まれると、いきなり両側から締めつけられた。

鋭い痛みが脳髄へ弾ね上って「あ、あ！」



それと

ヨリめ

りやアツモリ

懸命に跳いた。制約された足輪の中で、踵を挙げ小さく可愛い足甲や拇趾が踊り反った。ぐいぐいと骨が砕けんばかりの激痛に、貝人形のような趾が血の気を失って行く、

「あっ、いた！ いたあっ！」  
美貌は眉根を寄せ、鼻孔を膨らませ、紅唇をわなつかせて絶叫する。

ジシー、フィルムは廻転した。そして、カメラは痛みから開放されて、悲しみに喟然と涙する佳貌に向けられていった。

笑、驚、苦、哀、それ等の表情を幾駒かで写し撮ったカメラ・アイは、アップでぐっと近寄ってくる。

そして、左右の瞳を拡大して写し、臉を返して裏側もレンズに入れると小刻みに移動しながら、形よい鼻を前横下から丹念に撮り、唇をこじ開けて白い歯並、赤い舌、上顎、咽喉の開き迄もフィルムに納めとった。

そして、カメラは先程の物差の跡を追って乳房、腰、腿、と降りてゆく。



二十一才の女体は、一毛一髪、隠す処なく鮮明なフィルムに印されてしまったのだ。誰にも見せなかった肌、びったり覆っていた双の膨み、滑らかに張り充ちている腰部、それらが、一分一厘に至る迄写し出されて、満目に商品視されるのだ。正に美女を形成してる部分々々を、それ自体が一つの部品であるかの如く拡大され、プロマイドされたのだ。

美加子は純白の肌を染め、諦めと自尊の相剋を胸の中で戦わせる。

「背筋力や腹筋、脚力は後で調べますが、少し運動させて、この胴と腿の肉を少し削ったほうがいいですな」

勝谷は両手で纖胴を縊ってみてから、太腿に指腹を立てた。

正に、牛馬を好みの姿態に仕立てようとする調教師の態度だ。

「腕は、このぐらいの張りで充分でしょう」

勝谷は、束縛された円い肩に手を掛けるとひよいと跳躍して、囚女の差伸べた可弱い腕の上へどっかりと腰を載つけた。

「あっ！」

美女は、ぎしっと骨が鳴る思いで声帯を引きちぎった。

ペンしか持たなかった娯やかな腕は、十六七貫の男の重みを支えて、折れんばかりに攪う。くぼみのあるふっくりした掌は空を掴み手首が銀で真赤に充血した。

「う、うっ！」

苦悶に渋った顔を、勝谷はびちやびちや叩きながら

「どうだい。押しつぶされた気持は？ ちよっと乙なもんだらう。ははは」

嘲笑しながら、タツーマに向って、

「筋肉の張り具合は、どうです？」

云われる儘に書記官は肩の盛りを摘まみ、浮き出た鎖骨を叩き、肩胛肩を撫でる。そして懸命に突張り泳いでいる脚筋を調べた。

タツーマにしたら想像だに出来なかったことである。苦痛を与え、その苦痛を耐えている美体を調べる。それが触れることすら躊躇していた女体なのだ。併し、手触りは青春の乙女だけが持つ、温く柔い弾力だった。

その背肌から、じりじりと苦痛にたえた汗が滲み出始めた。

そうだ。こいつには二日近くも水も食物をやつてないし、四時間ぐらいしか眠らせてない筈だ。と先刻、餌は貴男の手から与えて下さいと云われたことを思い出した。

この汗で、こいつは更に水分を欲しがらるう。腹を空かせることだろう。私の足下にひれ伏して、哀願することだろう。

よし、うんと汗を絞るんだ。

タツーマは妖しい嗜虐感に支配されて、手を脇腹へ下らせると、ぶりぶりした触感を染しみながら、ねじり締めた。

「あ、あっ、ああっ！」

新鮮で玲瓏な玉の肌は突き悶え、汗粒をぶつぶつと吹きあげる。

清麗なオフィスガールは罪なく受ける死線の苦しみ、知的な相貌を涙と汗で穿め、吐底から号哭した。

## (五) 口内検査

勝谷がすんなりした囚女の腕から降りると顔を留めていた器具が、がたと動き、美貌はその儘の姿勢で強く後へ索かれて天井を向いた。

半ば開いた口へ強引に鉄棒が押しこまれると、上歯と下歯に嵌めれた。それは、シャッキのようなもので、小さな把手を廻すと、美加子の唇は徐々に離れて、関節の極限迄、大きく開けられる。

極点に迄開かれた顎骨は頬肉を突裂いて、ずきずきと鈍痛と疼かせた。機能を制されて流れ入る唾液で噎んでいる咽喉に、リゴールを塗るような細長い金具が突こまれて、弱皮の気管を押える。

無態に声帯を圧止させられて美嬢は吐気と咳も出せぬ苦しみで、ひゆうひゆうと泣いた。

鼻孔から細長い棒が口中へ突抜ける。

「タツーマさん、よく御覧なさい。ペットの口内を――虫歯はないようすな」



勝谷は柄で、とんとんと琺瑯質と齒茎を叩きながら、口内鏡で裏側を写す。

動物園の獣が、口内検査をされているような状況だった。

「この舌の色だと、胃も丈夫だ」

恐しげに奥で縮まっている赤い小さな舌を、タツーマも脇から挟み奥でひっくり返す。

ああ、甘い蜜のような接唇をさせてくれる可愛い舌なのだ。幾人かがこのピンクの舌帯を己が口に得ようと夢見、幻で焦れていたことだろう。

それを、書記官は釘抜きで引抜くように、ぐいと唇の外へ引張り出す。

美加子の眦から、痛みと屈辱の涙玉が一条となって滴りおちた。

タツーマは、ぬっとり汗ばんだ指で舌体を摘まむ。そして、爪でびくびくとうねっている紅い生物を掻き擦った。

「手の指を舐らせるなんて、こいつはつけ上りますぜ。足指がいいところですよ」

勝谷は鼻孔の棒を抜きとってみる。棒の中央の薬品が桃色に変色している。

「鼻の病気もないようですね。よし！」

差図が届くと、微小のカメラが繊維質のもので保護されて下りて来た。

最近、某医大で製作された胃内部を撮すカメラなのだ。

カメラは乾いた息を喘いでいる口中に納まる。

「呑め！」

背を力一ぱい叩かれると、検査体は息がとまった。眼球を白くすると、ごくり、夢中で呑み下す。食道を不快な刺激が落ちてゆく。係員は真剣な顔で器具を操った。

胃壁の形状が刻明に撮られると、やがて紐が手操られる。

前にも倍した不快痛が胸許を上ってくる。逆流する圧迫なのだ、嘔吐感が咽喉下の食道を駆け廻り、呼吸が停って疼き、秀麗な顔はじとじとと脂汗を滲ませる。

係員は、そんな犠女の態など関心を示さずただカメラそのものを創つけず手操ることに専念しているようだ。

やがて、げげっと吐き上げるのを、すうっと口から抜いて、直ぐ器具を点検する。

美加子は酸っぱい液を舌上に溢らせたが、動かせぬ口内機能の為、又、ぶぶぶと胃へ戻した。そして解放された呼吸で、ほおっと安らぎを息吐く。

カメラと共に採取された胃液は、検査室に廻される。

「だらしない奴だ。お前の品質を調べる運動機能測定が、まだ残っているんだぞ。涙はその時迄、とっておきな！」

滾々と瞼から涙滴を流している近代娘に、勝谷は嘲けるように吐き捨てた。

## (六) 内閣調査室

津田慶介が、遅い朝食を済ませ服を着替えている処へ、隣の酒屋の親爺が電話ですよと知らせて来た。

ちえっ、朝っぱらから何の呼出したと、いささか気を腐らせながら立上った。昨夜、時間が過ぎていたので多分ないだろうと予想していたのだが、比奈地路子は案の上、退社して了っていた。申訳なさな今朝、出社前に寄ろうと考えていた処だった。

電話は、社からではなかった。内調の友人名古浦健平から直ぐ総理府へ来てくれと云うのだ。

津田は、予定が又崩れたことを、ぼやきながら家を出た。総理府官房調査室。即ち内閣調査室。略して内調は日本の機密室である。

昭和二十七年四月創立された情報機関で、故緒方副総理の提唱した新情報機関構想の基礎になった内閣調査室である。

戦後、各国諜報員の跳梁する国際都市化した東京都をはじめ其の他主要都市にあって、厳然と国家情報を収集し、日本を累卵の危きから救っている権威ある機関である。

その内調室員、名古浦健平は津田の中学の先輩にあたり、気の合った呑友達だった。

併し、彼は流石に役目柄、仕事となると口



の端には絶対に載せない用心深さがあつた。いつかも君は新聞記者だからねと皮肉ったことがあるが、彼は家庭でも全然勤務のことは話題にしなかった。

その名古屋健平が、どういう風の吹き廻しか、自分から津田を呼んだのだ。

「何です？」

とポケットへ手を入れた儘の図々しきで突立った津田を、名古屋は周章てて、隣の小部屋へ案内して

「津田君、君は昨日公安三課で取引したそうだね」

と、にやにやしながら問いかけた。

「へえ、もう上聞に達しましたか、やっぱり情報部員は違いますね」

津田は、わざと呆れてみせて

「それで、まだ僕に何か聞くことでもあるんですか？」

「いや、折入って、頼みがあるんだ。場合によっちゃ取引してもいいぜ」

「ちえっ、人聞きの悪い、どんなスクープを呉れるんです？」

「さあ、それは君次第だが」

「思わせぶりは止して、いつものようにぎくばらんに願いましう」

津田は敵の出方を待つ主将のように、ソファに反り返って先輩を眺めた。

「うん、じゃ卒直に云おう、君にバクダット

へ行つて貰いたいのだ」

「えっ！ 何ですって？」

津田は意表を衝かれ跳び上つて上半身を起した。

「人類文化発生の地、バクダットだよ」

名古屋は笑顔を消さずに繰返した。

「<sup>カラ</sup>擲掄かわないで下さいよ」

「君は昨日、千代小路氏やアラビア人惨殺の根源は中東だと云ったね」

不審気に見上げる津田の瞳を、がっちり受



いなりと  
押しやり



けとめて名古屋は口調を改めた。  
「僕達が集めた情報を総合しても、君の云う通りイラク周辺を指向するのだ」

津田は黙って聴き入る。

「千代小路氏及アラビア人殺害ばかりではない。光子ロケット研究の権威関田三郎理化学博士の失踪の前後にはターバンを巻いた人種が出入しているし、細菌学者村井要博士の謎の自殺も令嬢の家出が原因ではなく、黒バッチに脅迫された形跡がある。又、最近、頻々と起る青年男女の失踪も総て、中東に拠んでいると見られる節があるのだ。アラビア人殺しの犯人も中央亜細亜の種族らしいし、他に又油田開発会社の技術者達は交通事故やその他不慮の事故で無惨の死を遂げている者が多い。それに、これは推測だが、今猖獗を極めている原因不明の疫病、これもどうやら奴等一味の仕業ではないかとも考えられるのだ」  
「と云うと……」

「この病気は先年、トルコのイスタンブール近辺で発生したのと同じではないかと想像されるのだ。この時はチグリスの行者と名乗る老僧が表われて祈禱したのだそうだ。すると一陣の風に吹き払われるに似て、忽ちにして、この疫病はトルコから消滅したとか、以来、その地に庵を作つてこの宗教を拡めようと計つたらしい。だが、イスラエルのエジプト侵入に端を発したスエズ抗争が、トルコ国

内に異常な波乱を起すと、又これが掻き消すように姿を見せなくなつて了つたのだ。チグリスの行者、即ちチグリスとはバクダットを縦断する有名な河の名だ。向うの資料を取寄せて調べた処、発生状態及伝染経路が非常に似通っているばかりでなく、病気を調伏すると称する黒霊教の出現、又罹病を防禦すると称する食物の販売など、トルコに於ける行者登場にまつわる諸状態に極めて酷似しているのだよ。」

「目黒の黒霊教と渋谷のエンゼルか？」

津田は味覚のデパート、エンゼルは勿論、目黒駅から自由ヶ丘に向う坂の一角に最近急速な布教方法で信者を獲得している新興宗教の殿堂が出来たことは職業柄知っていた。

「そうだ。それから、もう一つ、自殺を遂げた村井博士門下の若き俊足、民野理学士が偶然村井博士のメモからヒントを得て、或方法で病原菌を培養研究してみたところ、怖しい結果が出たのだ。これは人心を不安に陥れることでもあるし、確たる結論ではないから発表の段階と云えないが、どうもこの菌はメリオイドチス菌ではないかと云うのだ」  
「メリオイドチス菌って何です？」

津田は訳の解らぬ熟語が飛び出してきたので、慥面して問返した。

「一九一二年にホワイトモアがこのバチルスを発見し、分離培養した。このバチルスは

細菌戦にとっては非常に理想的な菌で、これに依つて起る病気は世界の医者は殆ど知らないし、その徴候は千変万化という有様で、診断が難しく、死後でも結論ははっきり出せない。だから、このバチルスは極度のパニックを捲起し、又高率の死亡に依つて高められることになるのだ。ペニシリンとマイシンも効かないし、この治療薬は現在迄のところ出来ていないのさ」

「とすると、この病気は或者がその菌をばら撒いたが為に生じた？」

「想像されぬこともないね」

「何の為にそんなことを？」

津田は憤慨の眉をあげて、椅子を乗り出した。

「解らないから君に探つて貰いたいのさ」

「イラクにその行者が居り、黒霊教と連絡あるかどうか、根源が何者かを探れと云われるんですね」

「それと、その組織の意図をね、僕の推理だが、多分、日イ油田開発会社の採鉱予定地を調べれば、何か掴めるのではないかと思うのだ」

「どうして僕を選んだのです？」

津田は開き直つて訊ねてみた。

「第一に君の気心は僕が熟知していること、第二は君の過去に何等諜報員としての匂いが無いこと、第三に君は記者としても優秀で探



索心が旺盛であり、偶然だがこの端緒を掴んで興味を持ったからだ」

津田は黙然と腕を組む。

「国内のことは我々が調べる。徒勞かもしれないがイラクに行ってくれんかね」

名古屋は誠意を言外に示して、じつと津田を凝視しながら、

「彼等の意図が掴めないのだ。米ソ両国に挟まれた東洋の戦敗国に殺人、誘拐、疾病を発生させて、攪乱するのは何故なのか。その団体は何者なのか？、背後にあるのはユー・マ・メーソンか、それとも別な大国が控えているのか？、力のない敗戦国では、確然と証拠固めをした後でない、このような大規模な国際的と見られる犯罪には手を打てないのだよ。まして今度の場合、何の目的で行動しているのか皆目解らないので決手が発見出来ないのだ。犯罪が非常に統制とれていること、残虐行為が平然となされていること、強大な組織体であること、それらから察して根本を根柢えなない限り、雑魚の一匹や二匹を捕えることが返って藪蛇になり、人道無視の極端な手段に出られる公算が大なのだ」

津田は深く頷くと、意慾に光り始めた双眸を投げて

「行くとしたら、どんな資格で？」

「勿論、新聞特派員だよ。石油探鉱の取材が名目さ。行ってくれるね」

爛々たる名古屋の眼光が躍りこんでくる。「行きましょう」

津田は、にっこり笑い乍ら手を差伸べる。名古屋は、ぱっと喜色を漲らして、すつくと立上ると、その手をしっかりと握る。男同志の固い誓が手の中で強く温もった。

「有難う。君の社の部長には今朝、大体の下話はして置いたからね」

「ちえっ、手廻しのよいことですね。それで出発はいつですか？」

「今夜だ、旅券や羽田からの切符は手配してある」

「えっ！」

流石の津田も相手の手際良さに聞いた口が利けない位だった。

「さあ、細い打合せをやろう。早くやらないと恋人とデートする時間がなくなるからな」名古屋はにやつと微笑んで扉口へ歩みを移す。津田は先手先手と取られて、舌打ちしながら後に続いた。

打合せを終えて、電車通りに出た時には、晩冬の陽は大分西へ傾いて、舗道に長く街路樹が影を曳いていた。

比奈地路子の頼みを聴いてやれなくなったことに心が残り、美加子のことが心配になった。恋人の安否を尋ね、相談にのれない詫を云って置こうと津田はタクシーを停めた。

だが、彼は恋人のことを單なる仕事の都合で帰宅が遅れているのだらう位にと軽く考えていた。

車はラジオ帝都へ向う。そして、欠勤を続けていることを知り、津田は周章で、車を中目黒の西和化学へ飛ばすことであろう。

併し、当の路子は黒山谷子の呼出し電話で早退していたのだ。昨夜遅く、自宅を訪れた魔女の術策に陥り、その頃、渋谷のエンゼルで勝谷と逢っていた。

まともに谷子を信じ、谷子の紹介した、この冷酷無慚な男を、唯一の相談相手と思い込み、類まれな美貌を弱らせ、胸の苦しみを声曇らせて、天来の美女は告白していたのだ。

(未完)

### 〔代理部だより〕

○五月目の「代理部だより」にて予告しました通り、『女体切腹構成案図譜』『女体自害悦虐図』『風流女体アラベスク』『美しき女体家畜飼育室』の分譲は今月を以て打切りといたします。

○左記の分譲品は近々分譲打切りにします。北原純子責面傑作選の中『女学生羞恥責』『ハートの的体洗滌室』『緊縛ヌード十六ポーズ』

(以上)



## 体験記

## 『バー「ナナ」の人々』

(第一回)



夫とき 南みなみ

## 一 バー「ナナ」

私は大学時代に寒い地方で暮らしたせいからアルコールには可成り強くなっている。そして現在は飲む機会も多く、誘われるままに根が好きな方なのでよく盃を重ねる。私にはまだこれと云った行つけの飲み屋はないが、それでも二、三軒はよく顔を出す店がある。最近では日本酒よりも洋酒の方が手取り早く酔も早いので——実は経済的な問題が多いのだが——もっぱら洋酒をたしなむ。それもストリート一本槍で、多少金に余裕があつて今日はカクテルにでもしようかと思ひながらも、店に入ると思わず「ストレートをダブルで」と云つてしまう。そんなわけで顔馴染になった店では私が無言で座つてもストレートのダブルを卓に置いて呉れる。東京山手の繁華街Sにあるトリスバー「ナナ」も私の注文を聞かずに直ぐに眼の前にあの褐色の液体を出してくる店であつた。駅前を真直ぐに入り、ガードと直角に右に折れた道の左側にあるこの店は、カウンターが階下にあつて、狭い階段を二階に上るとボックスが五つ並んでいる。一寸立寄つて直ぐ帰るお客は階下のカウンターで飲み、多少様子を知られた客は二階のボックスを占領する。普通のトリスバーであるが、二階に居ると注文した飲物を運んで来た女の子がそのままそこに腰をおろし相手をして呉



れる。二階の客の注文を聞くためであろうがチップも結構貰える利益がある。いずれにせよ、バーやサロンの様に女の子がつくというのではなく、居る処がないから腰をおろし酔っぱらいのたわ言に相槌をうっていると言った具合だ。したがって余り感じのよくない客やアベックで飲んでいる場合には注文品を置くときさっさと行ってしまう。その様な「ナナ」に働いているのはマダム以下女三人と一人のバーテンである。バーテンはそう若い方ではなく人の好きそうな背の低い男であるが腕はなかなか確からしい。

店の主人公であるマダムは、三十四、五の小太りに肥えた品の良い人であり、言葉も丁寧で中流以上の家庭の主婦といったタイプであつた。後で聞いたところによると矢張り相当良家の家庭の子女であつて、教養も可成り積んでいるとのことだつた。色の白い、アップにした髪がいつも清潔で、すんなり伸びた襟足がとても綺麗であつた。時には洋装で店に立つこともあつたが多くは和服で、それも紫がかった色合の着物が多かった。しかもその着方もこの種の店のマダムとは思えない程きちんとしていた。襟もぬき襟などとは程遠くまるで七五三の子供の晴着のときのようにいつもびったり襟首から胸元を隠していた。それでいてこの年増女性の襟足は不思議な魅力をもち、後向きに何かやっている姿を見る

とどうてい三十も半ばに達した人とは思えないみずみずしい色香をもっていた。私は映画で接する山本富士子を思い起す。もっともこのマダムには山本富士子のような若さもなくミス日本というレッテルのつく程の美貌でもない。でも彼女を包む品の良い色香は年令を超越した、あの女優に共通する何ものかがあつた。丈は中背であるが、鼻、口などのつくりが小さく、眼尻にかすかに浮ぶ小皺に気づかねばまだ二十代にしか見えない。初めての客は、若いのに随分落着いている」と云うがそれをもっともなことであつた。本も可成り読んでいるらしく、客との間に交わす話題も相当程度の高い内容をもっていた。私は彼女の名前も、今日に至るまでの生活の変転も知らない。又知る必要もないと思う。過去を穿さくしても何んの意味もないからだ。

マダムの他に、王己<sup>キミ</sup>、ミスズ、良子の三人の女がいる。この名前は本名かどうか分らない。ただ「王己」だけは珍らしいので本名ではないかと想像するだけだ。もっとも私は最近までそれを知らなかった。「きみちやん」と呼ばれるこの娘に「君はきみ子なのかきみ枝なのか」と聞いてみたところ、ウフツと笑いながら「きみだけよ」と云つて「王己」と教えてくれた。王己ちゃん是非常におとなしい娘で、けげんばしきはどこにも見られず、会社の女事務員という型、いやそれより高校

を卒業して洋裁学校へ行いつているか、音楽学校で好きなピアノでも弾いている様な静かなお嬢さんといった方が近い様に思われる。二十一だと云うが小柄でくりくりとした眼の可愛い娘であつた。客の前へ出てても万事控え目で酔漢に手を握られたりすると顔を赫らめてしまう様な純情な、何か優しい言葉の一つでもかけたくなる様な娘であり、マダムも可愛がつている様子であつた。マダムとこの王己ちゃんとは連れ立って歩いていたら、バーのマダムと女給と見破る人は恐らくあるまい。この世に何んの苦勞もない姉と妹がお花の展覧会にでも行くのかと思う人が多いのではなからうか。「どうだい、疲れるだろう」と云えば「ええ、でもママさんがよくして下さるから……」と静かに答える。それを聞く私は他人ごとながら喜ばしい気持になる。その様な娘が王己であつた。

マダムと王己とは全く違つたタイプをもつた女がミスズである。むしろバーの女給としてはミスズが常態であつて、マダムや王己の方が不似合な女であると云える。「ティーンエイジャー」とも「二十二、三」とも云つてゐるのではっきりした年は分らない。キングサイズとまでは云えなくても堂々とした肉体をもち、気の弱い男性などは太刀打がむづかしい様に思える。客と応対する言葉も男の子の様であり、あたりかまわずポンポン云う。



大胆な服装で、陽気が多少でも暖いと、もうむき出しの腕、豊かな胸をちらほらさせる。五尺三、四寸はあろう、それもただひよるひよると背だけが高いのではなく重量感をもっていた。ミスズは当今はやりのグラマーであった。時にはその長い足にスラックスをはき男の様な足取りで店を闊歩する。中国服を着ていることもあったが、裾の裂け目からのぞく太股のあたりは眼に痛い程の肉づきをもっていた。顔の造作も大きく、眉は男のように黒々と画き、ルーシユは毒々しいまでの赤さをもつてひかれていた。眼の上にはいつもアイシャドウをぬって酔眼には妖しげな美しさをみせていた。髪の毛はそれが好みなのか長く伸ばし、肩のあたりを覆っていた。流手なく目立つイヤリングをつけ、首には何重もネックレスを巻きつけ、両の手首には中世の騎士のように巾広い腕環ががっくりとはまっていた。この様な店に居るよりは外人相手のキャバレーにでも出た方がうれるような女であったし、或はその様な処を転々と廻って来た女かも知れない。アルコールも強いらしく客の側に座ると、王己とは違つて、ぐいぐいと自分から杯を口にもつてゆく。客も又ミスズの肉体から発散する異様な妖気に圧倒されて彼女の思いのままに飲ませられてしまう。「なに云つてんのよ。私まだ処女<sup>バジ</sup>より、まけとくから買つてごらん、」男のように臆面なく

こんなことを大きな声で云つては意味あり氣に腰のあたりをさすったりする。「ユーはいつもストリートね。しけてるよ」私は彼女にこう云われたことがある。「アンタおとなしううだけどマダムや王己ちゃんの様な人が好きなんでしょう。ウチみたいなのアバズレは邪魔なんだロ」、可成り飲んでいたのである、私の様な男にそんな風にからんできたこともあった。

もう一人の良子は子持ちの女であつた。もううば桜といつたところで、客扱いも慣れていて長年水商売をやつてきたと思われる女であつたが、どこかくずれた感じでしかも痩せているところから魅力に乏しかった。

以上三人の女の中、最後の良子だけが、かいであり、王己とミスズは店に住込んでいた。私は店のつくりを知らない。マダムと王己とミスズがどんな具合に寝泊りしているのか分らないが、これも又知る必要のないことだらう。

私は「奇譚クラブ」の読者である。しかし読者の大半がそうである様に私もまた自分の傾向を自分一人の胸に秘め外部に出すことを控える。可成り酔つていてもその様なことを口走することは殆んどない。変つてゐると思われたいという理由もあるが、それより他人に（少くとも一般人と云われる人に）

話してもどうなるものでもないことを承知しているからだ。同好の志と判れば胸襟を開いて語り合うことも無意味ではないが、社会人としてノーマルな生活を送っている私には、そのような秘めたる傾向を自分から発表する必要もないと思う。もつとも時には、はつとずる話に出喰すこともある。いつだったか友人と横浜の飲屋で飲んでいたとき、そこのおかみさんが「この辺は夜になるとリンクタ屋が多くて客の奪い合に大変なんですよ」と話したことがある。友人が「そう云えばアソコが近いからな」と相槌をうつと、「アソコにはいる変つた女もいるそうですよ。手や足を縛つて呉れて頼む女の子がいたんですつてサ」その後、話題は別の方に流れたが、そのおかみの話を耳にした時、私はどきつとした。普通の人なら、そんなこともあるのかなあ、ぐらいで片付けられてしまうことが、私には異様な関心が湧く。しかしそれでも私は強いて何んでもない様な顔をする。インテリの端くれだという偽い自尊からかも知れない。だから、バー「ナナ」にても私は、何んの変つたところのない一介のサラリーマンであり、つけたストリート族にすぎないのだ。ところが事實は小説より奇なりと云う。その奇なる事實が、バー「ナナ」で飲んでいた私の耳に飛び込んできたのであつた。私が問い尋したわけではなかった。数多い客の中で選りに選



って私の耳に入ったということは今もって不思議に思う。大げさに云うならば運命のいたずらかも知れない。私は自分自身のささやかな体験の外は「奇ク」よりこの種のことの知識を得るのみである。したがって「奇ク」が唯一の手掛りであり、秘めたる心の寄りどころはこの雑誌以外にはない。でも「奇ク」はあくまで雑誌である。どんな雑誌でもそうであるが、ある文章に書かれている内容の真実性を全面的に是認することは不可能と云えよう。自分自身の傾向は否定することの出来ない事実であることから、私は私の様な性情をもった人も他に居るだろうことは、想像出来る。少くとも世の中に私一人だけは居るのだから。ところが私と違った世界の人、例えば女性においても全く同じことが云えるかどうかには自信がもてない。女名前て様々な告白文や返信文が載っているけれども、はたしてその様な女性が実在するのか。男の人が女名前て投稿した記事ではなからうか。女性は本能的にマゾの傾向をもっと云われている。何回も縛られるとマゾ化すると書かれている。しかし私の経験ではその様な徴候は見られなかった。はたしてマゾの女性が居るのだろうか。サデの女性が実在するのだろうか。私の長い間の疑問であった。それは知りたくても明確な解答を得ることが困難な問題でもあった。その様な私の疑問を解いてくれたの

が「ナナ」であった。しかもそれは非常に生々しい解答でもあった。なぜなら私はその解答者を眼の前において、しかもその生きた声を耳の中に流し込んだのだから。

それはいつだったか、さだかには覚えていない。私の誕生日の前後だったと記憶しているから多分十月末か十一月初めであろう。雨の降っている晩だった。ボックスには私の他にもう一組の客があったが、あとはひっそりしていた。階下で歌っているミズスの声が時々聞えてくる。私は残業した帰りに寄ったのだからもう九時は廻っていたと思う。ウィスキーを運んで来て呉れたのはマダムであった。私にとっては珍しいことである。客が多いとマダムはカウンターに立ってシェーカーをふることも多いのでボックスに運んでくることは少なかった。「一寸お邪魔させて下さいね」マダムは私の前の椅子にだるそうに腰を下ろした。矢張り紫の着物であった。帯は白っぽい。「疲れている様ぢやない？」それには答えずマダムは私の方に顔を向け奇妙なことを聞きはじめた。「南さん、あなた大学では法律御専攻なのでしょう？」ええそうですが、と私がうなずくと「変なことを聞くようだけど」と前置きしながら続けた。「どんなことでも、本人が承知すれば犯罪にならないの？人を殺す様なことはいけないことだと

私にも分るんですけど……」私は大学時代のノートを思い出して一枚一枚めくってみた。でもアルコールを口にしながらマダムを前にして法律論はてれくさかったし、この様な場所ではまっとうな思考力も鈍りがちであった。「マダムに試験されるとは思わなかったよ」私は笑ってごまかした。でもマダムの眼は意外に真剣であった。私はこの三十女の白い頬を見つめた。違法性の困難な問題であった。違法性を阻却する事由は刑法三十五条から三十七条までの三箇条にのっている。しかしその解釈は非常に難しく学説の分れるところでもある。正当防衛、緊急避難の二つはよく新聞にも事件の解説として出るしその用語は知る人も多い。しかしマダムの換起した被害者の承諾による行為は三十五条前段の「正当の業務による行為はこれを罰せず」から導かれる正当行為の範疇に入れて解釈理論上より導き出されたものである。一般的に被害者の承諾があれば犯罪は違法性を欠き成立しないものとされる。しかしそれは定型なものではなくその解釈には弾力性をもっている。違法性を阻却する承諾は自由意思にもとづくものであることを要するし、脅迫されたもの、冗談の承諾は駄目である。又自己が処分し得る法益であらねばならないので身体、財産等に限られる。いずれにせよそれは無制限なものではなく一定の限度がある。それが



公序良俗という枠であると説明される。違法性の実質は公の秩序、善良の風俗に反することにあるからだ。私はマダムに困難な問題であることをほめかし具体的にどんな事なのか聞いてみた。「打ったり、叩いたり、そして縛ったりすることなんですけど……」マダムの言葉は淡々としていた。私は最後の「縛り」ということに、あの横浜の飲屋と全く同じ心の動揺を来たした。そこでマダムは「一寸」と云って席を立ち階下を下りたが間もなくジュースの入ったコップとウイスキーの瓶を持って同じ位置に座った。そして私はマダムの話から奇クを通して抱いていた疑問に或る一つの解答を得たのである。それは「奇ク」を読んでいる者にとっては何等珍らしいことではない。変な言い方が許されるならば一般社会においてはアブノーマルであるが、奇クの世界では既にノーマルになってしまったことと云えよう。マダムの話はこうであった……。(私は以下に話の内容を手紙風に書き綴った。読者の一人一人の方がマダムから直接届いた手紙だと思って読んで頂きたいと考えたからである。)

## 二 マダムの話

そう、七月末頃だったでしょう。とても蒸し暑い晩で御在居しました。お店を閉った後の寝る時になって王己が私の部屋に来て「暑

くて寝られないから」と云うのです。私も蒲団に入ったところで寝苦しいことだろうと思いい窓際で涼んでおりましたので、それから少し王己と映画の話なんかをしておりました。王己とミスズが階下に寝て私だけ二階で寝ることになっておりますが、その晩はミスズが何処かに外泊し王己と私の二人だけだったので御在居します。映画の話からお客様の話になりました。王己ちゃん、もう寝ましょうよ」と、私は立ちかけて云いました。ところが王己は動かずに私に甘えた様な声で云うのです。「ママ、王己の云うこと聞いてくれないかな」私が「なによ？」って問うと王己は私をいぢめたいと云いだし、一寸でよいから手をくくらせてくれって云うのです……。

(ここまで聞いて私は何かマダムの話を聞き違えたのではないかと考えた。あのおとなしいお嬢さんタイプの王己が人をいぢめたいとか、そのために縛るのだとか云う筈がない。男の様なミスズならば或はその様な傾向もあるかも知れないが。私はマダムの話の途中でその点について口をはさんだ。ところがマダムは、初めは自分も意外に思ったが、おとなしいわりに気性の激しい娘なんです。と答えながら、話を続けていった)

私も見も知らぬ人間に縛られるわけでもなし、一緒に暮している妹の様な娘にどうされ

ても別に何んでもないと思ったので「ぢやー貴女の云う通りになってあげるわ」と承知致しました。このまま寝ても仲々寝つかれないだろうし、王己もミスズが居なくて一人では淋しいし、少し遊んであげても……と考えたからでございます。

「これでいいの?——」

私は両の手を前に揃えて王己の方へ差し出しました。すると

「ママ、駄目よ。あっち向いて手を後ろに組んでくれないや」

と王己が云うので、私も成る程、映画でも縛るときは大抵後ろ手になっていると思いい王己の云うままに背を向けました。王己はそこにあつた私の腰紐で私の手首をかさねて縛り「ちよつとそのままで待ってて」

と云いながら自分の部屋へ下りてゆきました。私は今迄縛られた経験なんて全然ありません。その様な事に関心を抱いたこともありませんでした。現実には自分が縛られてみて、初めて映画のシーンや小説の挿し絵等が思い浮んで来たのです。手首が後ろに重さなつたまま自由にならない……何んだか変な気持ちでも別に痛いとも、厭とも感じませんでした。ので、そのままの姿で座っております。ただまだ蚊帳を吊る前だったので、顔の附近や足のあたりに飛んでくる蚊をはらおうとしても、手を後ろに縛られていますのでどうする



ことも出来ません。仕方がないので顔を動かしたり、足をこすり合せたりして蚊を追っておりまして。そこへ王己が細引の様なものと手拭を持って来て

「もう少し我慢してね」

と云いながら細引を私の乳の上に掛け胸をぐるぐると縛り後ろで結んだかと思うと、予め縛ってあった私の両手首にそれを纏いで上に引き上げながら引張ったのでしよう。私自身はどんな風に縛られたのか見ることは出来ませんでした。手首が背骨にそってぐつと吊り上ったのと、縄の掛っている胸と二の腕が締めつけられ、痛くもあれば息苦しくもなっていました。

「王己ちゃん、痛いわよ」

と私が顔をしかめて見せると、

「我慢々々」

と云いながら、とうとうそのままどこかに結びつけてしまいました。そのうえ、手拭で私の口を覆って髪の後ろで縛りました。後で知ったのですが、猿轡というものは口の中へ何かを詰めないと本当の用をなさないのですが、故意にか王己はそこまでいたしませんでした。その点は左程苦しく感じませんでした。それでも手を、又は身体を縛られた時はまだ遊びだという気持が大半でしたが、口に猿轡されてみると急に自分の自由のきかない立場が強く気持の上に支配するようになって

てしまいました。強盗にでも襲れて縛り上げられた様な錯覚に陥り、私は急に自由が欲しくなり、身をもがき頭をふりながら、

「もうやめてー、ほめて頂戴！」

って呼んだのですが、王己は興奮した様な面持で、私の足を前に引き出しよう一本の腰紐で足首と太股のところを縛り合せ、私を仰向けに転がしました。蒲団の上でしたので背中にくりつけられた手首がそれ程強く押えつけられるというのではありませんでしたが強く上に吊り上げられているので全く自由はきかず、次第に痺れて来て、私は棒の様にひっくり返ったままどうすることも出来なくなりました。その中に又ぶんぶん蚊がやってきて剥出しの胸や顔や手足に情容謝なくとまります。顔だけはどうか動かさせますがあとはどうすることも出来ないで食われるままにまかせ、そのあとのかゆみを我慢するのが又一段と苦痛でした。王己はお便所に立ってしまつて私一人、痺れた上半身をかすかにもがかせながら咬れた箇所を畳や蒲団にこすりつけ手拭の下で「うーうー」うなっております。人間というものは手足を縛られてしまうとなんと無力なもので御在居ましよう。普通の人ならば身体中の如何んな部分でも手の届かぬ箇所は無いと云われております。それなのに私は或る一点——それは縛り合された手首の触れる背中の中——を除いて、どこに

も伸すことが出来ない。縄のからみついた肉体の喰い込みによって僅かにその一点の附近を上下するだけでした。

「ママさん。哀れな恰好よ。でも私ものすごく興奮しちゃう」

私の気持と正反対の表情の、上気した顔をして王己はこう云うと私の背に手を廻し、私を抱き起すと姿見の前に私を押しやって、自分の姿を見ると云うのです。私も仕方なく鏡の中の自分に眼を注ぎました。ゆかたの胸ははだけ、乳房がのぞきその上に細引が三重に掛け二の腕に廻っていてその部分が凹み肉にかくれる様になっています。相当程度に強く縛られたとは思っていましたがまさかこれまでとは思わなかっただけに今更の様に驚きました。私はお恥しいことですが可成り肥えている方で、しかも色白でこの年になっても自分の肉体には自信が御在居しました。その身体が無惨にくびれているのです。その上顔の下半分が手拭で覆れ頬の部分が矢張り凹んで見えます。鼻だけが辛うじてのぞいているのが左程息苦しくない理由だったのでしよう。縄の掛って自由のきかない自分の姿を自分の眼で見ることの奇妙な気持。現代の世の中では、人の縛られた姿なぞ余程のこととでなければ見ることは御在居ませんでしよう。ところが私の眼の前には小肥りの、そしてしどけない姿の一人の女が猿轡をはめられ、身体を引



絞られる様にして座っているのです。しかもそれが自分だなんて……。

「ママ。素晴らしいでしょう。どんな気持ち？ なんだかほどくの勿体なくなっちゃった」

と、王己は私の猿轡の顔に自分の顔をすりよせて云うのです。鏡の中に哀れな捕われの女の側に、鏡の右端から若々しい、愛くるしい娘の顔がのぞき笑いながら片目をつぶっています。でも、その様なことに特別の関心もない私にどうして素晴らしいなんていう感情が湧くゆとりがありましょう。王己の耳が私の顔に近付いたとき私は必死に頼みました。「もう遅いから、解いて！ もう降参よ」

### ▽江戸の花笠（東映作品） 故里やよい

父の仇をたずねて江戸に上った僧浩然を慕って、これまた独り江戸に来た庄屋松右衛門の娘おちかが、悪人越後屋剛蔵に拐かされて長持に入れられたまま大杉伝右衛門への貢物にされる。長持を開くと後手、両足を縛られ猿ぐつわされたおちかが恐怖に満ちた顔で、お人形のように立っている。場面は足元から次第にパンアップするが、最初に両足をキチンと揃えた縛りが出る。ほんのワンカットで数秒間だが故里やよいの表情がいけるのでそんなに心残りがしなかった。

それなのに、

「ええ？ ママ何か云った？ 少しも聞えないわ。ねえーいいでしょう、ママ」

と王己はとぼけて私の言葉に耳もかきませんでした。私は、もうどんなことをされても無力でした。後ろに廻った両の手はしびれてしまつて力が入らず自力で縄から抜けることは不可能でした。このまま放っておかれたら朝までいや何日も限りなく私は自由を得ることが出来ないのです。私は今更ながら自分の拘束の立場を認識せずにいられませんでした。一人の人間がたった一本の紐で、ある人の意思に絶対服従の位置に立たせられてしまう。私は

### ▽花太郎呪文（大映作品） 近藤美恵子

目明しの父親勘兵衛の消息を知るため、金森三万八千石の若君源之丞のもとへ身をよせたお美年は、花太郎地蔵の洞窟で老婆からあずかった銀の鈴を持っているばかりに、盗賊花太郎に捕えられる。一軒家の中で後手に縛られ仰向けに転ろがされて「鈴を出せ」と折檻を受ける。胸をぐる／＼と三巻きした太縄は緊縛感があり、薪ぎっぽで二度ばかり打たれ、乳房の上をコジられるなど責められながら、気丈に睨み返す反抗的な眼ざしに魅力があふれていた。縛られたまま犯されかけた時にジャマが入って救われ、続いて恋人が助

王己の面前であることも忘れてて体を芋虫の様に波打たせ、身もだえしました。

皆様、御想像下さいませ。一人の中年の女が初めて纏った縄の衣から抜け出ようと必死に藻掻き廻っている浅間しい光景を。そしてその側で自分の主人であり、可成り年上の同性のこの惨めな姿態を冷然と凝視している愛くるしい娘の顔を。

それから数刻。私は、やつと解放されました。時の流れと私の必死の眼差しとが王己の眼に次第に平静さを蘇えらせた結果で御座居りました。

（未完）

けに現われる。花太郎がお美年を小脇に抱えてノド元へ刀をつきつけると恋人は鈴を代償に渡して助けて呉れる。ノド元へ刀をつきつけられてガックリうなだれる観念したらしい風情が悩ましい。

### ▽丹下左膳（東映作品） 長谷川裕見子

悪人峰丹波一味が左膳誘い出しの人質にチヨビ安を拐かす。この時に櫛巻のお藤が縛られるわけで、赤いシゴキで後手、手ぬぐいで猿轡されて、ころがっている。長谷川裕見子の艶かしい演技が、ほんの僅かな時間だがみられる。

### ▽丹下左膳（東映作品） 松島トモ子



## (映画通信)

## 今月の縛られ女優達

大河原 珠 樹

当のチヨビ安は、これまた柳生源三郎をさそい出すため捕われた。その妻萩乃と共に不知火道場の別宅にとじ込められている。白布の猿ぐつわ、胸をグルグルと巻いた後手縛り。大きな眼をキヨロキヨロしておびえている。

## ▽丹下左膳(東映作品) 美空ひばり

また萩乃は、峰丹波にうけた当て身で氣を失ったまま、チヨビ安同様に、白布で猿轡、後手にギツチリ縛られて放り出されている。俯向き加減にころがっている萩乃の胸を四巻き縛った縄の強い喰い込み、後手縛りの嚴重な手首の縄目も、はっきり見ることが出来る。一度は解かれるが、左膳達が救いに来たので再び縛られ、白刃の前にさらされることになる。

## ▽大当り狸御殿(東宝作品)

雪村いずみ、白川由美

縛りとはいえないかも知れぬが、きぬた姫(雪村)蝶の精(白川)が、蜘蛛の穴に落ちて、網にかかり悶えるシーンが2カット。

ト。しかしミュージカル作品だから所謂深刻さはない。

## ▽赤胴鈴之助、三つ目の鳥人(大映作品)

近藤美恵子

南町奉行土井肥後守に復讐する三つ目の鳥人にさらわれた奉行の一子鶴千代を捜して化物屋敷に來た腰元の萩乃は母親のお力と弟の松太郎が三つ目の鳥人一味の首領と知り、一度はいさめるが受付けぬとみて討ってかかる。しかし逆に当身を受けて小屋の物置にとじ込められる。腰元衣裳の胸をグル〜と四巻きばかりして後手、手ぬぐいで猿ぐつわされて氣を失って壁にもたれるように座っている。とりあげていうところもないが近藤美恵子の縛られ場面は今年になって「おけさ鴉」

「花太郎呪文」に続いて三本目。時代劇出演のうち十割近く縛られその度に演技上達のあとかうかがえられて嬉しい次第である。次にこれは縛りではないが縛りに関連して挙げておく。

## ▽葵秘帖(東映作品)

丘 さとみ

阿片中毒患者にされた彼女が、薬がきれどもだえ、のたうつ演技が素晴らしい。

なお何時ものように参考として縛りの無い映画を紹介しておく。

「白狐二刀流」東映。

「葵秘帖」東映。

「江戸っ子祭」大映。

「ふり袖纏」大映。

以上、「今月の縛られ女優達」と題して私の見た映画の中から数篇挙げてみた。他の紹介者の分と重複するものもあるかも知れないが、私は私としての簡単な感想を附して毎月、何らかの形で紹介してゆきたいつもりである。

(終)



## 天城山心中異聞

— 誘拐された令嬢 —



美 雅 沢 水

空は冷く澄んでいるが、それでも伊豆の山は今朝もほのかに暖みのある日射しだった。熱川温泉のバス停から山へ差掛る道を、二人の女学生が手を取りあって親しげに語らい乍ら上って行った。

一人は大柄な、しかしまだあどけなさの十分に残った、ふつくらとした紅い頬の眼の大きな美少女だった。上品な整った顔立ちで、ヘップバーン・カットの髪、紺の学生オーバーを着、肉附のよい脚に黒のナイロン・ストッキングをピッタリと穿き、よく磨かれた黒のロウヒール、襟元からはピンクのスカーフをのぞかせ、純白のナイロン手套をはめている。

いま一人は、やや小柄な細っそりとした清楚型だが、すらりとした体で、やや長めの髪をすそで軽くウェーブし、一ふさの髪を前にバングレ、グレーのベレー帽を冠っている。そして紺のボックスコート、ギヤザー・スカート、黒のウーリー・ナイロンの長靴下に白ソックスを重ねて穿き、黒のロウヒール、まだ子供っぽい服装だが理智的な瞳。

二人とも一見して、良家の令嬢らしい気品と美しい肌の清楚な美少女だった。年は、どちらも十八、九才だろうか。スニーカーを提げ、どこかの温泉で静かな冬の日を楽しむようだった。

「この山の上に、とても静かな家があるのよ



弘美さん」

細っそりした少女の方が声をかけた。

「私、去年の夏もお姉さまと一緒に三日程、来て毎日、本を読んで暮したの。とてもよかったわ」

「そうなの……ほんとに美紀恵さん、貴女のお姉さまって、いい人ねえ」

大柄な少女は、心から羨むように答えた。

「だけど私、自分の姉だけど、ほんとに尊敬するわ。両親もなくして私と二人っきりなのにこうして自分のアルバイトだけで今まで私も高校にやり、自分も勉強して来たんだもの」

「今年、卒業なの？」

「いいえ、大学卒業までには、まだ一年あるの。私も今年、高校を出て大学に入ったら、お姉さまに負担をかけないように努力するわ」

「ほんとに偉いわねえ、美紀恵さん姉妹は。私なんか、苦勞をこればっちも知らずに、お嬢さん育ちで駄目だわ」

大柄な少女、弘美は思わず呟いた。

二人は東都高校の三年生で、沖野弘美は富豪、沖野俊三の令嬢。関口美紀恵は二人の会話から判るように、父はかなりの資産家だったが、没落し両親共すでに亡くなって、女子大生の姉、関口淑子が苦しいアルバイトを続け乍ら、二人共勉學を続けていた。

二人は、この冬休の三、四日を伊豆へと旅を試みた。弘美の母は、箱根の別荘へ行くよ

うに勧めたが、弘美はそれを断って、この貧しい友と二人、熱川温泉へとやって来たのである。

二人が峠に差掛った時だ。

小鳥の声以外は、すべての音の絶えたこの山へ、下から一台の高級車が二人の後を追いかけるように上って来た。

急停車――

と、二人はハッと息を呑んだ。

ピストルが三丁、二人を囲んで突きつけられた。

「乗るんだ」――

余りにも突然の出来事に茫然と息を呑み、美しい眸を大きく見開き、喉がカアツと熱いものでふくらんだ二人の女学生は、無言のまま後部の座席に乗り込む他はなかった。一人が横から、一人が前から、ピツタリと体を寄せ合った二人の脇腹にピストルを突きつける。自動車は、山中深く走り去って行く。

車の中で――

「これを、このハガキに書くんだ」

何か書いた紙きれとハガキ、そして万年筆を突きつけられた弘美は、恐怖におののく顔を歪めた。

「書かないと、この娘の命はないぞ」

一方の男がピストルを引込めた代りに、短

刀を美紀恵の胸元に突きつける。

真青な美紀恵の顔。

弘美は、わななく指にペンを持った。

「お母さま、不幸の罪はお許し下さい。弘美は今日伊豆へ来る道で、関口さんのお話を色々お聞きしました。関口さんは本当に可哀想です。私は関口さんの不幸に同情して、一緒に死の道を選ぶ決心をしました。これから天城山中に入ります。」

お母さん、お父さん、お変わりなくお過ごし下さい。さようなら 弘美

震える手で書き終る。

「フ、フ、これなら本当に遺書らしいや。みんな大騒ぎして天城の山狩りでもするだろう」

男たちは、冷く笑った。

大勢の男たちに囲まれた二人の女学生は、半ば失神したように、よろめく足どりで地下室へと連れ込まれた。両手には冷たい鋼鉄の手錠が、罪人のように固く嵌められた惨酷な姿だった。

二人は伊豆から東京まで、ハイヤーに乗せられたまま誘拐されて来たのだった。

「美紀恵さん……」

「弘美さん！」

二人はジッと、お互いの痛ましい姿を見詰めあう。涙が美しく澄んだ眼に溢れてくる。

「いけねえや、二人とも口をふさいでおけ」



革マスクにバンドと尾錠のついた残酷な刑具が、二つ持ち出された。

「ア、ウウウ」

「ウウッ」

二人の少女の口に、固く防声具が嵌められたのだった。お椀を伏せたような革のマスクは、喘ぐ呼吸とともにピッタリと口のまわりに吸いつくように喰い込み、バンドを尾錠でしっかり留められると、もう発声はおろか呼吸さえも困難だった。

「この娘の方は、すぐ取引する。準備しろ」

「ハイ」

忽ち数人が走り寄って、美紀恵のボックスコート、スーツ、スカートを脱がせ、セーター、ブラウス、シュミーズ、そして白のソックスもロウヒールも引き剥がされた。ブラジャーも引き剥がれた。

白桃のような固い乳房、小柄だがすらりとした体の美紀恵が、パンティ、ガーターと黒のウーリー・ナイロンのストッキングだけの姿で、辱めをジッと固く眼をつぶって耐えている。男たちは、その若々しい女学生の手足をギリギリと細い麻のロープで縛り上げた。

「防声具じゃ、折角の顔が台無しだ。猿ぐつわにしる」

小さく畳んだハンケチが、革マスクの代りに口に押し込まれ、白布で猿ぐつわが噛まされた。ギッシリと縛られて、一切の抵抗を奪

われた若々しい美少女は、爪先で立たされたまま天井へ後手に吊られる。

「ウウッ、ウ、ウ、ククッ、クウウ」

悲しげな呻き。苦しいのだろう。青ざめた顔は、額に冷い汗をにじませた喘ぎ、身悶えする。そして、ヒイヒイという泣き声。

弘美は手錠を嵌めて立たされたまま、もはや美紀恵を正視出来なかった。友の余りの無惨な姿に、クラクラと眼まいさえ覚える。

「あ、こいつもこのままじゃ、友達同志で釣合いがとれねえよ」

弘美は、オーヴァーコートを脱がされ、スーツ、スカートの制服のまま後手錠を嵌められて、ギッシリと柱に手足を縛られて括りつけられた。そのままグッタリとうなだれる弘美。かなり立派な身なりの男達が、また大勢入って来た。

「うん、これが」

ガヤガヤした挙句、

「じゃ、競るぜ！」

親友、美紀恵は——売られるのだ。弘美は何も見まい聞くまいとした。

しかし……友はどうしているだろう。顔をあげた途端に、美紀恵の悲痛な視線とぶつかった。美紀恵はただ一人の友、弘美の眼を悲しげにジッと見詰めている。

男たちに、その若々しい体を罵られ、つままれる美紀恵。

せりの声、そして美紀恵は二十万円に決った。

「安過ぎるじゃねえか、この凄惨な美人を」

そして美紀恵は、涙で一杯の眸を「さようなら」と弘美に投げかけ乍ら運び去られた。

「どうだ、沖野令嬢。明日はお前ら、天城で心中したと思って世間は大騒ぎになるぜ。そこがつけ目で、こっちはお前の親父に身代金をこっそり要求する。つまり人質さ。今の奴みたいに売りはしねえから安心しろ」

弘美は縛られたまま、眼の前が真暗になった。

「これでも書かねえのか」

パンティと黒のナイロン・ストッキングだけの姿にされた弘美は、拷問につぐ拷問に責め苛まれていた。

だが——売られて行った友、関口美紀恵の身の上。そして自分は、身代金さえ父が出せば返してやると彼等はいうが——勿論、母の心配は言葉に尽せぬものだろう。自分も、この苦しみから一刻も早く逃れたい——それなのに、家への手紙は書けなかった。

あの日、伊豆から攫われて、美紀恵がその夜、直ぐ売られて行った一月三日から数えてまる二日、今日はもう五日だった。

残酷な拷問に喘ぎ、むせび跳き、身悶えし



泣き叫び乍ら、息たえだえの体をグッタリと床にくずれおれる。――勿論、両手は後手にギッシリと縛り上げられ、肉づきのよい黒ストッキングの両脚も縛られ、そして雪のように白い太股までも、縛られた惨たらしい捕われの姿のまま。

「沖野令嬢、これを見ろ」

見まいとしたが、活字と写真にハッと息をのむ。

令嬢、級友と行方不明

天城山で同情心中か

自分と美紀恵の写真入りだ。そして、ああ母が泣いている。ハンケチを眼に当てて泣いている写真。

「書きます」

弘美は、ワツと泣き出した。縛しめを解かれて、ペンを持つ白手套の手が震える。字が涙に霞む。やっといわれるままに、

お父さん、お母さん、驚かないで下さい。

弘美は生きているのです。だけど、このことは警察にもどこにも知らせないで下さい。若し知れたら、弘美は直ぐ殺されてしまうのです。

弘美は今、誘拐されて一室に監禁されています。手も足も縛られたまま猿ぐつわを嵌められて、口を聞くことも許されません。お父さんやお母さんが弘美を助けて下さるには、五百万円のお金を、一月七日の午後六時、新

宿駅の×××で左手に週刊誌を持ち紺の背広の服装の男に渡して下されば、引換えに弘美は返されます。

絶対に警察には知らさないで下さい。お願いです。では、また縛られる時が来しました。弘美の写真と同封します。さようなら。

美紀恵のことは、書くことを許されなかった。

「これに署名するんだ」

といわれて、眼の前に突きつけられた約十枚の写真。

くやしき、恥しき弘美は、またしても失神しそうだった。

何時の間に撮られたのか、拷問され続ける自分の姿が映っている。先ず手錠、防声具姿の女学生の制服、黒ストッキングの自分。

柱に同じ姿で縛りつけられている自分。身を跳き顔をのけぞらせ、髪を乱し体をくねらせる。

スカートを捲くられて、縛られたまま坐っている自分。

そして服を脱がされ、下着を引きむしられる自分。

白手套に黒の長靴下とパンティだけの自分が、天井から吊されている。逆さに、えび吊りに吊られている。

後手のまま跪かされ、大声で泣きじやくり、むせび叫んでいる自分。

雁字搦めのまま、猿ぐつわの下で眼に一杯涙をためて横たわっている自分。

そして――弘美は忘れもしない。最後に裸の体に黒光りする革の縫いぐるみの拘束服を首から足の先までピッタリとつけさせられ、ギューッと搾り上げられて泣き叫んでいる。その苦しさ、そのみじめな自分。

その一枚、一枚に署名させられ註をつけさせられるのだ。

書かなければならなかった。

弘美は、こういう姿で約三十分も縛られたまま、置去りにされたのです。

弘美は泣き叫びました。だけど、気を失うまで許してもらえませんでした。

わずか十八才の女学生にとって、それは耐えがたい辱めだった。書き終ると弘美は、また気が遠くなった。

速達書留で、業務上書類の体裁で送られたわが子の手紙に、父の俊三も母の富子も茫然としていた。

二目と見られないわが子の写真。

詰めかけている新聞記者に気取られてはならなかった。父母と、そして急を聞いて一昨日以来、かけつけている美紀恵の姉、関口淑子は、息を殺して手紙を見つめ相談する。

たった一人の愛嬢に、万一の危害があつてはと案じる父。



しかし母の気持は、一刻も早くと焦る。遂に二人は警察に秘密に連絡する。大捕物陣が新宿駅に張込んだ。

一月七日の夜が来た。

午後五時半——もう暗い道を、沖野家の高級車が門を出た。

母の富子と関口淑子が乗っている。

弘美の両親は止めたが、淑子はきかなかった。あくまで同行を主張した。

だが、その時、近くの酒場から飛び出した四つの影が、すでに素早く二台のオートバイで跡を追ったのだ。

母は、子 pensando 夢中である。淑子が気づいた。

「変だわ。もしかしたら……」

だが、すでに遅かった。二台のオートバイは、自動車の両側に沿って走っていた。

「止れっ」

離れ業だ。ピッタリと走り乍ら寄りそった二台のオートバイから、ピストルが突きつけられる。

世田谷の暗い路、自動車は止った。

麻酔薬のハンケチが三人の顔へ。

五分後、五百万円を奪われて眠っている母と運転手を、道端に置き去りにして、淑子に乗せた自動車はオートバイ二台に守られ乍ら、何処とも知れず闇を走り去った。

美紀恵は、地下の一室に縛られていた。

二十万円で取引された女学生は、しかし直ぐ出荷されたのではなかった。

一応、元の女学生の制服に返って、後手に縛られ両脚も縛られて椅子に括りつけられているのだった。

(弘美さん……) 猿ぐつわの下で、彼女は呻くのみだった。

しかも、パンと水は時々与えられ乍ら、縛しめは一瞬も許されなかった。

生理的な要求は、耐え難く迫って来る。みじめな自分……涙が止めどもなく湧く。

(お姉さま……) 呻き声は、むなしくコンクリートの壁に反響する。身もたえ、ああ、我慢が出来ない。自制は限界に達した。

生暖い液体が、この清楚な理智的な女学生の腰から下を、スカートも黒のウーリー・ナイロンの長靴下もロウヒールも、グッシヨリと濡した。

美紀恵は、すっかりぶちのめされた。そこへ……扉のカギがあいた。

「ウウウ……」(お姉さま……) 美紀恵は一声呻くと気絶した。

美しいロングヘアを後で軽くまとめて巻き髪にし、黒いスーツ・スカートに純白のブラウス、赤味がかかった薄いナイロン・ストッキングに黒のハイヒール、白手套の姉の女子大生、関口淑子が両手両脚をギリギリ巻きに縛

られて、男たちに肩を掴まれて立たされているのだ。勿論、固く猿ぐつわを嵌められたまま。

五時間後——

東京湾をひそかに出港する船の船艙に積み重ねられた箱。

その一つに、嚴重に縛られた体を折り曲げて制服の女学生、弘美令嬢が眼かくし猿ぐつわのまま押し込められていた。令嬢は三十万円で取引が成立したのだ。そして後の二つの箱には、それぞれ関口淑子、美紀恵姉妹が縛しめられた体を押し込められていた。

その同じ頃、わが子を奪われ、五百万円を強奪された沖野家では、母が半狂乱になって、子供の名前を呼びつづけていた。

一方、完全に肩すかしを喰った警察当局は沖野家からの知らせにより、新宿駅の張り込みを解散するや否や、必死になって令嬢誘拐団の足どりを追跡した。

張り廻らした非常警戒線の網にかかるのは雑魚ばかりである。時間は刻々として過ぎ去ってゆく。一時間！ 二時間！ 三時間！

可憐な三令嬢、弘美、淑子、美紀恵の上に救いの手が伸びるだろうか。怪船の出港はあと数時間に迫っている。ああ、

(終)



◎臨時増刊号 サディズム特集号 ◎六月中旬発売予定 定価三百五十円

皆様の要望に応じて緊縛フォト並に責画縛り絵を中心とした豪華なグラビア本位の特集号を企画いたしました。時代物現代物を網羅

し本誌ならではの特集号です。本文にはグラビア頁の詳細なる解説並にストーリーを添布いたします。必ずや座右の宝典として珍重さ

【新版】女体緊縛フォト ◎分譲◎

R組 七十組 (印画紙の大きさ 9×13cm)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二四〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四二〇〇円

R 1	柔肌と荒縄 (須川令子)
R 2	海浜の緊縛 (萩千恵子)
R 3	床間の飾り (佐賀美智子)
R 4	高手小手 (花坂道子)
R 5	海老縛り (萩千恵子)
R 6	後手猿轡 (須川令子)
R 7	後手足縛り (村田那美子)
R 8	鏡うつし (伊吹真佐子)
R 9	股間しぼり (須川令子)
R 10	鎖縛晒責 (萩千恵子)
R 11	股間縛正面 (伊吹真佐子)
R 12	女学生縛り (須川令子)
R 13	尻立縛り (萩千恵子)
R 14	開股しぼり (川辺砂登子)
R 15	猿轡の魅力 (伊吹真砂子)
R 16	トイレ縛り (須川令子)
R 17	立木しぼり (村田那美子)
R 18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R 19	足揚梯子責 (伊吹真佐子)
R 20	いたぶり (春日、伊吹)
R 21	帆立縛 (萩千恵子)
R 22	強烈梯子責 (伊吹真佐子)
R 23	椅子責め (佐賀美智子)
R 24	逆さ吊り (伊吹真佐子)
R 25	後手吊責め (伊吹真佐子)
R 26	股間縛後手 (中塚文子)

R 27	逆海老責め (伊吹真佐子)
R 28	高手小手 (加賀利江子)
R 29	変型しぼり (萩千恵子)
R 30	松樹後手縛 (村田那美子)
R 31	くさり責め (伊吹真佐子)
R 32	薄羅の緊縛 (加賀利江子)
R 33	股間縦縛り (中富綾子)
R 34	首縄股間縛 (坂口利子)
R 35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R 36	和装責め (藤田節子)
R 37	仰向悦虐責 (川端多奈子)
R 38	後手首縄締 (加賀利江子)
R 39	乳房下緊縛 (村田那美子)
R 40	肉体美誇示 (伊吹真佐子)
R 41	お灸責め (春日、伊吹)
R 42	後手猿轡 (萩千恵子)
R 43	松樹しぼり (村田那美子)
R 44	コルセット (中塚文子)
R 45	股間しぼり (〃)
R 46	手足緊縛 (萩千恵子)
R 47	後手しぼり (加賀利江子)
R 48	御開帳 (萩千恵子)

R 49	くさり責 (川端多奈子)
R 50	折檻の魅力 (須川令子)
R 51	雁字搦目 (津森静子)
R 52	股間緊縛 (〃)
R 53	のぞき見 (〃)
R 54	引き裂き (〃)
R 55	後手しぼり (〃)
R 56	猿ぐつわ (〃)
R 57	苦悶の表情 (〃)
R 58	あきらめ (〃)
R 59	強烈しぼり (〃)
R 60	トップモード (〃)
R 61	全裸股間縛 (愛川悦子)
R 62	逆立折檻 (大塚啓子)
R 63	開股椅子責 (大塚啓子)
R 64	振袖緊縛 (花坂道子)
R 65	腰元吊り責 (村井知可子)
R 66	ヌード縛り (愛川悦子)
R 67	本縄しぼり (愛川悦子)
R 68	股間しぼり (田仲芳代)
R 69	落花狼籍 (田中芳代)
R 70	ハリツケ (川辺砂登子)





## 緊縛映画速報と

## その雑感

藤 木 仙 治

### 悪魔の爪痕(日活映画)ワイド・カラー

ご存知グラマー・ガール 筑波久子が、ギヤングにさらわれ、椅子にうしろ手で縛りつけられる。シユミーズ一枚だから、肉感的である。椅子の背にまわされた両腕が、ワン・カット、クローズ・アップされた。ただし、胸に縄はかかっていない。

ギヤングに責められて、煙草の火を乳房の間に押しつけられる。その悲鳴。唇を歪めて苦痛に悶える表情は、まあまあ。この筑波久

子という女優、グラマースターだなんて騒がれているが、二、三カ月前の本誌で、宝塚二のグラマー(神秘的な肉体美をもつ女性)ではない。やたらに肥って肉づきがよいだけである。だから、胸に煙草の火をおしつけられて苦悶する演技も、田舎の健康優良児が、チンピラと太公にいじめられる程度の実感しかでない。この位、いつまでたっても垢ヌケしない女優も珍らしいだろう。顔もただ、女学生みたい、ポッチャリと可愛いだけなので

ある。

ただし、この「悪魔の爪痕」における責めシーンは、全体的にみて、前作の「肉体の悪夢」よりは、数段マシであろう。

### 江戸群盗伝(松竹映画)ワイド・黑白

福田公子扮する江戸吉原の妓楼大阪屋の抱え女、花鳥が、責められる。

これは、なかなかよかった。近來でのヒットかも知れない。

場所は伝馬牢の番屋。灰色の囚衣。後ろ手



で、胸から首にも縄がかけられている。縄尻は天井にのび、更に部屋中央に立つ柱に結びつけられている。縛られたまま、床にぐったりと俯伏している花鳥。そばに鞭をもった悪同心。つまり、今まで、天井から吊り責めにされていて、今おろされたという設定である。髪は乱れ、囚衣も汚れている。

同心の責めがはじまる。花鳥、なかなか白状しない。後ろ手に縛った縄を握って、上にぐい、ぐいとひきあげる同心。「ああッ……むむッ……ひいッ……」と、うめき声をあげて必死に耐える花鳥。このところアップ。圧巻。前記の筑波久子よりも、よほど実感がある。それだけ、福田公子のほうに演技力があるというわけ。

責めぬかれて、顔色も蒼白、唇も真っ白。このメーキャップ、迫真力あってよろし。全体的にリアルな感じで、いわゆるお芝居らしさがない。

着ている着物が囚衣なので、お色気はないが、妙に陰惨なエロチシズムがある。乱れ髪蒼白な顔で苦痛を耐える迫真の表情——

阿部秀さん。この表情は、撮っておく価値がありますよ。スクリーンがちよっと暗いのが難点かな。

尚、五月号で大河原珠樹氏が書かれているが、この映画に嵯峨三智子の縛りはない。念

のため。

## 花太郎呪文（大映映画）普通、黒白

近藤美恵子が後ろ手。雑木林に囲まれた小屋の中。河津清三郎が、いやらしい手をさしのべる。せまい小屋の中を、あちこち逃げまわる。後ろ手が、一瞬見えたか、見えなかったか。緊縛感はありませんが、シーンの長さからいったら、かなり長い。

市川雷蔵の美男浪人が助けにくる。河津悪玉が、美恵子ヒロインを小脇に抱えて睨みあい。縛られて立ったまま、上半身を不自由に抱えられて苦しげな美恵子嬢。手首がわずかにチラリ。ますますよろし。

## 女王蜂（新東宝映画）普通、黒白

キヤバレーの女給、城実穂が、ギヤング共の密談をドアの外で立ち聞き、捕まる。この縛りは、まったくいたしたことはない。胸にグルグル巻いた縄が、ちよっとひっぱれば、すぐ解けそう（実際助けられた時にズルズルと解けた）しかし、可憐な容貌の城実穂の縛られ姿。新鮮な魅力を感じましたねえ。

やはり、いくらマニヤといっても、同じ女優のばかりを見せられたのでは、正直いって飽きてしまう。東映の近作「千両獅子」における、千原しのぶの縛りなんか、シーンその

ものとしては、決して悪くはなかったのだけれど「なんだ。また千原しのぶかア……」見る方も馴れて、刺激なし。これは緊縛写真のモデルも同じ。ただし、強力な演出力、表現力があれば話は別だが（強力といっても、なにもドギックやれとか、危険を冒して撮れとかいうのではない。やわらかく美しく、しかも刺激的に撮る方法があるのだ。つまり撮影者の技術次第なり）

## 決戦オレゴン街道

（アライド・アーチス）ワイド・カラー

半裸の女が前手を高々と杭に縛りつけられ、苦しげにあえいでいる極彩色のポスター。あれをみて釣られて胸をときめかすのは早計。これこそ、まさに羊頭を掲げて狗肉を売るのたとえ、そのまま。ないわけではない。日活の「肉体の悪夢」のスチールとフィルム。あれと同じ……といえ、マニヤはもうおわりの筈。縛られる女優は、ジュディ・エイムズ、ローラ・オルブライト。お馴染みもうすい。見終って劇場を出る大学生二人の会話。半裸縛りのポスターを睨みながら、「チエッ！あんなとこなかったよなア……」





## 読者通信

先日、ニューヨーク・シティ・バレエ団の出演による「檻」をテレビで見ました。聞く処によるとこのバレエの意味は「男性は所詮女性の餌食に過ぎない」と云うことだそうですが、その通り一人の男性が若い女性の大勢の中に捕えられ、踏まれ蹴られ引きずり廻され、挙句の果ては、その女性達の中の女王及その王女の足許に引き据えられ、仁王立ちに立ちあはだか

つたまま舞台を行進する様、全くマゾヒストには感激の連続でありました。虐待の極に、打ち倒された男の上に王女が跨って打擲する場面もあり、何んと云っても彼女が太股で男の首を締めつける処は圧巻シーンでした。今後、日本のバレエ界でも度々、この「檻」が公演されることを切望すると同時に、小生も美しく若き女性等、このような虐待、露弄、打擲を受ける機会に恵まれるよう、世のサジスチンの皆様に御願いし、御連絡を待望するものです。

(横浜 姫馬痴人)

小生は、女の縛られる美に一ぱに興味があり、他は余り興味はありません。写真、画ともに縛られた女の姿は、小生を夢中にさせてくれます。と申しまして、ただ女を縛って眺めるだけで結構ですし、傷をつけたり叩いたりするとは好みません。復刊号になつてから、女の縛られた画が少なくなりましたが、挿画、記事共に大いにサジスチックなものをお願い致します。五月号の写真(田中芳子嬢)は、最近にない素晴らしさ。白いシユミーズが、とても印象的で、女の美しさがよく現れていました。

(名古屋 岩谷生)

はじめてお便りいたします。私が貴誌で最も興味を抱いているのは、切腹、特に女性の切腹についてのいろいろな記事です。私自身切腹プレーなど一度もやったことはありませんし、真似のつもりでやつても本当に切ってしまうのではないかと思うと恐しくて、やつて見る勇氣などありません。今のところ、切腹に用いる衣裳、刃物などを作ったり買い集めたりして楽しんでいきます。切腹に於ける作法とか、衣裳の白無垢についてはいろいろ貴誌にも出ていますが女性が切腹に際してどんな下着を着用していたかについてあまり出ていませんので、先日ふとした折に祖母から聞き出した事を御知らせしておきます。勿論当時の女性の

の下着はお腰でしたが、切腹に限らず女性が自害する時には、血液以外の汚物を体外に排泄させない為に、晒木綿の白布を細長くたたみ、それを股間に当て、その上から六尺褌を締めたそうです。特に切腹の時には、褌を下にすり下げて時にゆるむので、はじめから褌を下げて、ほとんどぎりぎりに締め、この上に白のお腰をかけたそ

うです。この事が昔の女性の自害に於て常に適用されたかどうか知りませんが、昔の女の人でしたら当然この位の配慮はした事と思います。私も今に切腹プレーをする勇氣が出た時はこんな下着をつけるつもりでいます。

(京都 園田春代)

小生は本年二十二才、T大の学生です。大体に於てはM傾向ですが、S傾向もあります。尤も、MとかSと云つても、変つたのや残酷な縛り方、或は血の出るような鞭打ち等は、性に合わず、専ら自分が女目明しに捕えられ高手小手に縛られるとか、或は自分の家に入つた女泥棒を捕え縛り上げる姿などを想像して楽しんでいきます。小生は普段は至ってノーマルな方です。から、KKの愛読者としては極く程度の低い方ではないでしようか。女性の愛読者の方で、S或はM、その他いかなる傾向の方でも結構ですが、私のような男性を望んで居られる方が居られたら、お便り下さい。

(東京本郷局止 佐藤亮)

水郷、潮来の近くの草深い田舎は生れた私は、三十年余の年月を



夢の様に過して参りました。初めて六尺禪を締めたのは十六才の春以来終始一貫今日まで六尺禪を常用して来ました。色々な夢を求めて。禪は私の心の旅路の出发点にして、そして又、終着駅かも知れません。私の歩んで来た禪道中には様々な人が現われ、そして忘却の彼方に消え去って行きました。軍人、実業家、芸能人、学生等……。どこまで続くや果しなき禪行脚。ねじ切れた禪の如く、ゆがめられた官能の歡びに酔いしれながらも、其の反面で理性の叫び声に身を責められ悶え苦しまねばならないのです。そして深い自己嫌厭に陥ってしまうのです。何故にこの様に同性の禪姿に魅かれるのだろうか。同じ苦しむのなれば、せめて異性を対象としての悩みなら肉親や友人達とも話し合えるものを……。因果なことに男でありながら、同性の禪姿を対象としてのみ、より官能の窓口が開けていないとは……。私と云う人間は、神に見放された放浪のジプシーかも知れません。自己嫌厭に醜く顔をゆがめながらも又、凛々しい少年の禪姿を見ると、切なく胸がうずき出してくるのです。十六才の春禪を通じて知った禁断の果実の甘

さは、私の人生航路を大きく転換させてしまいました。表面は世の人々と同調しながら裏面では心の友を求めて禪廻歴を始めました。それより既に十幾年、想い出の人々も最早、過去の人となってしまうました。物質的には恵まれた生活を送りながらも、心の空しさを隠す術もありません。僅かに旅に出ては知らぬ他国で旅愁を感じるのを楽しみにして居ります。同じ悩みを持つ読者の人々よ。文通により慰め会おうではありませんか  
(大阪 中井生)

八潮三枝子様。二月号と五月号にて貴女の文を読みました。私は女性の顔、特に鼻孔に対しては、非常に興味を持って居ります。電車の中でも、女性の顔が近くに来ると一生懸命、鼻をみつめてしまします。何とかして一度、弄びたいと思っているのですが、未だ一度も望みを達したことはありません。どうか、この私の願いを御聞いれて下さい。  
(神戸 中西)

昭和二十八年以来、ずっと続けて貴誌を愛読しているものです。性来のマゾ愛好者で、奇々を見る時も真先きに探すのは、マゾ絵で

あり、マゾ小説です。趣向は苦痛よりも、奉仕と凌辱を好みます。貴誌読者通信欄を拝見しますと各地に、美しい女王様方が沢山居られますが、如何せん私の住む新潟

市とは余りにかけ離れて居り、お会いすることすら容易ではありません。どんなにか、新潟市在住の女性の方で、私をなぶり苛めたり、奉仕させたりしてやろうとお思い

## ◎新人モデル嬢新作緊縛姿態集

光沢純黒調印画紙(9センチ×13センチ)焼付

新人モデル嬢の中、三人の得意のポーズを選んでここに提供いたします。

### 愛川悦子嬢の巻

#### ★ベッド変型縛り(略号1)

四枚一組 三〇〇円

ベッド上に繰りひろげられる悦子嬢のアクロバチックな全裸のポーズは輝くライトに映えて豊かなアクションをふりまいてゆく。

#### ★全裸強烈縛り(略号2)

四枚一組 三〇〇円

山里離れた温泉宿の一室、硝子窓から洩れる夕陽に照らし出されて縛られた裸身は妖しくゆらめく。

### 大塚啓子嬢の巻

#### ★股間縛り(略号3)

六枚一組 四〇〇円

その美を誇る啓子嬢の肌にひしひしと喰い込む縄目、緊縛マニアの方々に捧げる垂涎万丈の作品。

#### ★全裸縛り(略号4)

五枚一組 三五〇円

豊満な柔肌の全身に喰い入る麻縄の醸し出す妖しい美しさ田中芳代嬢の巻

#### ★セーラー服縛り(略号5)

五枚一組 三五〇円

可憐な表情、巧みなポーズ、セーラー服をまとうて縄目に悶える田中芳代嬢の清純なまざなし

#### ★股間しばり(略号6)

四枚一組 三〇〇円

ここに又、新しいモデル嬢の股間しばりをアルバムにお加え下さい。



の方がお有りでしたら、御連絡願いたいと思います。当方本年三十二才ですから、出来れば相似た様な年配から三十七、八才位の人なら一番結構なのですが、無論之にこだわることはありません。必ずしも實際行動と迄行かず、会ってお話し出来るだけでも（もしその方がそういう御希望なら）宜しいのです。私を足元にひざまづかせ思う存分苛めて下さる美しいサチスチンの出現をお待ちして居ります。

（新潟市 北海生）

○ 乗杉貴代子様。僕の希望により御執筆下さった「障得への道」を愛読、いや溺読致しました。本当に、僕の期待に違わぬ素晴らしい貴重な、そして高貴な体験談です。貴女の仰言る鞭と拍手と人參の味は、全く三昧（！）一体の玄義とでも云うべきでしょうか。若し、およろしければ、是非文通させて頂きたいのですが。勿論、個人的な意志や秘密は、エチケット上、絶対に尊重いたします。

（東京 麻生保）

○ 四月号、一七三頁、一七四頁所載の「熊本ウスノロ生」氏の読者通信は、全く御尤もです。確かに

より多くの読者に共通の問題を取り上げる場として活用するのが、この欄の本旨なのでしようから、悪用されるのは困りものです。ただ、私達が陥り易い誤りは、自分が興味を持つてないことを、敵視もしくは軽視しかねない傾きがあることです。特にKKは、アブの世界から脱けきれない苦惱を背負っている人々の唯一の誠実な拠り処である以上、異った傾向の人々の欲求を容認する度量を持たねばなりません。KKを通じて友を得、或は又、求め合った異性が新しい人生に入ることは、KKの存在意義から云って、寧ろ喜ぶべきことと云えないでしょうか。問題は、初めから不純な目的を以てなされた通信文に利用されることですがその点は編集部の諸氏に一任してよいと信じます。私自身の経験からして危惧の余地はありません。私が通信を出した後で、蛇足だと思つたことや掲載されることを迷う気持ちになったような箇所は、編集部でちゃんとカットして下さいからです。純粋に同好の士を求め呼びかけとを区別するのは、なかなかの難事であつて、私達の主観で

## 最新作

### 女体緊縛写真

#### 花坂道子嬢全裸緊縛集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

可憐な容貌と優美な姿態で好評のモデル花坂道子嬢を特に煩して全裸の緊縛を敢行しマニアの皆様の熱烈な要望に応えました。今まで一度も衣服を脱いだことのない花坂嬢の姿態を印画紙焼付の鮮明な写真にてごらん下さい。

（略号はな1）

## ◎ 花坂道子嬢

### 股間縛り集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

数々の傑作を過去に於て作成した写真部が、ここに美貌のモデル花坂道子嬢の協力を得てマニア垂涎の強烈な縛り写真の撮影に成功し、ここにその一部を発表することになりました。是非コレクションの一端へお加え下さい。

（略号はな2）

◎ 以上二集二十枚にて

千五百円

は謬りの可能性も大きい筈です。編集者の手腕と良識に信頼して、自分の好みに合った相手を求める呼びかけをも、KK発展のために歓迎したいと思うのですが、如何でしょうか。

（東京 近藤一）

○ 僕は、青年の割腹に興味を持っている者です。稽古着の若侍が、腹くつろげて割腹しているところ旧陸軍の若い兵士が責任を負って鈍いゴボー剣で切腹して苦しむところ。右翼大学の学生が学生服のまま日本刀で割腹しつつ苦悶のあ

まり涙を流しているところなど、いろいろ空想します。たとえば、秘密結社の若い隊員で葉山良二に似た色白の美男が、隊則を破つた掟により割腹を命ぜられ、首領以下居並ぶ中で六尺禪一本の裸体になり、首領より割腹命令書がありがたくいただき。短刀のサヤを抜き腹にあてがいグサと刺し、苦悶にうめき涙を流し、口より血を吐きつつ見事十文字に切り割き、掟によつて腸を切り取って小皿に入れて息絶える。隊員一同、涙のうちに、その腸を肴に酒をくみかわ



すなど、すばらしいと思います。又、僕自身も、二十七才で筋肉質のほうですから、児島輝彦氏のように美少年のために割腹してみたいと思います。愛する美少年が割腹で一度、僕の割腹を見たいと日頃から言うので覚悟を決め、ヘンピな温泉地で朝早く海辺の人のいない松林へゆき、白鉢巻と禪一本で松によりかかり、見事いさぎよく腹掻き切つて、喜びに目をかがやかせている美少年の手に、僕の血みどろの腸を握らせて息絶えたら、どんなに幸福でしょう。苦痛にあえぎながら、美少年の接吻をうけて死んで行ったら、どんなに幸福でしょう。

(東京 矢島茂男)

○ 奇々最近号に於ける記事、投稿に目立って、生首礼賛、脱の増加して参りましたことに満腔の賛辞を惜まぬ者です。こうした傾向こそ、復刊以前に見られなかった新分野の開発と称せられましょう。思えば「サロメ」の昔から人種、洋の東西を問わず行われて来た「首狩り」「斬首」「ギロチン」「梟首」等の行為こそ、人間生来の嗜虐願望を端的に具現化したものに外ならぬことと推察されます。

然るに所謂、文明化され近代化された処の現代社会に於ては、左様な蕃風？が通用する筈もなく、その代償的行為として著名なものがロンドンの「タッリー館」であり、パリーの「グラン・ギニョール」と云った施設のように思われます。一見、左様な役割を果す機関を持たぬ我國の民俗心理は如何にもそつた趣味とは無縁のように思われ勝ちですが、果して如何なものでしょう。伝統的な民俗芸術として世界に誇る歌舞伎。それは南方氏の御高説を俟つまでもなく、実に「生首至上主義」とも云える演劇形態ではないでしょうか。同様に、江戸趣味の他の代表である絵草紙では、これ又、乙甲のつけ難いまでに「生首」に劇的效果を発揮させているのです。更に、世紀末に至つては「京洛生」氏のイメージの母胎ともなった芳年の無惨絵が「生首」の持つ幻想的な魅力を、妖しいまでに発散させて居ります。下つて、世界に類を求め難い特異な作風の持主である乱歩の作品にも「生首」の讚美が強調されて居りますが、それが如何に大向に受けているかは、問いますまい。只、乱歩登場の背景、彼の作風に影響をもたらすものとしての芳年

それは日本国民の血の中にも、歌舞伎や絵草紙や無惨絵を愛好する趣味、換言すれば「生首」「首切」に随喜する執着と云つたものが、伝承されていると見て差支えないと思われのです。縛り、鞭打ち、切腹、流腸といったジアンルに食傷気味、ないしは不感症めいた読者の中にも「生首愛玩」といつた趣向には又、格別の刺激を感受し得、心理的快感に浸れるといつた方も、予想外に多くはないかと察せられるのです。いい過ぎかも知れませんが在来の本誌の編集子には「生首趣味」に対する熱意は、かつて見られず、それとは逆に、故意に閉却されているかの印象を与えられて参りました。私は、五年來の愛読者として、そ

の点、最も不満と焦慮とを感じて参つた者であります幸いにして近來に至り、かなりのスペースを「生首派」のために解放されて居りますことに、いささか愁眉を開いている訳ですが、今後とも根強く各層の読者の胸奥に潜んでゐる筈の「生首礼讃」趣味をくまれ、更にこの方面の試みを達せられんことを念願して止まぬものであります。尚、末筆で恐懼の至りですが「京洛生」氏「南方純」氏「杉江美津子」氏「K・K生」氏「四馬氏」礼讃の一愛読者「氏」、他、同好の皆々様からのお便り鶴首して待ちわびて居ります。

(北斗生)

## 花坂道子嬢 優美姿態緊縛選

純黒調大中判印画紙焼付 (タテ十八横ヨコ十三)

花坂道子嬢全裸緊縛集 (はな1) 花坂道子嬢股間縛り集 (はな2) の大好評により更に

素晴らしい作品の発表を強く要望されていまして、ここに前二作とは変った新しい観

点から狙いをつけた作品を提供いたします。

★ヌード縛り (略号はな3)

二枚一組 三百円

★股間縛り (略号はな4)

二枚一組 三百円



八潮三枝子さん。あなたと同じ神戸に住んで居りますが、いずれ充分な御満足をされるような一文を誌上で、あなたに献呈しようと思っております。あなたは鼻輪を、その品のよいお鼻にとりつけられて、さんざん虐められねばならず……その他のことは云わぬが花というところでしょう。僕は今一度あなたの文が例え如何に短くても誌上に見えねば今のこの気持が消えてしまうのではないかと恐れています。真鍋四十七氏へ。どうして居られるのです。その後、お目にかかりませんが、何と淋しいことでしょう。せめて読者欄でもあなたの文に接したいと毎日願って居ります。(神戸 K・R生)

皆さんが盛に意見や希望を發表されて、大変うらやましいのですが、小生は文章が下手ですので、とても載せて頂けないと思います。が、なるべく載せて頂くよう御願ひ致します。小さい時から女性を縛って責めて見たい素質があり、女の縛られた画の載っている雑誌を大分集めています。私としては到底、女を縛ることは実現出来ないので、縛り写真で我慢しています。もう一つの奇妙な性癖

は、女性が靴を穿いて足のむれた臭いにひかれます。質流れのハイヒールを三足ほど買って見ましたが、革の臭いばかりで、足の臭いありませんでした。どなたか女性の方で、穿き古した靴下や、ケミカルシューズ、或は女学生の方のゴム靴等を分けてくれる方はありませんか。(大分 A・S生)

始めて、お便り申上ります。最近貴誌のあることを知り、大変愉快に存じますのでお便り致す気になりました。いづれ私の作品なども投稿させて頂きたいと存じます。私は元来、少女趣味でありますから、そんな風なものを発表出来ません。ならば嬉しく存じます。又、私のような趣味の方も相当、居られることと思いますが、福岡K・M様など、私と同じ御趣味の方と存じます。今後、同好の方々とも交歓致したく存じます。K・M様、何卒、早くお便り下さいませ。貴君に差上げたいものもございます。折に触れて御手紙の交歓も致しますよう。(東京 今井一明)

名古屋坂田様。紳士協定は必ず守ります。その他の条件もすべて諒解しました。只名古屋は不案内

です。場所が成可く駅から近く、安全かつ経済的な処を御指定下さい。但し約束の時間に私が参らぬ時は、都合のつかぬものとしてお赦し下さい。千葉、室壮介様私は各地の男性裸体風俗に大へん興味を持ち、殊に房州地方の漁夫が全裸で漁業に従事する風習に關しての資料を求めています。公刊物のグラビアによる紹介等では満足を得られませんので、もし写真に撮られたものがありましたら提供して頂けませんでしょうか？(青葉)

私は、揮愛用女性の熱烈なファンです。私自身を含めた男性の揮姿には、特別の感興も湧きません

が、女性の揮姿は想像しただけでも楽しいことです。大きな豊かなヒップをキツチリ締めて露出することのスリルは、女性ならではの感です。而し、親しいガールフレンドと云つても揮を奨める勇氣もなく、せめてもの慰みに、外国雑誌の三角揮型やバタフライ姿のグラフ等をコレクションして、楽しんでる次第です。揮愛用の皆さんの中で、私と結婚して呉れる人が居たら、私の人生はバラ色に開けて来るのだが――。若く美しい女性が、どんな種類の下着を何枚位持っていて、どんな時にはどんな下着を使っている等を知ることが楽しいことですね。が、服装に敏感なオシャレな女性でも、平凡

## ◎浣腸連続フォト◎

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

長らく浣腸フォトの作成を中止しておりましたが、同好者有志の御希望により、ここに久方ぶりに十二枚連続フォトを完成分譲することになりました。マニア垂涎の硝子製浣腸器、エネ

マシリンジ、イルリガートル、いちじく浣腸等を駆使して女体浣腸の雰囲気をつ十二分に醸し出しました。何卒絶版にならぬうち御申込のほどを。



な既製品の下着に、何も手を加えずに使って居れば、全く味気ない話です。尾張一宮市の真砂美弓子さん、貴女のコレクションを発表して下さい。サイズ、用布、特長等を詳しく書いて、出来れば図解

か写真入り（締めた姿は嫌でしょうから、竿か壁等に並べて吊して撮ったもの等）で、或はグラフ式の下着一覽表も面白い試みと思います。福岡の池田ふみ子さん、カセックスの研究発表を待ちかねています。グループの近況等を御報せ下さい。最近、松原三千代さんや若柳キミ子さんの名が見えないのは淋しい限りです。家庭で大びらに揮姿で生活出来る松原さんは幸福だと思います。写真発表に期待して居りましたが——後向きポーズも発表出来ませんか？又、旧号の「米、仏婦人のふんどしに付いて」の一文に、ハリバタのことに触れて居られましたが、具体的な方法や、そうすることの理由

や根拠について御存じの方は、出来るだけ詳しく図解して発表して説明して下さい、

（福岡 長門睦）

○ 先ず本誌を受取つたら真先に読者通信欄を開けます。そして私と同じ男子同性愛者の投稿を見出すと、渴ける者が泉を見出した如くに一気に読んでしまいます。それにしても、何と同志の少いことよと、歎じている次第です。この欄を個人的な通信に使用するのには怪しからんと憤慨されて居られる方がありますが、私は反対意見で大いに同好の志と語り合いたいと思うのです。そして、たまたま唯一人の理想の相手が見つかったとしても、それはそれで好いではありませんか。KKが取り持つ縁として、私は大いに祝福したいと思えます。私はそんな小さなことより読者通信に一貫して流れている、この道ならでは味わえぬ憧れ、同

## 女体禪美の緊縛

（9×13センチ）印画紙焼付

五枚一組 四百円

略号（こん1）

## 女体の禪美フォト

（9×13センチ）印画紙焼付

二枚一組 二百円

略号（こん2）

志を得たい切望、強烈な執着というものに心から魅せられます。私もその中の一員として、今後大いに意見の交換を致し度く思いますが、こうした刊行物に於ては、どうしても書くことに制限を受けます。私は、思い切ったことを書き合う文通の友が、やはり一人欲しいと思います。尚、本誌に於て何時も乍ら青葉慎一氏の素晴らしいイクシヨンに全身が痺れるような感動を覚えます。（兵庫 凡生）

○ 私は現在二十五才の娘で家事の手伝いをしております。男兄弟二人は私と年が大分違いますので、すでに二人とも結婚して家を別に持っていますし、今まで家の都合で勤めに出たこともありませんので、これといつて親しい友達も出来ないうま過ぎしてしまいました。そんなわけで読書が楽しみで、なんとこのことなしにどんな書物や雑誌にでも目を通しておきます。K誌の小説を読んでいて、自分も思いきり一度いじめられてみたいという気持が起りました。家でお裁縫なんかしていますので日中でしたらいつでも外出できるのですが、どなたか私のような者でもお逢い下さる方ってありませんかしら

家は昔から旧式で通っておりますのでお手紙をどうして貰ったらいかが迷っています。只今、お茶とお花に週二回通っています。三時頃に終わりますから、その帰りにでもお逢いできたらと思います。最近の誌上で私の好きな作品は、三月号で辻村隆さまのガーベラの甘き香り、久留木栄さまの美容病院、夢原狂介さまの十三人目の奴隷、山川和男さまのマヤの黄昏、四月号では、水沢雅美さまの捕われの令嬢たち、土路草一さまの魔教園Z.O.O、三条卓史さまの紅山彦、等です。殊に四月号のはじめにありました捕われの令嬢たちには、自分がその主人公になったやうでうっとりしました。私が少女時代から悲劇物語が好きでしたが娘になつてからこのやうに変わつて来たのかもしれない。日本の古典は国文科を専攻した関係で特によく読んでいますが、鉢かつぎのような継子いじめのものには強い関心を持っておきます。説話物の中から、そういった傾向のものばかり集めてみたいと思つていますが、まだ十分の資料蒐集ができていません。どなたかそういう方面の先輩の方から御指導を頂けたら有難いと思います。誌上で御連



絡賜れば幸甚です。

(京都 菅雅子)

○ 毎号読者通信欄を拝見して、意外に同性(男)にマゾ傾向の多数居られることに意を強くすると共に驚喜している者です。諸兄は大胆に発表されて居られます。私は感歎し又啓発されて私なりの告白をする勇氣を出しました。かくいう私は本年二十五才の若輩です。まだ人とブレイした経験はありません。従って私は自縛によつて僅かに満足している状態です。どなたか以前に誌上で自縛は足ぐらいだものと云つて居られましたが、長年の工夫によつて私は後手に自由に縛つたり解いたりしています。しかし充分な満足感は一ひりでは駄目の様です。これについて他に好きな方法などあれば諸兄姉の御指導をお願いしたいと思います。ニニールガールの緊縛模様、いつもすばらしいと感歎して拝見していますが後手に喰い込む縄目があり見られませんが残念に思つて居ります。それからモデル嬢の口紅が少し薄い様ですが、もっと濃くして下さい。口元が引きしまつて見た目も感じがよいものです。旧号で

は座談会をよく取り上げていたが、座談会の様なものが現在では出来ないのですか？是非座談会の記事も載せてほしいものです。私は口絵などで女性の艶めかしい唇を見る度に興奮を覚えます。今は僻地に住んでいることとて、友人もなく只自縛が唯一の楽しみである淋しい明け暮れです。御理解のある諸兄姉の御指導をお願いいたします。

(岡山 KS生)

○ 空想ほど自由で楽しいものはないが、現実にはそれほどでもなく、殊に職業的になつてしまふと何の感興もない、ということをやマニア諸兄姉にお聞き願いたい。切腹は自分で切るところに興味がおかれるのだが、人に切られたり、人のを切つたりするのは面白おかしくもない。外科医、病理・解剖学者、検察医などは年中切つていて、刺戟も興奮も感じない。外科医や産婦人科医が切るのは生身だから赤い血も出るし、手を腹の中に突込んで腸を引ずり出すのは日常茶飯事だ。マニアの人々も一月間ばかり毎日手術の手伝いをして腹の中に手を突込んでみるが、いいたい刺戟を感じなくなつてしまふだろう。手術のときは消毒し

## ◎女体切腹フォト◎

(略号こし)

### 「腰元自刃」

村井知可子嬢

大判印刷紙焼付  
六枚一組 八百円

お家の重宝を紛失した美貌の腰元が激しい責折檻の末、遂に敵方から忍び込んだ間諜であることを白状する。そして今は、せめて武士の娘らしく深く切腹して果てることを願う。彼女に秘かな好意を寄せていた御側の若侍は彼女の介錯を願つて出て許される。今迄の折檻の場は忽ち凄惨な

美女切腹の場と変わる。という構想のもとに六枚連続の切腹フォト(全場面切腹)六枚の中、二枚は若侍介錯の場面。女体切腹マニアの方は是非一度ごらん下さい。日本髪をふり乱して苦悶するさまは、必ずや皆様を魅了せずにはおかないでしょう。(女性モデルの外、美男男性モデル登場)

た布で全身を覆い、手術する場所だけ穴を明けておく。その穴から見える腹は人格、或は人間、男女などの性格を失つた単なる皮膚である。もっと極端な言い方をすれば物質である。だから外科医も平気で一人関係、感性など抜きで手術ができるのだ。病理解剖や検察解剖になると相手は死体だから切つても血は出ないが、その代り切り方が派手だ。身体の中の線を咽喉から下腹まで縦一文字に一気に切つてしまふ。早くいえば魚の腹を縦に裂くのと同じである。舌、心臓、肺、肺臓、胃腸、その他内臓という内臓はどつそりと全部取出してしまふ。これもサジヤ

切腹マニアの人が見学するとうい血も出なければ痛がりもしないから案外つまらぬかも知れぬ。刺戟の条件欠除ということになるうが一月ばかり毎日やってみると人世観が変り、恐らく興ざめしてしまふだろう。私の所へお申込みになれば何時でも御案内するが、一月続ける決心がつかねばお断りする

(東京 壬生三郎)

○ 四月号入手、杉江美津子氏なる男性の「私の生い立ち」が興味をひきました。実話にしては怪奇すぎますが、黒髪、生首の趣味は同感させられました。口絵写真についていえば、映画のスタイルは歴



史的な興味もあり、同好者も多いようですが、一般に作りものの感が強く、グッとくるものがなく、むしろなくもがなと思われまゝ。オリジナルもの即ち特写分はモデルにポリウムもあり乳首まで露出し縛りに責めに大いに工夫のあとが見えますが、いずれも表情に苦悶のあとが見えず何かあじけなく思います。その点、滝れい子氏の作品などすぐれています。出来れば、画題について奈加多須磨尾氏がアイデアを書かれた森縛りや、読者通信にあるように死刑執行をテーマにとりあげたものを希望します。大分前に「斬首」とか「銃殺寸前」などという画題があつたように記憶しますが、要は姿態、表情、緊迫感ともかねそなえた迫真の名作をもつて誌上を飾っていただきたいと熱望する次第です。

新東宝の「毒婦高橋お伝」大いに期待していましたが、充分に毒婦ぶりが発揮されておらず残念でした。それはシナリオが、彼女の善い面（例えば病夫に貞女であるとか、残した娘に母性愛をもつとか心をひかれた青年の将来を思つて身をひくとか）を強調しすぎた為に、万引、婦女誘拐、殺人といった罪惡面がばかされて、毒婦の真髓を表現出来なかつたと思います。それにしても若杉嘉津子は体当りの好演で、鉄火場や入浴シーンの刺青姿は見事でした。今後とも、毒婦ものに精進を重ねて、ますます堪能させてもらいたいものです。

（南方 純）

私は女斗美のファンです。この頃、女斗美の記事は大分少いですが、思うに女斗美は、単なるエロと思われたり、又は何か、いわゆるマゾとサドでは分類しきれないものがある。貴誌でもだんだん取扱ひ難くなるのではないかと云うことと、一つには女斗美の記事なるものは、だんだん類型化してしまつたと云うこともありましようが。私は又、女の渾美にも関心を持っています。つまり女相撲なら私の関心はすべて満たされる訳です。私は、かねがね代理部で、取り組んだ渾美一つの女体のフォトを作つて貰えないかと考えております。四つに組んだ処もよし土俵ぎわで寄倒そうとしている処もよし、特に、投げのきまりかけた瞬間などのポーズを演出して、撮影して貰えたらと思います。私個人の興味で云うと、投げがきまらんとして、敗者が大きく片足を

を上げた処を後からとったポーズや、吊り出しをかけた処、足をかき込んで揉み合つた処等が最上です。別に、たいして斗志や緊迫感はなくともかまいません。（演出ではムリです）渾は、余り堅くてゴツイ相撲渾では、やや美を失いますから、やはり厚い目のサラシがよいと思つています。これ等のフォトの組物が作成される日を待ち望んでいます。現在、貴誌の代理部では女体の渾美のフォトと責め（渾姿）のフォトがあるそうです。が、多分、一人の女性のフォトでありますし、私は期待出来ないので（渾美としては関心があります）購入していません。どうでしょうか。私は復刊以前からの貴誌の女体渾美及女相撲の挿画記事を全部集めていますが、更に上記のようなフォトが作られれば、これにこしたものはないと考えています。同好者はかなり沢山おられます。

（京都 K・N生）

毎月K誌に私の好きな事があるかしらと、胸を躍らせて頁をめくるとのは毎月のことなのですが、旧誌に比べて私には余り興味がない記事が多いので、淋しく思つて居ります。しかし自分勝手な考えなので、私は私の夢を心に描いて、現実になんとも近づくように努力しています。私は、ありふれた女の人、たとえば女中さんのような地味な身分の人々に、あこがれています。そんな人々の暮らしの中に一緒に入つて、同じように働いてみたいと思います。好きな着物や下着をつけて毎日を送ることが出来るれば、どんなに幸せでしょう。これが私の一ばんの望みなので、なんと無欲な変つた心境でしょうか。

（兵庫 福本時依）

私は、ブロースマニアの青年です。そうした私の喜びを満足させてくれる記事が最近、殆んどないのが淋しいかぎりです。「街に見るフェチズム」は、少し極端すぎる私には程遠い境地です。無理なことは云いませんが、せめて少女の下着の記事や、それを身につけた美しい少女の写真や文が、ぜひ欲しいと思います。朝の新聞の中に入ってくる衣料店の広告のチラシに、少女の下着の文字を見るだけで、私のささやかな満足となるのです。ブロースマニア、パンティ三十五円、ブルマー〇〇円、シーズンバンド〇〇円、フレンチバンド〇〇円、それが貴誌の中で



写真や記事となつて立体化したら私の満足も幾重にも増すことでしょう。今までに私は、幾度かズロースを買い得ようとして、衣料店の前を空しく行来したことでしよう。よそ様の洗濯物に手を触れることなんか出来るものではありません。須川さん、或は花坂さんの御使用済の下穿を一点でも譲って頂ければ幸いです。

(群馬 峰岸一美)

○ 神戸の「八潮三枝子」様、貴女の文章「一月号一七六頁」とても嬉しく読ませて戴きました。私は今年二一才になったばかりの男です。私の体を申しますと「身長五尺五寸」体重「一六貫」顔は映画スターのある人気スターに似ているとよく人から云われる一寸個性的な顔の平凡な男です。貴女の鼻に対するマゾ。思わず大声で呼びたいくらいの共鳴を感じました。貴女こそ私の探し求めていた、日本中、いや世界中の唯一の私のマゾを満足させてくれる女性です。私は体をムチ打ったりする様な事は大嫌いです。ただ鼻をもて遊ぶ事だけが満足なのです、可愛い女の子の人をひざに抱き美しい鼻をいろいろの方法で愛撫する。二〇才

になるまでの唯一の願ひだった、私の行為を満足させてくれる女性に居る事は居ましたがいまいには皆厭がつてしまつて、皆私から離れて行つてしまひ今は唯一人淋しく寝床の中で想像しているにすぎませんでした。八潮三枝子様、もし私の様な男でもよろしかったら付合ひ願えないものでしょうか……そして思うぞんぶん鼻を玩具にし合ひましよう。「……云々程度をお知らせ願えれば……云々」と書かれていましたけどどの程度鼻をいじめるかと云う意味でしようかそれともどの程度鼻に対してのマゾヒズムを持つているか……という意味なのでしょう。私は鼻に対しては、すごく異常です、人の顔さえみればすぐ鼻に目が行きます、いろいろな形の鼻があります、美しいスタイルの鼻を見ますと思わず力一パイ「グツ」と鼻をつまんでやりたい衝動にかられ顔が「カツカ」とほてつて来ます。大衆の目前でまさかその様な事も出来ず本当に鼻を玩具にさせてくれる女性が居たら飛んで行きたいくらいだったんです。幸い「Kク」で貴女とお知り合ひになれて実に目の前が明るくなった様な気持ちです。私は大分前の頃から「Kク」

甲斐に参案  
四馬孝画

『涙のダイヤモンド』

(略号  
なみ)

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

○ 胃の洗滌 ○ ヒマシ油責

を愛読しています。八潮三枝子様何か良い連絡方法はないものでしょうか、あつたら至急お知らせ下さいませ、一日千秋の思いでお待ち致しています、編集部の方へもお願いします。(神戸 鼻夫生)

○ 昨年の十二月号拝見して、岩村美智子さんの流腸記、夢のようでした。私よりお姉さんでいらつしやいますね。うんと甘えてみたいと思ふのですけどお便り頂けないでしょうか。私は今年二十一才です。お会いできないでしようけど、お手紙の上でいろんな事して頂いたり、私からもファンタジイをさし上げたりしたいのです。半年ほど前から福岡のYさんと文通してたくさんの縛り写真などを見せて頂いて居ります。奇クを通じてのお友達はいないと思ひます普通では云えない事も臆せず書いて理解して頂けるのはすばらしい事です。皆様の中で流腸趣味の方、いろいろ教えて下さいませんか。私は何も知らないも

のですから、勉強させて頂きたいと思ひます。復刊前の奇ク数冊しか持つて居りませんので、どうか全部お持ちの方見せて頂きたいのですけれど。「アリスの人生学校」や「被虐の家」も拝見させて頂ければ嬉しいと思ひます。私今病床ですので、なつかしい復刊前の奇クの事ばかり考えています。皆様から楽しいお便りが頂けます事を祈つてペンを置きます。(柴崎黎子)

北原純子責画傑作選

〔女学生の羞恥責め〕

(略号女学生)

大中判印画紙焼付

四枚一組 五百円

〔ハートの的文体洗滌室〕

(略号はあと)

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

〔緊縛ヌード十六ポーズ〕

(略号ぬうと)

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円



○ 御初に御目にかかります。今後共宜敷く御附き合いの程、神戸の八潮三枝子様に御呼びかけ致します。小生結婚して二年近くなりますが未だ妻との間がうまくゆかず日夜味気ない日々を過しております。本誌五月号を初めて読み、小生の様な方々の多く居られる事を知り、又貴女の様な愛玩を希望される女性が居られる事を知り人生に光明を得ました。小生は貴女にこんな責めをしてみたいと希望します。そうして貴女と共に一ト時だけでも人生の喜びを知りたいと切望します。それは小生が先日妻に試みて嫌がられて出来なかった事なのです。小生は貴女を全裸にして(御希望なればパンティを付けます)テレビのアンテナ線越しに貴女の自由を頂きます。そして貴女をバスに入れ、次いで全身を石鹸で塗りつぶします。今度は貴女をシャワーの下へ立たせ水で石鹸を洗い流します。さあ、次はベルト責めです。これは小生の考案した方法です。この時小生は乗馬用の長靴をはきパレータイツをつけ、赤か黒のセーターの上に革ジャンパーを着ております。この際打つことはしないのですが御希

望なれば用意したナイロンベルトで貴女を打って差上げます。自分で勝手なことばかり書きましたが若し御願ひ出来れば小生の責めの方法も詳しく御話し貴女の御希望通りにさせて頂きます。それからズロースやパンティを御集めの方御連絡下さい。小生は素晴らしいパンティを二十八枚集めております。(中、ナイロンのワイリー・パンティ十四枚)全部新品ではありません。又外国製パンティ等御持ちの方、一度見せて頂くか着崩させて下さい。御希望の御方は六月号七月号の誌上で御便り下さい。御所を明記頂ければ直接御会いに伺うか連絡先が有りますれば其の場所まで待合させる事に致します。場所と日時、貴女(貴方)の服装等目標も明記して下さい。心から御待ち致します。(京都 木村洗)

○ 五月号の口絵の中、四馬孝氏の「美人調教馬」には思わず息が止まりそうになりました。誠に素晴らしいの一語につきると思います。小生と同意見の方が多数有ると信じて居ります。「美容病院」が休載なのでガッカリ致しました。最初の時の予定表によると、五月号にはアクロバット及器具応用の美

容体操による訓練が行われることになって居りますのに休載とは残念でなりません。三月号の投書で東京の阿倍能磨氏が「美容病院」等の長篇にはダレ気味な点が見え云々と云われて居りますのが作者の氣にさわったので投稿を止められたのではないかと大へん心配でなりません。多種多様の読者の為には多少自分の氣に入らないものが有っても、あの様な作者の氣にさわられた方が良いと思います。批評することは易いことです。文章を書くということは大変むづかしいものだということを頭に置いて居た方が良くと思います。小生は「美容病院」の連載を心から願うものであります。乱筆多謝。(門司 K・H生)

○ 貴社益々御発展およろこび申し上げます。毎月興味深き内容たのしく拝読致して居ります。私は東京に住んで居りますロマンチックなマゾヒストです。勿論妻も居り

子供もおります。毎夜私は勤めから帰り子供達が寝てから途端夫の座から女主人に仕える犬になり下ります。主人(妻)に一切の奉仕をする奴隷になつてしまっています。東京又は近辺にいらっしゃるもう一人の女主人を求めて居ります。もし妻と一緒に私を訓練したいとお思いになる女の人がいらつしゃいましたら誌上で御連絡下さい。但し一つ条件があります。その人は必ずロマンチストでなければ私達とはプレイが出来ません。何故なら我々人間特に男女間にはとかく問題が起り勝ちですから。(東京大仁成造ハイヌニナルゾウ)

○ 編集部の方さま、愛読者の皆さま、御機嫌いかがですか、初めてお便りさせて頂きました。雑誌は毎月欠かさず拝見させて頂いておりますが、御便りを出す勇氣もありません。失礼いたしておりました。私は物心ついた頃から惨虐な話や文章を読むのが好きで、年頃になつてからはそんな話を聞くと、妙に

甲斐に参案『涙のダイヤモンド』(略号)

四馬孝画

○申し責 ○浣腸責 ○苦悶のコルセット

大中判印画紙焼付 三枚一組 四百円



## 次号(七月号)の本誌は五月下旬発売です

胸がドキドキして困りました。初めは恐いもの見たさの好奇心だと思っておりましたが、娘になつてからは単にそれだけではないように思えるようになってきました。日常は平凡なサラリーガールとして真面目に働いておりますが、このような私の気持は誰にも相談することも出来ないで独り自分の胸の中に秘めております。昨年の夏、会社のお友達がオートバイに触れて怪我をした時お見舞に外科病院を訪ねたときでした。暑いのか私が廊下を通りかかったとき、手術室のドアが半開きになつてスクリーンのかげに若い女の膝から先がベッドの端に見えていました。はしたないと思いましたが何の気なしに見ていましたところ、急に「キヤー痛いッ」という悲鳴が聞えて今迄見えていた足が見えなくなりました。その悲鳴はどんなだったか、今ここで文章に書き表すことは出来ませんが、私は暫く廊下に佇んで胸をドキドキさせていたことを思い出します。先日も宝塚の歌劇の公演で女生徒の方がセリの事故で胴体を真二つに切

断してなくなられたそうですが、交通事故の現場写真なんかには、妙に恐ろしいものですが見たくて見たくて仕様ありません。と申しまして自分が見てみたいといううのではなく、自分がそういうむごたらしい目にあつてみたいという気持が強いのです。空想だけです。百貨店から墜落して雑踏の中で自分の死体を沢山の見物人に見て貰つたり、或は真ッ裸で死体を解剖されたりというようなことを考えたりします。幼い頃、探検家が食人種に殺されそうになつた物語を読みましたが、自分も食人種に身体中をバラバラにして食べられていくというような夢をみます。縄で縛られるということには特別に関心を持ちませんが方法は別として自由を奪われるということには興味を持っています。掠奪結婚のような風習が今でもあつて誰か力強い男性が無理矢理に自分を掠つてくれないかなあと考えたりすることがあります。こんな事についていろいろと心おきなくお話し出来るお友達がほしいと思ひます。純喫茶の一室なんかを拝借し

て、数人の愛読者が集まるというような会が出来ないものかしら。編集部主催でやつて頂けないでしょうか。そんな会合があつたら是非出席させて頂きたいと願ひます  
(大阪 久保利子)

○  
五月号の千葉県、室壮介様、貴兄の御便りを拝見致し是非御交際を願ひたいと思う東京在住の一人、身青年です。小生貴兄の御気持と全く同一で二人でお会いして色々とお話を致したく存じます。房州地方の漁村の風習、特に禪の使用状況等についても色々御話し願ひ度くよろしく御願ひ申し上げます。只小生現在周囲の事情で住所氏名を公表出来ませんので甚だ勝手な一方的なお願いですが御差支えなくば貴兄の御住所連絡先等を発表して頂けませんでしょうか。本当に心よりお会い仕度いと思つて居ります。決して御迷惑の掛る様な事は致しません。年令は貴兄より三つ上です。御返事御待ちして居ります。  
(東京 緊輝愛男生)

○  
矢島浩二氏に与う。貴男の「女装遍歴」を読んで感激しましたので借越乍ら敢て誌上にて私の感想を述べさせて頂きます。先ず第一

に貴男が女装マニヤになられた動機は最初単なる好奇心に依るものと思ひますが、それが春の目覚めと共に女装への憧れとなつたのでしよう。しかも、それを公然と楽しむことが出来ないで、こっそりお母さんや隣家の娘さんの赤い腰巻を肌身にまとう事に秘密の喜びを見出されたのでしよう。風の吹く日に和服の女の人の裾がまわって赤い腰巻がチラチラするのを見るのは随分と楽しみですね、貴男は腰巻の色はピンクよりも赤、布地はネルよりもモスリン、又は縮緬が良いと云われますが全く同感です。腰巻と共に赤い紅絹裏のついた緋縮緬の長襦袢を素肌になまう時の心地よさは又何とも云えないですね。貴男の身体は女性的なので女装されたら、さぞ良くお似合いの事でしょう。女装して女と間違えられて男から口説かれたらきつとぞくぞくするような変な気持ちになるでしょうね。又、女形になつて舞台に立ち凌辱されるような事も興味がありそうですね。貴男にはれっきとした奥様がいらつしやるのに、そうした喜びを持たれるのは、恐らく独身時代に求めても得られない女性への憧れで、物質である衣装を代用品として満た



す習慣が生涯尾を引いているのだ  
と思います。赤い腰巻や長縹絆は  
若い女性の身代りなのです。結婚  
前に童貞を破る代りに、この身代  
りを肌身にまとうことは、若い男  
性の純情の発露とも云えましょう  
私は決して貴男を軽蔑なんかしま  
せん。どうか、いつまでも奥様と  
同じように赤い腰巻や長縹絆の感  
触を愛して下さい。(兵頭庫一)

数年前からの愛読者です。私の  
最近興味を持って読むのは女性緊  
縛の実験談や体験談です。創作物  
には興味をあまり感じません。そ  
れは現実感が薄いからです。実際  
に「此の手で女性を縛った」或は  
女性の「私は縛られた」と言った  
告白や体験の文章が大好きです。  
特に縛り始めから縛り上げるまで  
の経過を何度も読み返します。  
何故さう言った所が好きか、それ  
は私にもはっきりわかりません。  
しかし、私も一度、女性を此の手  
で縛って見たい。そして、その女  
性の姿を、自分のカメラで撮影し  
て見たいと言う願望があることは  
たしかです。しかし普通に交際し  
て居る女性達に、そう言う事を話  
す事も出来ず。いわんや縛りのモ  
デルになつて下さい、なんて金輪

際言い出せません。私の商売がら  
お上品な人達とばかりと交際して  
居るので、なほさらです。しかし  
女性を縛って見たいと思う気持は  
日に日につのるばかりです。奇ク  
の愛読者には女性の読者が相当お  
いでの様で、その方達の中には、  
自縛して鏡に写して眺めたり、又  
そう迄しなくても一度縛られて見  
たい、又、自分の縛られた姿を写  
真にして眺められたら……いろん  
な事を書きました。私の本心を書  
きます。私はモデルがほしいんで  
す。どなたか私のカメラの前で私  
に縛らして下さい、そして美し  
くポーズして下さいる女性は、居ら  
つしやらないでしょうか。

(東京 F S 生)

私は今迄「奇ク」を時々愛読し  
ていましたが、今回始めてお便り  
します。同封の原稿は、私の女装  
の経過と所見を、のべたに過ぎま  
せん。御笑読下されば幸甚です。  
何時も、左記の方々の告白、体験  
等をくりかえしくりかえし読まし  
て戴き共鳴同感です。色々な面  
の御指導、御交際を御願います  
尚、手前勝手な希望ですが女装の  
男性の責めの写真及び女装方法の  
具体的な説明等を発表して戴けた

らと念願しています。「奇ク」の  
発表と先輩諸氏の尙一層の御奮斗  
を祈ります。二十九年六月号篠原  
幸雄氏(変性男子の告白)三十年  
一月号福本時三氏(綿ネルの妄想)  
三十年三月号喜多島佳月氏(わが  
半生の記)三十二年一月号丘与志  
夫氏(赤いネオンのきえる頃)「  
岸本青柳氏(舞踊女師匠の責め  
の実演)三十二年三月号森本信一  
氏(或る女装マニアの記)「東一  
郎氏(或るアブマニアの告白)三  
十二年七月号岸本青柳氏(「奇談  
俱樂部」の会合)三十二年一月号  
古井真哉氏(女性ホルモン服用の  
実験報告) (宮崎 K・Y 生)

一口にアブといってもその様相  
は実に多種多様で、分類の上では  
先ず対象を異性とするものと、同  
性(男性同志・女性同志)とする  
ものとの大別され、その中でのサ  
ド・マゾという風になります。サ  
ド・マゾに当って、一分の中にそれ  
らを網羅し尽す事は、殆ど不可能  
に近いと思われまふ。それに比率  
というものは重要なポイントです  
から、いきおい異性対象の記事に  
重心がかかるのはやむをえないし  
同性対象でも女性に關したものは  
男性の読者にも一応魅力があると

いう評価は認めざるをえません。  
こうなつてくると我々ソドミアと  
しては、どうも不遇をかこちたく  
なるわけですが、近年はシスター  
・ボーイなどの出現(私個人とし  
ては余り歓迎できぬ現象ですが)  
により、ともかく株は上つてきま  
したし、今後も大いに気を吐いて  
いこうではありませんか。先にも  
いつた需要の比率から、少くとも  
休刊以前の頁数に復さないでは、  
口絵にソドミアの頁を獲得するの  
は困難とみるよう仕方ないでしよ  
うが、最近挿絵が豊富になり、  
男性の裸体を描いたものが多く見  
られるようになったのは御同慶の  
至りです。尙本文中に全裸とある  
のに絵の方はパンツをはいている  
というのは幻滅ですから、挿絵画  
家の方はせいぜい気をつけて戴き  
たいものです。さて、長い間編集  
者並びに読者の皆様から、御指導  
御鞭達を戴いて参りましたが、都  
合により五月号の「続・病者の獄」  
を最後として、「青葉慎一」のペ  
ン・ネームとしては、お別れさせ  
て戴く事になりました。思えば二  
十九年九月以来、皆様に親しくし  
て戴いた名前と別れるのは心淋し  
い氣もしますが、そのうち折をみ  
て二再おめにかかる時があるかも



知れません。その節は又どうぞ宜しくお願い致します。(青葉)

○ 戦中、戦前に比し、芸能公開に於ける男性美描写の減少は残念である。第五郎の島衛、辰己の間新六、増田順二の「輝の兵士」(シンガポール総攻撃)等十年以上昔の映像が懐しい。特に戦時の昂揚物には映画演劇不問フンダンに筋肉が登場して爽快だった。戦後も汐騒や新劇創作物に僅乍ら現われたが満腹に程遠くモードショウの女体一辺倒が不公平に思われる。米国やパリには踊る希臘彫刻を觀せるという記録資料を入手したが羨しき限りである。さて今年から発表された勇姿を拾ってみると誠に淋しき極みだが次の如しである写真では双龍飛劍(三船は武蔵時代の水浴が力強かった)張込(遠慮した浴場々景も大木の鉢にも裏切られる)、緋桜大名(橋蔵の座姿丈で立姿無いのが惜しい)千両槍(林の顔が接角の稟々しい下身をマイナス)女殺油地獄(逆に扇雀は華奢な顔に似ず荒々しい肢)怒りの弧島(老人と少年なので中途半端)。フランスはJ・ギャバに物に屢々出現する若い裸身の方が、本場日本のよりも美しい。芝

居では「切られお富(花形歌舞伎)」で宗五郎(蝙蝠安)の小型乍ら活潑な行儀悪さが溜飲をさげた。冬季ニユースに各地の裸祭りが取材されるがそれこそ決定的瞬間である。TVで忍術(NTV)を主演した藤田西湖がサッパリとモードして秘法公開したが、青壮な容貌のスーパーマンであればターザンの向うを張れたのにとクヤまれる珍らしく放送(LF)で聴覚を操られたのは実像が見えぬ丈にスツキリと想像できたのだが、マイク探訪で某質屋の裏録音で青年主人の語りであった。「店に、マンボ族がユスリに来てネバっているので女子供に委しておけず、丁度夏で僕は禪一本の装の儘奥より現われ一喝した所、驚天したチンピラは忽ち逃走した」舞踊界が案外不厭である。Gボーイの嬌態でない若いダンサーの「美と力」が意外に少ない。往年の益田隆は英雄だった。(原俊行)

○ 本誌に女性に責められる男性全裸(写真や本文)の希望が多いですが、同じ男性責めでも昔の高橋お伝や姐妃のお百等の凄絶な毒婦に責められる筋骨隆々たる壮年の男を夢想し、自分もそれになって

見度く、相手は飽迄毒婦であること。明治のお伝より徳川中期のお百の凡てが毒婦美ですから、お百と仮定して男はそのお百の術中に陥り、痺れ薬を飲まされ毒婦の本性を明かされ、裏の庭先で六尺禪一本にされ赤い湯文字(昔は上の白布はなくヒモなし)一つで肌の刺青を見せたお百に鞭打たれ、見物の女郎達十数人(素人の娘人妻等より水商売の女が良い)の前でされ、姐妃責めという凄惨責めに掛けられます。(内容は長くなるので省略)逞しい裸の男が苦悶と羞恥で女郎達へ助けを求めながらそれも出来ず、水と泥にまみれながらノタ打つ昂奮は何とも云えず、長時間の責めの中、お百が頻発する言葉も凄絶で「赤い湯文字にノメノメと、口惜しいかい、態ア見やがれツ、苦しいのかい、末だ序の口だよ、男の生地獄だよ」等で男は「ドド毒ツ婦ツ、ククク口ツ惜ツしいツ、ろツ六尺だけは」等の苦悶の声です。読物風に書き度いが、残念ながら筆力がありません。雨、毒婦、赤い湯文字、見物の女、長い十尺余の細い皮鞭、縛る針金、水にグッショリ濡れた真白な六尺禪の男が必須条件です。復刊前の「天狗松」の責めより凄

絶地獄です、天狗松の姐御は毒婦でなく単なるサジストですが、お百は両方兼ねているわけで、男はマゾでなく常人だが若し実演出来ればマゾ男性の役柄です。共鳴する方があつたら来月号でお便りを乞う。発売のマゾ画廊は一度縮写して誌上に出して下さるといいのですが。(千葉県 百生)

○ 毎月の貴誌並にフォトをお送り下さつて有難うございます。いつも絶大な満足で以て拝見しております。殊に五月号では口絵が断然素晴しく全くユニークな存在として光っていました。巻頭の四馬孝氏の「美人調教馬」の垢ぬけのし超日本的な構図の立派さ、杉原虹児氏の「乳首責め」に於ける二人の女性の表情の対象、フォトでは花坂嬢の和装縛りもよかつたが「屏風の前にて」の田中嬢の三枚の写真が図抜けてよかつた。表情ポーズ共に申分なく、殊に左頁の上のものは満点の出来と思う。滝氏の絵、洋画スチールの「カルタゴの女奴隷」もよく、五月号は今迄になく優秀で嬉しかった。来月号は又どんなのが載るか、今から胸をわくわくさせて楽しんでい

(鹿児島 宇月生)